バカとメダルライダーと召喚獣

OOO・JANIKELU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカとメダルライダーと召喚獣

【Ｎコード】
Ｎ６７８６Ｓ

【作者名】
ＯＯＯ・ＪＡＮＩＫＥＬＵ

【あらすじ】
仮面ライダーオーズとしてバースやディアスと共に戦う明久

だが…そんな彼に最大のピンチが襲う

そしてグリードととの戦いはついにクライマックスへ

みんなを守りたい一心に戦う明久…彼は果たして欲望を思い出すことができるのか！？

そして世界の運命は！

最終章更新中です！

プロローグ（前書き）

始まりです。話はオーズではＶＳウヴァ戦、アニメバカテスでは３話から始めます。

プロローグ

僕…二年Ｆクラス吉井明久はいつものように学園生活を送っていた

いつものように美波に関節技を決められ、いつものようにムッツリーニから秀吉の写真を買い取り、いつものように姫路さんにうっとりしたり、いつものように雄二と喧嘩をして

いつものように試験召喚戦争を行う

何も変わらない日々…けど一つだけ変わったことがある…それは

『明久！ヤミーだ！』

「わかったよアンク！」

タカ！トラ！バッタ！

タットッバ・タトバ・タットッバ　！

腕の怪物と出会い、ひょんなことから僕は仮面ライダーとなった

ある日偶然見つけたタカのメダル
それは僕を仮面ライダーへと導いた

最初に出会った鳥の怪人（腕だけ）アンクの話だと僕が戦っている怪物、ヤミーを作り出したグリードは８００年前にいた怪物なんだけど、現代に蘇り、人々の欲望からヤミーを作り出しているらしい

「何かわからないけど、人々の命を救えるなら！」
アンクが手にした謎の化石のようなものが僕の腹に置かれた途端それは姿を変えベルトとなった

そしてアンクが渡した三つのメダル…タカとトラ、バッタ…このメダルにより僕は仮面ライダーオーズとなったんだ

オーズやグリードについて知っている鴻上ファンデーションの社長鴻上さん、秘書の里中さん、ライドベンダー隊隊長の後藤さん

いろんな人と出会った

そしてメダルを取り返そうと僕やアンクを狙うメダルの怪人グリード…

今日も忙しい日々が始まる

プロローグ（後書き）

次から本格的に書いていきます。いろいろと酷いですが暖かい目で見てくださると嬉しいです

設定（前書き）

最初にちょっとした設定です。

いろいろと変わっています

設定

話はオーズが対ウヴァ戦。バカテスは三巻からで行います

バカテス、オーズ、まどかマギカ、なのはからキャラが登場します

増やしていく予定はあり、オリジナルライダーが登場します

なのはやマギカでそれぞれ力は使えますが勝手ながら女性の戦いを現すのが苦手なので、たぶん明久のサポート以外の人は使わないと思います

設定では普通の学生としてやっていく予定ですので気に入らない方はお下がりください

吉井明久
Ｆクラス、主役
『観察処分者』

ひょんなことからアンクと出会いオーズとなった
何故オーズになれるのかは不明である
毎日いろんなことがありすぎて彼に欲望というものは存在しない
召喚獣は原作と同じだが、

３００点越えになるとオーズになる
ちなみにオーズのことはＡクラスとの試験召喚戦争でたいがいの人

が知っている

アンク
Fクラス
訳あって文月学園に転校扱いで通うようになる。
好物はアイスで明久にコアメダルを集めさせようと利用する。頭はかなりいいのだが態度が悪いことでFクラスになった。召喚獣は鳥のようなグリードでアンクロストに似ている

ここからはみんな原作と同じ設定ですが一部を変えているのでその人だけ紹介します

姫路瑞希
Fクラス
明久が好きでフェイト、ほむらと一緒に勝手に『明久恋愛憲法』を作った↑明久は知らない

なのは
Fクラス
明久の古くからの友達の一人で明久に危害を加える人を問答無用でこらしめる
例：アンク、雄二、島田
数学、家庭科、化学以外はかなり苦手
オーズとして戦う明久を心配しサポート係として一緒に戦う

フェイト
Aクラス
明久のことが好きで『明久恋愛憲法』を勝手に作った一人
なのはと一緒に危害を加える人をこらしめる。サポート係の一人

まどか
Bクラス
まどかはほむらに勉強を教えてもらい見事にBクラスに進級できた。明久とは古くからの知り合いで無理をしている明久を心配しサポート係になる

ほむら
Bクラス
まどかに合わせBクラスになった。試験召喚戦争に負けた時根元に変わって代表になった。いつもクールだが明久の時は乙女な子になる。サポート係の一人。『明久恋愛憲法』を勝手に考えた

いろんな設定をしていますが全部は書けないのでメインキャラだけを書きました

ちなみに気になるCPはこうです↑ならないよ

明久↑瑞希、フェイト、ほむら

雄二↑翔子

島田は明久ではなく違う人と絡ませる予定です。すみません

ムッソリーニ↑工藤、はやて

アンク↑杏子、？

バースは誰と思ったそこの方！後藤さんでも伊達さんでもないんですよ～

ヒントは明久の身近な人です！

更新は遅くなると思いますが是非とも興味がある方は見ていってください！

グリードとデートと緑のメダル（前書き）

遅くなりました！やっと一話目更新です！

バカテスト　化学

問　以下の問いに答えなさい。

『調理の為火に掛ける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点と、マグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞希、フェイト・Ｔ・ハラオウン、ほむらの答え

酸素と反応して危険であるという点。

合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、三人は引っかかりませんでしたね。

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

アンクの答え

『コアメダルを使わなかったからだ』

教師のコメント
そこも問題じゃありません。

アンクの答え
『アイスを作らなかったせいだ』

教師のコメント
アイスは関係りません。

吉井明久の答え
『合金の例……未来合金（↑すごく強い）』

教師のコメント
すごく強いと言われても。

グリードとデートと緑のメダル

吉井明久の朝は早い。

「こっちが夕食で～。」

「明久。アイスよこせ。」

腕だけの怪人アンクが僕にアイスを要求してくる。まったく朝からうるさい奴だ。

「そんなものあるわけないでしょ。」

事実上アンクがすぐに食べてしまうから、僕なんてアイスを食べたことすら最近は無いよ。

「ああ！？ふざけんな！」

腕だけの怪物がうるさいな～。

「じゃあこれ食べてなよ。」

そういってアンクに渡したのは…砂糖。

「ああ？なんだこれ。」

「砂糖だよ。アイスも甘いんだし、変わりになるでしょ。」

「ふざけんなあ！！アイスとこんなザラザラしたもんを一緒にすんな！食えるか馬鹿が！」

「そんなこと無いよ～？僕は食べてるよ～？」

そういってアンクに砂糖を口を開けて入れようとする。

ちなみにアンクは腕だけの怪物だけど、ある時、ヤミーに襲われた人の体を乗っ取り人間として活動している。

「ああ!?てめっ何しやがる!!」

この!!強引にでも…。

「くっ…!?ぐああ!!」

僕の家からアンクの叫びが響き渡った。

「はあ…下手に使えないよなあ…」

僕は財布の中を見てため息をつく。

今日はAクラスとの試験召喚戦争で負けた後、三人に無理矢理?出掛ける約束をされたんだ。

「雄二のせいで…」

思い出すだけでイライラが収まらない。

雄二い…絶対に殺す…。

雄二が負けたことで同時に僕の食費に大打撃が与えられることになるとは。

ちなみに三人と言うのは…

姫路さん、フェイト、ほむらさん…

「まてよ…これはひょっとしたらデートじゃないか…。そうだよ！これはきっとデートだよ！それならちょっとやそっとの出費全然平気じゃないか～！」

けど僕は知らなかった。まさかグリードと戦うことになるなんて…。

気持ちを切り替え僕はステップを踏みながら集合場所である噴水広場に向かった。

あっ三人共集合時間までまだ３０分あるのにもう来てる。

『瑞希の服可愛いね！』

『そんなフェイトちゃんやほむらちゃんだって可愛いですよ！』『ありがとう瑞希。ほむらも可愛いね♪』

『ありがとう二人共…。二人も似合ってるわ。』

うんうん。みんな楽しくて何よりだ。それにしてもみんな似合ってるなあ…。

ほむらさんがいつもと違って足の肌が見えている…。

何だろう…普段肌を隠してる子が露出した肌を見せると…何というか…新鮮で可愛いらしい…

「はっ！いかんいかん！」

僕は自分の妄想にストップをかけ現実に戻る。

早くみんなの所に行かなくては

『みんな準備…出来てる?』

『はい／／！』

『…ええ／／』

うん?何だろ?フェイトが何か言った瞬間、三人共頬が赤くなったような…。

『『『今日は明日の朝まで帰らない（りません）！』』』

「なっ！?」

思わず声が出てしまった。いや出さずにはいられない…。

やっぱりデートなんかじゃない！あの三人一体僕に何をする気なんだ…！まさか死刑?

『あっ！吉井君！』

『明久！』

『吉井…』

三人が僕に気づきこちらを振り返る。凄い勢いで…

まずい…捕まったら最後…僕は…

「やあ…みんな……」

『『……』』

「ごめん！ちょっと用事がっ！」
その言葉と同時に全力で走り出す。
三人はすぐに気づいた…

後ろを見ると
『逃がさない…』とほむらさんが言いもの凄いスピードど追いかけてくるではないか

しまった…ほむらさんは魔法少女…身体能力が半端ない。
いやほむらさんだけではない…
フェイトも瞬速なみにスピードを出し追いかけてくる

くそっ！完全に二人の力を忘れてた…

『止まれ』
急に目の前のトンネルから緑色の服を着た男が現れた。
僕はぶつかるのを避ける為に仕方なく足にブレーキをかける。

「誰かわからないけどどいてくれない？ちょっと急いでいるんだ！」

『断る…貴様からコアメダルを貰うためになあ！！』

男が上半身が緑色の怪物に変わる。
見た目からして虫の怪物だ。

ん？コアメダル？怪物？

「まさか、こいつがアンクの言ってたグリード…！」
アンクは僕に出会って間もない頃グリードについて話してくれた。

完全復活の為にアンクからコアメダルを取り返そうとしている怪物
ヤミーの生みの親…。

ちなみに以前はカザリとかいうグリードと戦ったっけ？

『俺のコアメダルを返せ！！』

そういって緑色の怪物…アンクによるとウヴァと言うらしいグリー
ドは頭から電撃を放ってきた。

「うわあ！危な！」
どうにかかわす。なんでこんな時にいい！

そこにほむらさんとフェイトが追いつく。

『吉井！』
「駄目だ！来たら危ない！」

僕は電撃を避けながらほむらさんとフェイトに叫んだ

『なんだあ…あの小娘共は』

「！？やめろ！彼女達には手を出すな！」

ウヴァがほむらさん達を襲わないように必死に叫ぶ。

『大丈夫だ…俺が興味があるのはコアメダル』

なんだ…良かった。

『つまり貴様を殺して奪い取る…』

良かった良かった。フェイトやほむらさんには被害が及ばないんだね。

ん？コアメダル…貴様っ？

まさか…

『貴様を殺す』

えええ！？

「うわあ！ちょっと待ってよ！」

僕はウヴァが放った電撃をかわしながら逃げる。

「えっ明久！？」

「フェイト！ごめんどいてどいて～」

フェイトが目の前にいたので避ける。

『ちょこまかとこざかしい！ふんっ！』

「あっ！危ない！」

僕を狙って放った電撃がほむらさんに当たりそうになり、ほむらさんを庇いながら僕は攻撃を避ける

「大丈夫ほむらさん？」

「ええ…ありがとう」

「明久！ほむら！大丈夫？」

「ありがとうフェイト。この通り大丈夫！」

僕らはウヴァが迫ってきた為、すぐに全力で走り出した

「うう！なんでよりによってグリードなんかに！」

「「グリード？」」

僕の隣を走っているフェイトとほむらさんが尋ねてきた。

二人はグリードなんかわかる訳ないよね…でも今は話している暇はない！

「ごめん二人共後で話すよ！」

『おい！明久あ！！』

どからか僕を呼ぶ声が…

「まさかアンク！？」

周りを見渡すとおおきな木の上にアンクがいた。

「「アンク？」」

「アンク！なんであんな所に」

二人はアンクに気づき、僕はアンクがいたことに驚いた

「お前がもしかしたらグリードに会うかと思ってな…どうやら当たりのようだな」

こいつ！僕がグリードと会うのを知ってたのか？

「お前は究極の馬鹿だからな。グリードといつ会おうがおかしくないからなあ」

「きゅ…究極の馬鹿ああ！！？アンクうう！貴様あ！！」

『何ごちゃごちゃやっていやがるアンク！』
後ろを見るとウヴァが迫ってきていた

「うわあ！！アンク！メダル！」
「ふん…取られるなよ。」
そういってアンクは僕に三つのメダルを投げる
僕はドライバーを取り出し腰につけると同時にメダルをキャッチした

「フェイト！ほむらさん！離れてて！」
僕は迫ってきたウヴァを足で蹴り飛ばし、フェイトとほむらさんに
離れるように言った

「わかったわ。」
フェイトとほむらさんは頷きアンクの方へ行った

「さて…いくぞ！」
僕はドライバーに三つのメダルをセットし横にあるスキャナーでメ
ダルにスライドさせ読み込む

「変身！！」

『タカ！トラ！バッタ！』
ドライバーから三つのメダルの名前が聞こえメロディーが流れる

『タットッバ！タトバ！タットッバ！』

その途端、僕の周りにメダルが現れそれはひとつのサークルになり

僕の体に刻まれる同時に僕の姿は変わり仮面ライダーオーズとなった。

「ハッ！」
敵に向かって構える

『俺のメダルを勝手に使うな』
ウヴァが苛立つように言い放つ

「俺の俺の言うけどさ‥今はアンクのものじゃないか」

『うおっ！！』
ウヴァはさらにキレて僕に向かってきた。
「ハアア！！」
僕も走り僕は蹴りをウヴァは拳を放つ

「ぐわっ！」
『ちいっ！』
同時に当たり火花がちる
「おりゃあ！」
『ふんっ！』

次は拳を同時に放つ
僕はウヴァの爪が体に当たり後ずさる
「ぐあっ！」

さらにウヴァは爪で攻撃する
「ぐうう！パンチじゃ不釣り合いか！」
腕についているトラのクローを展開させウヴァにクローで上からアッパーをするように切り裂く

『ぐあ！』

「ハアッ！」
怯んだ所をさらに蹴り飛ばす
『こざかしい！』
「うわああ！ちょっ危ない！」

ウヴァは頭から電撃を放った。僕は腕をクロスさせ電撃から身を守る

『返せ！！』
ウヴァはベルトに手をのばしバッタを取ろうとする

「させるかあ！！」
僕は隙をついてウヴァにアッパーをくらわせる
『ぐうう！』

ウヴァは吹っ飛び建物にぶつかった

「凄い。怪物を圧倒している」
フェイトが驚きながら見ている
「あれがオーズの力…」
ほむらさんも静かにつぶやく

「いや…オーズだけじゃない。明久がオーズの力を上手く引き出している…いやそれ以上か」
アンクは起き上がるウヴァを見ながら感心したように言う

『くっ俺が圧倒されているだと？ふざけるなあ！』

「ぐあああ！！」

ウヴァが放った電撃が僕に直撃して僕はたまらず吹き飛ぶ
さすがはグリードといった所か…
って…

「あちちち！！尻が燃えてるう！」
僕は火を消そうと走り回る

ガン！

「いたああ！おうう！」
ライドベンダーぶつかり頭を打つ

「さすがはグリード…やるじゃないか！」

『いや…貴様が自爆してるだけだろ』

ウヴァは呆れたように言い放つ

「やっぱり…馬鹿だからか…」

アンクはため息をつきながら呟いた
‥アンク‥

明久がウヴァを圧倒してるがこのままだと馬鹿してメダルを取られちまうな…

「おいウヴァあ！！」

俺はウヴァに聞こえるように叫ぶ
「知ってるか？お前のコアメダル…カザリが持っているぞ！」

「何…カザリが？」
やはりな…
「やっぱり知らないんだなあ！俺達はカザリにカマキリのメダルを取られたんだよ！」

ウヴァの奴…かなり同情していやがる
今がチャンスか

「おい明久あ！！こいつに変えろ！」
俺は明久にチーターのメダルを投げる

「こういうことあまりよくないけど…今は仕方ないよね！」
バッタからチーターにメダルを変えて読み込む

『タカ！トラ！チーター！』

バッタの部分が黄色い足に変わった

‥フェイト‥

「あっ…緑色から黄色に変わった！」
私は驚きながら明久の方を見る
「三色から二色になった…」
流石にほむらも驚いてる

「はあああああ！」
その瞬間明久は高速でダッシュした
「凄い…私でもあんなスピード出せない」
さっき読み取ったのは…チーター…
つまりチーターの力を引き出してるってことね…

「セイヤアアア！」
加速して放った蹴りが怪物に直撃した。怪物は後ろへ吹き飛ぶ。やった！

‥明久‥
『うおおお』
僕が放った蹴りでウヴァは吹き飛び途端にメダルが散る
「あっ！あれってコアメダル！？」

その瞬間、アンクが人間から離れ二つのメダルを掴みすぐに戻っていった

「はっ！揃ったなあ…」
アンクの手にはカマキリとクワガタが握られていた

グリードとデートと緑のメダル（後書き）

ぐだぐだで始まりましたが頑張っています！

映画とフェイトと女の欲望（前書き）

「最初に」

この小説は原作オーズと全く話が異なります。
多少は合わせて行く部分もあります

さて今回はフェイトがメインのお話になると思います！
上手く書けない（笑）

映画とフェイトと女の欲望

‥明久‥

『く…俺のコアメダルが…』

虫のグリードウヴァはコアメダルがなくなりカザリと同じように体の鎧が破壊されよろめいていた

「よし！このままとどめだ！」

『ちい！』

僕がウヴァにとどめをさす前にウヴァは電撃を放ちその場から逃げ出した

「うわ！あっ逃げられちゃった」

「ふんまあ…いい」

僕は変身を解きアンクの方へ歩く

アンクはさっき奪った緑色のコアメダルを見ていた

「「揃ったってどういうこと（ですか）？」」

フェイト、ほむらさん、姫路さんがアンクに詰め寄る

僕も気になるなあ…

って姫路さんいつの間に！？

「ああ…さっき明久が変身した時…使ったメダルはタカ、トラ、バッタだったよな？」

「うん。あとはチーターだったね」

「コアメダルは各種類が三枚揃った時本当の力を発揮する」

アンクは僕達の方を見ながら淡々と話す

「そして、各三枚を使った時コンボが成立する」

「コンボ？」

「ああ…同じ色のコアメダルが三枚揃った時になれるオーズの進化形態だ」

コンボ…オーズの進化形態…

「俺がさっき手に入れたクワガタ、カマキリ。そしてお前が使ったバッタ…こいつでガタキリバコンボが成立する」

「ガタキリバ…コンボ」

フェイトがアンクが握っているコアメダルを見ながら言った

「ではさっきのチーターを使用した時は亜種ということですね」

さすが姫路さん。回転力が早い

「へえ…使ったら強いの？」

「強いというレベルじゃない。簡単に街一つ破壊できる」

アンクを除くみんなが黙り込んだ。

でも逆に考えたら戦いが有利になるってことだよね

「そういえばグリードって何なの？」

ほむらさんがアンクに向けて尋ねる

「グリードというのは８００年前にいたメダルでできた怪物で俺もその一人だ。グリードは俺を含め5体いる」

「5体…」

「つまり他のグリードもコアメダルを持っているってことね…」

フェイトが僕を見ながら呟く

「明久。今から鴻上の所へ行ってメダルの件について話してくる」

アンクはそういうと木から飛び降り歩き出した

「あっ僕も行くよ」

「ああ？お前用事あんだろ？」

えっ？用事って何かあったかな？

何かオーラを感じたので振りむいてみたら

「明久。さっ行こう♪」

フェイトがにこにこしながらそう言った

しまった！出掛ける約束！

「逃がさないわ。」

方向転換しようとした僕をほむらさんが腕を掴んできた…ちょおおおっ！

当たってる！なんか当たってるうう！「現在９時ですから時間はまだ沢山ありますね♪」
姫路さんがそう言いながらほむらさんが抱きついている逆の腕に抱きつく
うわわわ！当たってる！二人共プロポーションが凄いから…
「さっ行こう明久」
フェイトが何故か不満そうな顔をしながら歩き出した
はあ…仕方ない。死を覚悟するか
さて…アンク上手く行くといいけどなあ…
‥アンク‥
俺は鴻上の前に立っている。
奴には剣やカンドロイドなどバックアップで世話になってなあ
昨日明久がチーターを手に入れた時にセルメダルを７０％よこせと言ってきやがった
勿論７０％渡せばオーズをバックアップする為に様々なことをしてくれるらしいが…
「７０％も渡せるか！！」
「ではオーズの補助の件はなくなるのだが」
鴻上はにこにこと笑いながらパソコンを見ている

「３０％だ！３０％なら譲ってやる！」
「ＮＯ！７０」

くっ…ふざけやがって
俺は赤いジーンズのポケットあたりを握る。

んっ何か感触が

「アンク君なんだねそれは？」
鴻上が俺がポケットから取り出した紙に興味津々に眺めている

こいつは明久が渡した紙！

『アンクもしもの時にこれを使ってよ』

昨日乗り込みに行くと言った時明久が何か書いて渡したきたんだっけなぁ

「…こいつを明久がお前にと言ってやがった」

鴻上は俺からさっきの紙を受け取り中身を読み始めた

「素晴らしいいい！！！やはり彼は面白い」
鴻上は笑いながらもイスから立ち上がりその紙を里中と言う秘書に渡した。あん？何が書いてあったんだ？

「里中君読んでくれたまえ！」

セルメダル交換の件について

『僕は思いました。さすがに７０％は厳しいのでは無いかと。そこで提案があります！
セルメダルを５０％にして欲しいんです。やはり半分半分の方が互いに納得できますし、もしも大量に稼げたなら平等に振り分けた後全て余ったセルメダルを渡します。アンクもグリードだからセルメダルが必要になると思うんです。確かにあいつは化け物、グリードです！しかしあいつは人に危害を加えてません。僕はあいつの優しさを学校に一緒に行った時に感じました。あいつはグリードなんかじゃありません！だからここは半分にしてもらえないでしょうか？お願いします』

「吉井君は面白いよアンク君。ヤミーやグリードと戦うのは彼。彼は君の存在を知っていながらも君の為にセルメダルを稼いでいる」

「……」

馬鹿かあいつは。俺はあいつを利用しようとしているだけだあいつも気づいているはずだ

「彼は優しすぎる。そして面白い。確かに君はセルメダルを必要とするね。そして我々も必要とする。確かに吉井君の言う通りフェアにすべきだ」

鴻上は高らかに笑った

「素晴らしいいい！良いだろう吉井君の言う通りフェアにしようじゃないか！だが余ったセルメダルは我々が貰う。いいねアンク君？」

「まあ７０％取られるよりましか…良いだろう」

「では吉井君に感動した私からのプレゼントだ受け取りたまえ。里中君！」

そう言った後里中が俺に渡した物は…カンドロイドセットか

「私も吉井君を見習って５０体にしてみたよ。吉井君に渡しておいてくれたまえ」

「ハッ！お前にしちゃあ随分と気前がいいなあ」

フン！明久に感謝だなあ…

俺はそう思いながら外に出た

俺の何かが変わりつつある。まるで俺が俺ではないかのようだ

ハッ奴の言う通り明久は変わった奴だ

‥明久‥
チケット一枚千円！ポップコーンLサイズ三百円！これが数時間にして一気に減って行く…映画館なんて恐ろしい場所なんだ！

「あの…明久君」
「なあに姫路さん？」
姫路さんはたどたどしくしながらポスターに指をさす
「これ見ませんか！？」「これって今人気の恋愛映画よね？」

姫路さんが叫んだと同時にポスターを見てフェイトが目を潤ませる

「明久これを見ない？」
ほむらさんもか…

僕はもう一度チケット代を見る
千円…僕も見たら四千円か…
食費をもたせるにはとてもきつい‥

「明久どうしたの？」
ほむらさんが心配したのか僕に声をかけるが僕はチケット代が書いてある看板とにらめっこをしていた。くう仕方ないか…

「三人で見てきてよ。僕は待ってるからさ♪」
なるべく笑顔で答えたが三人は急に財布を取り出す

「ちょっ別に足りない訳じゃないから！ちょっと買い物しなきゃなあ～て」

「まさか逃げる気？」
ほむらさんがビシリと言い放つ

なるほどその手があったけど今じゃもう無理か

「嫌だなあ～ほむらさん。本当に買い物だって」

実際買い物したいのは本当だ。アンクのアイスも買わなきゃならないし夕食だって買わなきゃ…その為に今まで買ったゲームや漫画を半分以上持ってきたからね

「でもその鞄重たそうですよ？」

くっさすが姫路さん。すぐに鞄を指摘してきたか

「大丈夫だよ！すぐに軽くなるから」

「「？」」

ふと時計を見たら上映まで時間がないじゃないか

「あっ始まっちゃうね」

「やっぱり三人で見てきてよ！」

「諦めろ明久…男とは…無力だ」

この声は…

「雄二！？」

声がした方を見ると雄二が手錠につながら綺麗な服を着た霧島さんに連れられているではないか

「…雄二。何が見たい？」

「俺の望みは叶えられるのか？」

「…じゃあ戦争と平和」
「おい！それ7時間４０分もあるぞ！」
「…二回見る」
「１４時間８０分も座ってられるかあ！」
「…暇なら寝てていい」

『バリバリ』
「待て翔子！！なんだそれはがあああああ！」

雄二がスタンガンをくらい霧島さんに連れて行かれてしまった

「雄二…幸せにね…」

僕は雄二を見送った後にカウンターにいる人に声をかける
「すみません！この映画のチケットを四人分欲しいのですが…」
「申し訳ございませんお客様！この映画は人気でして今は二席しか空いておりません」

二席か…仕方ないよね
「じゃあ二枚お願いします」
「わかりました！二千円になります！」

僕は財布から二千円取り出しレジ係の人に渡した

「ありがとうございました！間もなく上映なのでお急ぎください」

「ごめんみんな…もう二席しか空いてなくて…二人しか見れないん

だ」

「仕方ないよね…人気なんだから」
フェイトが残念そうに呟く
「では公平にじゃんけんしませんか？」
姫路さんの意見でみんな納得したようだ。よし負けるように頑張るか

「「じゃんけんほい！」」

僕：パー
姫路さん：チョキ
フェイト：パー
ほむらさん：チョキ

「ありゃ～負けちゃった」
「私も負けちゃった♪」

「あう…勝ちました」
「…私も」
ナイスだ僕の手！勝ったら骨を壊すところだったよ

「勝ったのは姫路さんとほむらさんだね。はいチケット」

何故かチケットを受け取った姫路さんとほむらさんは残念な顔をしながら僕が勝ったジュースを受け取り中へ入っていった

‥フェイト‥

「ごめんねフェイト。フェイトだけ見れないね…」
「別にいいよ。」
瑞希、ほむらごめんね。これで明久を一人占めできる
今は9時30分…映画は2時間ね…

「暇になったね明久。…？明久？」
振り返ってみると明久がいなくなっていた。
周りを見渡してみるけどいない

「明久？」
まさか逃げられたのかな？

『じゃあな真美！！』
『待って公平ー！』

ふと声がした方を見てみるとカップルの人が喧嘩をして別れてる…

「…私もあんな風に明久に捨てられるのかな…」

明久は私のことをどう思っているんだろう…私はいつでも本気だよ
明久？

「ねえ君！」
ふと声がしたのでそちらを見るとさっき女の人を振ったの男の人が
私の前に立っていた

「君かなり可愛いね～！どう？俺と付き合わない？」
「お断りします」

「どうしてさ～幸せになれるから！」

さっき振った人が幸せにできるだろうか

「すみません。お断りします。」私はそう言って去ろうとしたんだけど

「ああ！？なんだてめえ！せっかく人が付き合ってやろうと言ってんのによお！」

「痛っ！離してよ！！」

男は私の腕をつかみ引っ張ってきたから私はバッグでその男の頭を思いきり叩いた

「痛ってええ！ふざけんなあ！」

男がぶちぎれて私は即座に逃げ出した

周りの人に助けを求めようか？いや助けてくれそうにない

「きゃっ！！」

今日はオシャレしてハイヒールを履いていたからとても走りにくく、こけてしまった

「ぶん殴ってやるぞオラアアア！」

男が私に追いつき拳を構える

助けて明久!!

「させるかあああああ!」
急にジェット機のようなスピードで明久が走ってきてナンパ男に思いきり蹴りを放った

「ぐほあああああ!」
男は叫びかなり吹き飛んでいった
「明…久。」

‥明久‥
「大丈夫フェイト!?」僕はフェイトに手を貸し起こしてあげた

うかつだった。ゲームや漫画を売りに行っている間にフェイトが男にナンパされてたなんて
フェイトには本当にとんでもない迷惑をかけてしまった‥

「フェイト逃げるよ!またあの男が追ってくるかもしれない」

「うん…」

フェイトの手を優しく握り僕とフェイトは二階へ急いで逃げた

「ごめんねフェイト…何か言っておくべきだった…」
「いいよ…明久助けにきてくれたから」

フェイトは微笑みながら頬を赤くした

フェイトの微笑みはやっぱり癒やされる

髪は金髪でおろしてあり、瞳は綺麗な赤色。おまけにプロポーションもいい…フェイト程の美人…ナンパされるのは当たり前だよね…

勿論姫路さんやほむらさんも素晴らしいよ

「フェイト…お詫びと言ってはなんだけど服をおごるよ」

「本当!?嬉しい!」

良かった喜んでもらえた

「じゃあ行こうか。」「明久…」

フェイトが頬を赤くしながら上目遣いでしゃべる

「腕…掴んでもいいかな?」

上目遣いされたんじゃ断れないや

「うん…さっきのこともあったからね」

フェイトは僕の腕に抱きつき歩き始めた

何か当たってるような…

当のフェイトは嬉しい顔をしているからよしとするか

：姫路：
『ミリア！エリー！桜！由希！真里！みんな一緒に暮らそう！みんな俺の妻だ！』

『『賢治！！』』

『結婚しようみんな！』

はわわ…私とほむらちゃんは顔を赤くしながら映画を見ています。

まさかこんな展開があるなんて！！

：真美：
「公平に振られちゃった…」
今まで彼を一生懸命愛してきたのに…私どうしたらいいの？

『育ってる育ってる。早く生まれてね私の子供達』

映画とフェイトと女の欲望（後書き）

どうでしたか？次はいよいよピラニアヤミーと戦います。

クレープとロングヘアーと女の欲望の秘密（前書き）

遅くなりました。続きを更新しました
良かったら見てください！

明久と三人の恋愛関係が難しいです

「明久…似合う…かな？」

その姿を見て僕は頬を赤くした。
可愛いを通り過ぎ綺麗がふさわしいくらいだ

フェイトは上を黒い服を主張とし、ピンクのミニスカートを履いてる

「明久…？」
「……！！ああ！うん凄く似合ってるよ！！」

畜生！困った顔したフェイトも可愛いすぎる！

「…！嬉しい…なあ」フェイトは両手を頬につけ赤くなっている

フェイトとは昔からの付き合いだけど…こんなに美しくなったんだ…
昔から見てきているから気づけなかっただけかな？

「明久…」
「うん？何？」

「もしもだよ。明久が好きな人が5人いて…」

もしものレベルを越しているような…
ちなみに僕が異性として好きな人は3人しかいないよ

「もし同時に5人に告白されたら…明久はどうするの？」
フェイトが少し暗い顔をしながら尋ねてくる。彼女にとっては何か大切そうだな…
よし…僕も真面目に答えようじゃないか

「そうだね…僕ならきっと5人とも受け入れるかな…大変だと思うけど…やっぱり好きな人とは一緒にいたいしね…」

僕が顎に手をあてながら考えているとフェイトが目の前にいた

「ありがとう明久！明久はやっぱり優しいね…」
フェイトが微笑みながらそう言う

何故お礼を言われたかわからないけどやっぱり彼女にとっては大事そうなことなんだろう…
真面目に答えて正解だったね

しばらくフェイトといろいろな所へまわってから姫路さん達と合流した

‥姫路‥
「明久君！」

私は明久君に手を振りながら映画館からほむらちゃんと一緒に出ました

とても感動して…途中から涙が止まりませんでした…ううう。

「ありがとう明久。たまには映画もいいものだわ。」

ほむらちゃんが微笑みながら明久君に飲み物を渡してきました
ほむらちゃんはめったに笑わないので微笑んでほむらちゃんはとても可愛かったです

「ありがとう。喜んでもらえて何よりだよ。」

頬を赤くしながら答える明久君は素敵です！

「フェイトちゃんそれ…」
私はフェイトちゃんが持っている物が気になり尋ねてみますと
「これ…明久に買ってもらったの」
とフェイトちゃんは微笑みながら明久君の腕を掴みました

ううう…羨ましいですぅ。

「明久君！お昼ご飯はどうします？」
「うーん…そうだね…」
「吉井。前に美波から教えてもらった店があるけど…そこにする？」

「じゃあほむらさんに任せるよ。なんて店？」

「ラ・ペディスと言う場所らしいわ。」

「じゃあそこに行こう。姫路さん、フェイトいいよね？」
「勿論です！」

「うん！私もいいよ」
私達四人はラ・ペディスへと向かうのでした。まさかこの後にあんなことが起きるなんて私達はまだ知りませんでした

‥真美‥
なんで…なんでよ
なんで私…

私は公平に振られた
あんなに私を信じてくれたのに。あんなに私が好きだって言ってくれたのに

どうして？

私は涙をこらえ店の中をあてもなく歩いていた
ふと周りを見ると仲のいいカップルが歩いている

許せない！私だけ私だけ！

拳を握りしめ周りにいるカップルを睨む

「あれは…Ｆクラスの吉井明久？なんであんなに仲良く姫路さんやフェイトさん、ほむらさんと話しているの？」

彼女達は成績優秀で学園主席の力を持つ人達だ。
それなのなんであんな馬鹿と一緒にいるの？
どうして？

「吉井…明久。あんな馬鹿がなんでモテるのよ」

私は吉井を含め仲のいいカップル達を潰したい…潰したい！

‥メズール‥
『生まれるわ…』
彼女は仲のいいカップル達を潰したい…という欲望により彼女に入れた欲望のセルメダルは十分に育った。
『さあ…どんな力を見せてくれるかしら？フフ』

彼女の部屋を見るとふ化した大量のピラニアのヤミーが彼女の部屋から現れ外へと出て行った
彼女の欲望を叶える為に

‥明久‥
何故こんなことになってしまったんだ

僕の目の前の席と隣に座っていた姫路さんとほむらさんは僕にクレープを刺したフォークを差し出し、頬に何か感触があったので横を見るとフェイトがニコニコとクレープを刺したフォークを当ててくる

ことの発端はフェイトだ
『美味しいです！このイチゴクレープ』
『私のチョコクレープも美味しいわ…』
『私のマロンクレープも…美味しい！』

姫路さんがイチゴクレープ、ほむらさんがチョコクレープ、フェイトがマロンクレープを美味しそうに食べている

うん。やっぱり女の子は甘い物が好きなんだね…
三人の幸せそうな顔を見るとつい微笑んでしまう

『明久は…食べないの？』
『僕はいいよほむらさん！ほら食べて食べて』

実はさっき収入を得たんだけど、この後、アイスや夕食の材料を買わないといけないから無駄使いはできないんだ

『でも…明久お腹減ってるでしょ？』
『ありがとうフェイト。確かに減っているけ『ズイ』

僕が言い終わる前に三人が一斉にクレープを刺したフォークを差し出してきた

そして今に至る

『『はい！アーン！』』

「ちょっと待ってみんな？それじゃ口移しのようなことになるよ！？」

『『構わないわ（構いません）！』』

ええ！ちょっと待ってくれ
なんで嫌がらずどんどん迫ってくるの！？

「明久あれ何？」
フェイトが外を指を指す

「うん？なん（グイグイ）…！」

気づくと僕の口には三つのフォークが入っていた

「！？」

そして三人は僕の口にクレープを入れた後、普通のようにクレープを切ってフォークに刺し食べている

僕の口に入れたフォークを自分達の口へ…
僕は頭から湯気を出し俯きながらクレープを味わった

「あの…明久？」
顔を上げるとフェイトが赤くなりながらしゃべる
「明久…ってどんな子が好みなの？」

いきなり何を聞いてくるんだろう。

「いや…そのムッツリーニが明久は長い髪の子が好みって言ってたから」

ムッツリーニイイ！
何故、僕の好みを知っているんだあ！これじゃ彼女達に僕が好きだって誤解を招くじゃないかあ！
彼女達は僕より雄二が好きなはずだから…

よし！ここはわざと外して誤解を解こう！
「そうだね…実は三つ好みがあって…一人はふわふわのピンク色をしたとてもおしとやかな子が好みかな…
二人目は金髪でストレートで瞳が赤くて元気な子
三人目は黒い髪でストレート。性格はクールでもの静かな子が好みかな」

よしこれで大丈夫…あれ？なんで三人共赤くなりながら俯いてるの！？

はっ！？

僕はさっき言ったことを思い出した

しまった！つい本音を
待てよ…さっきの好みって
一人目姫路さん
二人目フェイト
三人目ほむらさん

「ちょっと待ってみんな！これはその…えと！まさかみんな自分のことだと思ってる？」

『『コクン』』

なんて正直な人たちなんだああ！
ヤバいヤバいよ！
これって…告白に近いよね！？

あああああ！振られるうう！
さらば僕の人生！さらば僕の初恋！

「明久…」
「明久君…」
「明…」

三人が俯きながら僕に声かけ一瞬ビクリと肩が上がる僕

あれ？ほむらさん呼び方変わってない？

『『私達は…「バリイイン！」

三人が何かを言う前にラ・ペディスの入り口が破壊される

「！？なんだ！」

僕はすぐさまみんなと外に出た。
そこには…
一人の女の子とピラニアのヤミーが男女を食べている

「…なんだよこれ！」
『キャアア！』

叫び声がした方を見ると三人がピラニアヤミーに襲われそうになっていた

「くっ！危ない！」
とっさに三人を突き飛ばし盾になる

「ぐはっ…」
ピラニアヤミーの体当たりが当たり僕は吹き飛ぶ
ギリギリ急所には当たらなかったけどわき腹をやられ血が流れた

「ぐ……みんな逃げて！」
「でも…明久」

「早く！！！」

僕は三人に大声で叫ぶ

「姫路、フェイト、行くわよ」
ほむらさんが苦しい顔をしながら二人を連れて逃げる

「逃げられたわ…」
声が聞こえそちらを向くと知っている人がいた

「君は…Dクラスの真美さん…」

真美さんは僕に気づき暗く微笑んだ

「こんにちは吉井明久…」
「まさか君がこのヤミーを!?」
「そうよ。これが私の欲望の化身」

ピラニアヤミーが噛みつこうと突進してきた

「うわ!」
すれすれでかわせたけど軽く数千体はいる…よけれるはずがない

「ぐはっ…」

「あははは!いい気味だわ!」

「何故だ真美さん!何故こんなことを!」

「私は公平に振られたのよ。」
真美さんは唇をかみしめながら呟く

「私はあの人に全てを注いだのに!あの人の全てを愛したのにいいい!」

「ぐは…真美さん…」
「あの人は私を振った…目の前の金髪の子に一目惚れしたのよ」
「そんなっ!」

僕は必死に避けながら叫ぶ
けど叫びは彼女には届かない

「そして…一目惚れした相手はAクラスのテスタロッサ」

「！！」

そんな…フェイトが一目惚れの相手だったなんて…

そして僕はさっきのことを思い出した

それはフェイトをナンパしようとした奴のことだ

「私は許せなかった。テスタロッサが。テスタロッサが私の公平を奪ったんだわ…そして吉井明久！あんたも許せない！」

「！！」

「なんであんたのような馬鹿がモテるのよ？」

悲しくなってきたけど落ち込んでいる暇はない

「けど…君のヤミーのせいで多くの人の命が失われるんだぞ！？」

「あははは！もう構わない！私の欲望が満たされるまで他人の命なんかどうてもいいのよ！」

そんなこと許されるはずがないよ！！

「僕が君の欲望を止める！」

僕はピラニアヤミーから離れドライバーを腰につける

そして三枚のメダルをセットする

「変身！！」

わき腹の痛みに耐えながらスキャナーを取り出し三枚のメダルを読み込む

『タカ！トラ！バッタ！』

『タットッバ！タトバ！タットッバ！』

僕は仮面ライダーオーズに変身しメダジャリバーという剣を取り出した

「いくぞ！うおお！」

僕はピラニアヤミーの軍勢に立ち向かって行った

クレープとロングヘアーと女の欲望の秘密（後書き）

明久：次回はいよいよガタキリバの登場でーーすぅ！
フェイト：なるべく早く更新するらしいから見ていってね（ニコッ

故障と覚悟と緑のコンボ（前書き）

遅くなりました！続き更新します！

故障と覚悟と緑のコンボ

「うおりゃあああ！」
僕はピラニアヤミーの軍団をメダジャリバーで切り裂く
けど…切っても切っても一向に数は減らない

「うわっ…くそっ…」
メダジャリバーで回転切りしながらピラニアヤミーを蹴散らす

「はあっ！！」
そして片手で持ち真っ二つにする
こうしていけばピラニアヤミーの攻撃を少しでも防げる

「うっ…ぐあっ！」
く…さっきくらった脇腹の痛みでメダジャリバーを落としてしまう
そして、ピラニアヤミーの軍団から攻撃を受け吹き飛ぶ。くっ…このままじゃまずい！

「く…ならクローで！」
僕がトラクローを展開した同時に叫び声が聞こえた

「！真美さん！？危ないっ！」

僕はピラニアヤミーに襲われそうになった真美さんを庇う。ぐあっ…

「大丈夫真美さん？」

「どうして…どうして私なんか」

「真美さんがやったことは確かに悪い。」

真美さんは俯きながら涙を流し始めた

「私……どうすれば
いいの？」

僕は黙るしかなかった。本当は彼女は悪くないはずだ…
そして僕に一つの答えが導き出された

「真美さんは頭もいいし、可愛いけど…」

僕は仮面の中で笑った
「ただ…男を選ぶのが下手くそなのかもね」

僕はそう言って真美さんの頭にポンと手を置く

さて…このヤミーをどうにかしなきゃ！

「僕は今から…君の欲望を止めにいくよ」
僕はそう言って真美さんの頭から手を離し再びピラニアヤミーに向
かっていった

「どうして…人殺しなんて言わないの？」

‥アンク‥

俺は鴻上から貰ったカンドロイドを手に明久の元へ向かう

このメダルがたまる感覚…

メズールのヤミーか…。なら大量に稼げるなぁ。

「…チッ明久の奴勝手なこと考えやがって」俺は明久の考えた案の内容を思い出し舌打ちをする

俺が人間だと?ふざけんな‥俺はグリードだ!どんな手を使ってでも自分の欲望を叶える

あの馬鹿はその為に利用しているだけだ!

「馬鹿がっ!」

俺は再び舌打ちをしながら明久の元へ向かった

‥フェイト‥

「明久君大丈夫でしょうか…」
瑞希が俯きながら呟く
「大丈夫だよ…明久は強いから」
あの時だってグリードを蹴散らしてくれたから…
そして明久は絶対ピンチを乗り越える人だから…

「今私達にできることは…明久を信じることよ」

ほむらさんの言葉で私と瑞希は頷いた

「うわああ！なんでええ！」
急に叫び声が聞こえ振り向くと明久がオーズが自動販売機を叩いていた
えっ！？なんでそんなことになってるの！

‥明久‥
僕は再びピラニアヤミーに立ち向かっていった
けどトラクローが攻撃範囲狭いせいでピラニアヤミーの攻撃を受けながら戦っている
ぐう…きつい

「こうなったらバイクで一掃してやる！」

僕はセルメダルを取り出しライドベンダーへ向かった

「えっと…　あ。あったあった」

セルメダルを投入し準備完了！

「よおし！変形だライドベンダー！」

シ～ン

あれ？なんで変形しないんだろ？

何度もボダンを押す。けど反応は見られない

あれええ！？

「わああ！セルメダルが出てこなーいっ！」

なんなんだこのライドベンダー！

これじゃあセルメダルを無駄に消費しただけじゃないか！

「明久。はあ…何やってるのよ？」
傍らにほむらさんがいた。

「あれ？ほむらさん呼び方戻って『ゴスッ！』痛ああ！？』
僕の顔面にほむらさんのストレートパンチが直撃した

「やっぱり恥ずかしくなっただけよ」
そう言ってほむらさんはぷいっと顔を逸らす
なんだ…急に呼び方変えるのって恥ずかしいよね

「で、どうしたの？」
「あっうん。ライドベンダーが変形しなくてさ」
僕はそう言ってセルメダルをもう一回入れる
「畜生！変形しないよ！」

またセルメダルを無駄使いしちゃったじゃないかあ！

「わかったわ。私がやってみる」
ほむらさんはそう言うと足をトントンとしている
いやな予感がする

『ガアアアン！』

ほむらさんが放った回し蹴りが思いきりライドベンダーに直撃した

ちょっと待って！ほむらさんスカートだよね！見えちゃうよ！？
僕は必死に目を逸らす

『ガシャーン！』

ライドベンダーが音が聞こえ見てみるとバイクへと変形していた…

「凄いよほむらさん！」

僕はほむらさんの手をとり感動したように言った

うん？ほむらさん顔赤いなあ

「ほら…早く行きなさい！」
ほむらさんは焦ったような声で僕に言った

「うん！ありがとう！」

僕はほむらさんから手を離しバイクへとまたがる

「よおし！行くぞおお！」

ブオンと音を立て再びピラニアヤミーの軍勢へ向かって行った「だっしゃあああ！」
勢いよくバイクを飛ばしピラニアヤミー達を引き倒していく

ピラニアヤミーは倒れたと同時にセルメダルとなり、次々と倒した
ピラニアヤミーのセルメダルが散らばる
アンクが見たら喜びそうだ

「あれは？部屋？」
ピラニアヤミー達が現れる場所をたどっていくととあるマンションの家の部屋から次々とピラニアヤミーの軍団が出てきている

「よし！」
僕はスピードを更に上げマンションの部屋へ突撃しようとした。
部屋はマンションの二階だからジャンプしなきゃ届かない

「よいしょっ！」
バイクを加速させ一気に部屋へめがけてバイクをジャンプさせた
けどそう簡単にはいかずピラニアヤミー達の妨害を受け僕はバイクから落下した

「うわああ！」
地面へと叩きつけられた後、ピラニアヤミー達に噛みつかれた

「ぐ…痛たたあ！」
おのれピラニアヤミーめ！これでもくらえ！
僕は拳をピラニアヤミーに放ちバッタレッグをいかして回し蹴りを放つ
そしてその勢いで後ろへと下がった

『ベシャっ！』
バッタレッグの跳躍力が強すぎた為に僕はうまく地面に着地できずに頭を打ってしまった

「痛てて…もう少し弱めにジャンプしておけば良かったかな…」

すぐに立ち上がってマンションの部屋を見てみるとピラニアヤミーはもう生まれてくる様子がないけど、まだ軽く数千匹はいるな…

「ほうっ！これは大量だなぁ」

「アンク！」

ふと声がしたので振り向くとそこにはアンクがニヤリと笑いながらピラニアヤミー達を見ていた

「鴻上さんと上手くやれたの！？」

「まあな…お前の案を使って上手くいった」

「それは…良かったね」

まさか僕の考えが通るなんて

「…無駄に気を遣いやがって」

「うん？何か言った？」

「独り言だ。それより何苦戦してんだ」

アンクは呆れたように僕に言い放つが仕方ないじゃないか！

「タトバじゃ限界があるんだよ！他のメダルに変えれば…」

「無理だな…一つメダルを変えた所であの軍団には勝てない」

やっぱり無理なのかな…ん？一つ？

「アンク！コンボならいけるんじゃあ…」

「確かにな…だがコンボは危険だ」

危険なんで？

「亜種になれるんだからコンボも」

「亜種なんかと一緒にするな。コンボはあまりにも強い為に制御できなかったり下手したら死ぬ」

僕はアンクが言ったことを黙って聞いていた

「コンボは普通の奴じゃあ無理だ。お前にできるか？明久」

僕は拳を握りしめピラニアヤミー達を見た

「でもコンボを使えたらあいつらを倒せるんだよね？」

「ああ…」

僕にもう迷いはない。やってみなきゃわからないしね

「じゃあ…やってみようかな…」

アンクは黙って僕を見た後、二枚のメダルを取り出した

「ぶっ飛ばされてメダルなくすなよ？」

「わかった」

僕はアンクから二枚のメダルを受け取りその場を走り去る

「明久！」

僕はアンクから少し離れた後、メダルを入れようとした時、声が聞こえその方向を向く

「フェイト…」

フェイトが悲しそうな目で僕に近寄る

「明久…」

「明久君」

フェイトだけじゃない。姫路さんやほむらさんも僕の方へやってくる

「みんな…」

「明久…帰ってきてね？」

「明久。信じてるから」

「明久君…必ず勝ってくださいね？」

やれやれ聞いてたのか…そんなこと言われたらなおさら絶対生きて帰らないといけないね

「大丈夫！僕はこんなことでは死なないよ！」

僕は笑いながら答えポンと三人の頭を軽く叩いた

「「いってらっしゃい」」

三人は笑顔でそう言ってくれた（上目使いで）

「うん！行ってくる！」

僕はピラニアヤミーの方へ走り去り三人から離れた

よし…ここなら何かおきても大丈夫！気合いは十分だ！

「さて…行きますか！」

僕は二枚のメダルをドライバーにセットした

三枚揃ったメダルはセットされた時に緑に光った

そしてスキャナーを取り三枚のメダルを読み込んだ

『クワガタ！カマキリ！バッタ！』

ブーンと虫の飛ぶ音が聞こえた後

『ガータガタガタキリバッ！ガタキリバッ！』

歌が響いた

三つのサークルはガタキリバのサークルとなり僕の体に刻まれサークルはタトバからガタキリバへと変わった

「手とカマキリへと変わり顔はクワガタをモチーフにした姿へと変わっていったわ」

ほむらさんが驚きながら言った

「全身が緑色ですね」と姫路さんが言う

体中から力が満ち溢れる

「うおおおおおお！」

僕は体中に駆け巡る力を外へと解放した

僕から出た波動が周りに広がる

「っ！？」

アンクが手を抑えて防ぐ

「きゃああ！」

「凄い…力」

「これがコンボ…」

「おおおお！ハアアア！」

砲口を止めて思いきり腕を下ろす

「うおおおお！」

「え！明久が沢山いる！？」

「これは分身！？」

「凄いです！明久君！」

僕はピラニアヤミーへ向かって行き、ガタキリバの力で僕の分身を沢山作りだす

負ける気がしない！

「コンボの力…どれほどか見せてもらうか」

故障と覚悟と緑のコンボ（後書き）

ようやくガタキリバへとなれました！
次回は決着とその後を更新します！

力と反省と決意と…（前書き）

明久：管理人ちょっと

管理人：何何？

アンク：くたばれ

管理人：ぐはっ！？

ほむら：こんなに遅く更新してしかも内容が曖昧なのはどういうことかしら

管理人：それは…僕だって用事が

明久：嘘つくな！いつも遊んでいただろ！

管理人：ギクッ

ほむら：しかも他の方への感想書かないでお気に入り登録しているのはどういうつもりかしら

管理人：すみません（泣）（泣）必ず必ず書きますからあ！

明久：管理人他の小説を書くって本当？

管理人：うん♪仮面ライダーではなくバカテスシリーズを…何？どうしたのみんな

全員：ある程度更新してからにしろおおお

管理人：ぎゃあああ

力と反省と決意と…

明久ｓｉｄｅ

『うおおお！』

僕はガタキリバの力で作り出した５０人の分身と共にピラニアヤミーに切りかかる

『はあっ！』
『てやっ！』

『はっ！』
『おりゃあ！』
『よっ！』

腕についているソードど切り裂けば、殴ったり蹴っ飛ばしたりもする

５０人対１０００匹以上なのに軽く圧倒している

凄い！まだまだ力がみなぎってくる！

『はあ！！』
『うおりゃ！』

ピラニアヤミーは次々とメダルとなっていく

「ほおう！これは大量だなあ！！」

アンクはタカカンドロイドに散らばっている大量のメダルを集めさせていた

『！！』

切り裂いたり、倒したりしていたけど
残ったピラニアヤミーが上空で固まり大きなピラニアになった

けど…今の僕には通用しない！

腰についているスキャナーを取り出せば僕の分身達も取り出した

そしてそれを再びドライバーに読み込む

［スキャニングチャージ！！］

その音と共に僕らは上空に飛び上がり必殺キックをお見舞いする

よし！決める！！

『『ハアアア！セイヤアアアアー』』

くらえええええ!!

僕らはピラニアヤミーの体内に入りキックを何発も放った

『ギャアアア!』

ピラニアヤミーが大きく叫びその途端大爆発が起きた

「ハッ!」

僕は爆発から抜け出し地面に着地した

危ない危ないあやうく虫焼きになるところだった

!?あれ?急に力が…うぐっ苦しいや…

でも、僕は帰ってこれたんだ

「どう…だ…アンク。コンボに耐えた…よ」

ドライバーを横にして僕は変身を解いた

体は重く大量の汗が流れ落ちる

「…召喚獣で受けるフィードバックよりはまだましかな?」

僕はそうアンクに言って笑ってみせた

これがコンボの力…強すぎるけど…かなり体力が減ってしまう…

「…正直驚いたな…まさかコンボに耐えれるとはなぁ…」
アンクが珍しく顔をびびらせながら呟いていた

フェイトｓｉｄｅ

私…凄い光景を見ちゃったな…
大量にいる怪物を圧倒する仮面ライダー…ううん明久

そして降り立った時の姿がとても格好良かった…

「フェイトちゃんすごかったですね今の♪」
「うん…そうだね」

瑞希が嬉しく聞いてくるけど私は静かに答えた
あれ？私まさか

「フェイト？」
ほむらが心配そうに尋ねてきた

「…二人共…私…明久もだけど」

本当にあの姿は格好良かった…

「あの緑色の姿のオーズが…好きになっちゃった…」

私は頬を赤くしながらそう答えた

「！ええええ！？」

瑞希は慌てていて、

「…！！」珍しくほむらは驚いていた

アンクｓｉｄｅ

あの馬鹿…コンボに耐えやがった

俺は何故か震える手首を抑えて手のひらにある緑色のコアメダルを

見つめた

「……ハッ！やっぱりあいつにはメダルの力を使いこなす才能があるなぁ…」

ガタキリバを耐えたあいつのことだ…

おそらく…他のコンボも

俺は明久の方を見ながら独り言のように思った

『わあああ！三人共落ち着いて！』

明久は叫びながらあの三人から必死に逃げていた

「…やっぱり馬鹿だからか…」

俺はそう呟き少しだけ笑った

明久ｓｉｄｅ

「大丈夫？」

僕はそう言いながら泣き崩れている真美さんに近寄り問いかける

「私……私…みんなに酷いことを…」

真美さんはボロボロと涙をこぼし必死に謝った

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい…」

「真美さん…」

僕は拳をぎゅっと握りしめた

真美さんはきっと利用されていたんだろう…

勝手な考えだけど…フェイトをナンパしたあの男はナンパをした時点で酷い性格の人だとわかる

真美さんはきっとナンパされて…真美さんは告白と勘違いをし…利用されてたんだ…

彼女の欲望はきっと彼女の叫びから生まれたものなんだろうな…

「吉井…明久君?」

真美さんはようやく我に返り僕の方を見てきた

「私…私…」

彼女は再び涙を流した…

彼女のやったことは許されない…けど…彼女は反省をしている

一番大事なのはその後自分の過ちに気づけるかどうかだ…
できることなら彼女を救ってあげたい…
彼女を悲しみの渦から救い出したい…

悲しみを背負うのは僕だけで十分なんだ

アンクをふと見るといつも通りにアイスを食べながら最新型の携帯を使い何かをしていた

「真美さん…君のやったことは許されない」
「！……」

「だから…ちゃんとした人を見つけるんだよ？これがみんなに対する謝罪さ」

僕はそう言ってから真美さんに微笑んだ

「吉井…君。どうして…？」
「うん？だって…誰だって青春が欲しいでしょ？」
「そうじゃなくて」

「じゃあ真美さん…また学校でね！」

僕はそう言うと真美さんから離れていった
彼女ならきっと大丈夫…

「吉井…君。私…」
ゆっくりと目をつぶりそして笑った

「ありがとう…私…もう自分に負けない」
そこには一時欲望に飲み込まれたが、欲望を自ら打ち砕いた女の子が空を見上げていた

「きっと…自分を大切にしてくれる人に出会ってみせる…必ず」

「みんな大丈夫だった?」
僕は三人の所へ走り無事かを確認した

「はい！私達みんな無事です」

良かった…怪我一つなくて…

「明久…大丈夫？」

急にフェイトが僕の額に手を当ててきた

ちょっ…

「…！フェイト。急にどうしたの？」

「明久…つらそうな顔をしてるから…」

僕はまだ疲れている顔をしてたのか…

正直体が重いや

「大丈夫だよ！こんなのフィードバックに比べたら全然たいしたことないさ！」

僕は笑いながら答えたけど三人は心配な顔をしている

もうっ！どうしたらいいんだよお！

「明久…あのね…」

ほむらさんが急に静かに話し始めた。なんだろう

「あなたがオーズとなって戦っているのを見て正直つらそうだった

…」
「…」
「あなたは欲望を止める為に一人でヤミーやグリードと戦ってる…
私達はそれがとても辛いのよ…」
ほむらさんは顔をゆっくり上げて話しを続ける
「だから…明久にとっては迷惑かもしれないけど…私達も明久の戦
いに協力させて欲しいの」
僕は指で額を弾かれたように驚いた
ほむらさん達は人間だ！オーズになれる力はない…
「そんなの…危なすぎるよ」
「危ないのはわかってる…けど私には魔法少女の力があるから」
「私だって能力があるよ」
フェイトが笑顔で言ってきた
「姫路さんは…」
「私は…これから明久君をサポートできるようなことを見つけます。
」
きっと何を言っても三人は突き通すだろう。なら僕にできることは…
「わかったよ…なら僕はみんなを必ず守ってみせる」
三人は笑顔で頷き…そして

「ところでさっきの子は誰?」

ほむらさんのこの一言により天国は地獄化としてしまい家に帰れたのは夜の8時だった

力と反省と決意と…（後書き）

次回は真美さんが再び登場！

そして新たな欲望の主とまさかの明久へ惚れた人が…

なのはと新たなメダルとキス（前書き）

管理人：やってしまった
明久：ううー
なのは：今回は酷い内容かもしれませんが是非見ていってください

「でね…明久がとても格好良かったの！」
「へえ…凄いねアキ君」

私の名前は高町なのは
今、私は親友のフェイト、はやてと一緒に文月学園に向かっています
フェイトったら合流した時からずっとアキ君の話ばかりで幸せそうに見えるなあ…

「アキ君体大丈夫なんか？コンボは厳しいんやろ？」

はやてが少し心配な顔で喋る。フェイトからガタキリバコンボの話しを聞いた時は私もびっくりしちゃった

『…ってよ！』
「！？」
ふと声がしたのでそちらを向くと

『なんでそんなに急ぐんだよ！』
『うるせえ！今日こそ坂本の奴を懲らしめてやる！』

ダッシュで走るアンクに続いて必死について行くアキ君がいた

「大丈夫そうやな」
「流石は明久だね…一日でもうよくなってる」
苦笑しながら笑うはやてと感心しているフェイトと一緒に私は笑った。アキ君なら大丈夫…かな

『たくっ！明久あ！早くこねえと帰ったらアイス全部食っちまうぞ！』

『えええっ！そんなことしたら僕の食費にダメージがあ！』

アンクを追いかけながらアキ君は涙目になりながら叫んでいます

カチン！

この時は私…ううん。はやてやフェイトも一緒に頭に怒りマークが浮かび上がりました

アキ君は私達三人とは古くからの親友。さらに私はアキ君とは幼なじみ関係

そんな関係で目の前で涙目になりながら叫んでいる幼なじみを見て果たして誰が怒らないだろうか？いや怒る

「「「アンク！」」」

私達は一斉にアンクに向かって叫ぶ。

「んあ？うおおお！？」

アンクは私達から放たれているオーラを見て顔をひきつらせてる

「アンク…アキ君を泣かせたわね？」

「まて！高町！こいつが悪いんだ！」

少しＯＨＡＮＡＳＨＩしようか？

瞬間アンクは高速で逃げたので私達はすぐに追う

「「「逃がさない！」」」

『畜生がああああ！』

けど、その時ドサッと倒れた音がしたので止まって振り返ってみると

「アキ君っ！！」

アキ君が急に倒れ私は二人を追わずにアキ君の所へ走って行った

明久ｓｉｄｅ

何だろう…この感触…どこかで…そうだ…この懐かしい感触はあの人しかいない…

「…うん？」

「良かった…気がついたんだね」

目をゆっくり開けると額に手のひらを当てながら微笑む幼なじみがいた

髪はサイドポニーテールで優しそうな瞳…

「なのは？あれ？僕どうして保健室に？」

気づいたら僕は保健室のベッドにいた

「もう…びっくりしたんだから。急にアキ君が倒れて何かあったんじゃないかって」

なのはが苦笑しながら額から手を離して僕を起こすのを手伝ってくれた

そうだ…確か

『アンク…なんでアンクはアイスだけで生きていけるの？』

『はんっ！俺はグリードだからなあ。だが今は体は人間だ…栄養を与えてやらないと死んじまうからな』

『それでアイスって…酷くない？』

『はっ！塩と水の奴には言われたくないんだがな！』

『ぐっ！仕方ないだろ！あの後三人とまた映画を観たんだから』

『自業自得だな…』

『なにいい！『ピロロン』ん？アンクメールだよ。雄二からだ』

Ｒｅ：馬鹿鶏へ

本文

早く学園に来ないと貴様の昨日あったことをバラす　ｂｙ雄二

『脅迫状？』
『なわけねーだろ！あのゴリラ！バラバラにしてやる！行くぞ明久あ！！』
『あっ待ってよアンク！』
『ガタキリバでボロボロにしてやれ！』
『うわっ！と急にメダル投げないでよ！それに変身する気もサラサラないよ！』

「そうだよ…朝ご飯を食べずにダッシュで走った上、まだコンボの時の疲れが残ってて倒れてしまったんだった」
僕はぶつぶつと呟きながらアンクに対してまた一つ恨みができた
「それ全部本当？」
「ゑ？」
しまったあ！ついペラペラと口に出して喋ってしまった！何やっているんだ！僕の馬鹿！
「やっぱり…アキ君コンボの疲れが治ってなかったんだね」
「あれ？なんでなのはがコンボのことを！？」
なのは申し訳なさそうな顔をして呟いた

「ごめんなさい。フェイトから全部聞いちゃって…」

なんだ…フェイトから聞いたのか…別になのはなら聞かれても大丈夫だよね！

「謝ることはないよ。なのはなら信用できるから」

僕は笑いながらそう答えるけどなのはの顔はまだ暗い

「アキ君…」

「何？なのは…」

「…」

なのはは静かに僕に近づいてくる

な…なんだなんだ？

「アキ君…」

何故かなのははどんどん近づいてくる

「へ？ちょっと待ってよ！

僕は慌ててベッドから抜け出し後ろへ下がる

何？何なの！？

「フェイト、瑞希ちゃん、ほむらちゃんが明久のサポートをすることも聞いたの…」

ゆっくりとなのはは歩み寄ってくる。僕は下がるけどとうとう壁に阻まれてしまった

「いけないよなのは！君みたいな綺麗な女の子が！」

「アキ君…私も…アキ君の為に戦うよ」

「へっ…！？」

そう言うとなのはは急に抱きついてきたって…ちょっとちょっと！

あた…当たってるよおお！

「ちょっなのは…急にどうしたの／／！？」

「私はどうもしてないよ」

そういうとなのはは急にポケットから一枚のメダルを取り出した…

ってちょっと待ってよ！

「なんでなのはがコアメダルを！？」

そのメダルにはライオンの絵が刻まれていた

「アキ君ごめんなさい！」

「どうし……ー！！？」

僕の唇にやらわかな感触がした…

「…？」

なのはが僕にキスをしたということが１０秒おいて理解できた

これが僕にとって最初のファーストキスとなった…

何が何なのかわからないまま…

なのはと新たなメダルとキス（後書き）

管理人：畜生！気まずいよー

明久：うう…

血祭りとフラグとなのはの気持ち（前書き）

＜バカテスト＞
　問題
以下の英文を略しなさい。
『Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ｔｈｅ　ｂｏｏｋｓｈｅｌｆ　ｔｈａｔ　ｍｙ　ｇｒａｎｄｍｏｔｈｅｒ　ｈａｄ　ｕｓｅｄ　ｒｅｇｕｌａｒｙ.』
姫路、テスタロッサの答え
『これは私の祖母が愛用していた本棚です。』
教師のコメント
正解です。しっかりと勉強をしているようですね。

高町なのはの答え
『これは使った。』
教師のコメント
確か高町さんは英語が苦手でしたね。

土屋康太の答え
『これは』
教師のコメント
あなたが訳せたのはＴｈｉｓだけですか

吉井明久の答え
『☆●◆▽♪※ーー』
教師のコメント
出来れば地球上の言葉で。

アンクの答え

『私の祖母が愛用していた本棚です』
教師のコメント
珍しくきちんとした答えを書いていますがＴｈｉｓが訳せていないので不正解です

「……え？」

僕は何をされたんだっけ？確か…

「アキ君？どうしたの？」

ふと見るとサイドポニーテールで可愛らしい顔のなのはが首を傾けてこっちを見ている

「なのはそのメダルは？」

そうだ！なのはが新しいコアメダル…ライオンのメダルを僕に見せてきたんだった

「ああ…これはね朝…鴻上さんて人からアキ君へって」

なのははそう言うと僕の手の平にライオンのメダルを渡したでもなんで鴻上さんが持ってたんだろ

「ところでアキ君…」「うん？」

「その…」

なのはは顔を赤くしながら答えた

「腰に巻かれている手…」

ゑ？手？……

「うあああっ！ごめんなのは！」
僕は急いでなのはの腰に巻いていた手を離す
「別にいいよ…アキ君なら」
ん？なのはが何か呟いている…
あれ？コアメダルの他に何か大事なことが…
「ほう…これは面白いものを見ちまったなあ…」
何故だ！急に殺気が！
僕は恐る恐る後ろを振り向くと…
「雄二……」
ニヤニヤと笑いながら保健室の入り口に立っている悪友がいた…

アンクｓｉｄｅ

なんだ？何故かさっきメダルの気配が…しかもコアメダルだ…
俺は確かめに行こうとしたが
「アンク…まさか付き合ってたなんて」

「誰と付き合おうが俺の勝手だ！」

俺はＦＦＦ団と言う連中に明久と共に捕まっていた

『『『罪人吉井明久…ならびに西条明訓は…』』』

ＦＦＦ団の説明を聞くのがめんどくさいと思うからその間に教えてやる

俺はアンクだが、西条明訓と言う名前にもなっている。
西条明訓はヤミーに襲われ死にかけていたのを俺が憑依して体を使わせてもらっている。元はこの学園の生徒だったらしい

『判決！有罪！死刑！』

「何が死刑だふざけんなあ！」

『異端者に反論は認めん！』

俺と明久、何故か坂本は火炙りの刑になった

なのはｓｉｄｅ

「なのはちゃん！吉井君に抱きついていたのは本当ですか！？」

瑞希ちゃんが私に詰め寄ってきた。近いよー

「……うん」

「アキにはお仕置きが必要ね…」

そう言ってポニーテールを揺らしながら腕をパキポキと鳴らしている美波ちゃん

「何…美…あがが！僕の関節はそっちには曲がらないいい！」

いつもなら助けるは私だけど何故か…体が動かない

あれ?美波ちゃんって彼氏いたはずだよね?

「あんたって奴は!本当にフラグを立てるのだけは上手いんだからああ!」

「ぎゃああ!僕の背骨がバキバキと砕けるうう」

フラグって何だろう?

「明久君…」

「何姫路さ…ぎゃああ!腰が腰がああ」

ちょっと!流石にやりすぎだよ!姫路ちゃんまで何やってるの!?

私は急いで気絶しかけているアキ君を助けに行った

なんだろ…このもやもやした気持ち

アキ君が他の子に関節技をされているだけなのに何故か胸が痛むよ…

でも今は

「何やってるの二人共!!」

急いでアキ君を助けに入った

血祭りとフラグとなのはの気持ち（後書き）

次回はいよいよヤミーと戦います

巧と重力ヤミーとライオンヘッド

俺は明久を見ながらぼーとしていた。

あっ俺都築（つづき）　巧（たくみ）

迷い猫オーバーランっていう小説の主人公だ。ん？何故そんな奴がここにいるかだって？

それは二次作小説だからさ。まあ…作者が考えたことだからよくわかんないけど

設定は迷い猫オーバーランと同じさ

特に勉強できる訳ではないから俺はFクラスってわけ

んで俺は一緒にいる悪友の家康と大吾郎と一緒に島田に締め付けられている明久を見ている

相変わらず可哀想な奴だ…助けたいけど俺まで巻き込まれるからなあ

「それにしても何故吉井はあんなにモテるんだ」

家康、ＦＦＦ団に行こうとするな！？

「あいつは優しいからな」

俺は明久の方を見ながら笑った

そう…あいつと初めてあったのは俺がいじめられていた時だ…

あの時のあいつは言葉にできないくらい輝いてた

「だが、このままでは危ないのではないのか？」

秀吉と似ている言葉をしゃべる大吾郎

まあ確かにあのままじゃー

「あっ高町じゃん」

「……なんだあれ杖？」

ヒュゴオオ！

な、なああっ！ちょっと待て！姫路と島田が灰になったぞ！？

「大丈夫アキ君？」
「う、うん。ありがとうなのは…」

流石の明久も怯えてる…

チャリン…

なんだ？さっき何かが落ちる音が…

「どうしたの巧？」
そう言って俺の顔を覗き込むのは俺の幼なじみ芹沢文乃（せりざわふみの）

茶色の髪と緑の瞳、頭に着けたリボンが特徴ないわばツンデレ美女だ

「いや…なんか最近…音が聞こえるんだ」

「出たな！芹沢文乃！」

「出たって何よ！それにその写真は何よ！？ムッツリーニから買ったの！？」

「ふははご名答！この写真は貴様の下着が姿が写っている」

「なっ！／／」

俺の話を無視し、いつものように文乃と家康が喧嘩をしている

家康…お前ムッツリーニから文乃の写真買ってたのか

「……巧も買うか？」「うわああっ！ムッツリーニ？」

突如ムッツリーニが俺の背後に現れたってびっくりするよ…

「いや…俺はいい「希のメイド写真…安くしとく」ぐっ…」

ムッツリーニが撮った写真は凄すぎて何回買わされそうになったことか…

「二回死ね！！」
「ぐはっ！見えたっ！！」
「なっ！／／」

ムッツリーニと俺は窓まで離れ再び話す

「……これ見本」

なっ…正直言うと可愛い

「…そしてこれが希のメイド写真」

！！？

「芹沢の下着はー」
「１２０回死ねええ！」

ドゴオ！

『『芹沢さんの下着教えてくれええ』』

俺は理性が壊れ気づいたら希のメイド姿の写真を持っていた

「しまった！俺は何を！？」

「七万回死ねえええ」

『『ぎゃあああああ』』

とりあえずこの写真は文乃には見せれない…

「…巧何してるの？」「うおあああああっ！……の…希！」

突如俺の後ろに現れたのは猫の耳に見える髪の毛が特徴的で瞳が赤い美少女…霧谷（きりや）　希（のぞみ）だ

「いや…ちょっとムッツリーニとお話を…はは。」

「にゃあ…それ何？」

しまっ…た…写真を隠すのを忘れてた…

正直仕方ないと思っている。なぜならあの写真の希はあまりにも可愛いからだ

「…にゃあ。見せて」「…拒否権は「ない」」

仕方なく希に写真を渡す

「にゃっ…（カアアア）」

希は顔を赤くしながら俺に抱きついてきた

「嬉しい…巧」

「ちょっ…希！（カアアア）」

真っ赤になりながら俺は慌てふためく

「あああ！羨ましいぞ巧！」

馬鹿っ！家康声が大きい！

「……アキ君。オハナシしよ？」

「どうしたのなのは!?顔が赤いし何か当たってる！」

「明久…」

「巧…」

「「うわあああああ！」」

俺と明久は同時に教室から抜け出す
勿論…希は俺に、なのはは明久にくっついたままだ

「はっ…ざまあ見ろ」「ざまあ見ろ馬鹿明久」

家康と雄二の声が重なる

「家康がこの間Aクラスの梅ノ森（うめのもりちせ）千世とゲームしていたぞおお」

「代表坂本雄二はAクラス代表の霧島さんと弁当食べてたぞおお」

「馬鹿っ！巧貴様ああ！」
「明久ああ！てめええ」

『異端者には死を！！』

「「ぎゃあああ」」

ふう…助かっ…てない

「巧いい！二回殺す！」

「明久君大人しくエデンへ行きましょうね」

「明久！なのはに抱きついたの本当？」

「巧！下僕のくせにいい」

「わああ！文乃！千世！まて！」

「姫路さん！フェイト！ちょっと待ってよ！」

俺と明久は全力で地獄行きの門から逃げた

★

明久ｓｉｄｅ

「はあ…はあ…」

僕と巧は地獄という地獄から上手く逃げきりとある駅に来ている

「どうしよう巧…」

「ヤバい明久…鞄を持ってきてしまったし、授業を抜け出してしまった」

鉄人に見つかったら大変だ

「あれ？ここどこ？」「にゃっ？」

なのはと希ちゃんが僕らから離れ辺りを見回す

「だいぶ遠くに来てしまったな」

「うん。えーと…」

そう言って僕は駅の名前を見る

「文月駅だね」

「にゃ。それなら学園まで一時間でつく」

「じゃあ，学園に戻ろうアキ君」

その瞬間僕と巧は一気に暗くなった

今帰ったら大変なことになる

僕と巧は頷きあって二人の方へ顔を向ける

「あのさ二人共」
「せっかくだからたまには授業休んで」
「「どこか行かない？」」
よし！完璧だ！
「アキ君と…いいよ」「にゃっダブルデートだね♪」
なっダブルデート…！？ちょっ…ちょっ
「何を言ってるんだ！二人共　」
「そうだ！まずデート…じゃないぞ」
「にゃ？私となのは二人のことが好きだよ？」
そう言って希が巧の手を握る
「ちょっのぞ…えええっ！」
これは告白？告白なの！？
「あの…なのはも」
「うん。私ずっと前からアキ君のこと大好きだよ？」
「なあああああ！？」

ちょっと待て！ちょっと待て！

現在オーズが使えるメダルは

タカ×２
クワガタ
カマキリ
バッタ
ライオン
トラ×２
チーター×２

ふう……

「きゃあああ！」
「わあああ！」

人の声が聞こえ、そっちを見ると…

「なっ！ヤミー！？」「ヤミーってあの時学園に現れた？」
「にゃ…バイソンだ」
何故ヤミーが…ん？

「ちょっ危ない」

僕達はすんでの所でとんできた物をかわす

あのヤミー…重力型？

物を浮かし人にぶつける

このままじゃ危ない！

「みんなはここで待っててて！」
みんな驚いてるけど僕がオーズのことを知ってるからすぐに頷いてくれた

「アキ君！」

なのはが僕を呼び止める
なのはは心配そうな顔をして
「気をつけてね…」

と言った

「うん！大丈夫。だって死んだら大好きななのはに会えなくなっちゃうからね」

「へ？」

さあて…ヒーローの出番だね！

その時、電話がかかってきた

「はい…どちらさまですか？」

『俺だ』

アンク？なんで

『コアメダルの情報を知っている奴がいるからそいつにあってくる』

コアメダルを知っている人がいるのか…

なんか怪しい…

「ごめんアンク。今からヤミーと戦わないと」

『あああ！？またお前勝手に戦ってんのか！？』

アンクの激しい怒鳴り声

「仕方ないだろ！？」

『チッ…わかった』

プツンと電話が切れた

いつものアンクならもっとうざいくらいうるさいのに…

おっと！今はヤミーに集中集中！

みんなに手を振った後、すぐにヤミーの近くへ行く

「また当たった！んー？」

「うおおお！ダラッシャアアア！」

勢い良く跳び蹴りをヤミーにお見舞いする。

その時、髪が尖った人を巻き込んでしまった

「痛い……」

「グウウウ…」

「ごめん君！大丈夫！？」

「お前…なんか腹立つ。お前倒す！」

ちょっと待って！？なんか悲しくなってきたよ！

髪が尖った人はメダルに包まれ化け物になった

「なっ！グリード！」

確か…あいつがカザリ、あいつはウヴァ、前出てきた女のグリードはメズール

ということはこいつはガメル！

「まさか…またグリードと会うなんて…」

でもメダルが取れればアンクも機嫌が良くなるだろう

素早くベルト…オーズドライバーを腰に巻きタカ、トラ、バッタのコアメダルを取り出し素早くセット

ドライバーを斜めにしてからスキャナーを取りメダルにスキャンして読み込んだ

『タカ！トラ！バッタ！』

おなじみのメロディー

『タットバ！タトバ！タ・ト・バ！』

上からタカ、トラ、バッタとオーラングサークル作り黒い姿のオーズに刻まれ色がつき僕は仮面ライダーオーズに変身した

『オーズ…！』

『ウオオ！』

「いくぞ！」

2体に向けて構え勢い良く殴りかかる

「ダラッシャアアア！」

「ウオオ！！」

バイソンヤミーは顔面に直撃した僕のパンチあびフラついてる

「オーズ倒す！」
ガメルが突進してきたから僕も突進で対応した

「うわああ！」

すぐに力負けして吹き飛ばされた

「くっ…なんて力だ」
ガメルが再び突進してきたから再び僕も突進

「今度は負けるかー！」

『ヌウウ！』

互いに譲らず今度は僕が吹き飛ばした

「おりゃああ！」

『ワアア！』

ガメルは近くにあった階段に頭を打つ

僕はバイソンヤミーに向けて何発も殴る。そしてトラクローで切り

裂く

『グウウウ…』

バイソンヤミーは吹き飛びガメルに撃沈

『痛あい！』

『痛い！』

見るからにして馬鹿の図だ

『ウオオオ！』

バイソンヤミーが起こした波動によって僕の体が引き寄せられる

「ちょっ！まっぐああ！」

そこをガメルの拳が僕の体を殴る

「うわああ！ぐあああ！」

再び引き寄せられ再び殴られる

ガメルの拳は重い

何発もまともに受けられない

「うわあ！またか」

けど何発も受けてられるかあ！

「くっ…おりゃああ！」

バキッという音が響く

2体に向けて重力を利用し重い一撃の蹴りをお見舞いした

『グウウウ！』

『痛い！痛い！』

そうだ…せっかくだからなのはがくれたライオンを使ってみよう

タカを抜き取り素早くライオンをセット

『ライオン！トラ！バッタ！』

タカだったヘッドはライオンをモチーフにしたヘッドに変わり眩い光がヘッドから発光される

『グウウウ！ウウ』
『眩しい！目がああ』

「おお…凄いなあこれ！」

2体とも目を押さえて暴れ回っている
今のうちだ！…

『タカ！トラ！チーター！』
素早くチーターに変える。足は黄色い

「ハアアア！」

足をギリギリまで落とし勢い良くスピードにのる

「セイヤアアアアア！」

加速がついた両足でガメルに蹴りをお見舞いする

『ぐあああああ！』

するとガメルから一枚のコアメダルが出てきた

「やった！ゾウゲット！」

灰色の新しいメダルだ

再びラトラバになり目を潰す

『ライオン！トラ！バッタ！』

『目がああ！』

『ウウ！』

これはもはやイジメレベルだ…

再びガメルに今度はジャリバーで切り裂く

くっ…固いか！

ガメルは裏拳を放つが僕は上手くジャリバーで防ぐ

ジャリバーに二枚セルメダルを入れる

『ダブル！スキャニングチャージ！』

スキャナーで剣をスキャンし構える

『セイヤアアアア！』

『うわあああ』

今度は効いたらしくガメルから二枚のコアメダルが飛び散る

「よいしょっ！やった！ゴリラとゾウゲット！」

よし！このまま全部貰うか…ってあれ？

気づいたら逃げられていた

危機と二人の絆とグリード戦（前書き）

特別問題
明久君がコンボを使ったらあなたはどのコンボに抱きつきますか？
また理由もお答えください
未使用コンボでもＯＫ
タトバ
ガタキリバ
ラトラーター
サゴーゾ
タジャドル
シャウタ
プトティラ
オリジナル↑

高町なのはの答え
『サゴーゾ：遅いから抱きつきやすい』
教師のコメント
『本人は戦いずらいと思います』

フェイト・Ｔ・ハラオウンの答え
『ガタキリバ：恋をしたから』
教師のコメント
「以外な答えにビックリしています」

暁美ほむらの答え

『タジャドル：Wスピナー』
教師のコメント
「この答えにもビックリしています。できるといいですね」

危機と二人の絆とグリード戦

「ああ！？また勝手に戦ってんのか？」
「仕方ないだろ！！」

「ちっ…わかったよ」
俺は電話を切った。明久の奴こんな時にヤミーと会いやがって
俺は緑のコアメダルを見たって奴の情報を聞きそいつに会いにきた
だが…妙な気配がした…もしもの時を考え明久を呼ぼうと思ったが
この様だ…
何故俺は明久をそのままにした？あいつに何か期待しているのか？
理由なんかわからないしわかりたくもねー

俺は港にいる緑の服を着た奴の所へ歩いて行く

「お前か？コアメダルの情報を知っているのは？」

するとそいつはニヤリと笑ってこう言った

「アンク…やはりこの姿じゃわからないようだな」

この時は俺はこいつの正体にすぐ気づいた

「ウヴァ！？」

すると奴はグリードの姿に戻り俺を殴ってきた

「うはっ！」

走る衝撃に俺は歯を噛みしめる

「まさか…お前らが人間の姿になっていたとわな…」

俺はすぐに片手を自分の本来の腕に変える

コアメダルが全然ない俺。力などもないこの腕

勝敗はわかっていた

「ぐああ！」

ウヴァは俺の腕を掴み捻る

そして顔面を殴ってくる

俺は必死に避けながらも痛みに耐えていた

このままだと確実にコアメダルを持っていかれちまうな…必死に抵抗してもさらに捻られるだけだ

「ぐう…うあ」

俺はたまらず体を借りている人間から抜け出す

だがウヴァはすかさず掴み

「オーズがいない貴様など赤子同然だ」

と言ってから俺にクローを突き立てる

ビリビリと走る雷

「うぐ…」

くそっ…確実にまずい状況だ

「フハハ…」

ウヴァは何度も何度もクローを突き立てる

「ぐっ！」

なんとかウヴァの腕から抜けれたが逃げれば確実に角の雷を受ける

なら

「あああああ！」

俺はウヴァに突っ込む

「ふんっ！！」

ウヴァを向かってきた俺をクローでなぎはらう

「ぐはっ！」

俺は宙を舞い吹き飛ばされる

そして飛び散るチーターのメダル

奴が気を取られている隙に逃げるしかない！

俺はすぐに逃げようとした

が、すぐに再びに掴まれる

「何！？」

そいつは髪が白い人間だった。

「逃がさないよアンク」

そいつはすぐに黒い怪物に姿を変えた

「カザリ…」

馬鹿な!?何故カザリが…

「ごめんねアンク。ウヴァがこのメダル返すって言ったらカマキリを返すことにしたんだよ」

奴はさっき持っていたチーターをウヴァはカザリから渡されたカマキリを取り込む

「残りのメダルも全部貰うよ」

カザリもクローを突き立てウヴァがさらに突き立てる

「ぐ…ああ」

くっ…くそっ

さらにクワガタ、トラが飛び散る

「ハア…ハア…」

「ウヴァこれ」
「ふんっ」

カザリはトラ、ウヴァはクワガタを取り込み壊れていた鎧が復活した

まさか…ウヴァとカザリが組んでいたとはなあ・

「残念だったねアンク。原作のオーズの話で進んでいくと思った?」

「作者は設定をかなり変えてんだ。」

ＯＯＯ（作者）の野郎ふざけんなあああ!!

「じゃあ…そろそろバイバイアンク」

「ぐっ！」

ちっ…体を取り戻せず終わんのか俺は

「うおおお！だあっしゃあああ」

諦めかけていた時聞こえたのはあの馬鹿の声だった

明久ｓｉｄｅ

くっやっぱりアンクは無事じゃなかった…

ヤミーを追い払いすぐにアンクの所へ向かったけどいたのはグリードに攻撃されているアンクだった

僕はとっさにオーズタトバコンボに変身し奴らに向かっていった

「うおおお！だあっしゃあああ！！」

「うわあ！！」

跳び蹴りがカザリっていうグリードに直撃しカザリは吹っ飛んだ

「明久…」

「くっ…オーズ！？」

ウヴァは驚きながらカザリを起こしアンクは驚いていた

「アンク。やっぱり僕がいなきゃ駄目じゃないか」

「ちっうるせえ」

アンクは腕にダメージを受けていて一部が破壊されている

（ごめんよアンク…僕がもっと強ければ）

僕は知っているアンクの優しさを…

いつもうざい奴だけどさりげない優しさがある

ガタキリバコンボで倒れた僕を家まで連れて帰ったのはアンクだったらしい

そして僕にお前は馬鹿だから危ないと言ってメダルを渡してくれた

アンクは敵なんかじゃないんだ！僕の仲間なんだ！だからアンクを必ず助ける

「遅いんだよ明久」

「それは悪かったね…大丈夫かいアンク」

「ハッ…誰かさんのせいでこの様だ。……すまない。メダルを４つももっていかれた」

アンクは苦虫を噛んだような顔しながらそう言った

僕はニカッと笑って　「大丈夫だよ…取り戻すから」

と言ってやった

「オーズ…俺のメダルを返せ！」

「返してもらうよ」

虫と獣のグリードが向かってくる

「はあ…だからアンクのものだって言ってるだろ！この馬鹿あああ」

僕はトラクローを展開させ対抗する

ぶつかり合うクローとクロー

「はあっ！」
ウヴァに蹴りを入れる
「くっ」

「せいっ！」
トラクローでカザリを切り裂く

「ぐっ…やっぱり強いね今のオーズは…」
「原作ではこんなには…」

「原作とは違うんだあ！この馬鹿あ」

トラクローでウヴァを切り裂き素早くカザリの頭に拳を入れる

「ぐっ！…お前にだけは」

「うう！君にだけは…」

何？何なの

「「馬鹿と言われたくない！」」

ウヴァは雷をカザリは砂を同時に発射してきた

「うあああ！」

まともに浴びて吹き飛ばされる僕

「うおらあ！」

「ふんっ！」

すぐにクローで切り裂かれる

「うわあ！！」

くっやっぱりグリード：強い

「ぐわ：」

休む暇もなく殴られる

「くっ」

「オラオラ！」

「はあ！」

畜生！このままだと

「「明久！」」

「アキ君！」

！？この声は…

「なのは！フェイト！ほむらさん！」

美女三人が向かってきた

なのはとフェイトはバリアジャケットを、ほむらさんは魔法少女に変身している

「危ない！…ぐ…来ちゃ駄目だ」

「言ったよね明久！私達も戦うって」

フェイトは走りながらタカ缶を発射した

「ちっ…」

「くっ」

タカ缶は2体のグリードを攻撃して助けてくれた

「ふう…危なかったあ」
「大丈夫？アキ君」
「うん…このくらいどうってことないよ！」

「良かった…けど今はあの2体をどうにかしなきゃね」
「うん…さっきはありがとうフェイト」
僕はフェイトの頭にポンと手を置いた
「うん…どういたしまして」
フェイトは顔を赤くし伏せている

あれ？何かしたっけ僕？

「…明久どうするの」

「僕が攻撃するからほむらさんはこれを使ってサポートを、フェイトは隙を見て攻撃して、なのははアンクを頼むよ」
そう言ってジャリバーをほむらさんに渡す

「わかったわ」
「うん。わかった」

「じゃあ…行こうか」

フェイトの合図でフェイトは空中に飛び
僕とほむらさんはグリードに向かっていく

「大丈夫アンク？」
「…ああ」

アンクがやけに素直だ

「人間など敵じゃない」
「どうかしら」

ほむらさんはウヴァに向かって行く

ウヴァは雷撃を放つがほむらさんに当たらなかった

「何！？消えた！」
「ここよ…」

ほむらさんはウヴァの背後に現れジャリバーで切り裂く

「グウウ！」
ほむらさんは再び瞬間移動をして後ろから切り裂く

「ぐああ」

「ウヴァ！？」
「お前の相手はこっちだあ！」

カザリに向かって跳び蹴りを放つ
が、カザリはすぐに砂を発射し僕は吹き飛ぶ

「くっ…やっぱり鎧が復活しているから強い」

「小娘ええ」
「う！」

ほむらさんも動きを読まれ攻撃されたがなんとかジャリバーでガードする

「今だ！ファイヤ！」
フェイトが持っていた杖から金色の光弾が発射しウヴァとカザリに直撃した

「ぐああ！なんだあの小娘！」
「本当に人間なの！？」

今だ！
素早く二枚のメダルに変える

そしてスキャナーで読み込む

『タカ！ゴリラ！チーター！』

「体が銀色になったよ！？」
「あれはガントレットかな？」

「何？明久の奴何故ガメルのメダルを！？」

「はあああああ！」

チーターで加速を上げ二体に向かって力いっぱい殴りつけた

「せいやあああ」！

「ぐおおお」
「うあああ」

するとカマキリ、トラが飛び散りすかさずキャッチし読み込む

『タカ！カマキリ！チーター！』

「今度はカマキリになった！？」
「緑色？」

僕はカマキリソードを構え素早くダッシュ

「アンクにダメージを与えた分だああ！」

そう言って思い切り切り裂く

「ぐおおおお」

「うあああ」

再びクワガタ、チーターが戻ってきた

そして再びウヴァとカザリの鎧が破壊される

「こんなこと…って」

「くっ…逃げるぞカザリ」

2体のグリードは急いで逃げていった

「明久の奴…こんなに強いとわな…」

「凄いよアキ君！」

「ふう…みんなありがとぐふおお」

僕はみんなの所へ向かって行ったはずが、何故かバイソンヤミーが現れアッパーを喰らう

「やっぱり馬鹿だ‥」アンクはそう呟きため息をついた

「畜生うう！返せ！僕の感動返せ！」

せっかくみんなと感動の再会を再現しようと‥

「オーズのせいだ！オーズのせいだ！」

「ぐはっ！何で僕う！？」

いや確かにあの時苛めてたけどさ！

「あああ！邪魔だなあ！こうなったらコンボ使うか！」

「馬鹿久！コンボはやめ‥クペッ↑フェイトがアンクを締めた音」

フェイトは僕の所を走ってきて

「明久…ガタキリバコンボになるんだよね？」

「ほえ？」

手にはクワガタがあるからガタキリバで行こうとしてた所だしフェイトの…上目使いと涙目のコンボはオーズのコンボ以上の破壊力だ

「うん！さっさと片づけてくるよ！」

素早くクワガタに変えて読み込む

『クワガタ！カマキリ！バッタ！』

『ブーン！『ガータガタガタキリバッ！ガタキリバッ！』

同じみの歌

そして姿は緑色のガタキリバコンボとなった

「一気に決める！」

『トリプルスキャニングチャージ！』

ジャリバーを持って振り切る

「うおおおお！せいやああ！」

そして

いつもと同じ威力で切り裂かれた

うんバイソンヤミーは爆発してメダルになったけど…

「あれええっ！？威力が変わらない」

馬鹿な！コンボで使ったら威力が倍増すると思ったのにいい

「馬鹿か…何自分から疲れるようなことしてんだ」

畜生ううう！

「明久！」

「何っフェイ…うわっと」

フェイトが僕に抱きついてきた

頬は赤く顔をオーラングサークルにうずめている

「しばらくこのままでいてくれない…かな？」

涙目＋上目使いコンボ

これに勝てない奴はいないだろう

「けど…コンボが使える時間が…」

ぐっ苦しい…

「フェイトちゃんだけずるいよ！私だって」

「私も…」

「うわわわ！ちょっとみんな待って！抱きつかないで！当たってる

！しコンボでの疲労がああ」

うわああ！！本当に死んじゃうよおお

アンクのため息を最後に僕対グリード、ヤミーとの戦いの１日が過ぎてゆくのだった

現在オーズの使えるメダルは

タカ二枚
クワガタ
カマキリ
バッタ二枚
ライオン
トラ二枚
チーター二枚
ゴリラ
ゾウ

告白と疲れと新たな欲望（前書き）

今回は短くてすみません。

いよいよまどマギからあの人が登場します

告白と疲れと新たな欲望

「うう…眠い」

朝…それは今の僕にとっては邪魔な存在…

昨日は大変だったのだ。剣の力を試したくてコンボが使ったが力は変わらず…おまけに美女三人に抱きつかれて危うく本当に死ぬところだった

とにかく今は疲れている。体はまだ寝ろと告げ僕はそれに従った

「う…ん？」

再び目覚めたのは窓から日差しがさすぐらい明るい時間帯…

「えっ…？」

そばにあった時計を見て思わず声が出た

時刻は８時００分…完全に遅刻だ

「えええええええええええ！？」

ヤバい！完全に寝坊だああ

「アンク…また起こしてくれなかったなあ…！！」

くそう…なんて奴だ！起こしてくれたっていいのにい！

「ああ…！ヤバいよおお」

とりあえず昨日買った食パンを二枚口に運びすぐさま制服に着替える

そしていつものように鞄を持ちメダルを制服のポケットにしまいマンションからでる

「うわあ…なんで…赤信号？」

最悪だ…よりによって赤信号になるなんて…
この信号は確か1分はかかるはずだ

「マズい…このままだと鉄人に怒られてしまうよ」

そんなことを考えている時、昨日の疲れが僕を襲った
脚はふらつき今にも倒れてしまいそうだ

「うっ…駄目だこんな所で倒れたら…」
けど体は言うことを聞かず徐々に倒れ始める

「…もう駄目だ…」
僕はその場にドサリと倒れてしまった

「…丈夫?…吉」

少し聞き取れなかったけど意識を失う前に可愛いらしいそして懐かしい声が聞こえた

巧ｓｉｄｅ
「遅いな明久…」
俺は窓を見ながらそう呟いた
あいつがこんなに遅刻をするなんて珍しいよな…

「巧大丈夫？」
傍から幼なじみの文乃の声が聞こえた

「なんでだ？」
「さっきからずっとあくびしてるじゃない」
「昨日のケーキ作り結構時間かかったからな…」

ストレイキャッツに帰った後明日の為にケーキを作っていたんだけど結構時間がかかったんだ。何せ新しいメニューだったもんで希も遅くまで協力してくれてやっと完全できたんだ

「まあ…寝たら大丈夫かな？」
そう笑いながら答えてやると文乃はそっぽを向き

「だったらゆっくり休みなさいよ！別に巧の体調なんか心配してないから」
と言った

つまり文乃の言ったことは逆になるから心配してくれていることに

なる
これは正直に嬉しいことだ

「そういえば他のみんなは？」
姫路に尋ねてみると姫路は窓を指差した

「皆さんなら野球をしていますよ」

文乃ははあ！？と言いながら窓を見る

ちなみに教室にいるのは俺、姫路、文乃、希、なのは、島田

文乃が起こるのも無理はない。もうすく清涼祭が始まるんだからな
簡単に言えば学園祭のようなものさ

AからEクラスまで既に準備に取りかかっているのに俺達のクラスは…

『プレイボール！』↑秀吉
『こい坂本！お前の球なんか打ち返してやらあ！』↑家康
『後悔するぞ家康？』↑雄二

とまあこんな感じで野球をしている。俺はとても眠かったからFクラスに残ったんだ

『お前らああ！何をやっている！』

鉄人が登場しみんなが一斉に逃げ出した

『出し物が決まってないのはＦクラスだけだぞ！？』

１分もたたずにみんな捕まってしまった…さ、流石は鉄人…

「んじゃあ出し物決めるぞ…」

この後みんな帰ってきて坂本を中心に出し物を決めることになったけど…明久本当に遅いな…

「う…ん？」
ゆっくりと目をあけるとそこは保健室…
あれ？確か昨日もこんなことあったよね？
なにかヤバいような
「起きた！？」
傍らから柔らかく元気な声が聞こえてきたのでそちらを振り向くと
「まどか？」
幼なじみがいた
「うん！明久君久しぶり！」
まどかはにっこりと微笑みかける
「ほむらさんは一緒じゃないの？」
「それが…寝坊しちゃって…」
まどかはそう言いいながら苦笑いをした

「そうなんだ…大丈夫なの？」
「うん。一応代表には伝えてあるから。それより明久君こそ大丈夫？」
その言葉に僕は首を傾げるとまどかは僕が倒れていて保健室まで運んだことを話してくれた
「そうだったんだ…ごめんねまどか。迷惑かけちゃったね」
「そんな…迷惑なんて思っていないよ！」
まどかは慌ててそう言った
それだけで体の疲れが癒やされるように感じた
「じゃあ後は湿布だね！」
「へっ…うわっ！」
まどかは笑いながらそう言うと僕をうつ伏せにして制服のシャツをめくった
ちょっ…
「何するのまどか？」「明久君背中が赤く腫れ上がってたから今から湿布を貼るよ！」

そう言うとまどかは湿布を貼り付け綺麗な指で伸ばしていった

「気持ちいい？」

「うん。ありがとうまどか！」

まどかはほむらさんと出会ったおかげで積極的になり成績も良くなり今はＢクラスにいる

「明久君…なんか雰囲気変わったね」

「え！？そうなの？」

「うん…なんかさらにカッコ良くなって余計惚れちゃったなあ」

僕はこの一言を聞き逃さずきちんと聞き取った後意味が理解できた

「まどか…それって友人として…だよね？」

するとまどかは首を振ってから僕の顔を真っ直ぐ見て口を開いた

「違うよ明久君。私は明久君のことがほむらちゃんに負けないくらい異性として好き…」

僕はいきなりのことで頭の中が真っ白になった

何故だ…

見れば見るほど心が惹かれる

「高町なのは…」

ああ…美しい…僕のものだけにしたい

そんな僕の願いを叶えてくれたのは

「これが僕の欲望…」

欲望から生まれた怪物だった

「人を手に入れたい欲望の力はどれほどのものか興味深いですね」

メガネをくいっと上げ男は化学室から出て行った

肩に乗っている人形は衝撃で少し揺れたのだった

出し物とＤｒ．と迫る危機（前書き）

急ではありますが清涼祭編スタートします！

この章で明久の恋人が決まる…かもしれません

出し物とＤｒ．と迫る危機

ＮＯｓｉｄｅ
「ＨＡＰＰＹｂｉｒｔｈｄａｙ…」
誕生日を祝う歌。それが今鴻上ファンデーションの会長室で響き渡っている

歌っているのは勿論ファンデーションの会長鴻上だ

『ＨＡＰＰＹｂｉｒｔｈｄａｙ…』
いつものようにケーキを作りホイップクリームでデコレーションし文字を書いていく

『素晴らしいい！メダルのライダーオーズに続き新たな戦士が誕生だよお！』

鴻上はいつもより大きな声でそれを言った

『で、Ｄｒ．真木い！そちらの方は決まったのかね？』

鴻上が問いかけた先にはメガネをかけ、肩に人形を乗せたいかにも博士のような人が立っていた

「はい……装着者については既に決まっています」

静かに真木は答え鴻上に資料を渡す。それを見た鴻上は笑みがさら

に大きくなった

『素晴らしいいいよＤｒ．真木！いかにも欲望に忠実な人間だ！』

真木は頭を下げると

「まずは、不足したセルメダルを集めなければなりませんね」
と答えながら肩に乗っている人形を見た

『その通りいいだよ！コアメダルの力を増幅させるにはセルメダルは欠かせないからね！』

鴻上はケーキを仕上げまた歌い出した

『ＨＡＰＰＹｂｉｒｔｈｄａｙ…オーズ！』

鴻上の前には三つのケーキが置かれていた

その一つにはＯＯＯ（オーズ）と書かれていた

明久ｓｉｄｅ
「…どうしよう」
僕は今Ｆクラスの教室前にいるのだが入りずらい
「前のようにバレてたら…」
数分前に僕は幼なじみの一人鹿目まどか…
とても可愛い幼なじみに僕は告白された…
そりゃ僕だってあんなに可愛い幼なじみに告白されて嬉しくないわけがない
けど…僕は好きな人がいるんだ…
だからまどかにまだ答えられないって言ったんだ…だってまどかのことも好きだから…
控えめにガラガラと開け
「すみません遅れま「死刑！」なっ！」
黒いフードをかぶった集団に捕まった

★

「…死ぬかと思った…」

僕はみかん箱に突っ伏した。なのはの助けがなかったら死んでいたよ

「大丈夫アキ君?」

「ありがとうなのは。僕は大丈夫だよ」

「良かった〜」

なのは安心したような顔になり僕は心配してくれたことに嬉しくなりたがいに笑いあった

「本当に仲良いわよね二人共」

文乃がちゃかすけど全く聞こえない

勝手な考えだけどきっと今の僕らにはピンク色の空間ができてるんだと思う

反面、みんなからの殺意に満ちた目線が怖い

「明久君…お仕置きが必要ですね」
「瑞希落ち着いて！アキが死んじゃうから」

聞こえない！さっきの会話聞こえない！

「アキ君大丈夫？」

「あっ…うん大丈夫。それよりみんな何やってるの？」

「えっとね清涼祭の出し物について決めてるの」

「雄二は…ちゃんとやってくれてる？」

なのはは苦笑いをし
「たはは…ちょっと…ね」
と言った。何だろう凄く気になる

「よっ明久！大丈夫だったか？」

「あっ巧！ちょっと遅刻しちゃった。それよりどーなってるのこの状況！？」

僕は黒板を指差した。

そこには

『・メイド喫茶
・中華喫茶
・ウエディング喫茶
・コスプレ喫茶
・写真館ｅｔｃ…』

と書かれていた

凄いことになってる…

「一体何が…？」

「ああ…お前が来ない間に清涼祭の出し物決めることになってなそしたら家康がなのはや希の写真を採用された人にプレゼントとか言って」

それは…人権もへったくりもないね…

「はあ…菊池君ったら」

なのはが溜め息をつきながら黒板を見たから僕も振り返った

「皆良く意見を言ってくれた！では出し物を決定する！」

家康はそういうとゴホンと咳払いをした後、チョークを持ち

「我がFクラスは…コスプレ喫茶に決定する！」

と言いながらコスプレ喫茶の字に丸をした

途端に落胆の声が上がり始めた

『畜生！』

『神様なんか大嫌いだ！』

『二人の写真がああ』

「シャラープ！んで誰だ？この意見出したのは」

あっ…それは…

「僕（俺）…」

僕と巧が手を静かに上げた

教室に入った時、家康にやりたい出し物を書けと言われたから巧と相談してこれを書いたんだ

「んじゃー写真プレゼントなー。」

僕と巧はみんなからの視線を恐れながら写真を受け取った

「じゃー鉄人に坂本と報告しとくから。今日は解散」

『吉井殺す！』
『写真よこせえ巧いい！』
『明久君…やっぱりお仕置きが必要ですね』
『巧！３００回死ねええ！』

ぐっなんでいつもいつもこんな目にいいい！

「はあ…酷い目にあったよ…」
僕は溜め息をつきながら歩く

「まあそう言うな。高町の写真が貰えたからいいだろ」

雄二は苦笑しながら霧島さんと歩いていた

「そもそもお前が遅刻したのが悪いだろ」
そう言いながらアンクはアイスを食べながらBクラスの赤髪でポニーテール、美波のような強気な女性佐倉（さくら）　杏子（きょうこ）さんと歩いている

「アキ君はいつも戦ってるから仕方ないよ」

そう優しく言ってくれるのは女神のなのはだ
僕は腕に抱きついているなのはと一緒に歩いている

秀吉は部活、ムッツリーニは撮影に、美波は彼氏とデートに姫路さんは急用、巧達はストレイキャッツの営業があるからいないんだ

「雄二のコスプレ楽しみ…」

「お前は一体何に期待してる！いっとくが女装はしないからな」

「…残念」「お前本当に願ってたのか！？」

坂本夫婦はいつも通りだからほっておいて

「アンクが付き合ってるなんて意外だったよ」
「悪いか？俺だって異性に興味はあるんだよ」

へえ～そういえばAクラスの木下さんとも噂があるらしいね

「「そして何で高町はこんな状態なんだ？」」

「そんなの僕が聞きたいよ！」

わからないよ！…だっていかにも幸せそうに腕に抱きついてるんだよ！？理由なんか聞きだせたもんじゃないよ…

それにしても姫路さんが転校することには本当に驚いたよ…そりゃ…Fクラスなんかにいたら心配されてもおかしくないはずだ
でも清涼祭で売り上げが良かったら新しい机や椅子を買うことができる。

姫路さんの為にも頑張らなきゃね

そういえば姫路さんがこんなことを言ってたな…

『……その、明久君は知ってますか？　文月の学園祭では、とっても幸せなカップルが出来やすいって噂が……』

……果たして僕に春がくるのかなあ？心配だよ…

そんなことを考えてると学園長から呼ばれて…腕輪を回収して欲しいとか言われ召喚大会に参加することになったんだ

召喚大会に勝てばきっと姫路さんのお父さんだって認めてくれるはずだから勝ちに行く気で姫路さんを選んだけど美波と出るらしく、雄二は霧島さんとだったら巧と…と思っていたけど希と出るらしくてそしたらなのはに声をかけられて今に至る訳。

「アンクは出ないの？」
「興味ないからな」

言うと思ったよ…

「それにしても強敵ばかりだね。フェイトとはやてさんペア、まどかとほむらペア…雄二と霧島さんペア、美波と姫路さんペアに巧と希ペアか…」

「お前らも十分に強敵だがな」
雄二はそう言うと僕らを見た。そうだよね。なんたって僕にはなのはがいるから！

「そうだ…高町、明久」
「何雄二？」
「テスタロッサが何故か恐ろしいオーラを出してたぞ」

「「え？（ピロローン）」」

なのはの携帯からメールの受信音が…

「二件？…」

それを見てなのはは急にペタンと膝をついた

「どうしたのなのは！？」

「フェイトちゃんが本番絶対負けないって…」

「あはは…簡単には勝てないね」

「うん。（フェイトも明久の事好きだもんね）問題は次なの」

僕はなのはから見せてもらった内容を見て驚く

「あなたの全てを知っています。僕と付き合ってください」

「なんだよこれ…」

杏子さんが携帯を睨みながら呟く

「私こんなメール知らないよ」

「こいつは脅迫メールか？」

「そんな…一体誰が…」

途端にアンクが大声で叫んだのが聞こえた

「明久！後ろだあ！」

「えっ…？うわああ！」

僕はいきなり現れたサメの怪物に突進され倒れる

「うう…痛てて」

『キシャアア！』

「きゃああ！」

なのはがサメのヤミーに襲われかけていた

「このやろー！」

サメヤミーに激突し跳ね飛ばす

「大丈夫なのは！？」「うん」

「アンクこいつってやっぱり」

「ああ！メズールのヤミーだ！」

「おい明久！これがヤミーって奴か？」
「そうだよ雄二…言わば欲望から生まれた化け物」

そう言った後みんなを下がらせ僕はベルトを装着した
そして三枚のメダルを入れる
スキャナーを取り出しメダルを読み込む

「変身！！」

『タカ！トラ！チーター！』

いきなり亜種のオーズに変身した

「いきなりこれ！？」
「いいから倒せ！」

文句を言ってもアンクがうるさいから仕方ない

「ハアアア」
足に力をためて一気に加速！

「はやいなっ！」
「チーターの能力か」
「セイヤアアア！」

地面を泳いでいるサメヤミーを引きずり出し空中で連続高速キック

をしてセルメダルに分解した

「よっと…！」

「凄いな…あの明久がここまで戦えるとはな」

「…流石吉井」

坂本夫婦。お誉めの言葉ありがとう

僕はすぐなのはの方へ駆け寄る

「大丈夫だったなのは？」

「うん…ありがとう／／」

「良かった～。／／」

お互いに照れているとまたアンクのでかい声が

「馬鹿明久！後ろだ！」

「えっ…ぐああ！」

二体目のサメヤミーに奇襲をうける。しまったメズールのヤミーは確か沢山いるはず

「くそっ…！！？うわあああ！」

「明久！」

今度はさらに協力な攻撃がきて近くの川まで吹き飛ばされた

「ぐっ…」

「オーズ…私のヤミーよ?」

「そうだメズールのヤミーだ!」

「お前達は確か…メズールとガメル!」

灼熱コンボと誘拐と新たなメダル（前書き）

カウンザメダル！
現在、オーズの使えるメダルは
タカ×２
クワガタ
カマキリ
バッタ
ライオン
トラ×２
チーター×２
ゴリラ
ゾウ×２

灼熱コンボと誘拐と新たなメダル

「お前達は確か…メズールとガメル」
「あら…覚えていたなんて嬉しいわオーズの坊や」
「オーズ！俺のメダル返せええ」

ぐっマズいな…状況は前と同じ2対1…
しかもグリードが2体けど…やるしかない！

「いくぞおお！」
「あら…元気がいいわね…いらっしゃい！」

僕はジャリバーを構えてダッシュでメズールへ攻撃を仕掛ける。足が水に浸かっているから早くはないけど

「いいわよオーズの坊や♪」

メズールは手の平を僕へ向ける

んっ…待てよ！？

「ハアア！」

「しまった！ぐああ！」

メズールが発射した水流弾をまともに受け吹き飛ばされた

「メダル返せええ」

「うわああ！」

倒れた所をさらにガメルの突進を受けまた吹き飛ばされる

「くそおお！」

ジャリバーでガメルを切り裂きメズールに斬りつける

「甘いわ…」

「なっ」

攻撃は簡単に避けられた…

「ハア！」

「うぐっ！」

メズールは僕に蹴りを放った

「ウオオ！」

バキャッと固い音が響きガメルにボディーを殴られる

「くっ…ぐあ」

そして再びメズールの蹴り…

くっ…このままじゃ

「フフ！」

「ぐっ…がっ」

メズールに何発も蹴りを打たれ僕はよろめいた

「あらあら…こんな程度なのオーズの坊や」

「うるさい…」

セルメダル素早くジャリバーに入れる

「ウオオ！」

「おりゃあ！」

突進してくるガメルを蹴り飛ばしスキャナーで剣を読み込む

『ダブル！スキャニングチャージ！』

「はあああ！うおりゃあああ！」

剣に力を込めてチーターの力でメズールまで近づく

「なっ！」
「これでも…くらえええ」

力一杯メズールに剣を振り下ろし

「うあああ！はあっ！」

チーターで素早くメズールの体に高速蹴りを放つ

「きゃあああ！うはっ」

たまらずメズールは後ろへ吹き飛びメダルが４枚飛ぶ

「メズールうう！オーズうう！」
「ぐっ…」

ガメルの拳が顔面に当たり吹き飛ばされた

そしてチーターとトラが飛ばされた

「しまった！」

僕は機転をきかせ素早くメズールから出たコアメダルを掴む

『コツン』

そんなまぬけな音が響き、飛んだトラとチーターのメダルはメダルを取られ足の部分の鎧が破壊されたメズールの頭に当たった

「ぷ……」

駄目だ思わず笑いが…

ピキッ

「オーズの坊やあ…」

えっ何？僕何か悪いことした！？

「ハアア！」

「えっ…うわああ」

変身が解けた僕にメズールの水流弾が襲いなんとか避ける

「明久ああ！」
「この声はアンク…！？」
すると僕の目の前に腕だけのアンクが現れた
「何メダル取られてんだ！」
「ごめん…」
「謝る余裕があんならさっさとメダル取り返せ」
アンクは僕にトラ、チーターを渡す
そういえばまだあったんだっけ？
「変身！」
『タカ！トラ！チーター！』
僕は再び変身をしてグリード達に構える
「何度やっても同じよオーズ」
「そうだ！メズールの言うとおりだ」
「わからないじゃないか…だって僕には」
そういって黄色いメダルを取り出す
「お前！そのコアメダルいつの間に！」
「鴻上さんからのプレゼントさ！」

そう僕が取り出したのはライオンのメダル…つまり

「これで黄色のコンボでしょ！」

「なっ！コンボはヤバいと言っただろうが！」

「あなたはコンボに耐えられる器かしら？」

確かに前は運が良かったかもしれないけど…

「言ったよねアンク。僕は死ぬきなんかないって」

「チッ！」

僕はピーンとライオンメダルをはじいてキャッチ。そしてタカと入れ替える

「まさか！この坊や本当にコンボを」

『ライオン！トラ！チーター！』

さあいくぞおお！

『ラッタラッタ～！ラトラーター！』

オーラングサークルは上からライオン、トラ、チーターとなり顔が立派な鬣と青い目に変わる

これがラトラーターコンボ！

「うおおおお！」

そしてライオンヘッドから夜をかき消すくらいの光が放たれる

「きゃあああ！」

「～」

頭から放たれたのは灼熱…水がすぐに干上がりメズールとガメルは大ダメージを受けた。

「はあああああ！」

灼熱の光を払い当たり一面が溶けている

「はあ…はあ…」

肩で息をしながらグリード達を見る

メズールは弱りきっていてガメルは穴を掘ってメズールを連れて逃げ出した

『シャアアア』

川からサメヤミーが飛び出した

「ふっ！はあっ」

トラクローを展開させサメヤミーを捕まえる

バシャンと地面に叩きつけ素早く切り裂く

「はあっ！」

胴体を集中的に狙い素早く

「はあっ！てああ！」

そして何度も切り裂き後ろへ吹き飛ばす

さあとどめだ！

「ふっ…（ガチャン）」

『スキャニングチャージ！』

「はっ！」

三つの輪を作りそして構える

「はあああ」

ダダダダと高速で走り敵の前でライオンヘッドから光を放つ

『キシャア…』

「うおお！せいやああ」

そして目を潰した所で力一杯切り裂く

ドオオンと爆発音を立てヤミーはセルメダルに分解された

「ぜえ…ぜえ…やった」

うっ…体に力が入らないや…

「ぜえ…ぜえ」

「まさかラトラーターも耐えるとは…」

どんなもんだい。僕だってただの馬鹿じゃないんだ

「明久！」

雄二達がこっちに急いで走ってきた

「ゼェ…あれ雄二？どうしたの」

雄二達は顔を青くしながら僕の顔を見て

「落ち着いて聞け。高町が…誘拐された」

えっ？なのはが…

まさかヤミーに！？

でもどうして！？

「明久は休んでろ！俺達が助け出す！」

そう言って雄二達はダッシュで走っていった

「あれは…タカ缶？」

そうか…雄二がとっさに…流石に雄二だね

「明久！お前は寝てろ」

そう言うとアンクは僕からコアメダルを取り上げタカ缶の後を追っていった

「冗談じゃない！…なのはが誘拐されたんだ…ゼェ…助けな…きゃ」

ドサッと音が響き僕は地面に倒れる

くそっ！こんなところで倒れている場合じゃ…

「やはりあなたではメダルの力を引き出せませんか…」

突然声が聞こえ顔を上げると

「真木先生……？」

僕らの化学を担当している真木先生がいた

肩には同じみの不気味な人形を乗せている

「どういう…こと…ですか？何故…先生がコアメダルのことを…」

「…高町さんをさらったヤミーならさっき私の前を通り過ぎましたよ」

「なっ！？」

ちょっと待ってよ。彼は先生だよね？どうして生徒を助けなかったんだ…

「どうして助けないんですか？…」

「最近…人を手に入れたいという欲望の持ち主がいましてね…」

「？」

「私はちょっとある所に博士として勤めてましたね。それがグリードやオーズ、メダルに関する職業なんですよ」

「えっ」

「そして今私は人間の欲望の強さを研究しているんですよ。そしていい欲望の持ち主が現れました」

「それとこれとなんの関係があるんですか」

「あるんですよ…そのヤミーの主はあなたのクラスの生徒…確か高橋という生徒でしたね」

僕は無理やり体を起こしながらショックに耐える

「そんな…高橋君が…」

高橋君は確かＦＦＦ団のメンバー…何故彼がなのはを…

異端審問にかけられるから…ヤミーを作ってまで…？

いや高橋君はそんな人じゃない

「それにしても…面白いものです欲する欲望は…」

僕は先生の言葉を聞き拳に力を入れた

「一人の人間を手にする為にあそこまで力が増幅するとは…」

「そんなことでなのはを見放したんですか！？」

「これからが面白いのですよ吉井君。実際に欲望を満たせばどうなるか興味深いです」

「興味深いだと？なのはがどうなっても先生はいいんですか」

「人間は必ず終焉を迎えるのです吉井君。高町さんに良き終焉を」

こいつ……

「ふざけるなあああああああああああ」

僕はダッシュで先生の所まで走り

バキャッ…

先生を殴り飛ばした…

「！？！」

「ふざけんな！先生は人の命よりも人の欲望を優先するんですか？」

僕は先生を睨みつけた。先生は人形が落ちて混乱している

「あんたはクズだあああああ！」

僕はそういってこの場を去る

「なのは！待っててね！」

携帯を取り出し雄二に電話をする

『もしもし明久か！？休んでろと言っただろうが！』

「大丈夫だよ雄二！それよりそっちは見つかった？」

『くっ…缶が破壊された』

「えっ？」

『本来普通のヤミーじゃ…破壊は難しい』

急にアンクの声が聞こえた。ということは

「まさかグリードが…」

『わからねえ！だが今はとにかく探さねえと！気をつけろよ明久！』

「わかったよ雄二！」

グリードか…だったら余計に状況がマズい！

僕は疲れた体に無理やりダッシュをかける

「ほお…これは面白い状況になってきたね。里中君。」

「はい」

「面白いものが見れるかもしれない。これをあの人に渡してきてくれたまえ」

「了解でーす」

そういって鴻上は里中に銀色のコアメダルを渡した

嫉妬とトラ缶と黒いコアと…（前書き）

今回は急展開が多いです。そして毎回感想ありがとうございます！

嫉妬とトラ缶と黒いコアと…

バカテスト　清涼祭アンケート
学園祭の出し物を決めるためのアンケートにご協力ください。
『喫茶店を経営する場合、ウェイトレスのリーダーはどのように選ぶべきですか？
【？可愛らしさ　？統率力　？行動力　？その他（　）】
また、その時のリーダーの候補も挙げてください』

土屋康太の答え
『【？可愛らしさ】　候補……姫路瑞希、高町なのは、島田美波、芹沢文乃、霧谷　希』
教師のコメント
甲乙付けがたい、といったところですかね。

吉井明久の答え
『【？可愛らしさ】　候補……高町なのは、フェイト・Ｔ・ハラオウン、鹿目まどか、暁美ほむら、姫路瑞希、泉比奈（取り消し）』

女性達のコメント
「泉比奈って誰（ですか？）」

坂本雄二の答え
『【？その他（結婚相手）】　候補……霧島翔子』

教師のコメント
なぜＡクラスの霧島さんが用紙を持ってきてくれたのでしょうか？

なお、このアンケートは当日の前の日に行っています

「…うわあああああ！！」
キヨちゃん！キヨちゃんの顔が泥で汚れていくううう！
「あああああ！！」
キヨちゃん！キヨちゃんの頭に鳥のフンがああ
「ヤメローー」

「ゼエ…高橋君はどこだ！」
くそっなのは…
『ＰＵＬＬ』

焦っている僕に電話が鳴り響く

「はい…」

「明久！大変だ！テスタロッサまで誘拐された！」

「え…？」

「すまない、助けようとしたらヤミーに襲われちまった」

雄二は悔しいそうな声で叫んだ

フェイトまで…

「相手の特徴とかは！？」

「ああっ一人は緑色のジャケットを着た奴だ！」

そんな奴Fクラスに居たっけ？

とにかく急がなくちゃ！

「うぐ…くそっ！どこだ！どこへ行けば…」

『キシャアア！』

「なっ！？」

突如サメヤミーが僕に襲いかかってきた

メダルを持ってない僕はどうすることができず腹を殴られた

「ぐ……」

バタンと音が聞こえた

くそっ倒れたら駄目だ！倒れたら駄目…だ…

「…君！」

ん？何だ？

「アキ…君！」

この声はなのは…？

「！？」

僕はすぐに目覚め起き上がったが、縄で両手を縛られ、目の前には両手を縛られたなのはとフェイトがいた

「なのは…フェイト」「良かった！」
「大丈夫明久？」
「うん…」

ここはＦクラス？そっか…サメヤミーに襲われて連れて来られたのか

「よう吉井！」
「高橋君…！？」

高橋君はこちらを見ながらニヤニヤと笑っていた

「なんでこんなことをするんだ！」
「理由は簡単だ…明久…お前が憎いからだ」

僕が…憎い？

「ああ！！なんでお前だけそんなに高町とテスタロッサと親しいんだよ！」

「それは…」

高橋君はギリギリと歯を食いしばる

「憎いなら僕だけにすればいいじゃないか…！」

高橋君はこっちを睨みつけ
「俺は高町さんとテスタロッサさんが好きなんだ！」
と言った

「え…？」

一番早く反応したのはなのはだ…

「二人が好きなんだ！けど…どうやっても振り向いてくれない！なら」

高橋君は俯きながら拳を握りしめる

「なら…力づくでも奪うしかないんだ！」

「高橋君！私達がそれであなたを好きになると思うの！？」

「思ってないよテスタロッサさん！けど…こうするしかないんだ」

何だよそれ…結局は逃げてるだけじゃないか…それになのはやフェイトがヤミーに襲われて…こんな状態にされて…

「君は本当に彼女が好きなんだろ！だったらこんなのおかしいよ！」

「黙れ吉井！お前なんかに説教なんかされたくないんだよ！！」

高橋君が腕を上げると同時にサメヤミーに殴られた

「がっは…」
「アキ君！」
「明久！」

「女たらしなお前なんかに何がわかる！お前なんかがいるから」

「高橋君！アキ君に酷いこと言わないで！」

「うるせえ高町！無理やりにでもわからせてやる！」

高橋君はなのはの顎を掴んだ

「いや！」
「なのは！」

「やめるんだ高橋君！！」

高橋君は無理やりなのは顔を寄せようとしなのははは必死に抵抗する

「やめて…」
「ぐっ…なのは！」
「なのは！」

やめるんだ…高橋君…

「やめてええ…！」

なのはが思い切り叫んだ瞬間

「うわあああ！！」

高橋君が吹き飛ばされ、サメヤミーが消し飛んだ…

「え…？」

なのはもそれに驚いている…

「なのは？」
「あれは！？」

なのはの周りには黒いコアメダルが浮いていた

「なんだあれ？…黒いコアメダル？」
「なのは！」

フェイトはなのはを抱きしめ黒いコアメダルは再びなのはの体内へ消えていった

「フェイトちゃん！」「なのは！」

二人はお互いに泣いている

怖かったんだろう…

僕はふつふつと怒りが込み上げてきた

「痛てて…なんだ？」
「くたばれええ！」

起き上がった高橋君に思い切り僕は殴りつけた

「うっぐっ！」

高橋君は後ろへ吹き飛び教卓へ激突した

「ふざけるな！二人がどんな気持ちなのかお前にわかるのか！？」

「……ぐ」

「君は本当に彼女達の幸せを願ってるんだろ！？だったらどんな結果になっても応援するのが本当に好きって意味じゃないの！？」

「……う…」

「君はただなのはとフェイトに恐怖を植え付けただけだ！」

欲する欲望？くだらない！

「お前に…お前なんかに…」

「高橋君…冷静になろうよ…」

高橋君は俯きながら歯を食いしばる

「高橋君…私ね」

なのはが高橋君に近づいた瞬間サメヤミーが襲いかかった

「や、やめろ！！」

高橋君がとっさにかばい高橋君は背中を斬られた

「ぐ、ああ」
「高橋君！」

「おい明久！大丈夫か！？」

この声は雄二！

「雄二！アンクいる！？」
「明久！何やってんだ！」
「アンク！メダル！早く」

アンクは僕に迫力負けをしたのかメダルをすぐに渡した

「高橋君…僕が君の欲望を破壊する！変身！」

『タカ！トラ！バッタ！タットッバ！タトバ！タットッバ！』
同じみのメロディーが流れ仮面ライダーオーズに変身した

「ハッ！」

トラクローを展開しサメヤミーを廊下へ引きずりだす

「ハア！ぐっ…」
トラクローで引き裂いたがコンボの疲れが僕を襲いサメヤミーに蹴り飛ばされた

「チッ！やっぱり無茶しやがって…」

「たあ！おりゃあ！」『キシャアア！』
「うああ！」

駄目だ…力が出ない

『キシャアア！』

ズバッとボディーを切り裂かれ僕は吹き飛ばされる

「うわああ！！」

廊下を転がり階段から転げ落ちた

「うわっ…！ぐっ」

『キシャア！』

サメヤミーは学園の外へ逃げ出した

「しまった！」

外を覗いてみると２０匹はいる…あれが全部か…

「ぐっ…このままだと…ん？化学室？」

僕は何かを誘われるように化学室へ入る

「明久！何やってんだあ！！」

「アンク！これって！」

アンクの声がしたから僕はある物を持って化学室から出た

「なんだそりゃ？」

「新しいカンドロイド？」

雄二となのはが覗き込む

「ライドベンダーを起動させ合体させる…乗った所でラトラーターコンボだって…」

フェイトが説明書を読み上げる。そうか…これはライドベンダーに合体させるのか！

そうと決まったら

「アンク！メダルメダル！出して！出して」

腕状態のアンクを掴み叩く叩く叩く

「ぐっ…」

「メダルうう！出せええ」

そしてアンクを上下に振ると素晴らしい！

メダルが出てきたではないか

「あった。ちょっと邪魔」

アンクが凄い邪魔だから横へどける

「ぐあっ明久…覚えてろよ」

「くくっ。ざまあねえな」

雄二とがアンクをつつきながらニヤニヤと笑う

「じゃあ…行ってくるよ！」

二階から飛び降りてすぐにライドベンダーを探す

確かこの学園には3つあったはずだ

「！あったあった」

さっそく販売機をライドベンダーに変形させる

「よし！じゃあ頼むね！」

トラ缶のタブを開けて空中に投げる。すると小さなトラになった

「はは可愛いや」

「ガウ♪」

トラ缶は喜びながら手にこすりついた。それがまた可愛くて

「よーし合体だ！」

「ガウ！」

トラ缶は僕より大きくなりライドベンダーの先端に合体する

トライドベンダーの完成だ！

「ガウウ♪」

トライドベンダーはまるで僕に乗れと言っているように鳴く

「よーし！わかった！せりゃっ」

『ライオン！トラ！チーター！』

飛び乗ると同時に素早く黄色コンボへと変身する

『ラタッラターッラトラーターッ！』

「凄い！コンボになっても疲れが感じない！」

「ガオオン♪」

トライドベンダーもやる気満々だ！よし行くぞ！

『キシャ？』

「邪魔邪魔ー！」

サメヤミーを引き倒して行く僕とトライドベンダー

すると一部の奴が水流弾を放ってくる

「うわあっ！」

『キシャアア！』

サメヤミー達が飛びかかってくるのを見て僕はトライドベンダーの

上に立つ

『トリプルスキャニングチャージ！』

オーズ無双の始まりだ！

「ハッ！」
「よっ！」
「りゃあ！」
「セイヤッ」
「ホッ！」
「フッ！」

「オリャアアア」

何体ものサメヤミーを切り裂いていき残るは5匹になった

「決めるよトライドベンダー！」
「ガオオン！」

サメヤミー達を追い抜き止まる

「ガオオン！！」

トライドベンダーが砲口は放ちサメヤミー達が地面から飛び出す

「ハアア！」

トライドベンダーを傾けてタイヤから光弾を放った

『キシャアア！』

空中では大爆発を起こし大量のセルメダルが落ちてくる

「よおっし！よしよし♪」

僕はガッツポーズをした後、トライドベンダーを撫でる

「ガオオン！」

嬉しそうにトライドベンダーは吠えた
良かった良かった！

「ふん。上出来…メダルメダル」

いつの間にか来たアンクは僕を誉めるとメダルを拾い集める

さてと手伝うかな！

この時僕はなのはから出た黒いコアメダルの力をまだ知る余地もなかった

ＮＯｓｉｄｅ
「ＨＡＰＰＹｂｉｒｔｈｄａｙ…」

鴻上はいつものようにケーキを作る

そのケーキにはオーズとデコレーションされているが中央には赤いコアメダルが置いてあった

「素晴らしいよ！！黒いコアメダル…そしてそれは人間の体内に宿されている！」

鴻上はモニターを見ていた。勿論オーズの戦いだ

「ですが不思議ですね…」

そう言ってガチャガチャのカプセルを持っているのはＤｒ．真木だ

「人間はコアメダルを体内に宿すとやがてグリードとなるはずですが…」

「そこなんだよＤｒ．真木！彼女の体内には３つの黒いコアメダルがあるのだよ…しかし！彼女には何の変化も訪れない！実に面白い話しだよ」

鴻上はなのはを見てニヤリと笑った

「そしてオーズにそのコアメダルが宿った時…何が起きるか興味深いものです」

真木はキヨちゃんと言う肩にのせている人形を見ながら呟いた

『ＨＡＰＰＹｂｉｒｔｈｄａｙ…ＨＡＰＰＹｂｉｒｔｈｄａｙ…』

誕生日の曲が流れる中鴻上はケーキを仕上げた

『ＨＡＰＰＹｂｉｒｔｈｄａｙ…ディアス！』

鴻上が高らかに叫び曲を遮った

そして再び曲が流れる

『ＨＡＰＰＹｂｉｒｔｈｄａｙオーズ…』

ケーキが3つある中で2つにはオーズとディアスとデコレーションをされていた

「銀色の戦士の誕生だ！…」

明久ｓｉｄｅ

僕は走っている。そう全力で…

昨日、僕は高橋君と仲直りをした。高橋君はあの後、自分の過ちに気づきなのはとフェイトに謝った

二人は反省をしているから許すと言って高橋君はその時本当の気持ちを伝えたんだ

二人に告白をした…

けど…高橋君は断られ肩を落としていたけどその顔に後悔はなかった

『吉井！俺決めたよ！もし二人が危ない時は俺も協力する！もし二人が変な奴らにつきまとわれたら俺が助ける！それが俺にできることなんだ』

高橋君はこれからきっといい彼女に巡り会えるだろう…そう僕は信じてる

そんなことがあったけどなぜ僕が全力で走っているかと言うと…

明日の清涼祭にそなえて…ね準備を…ね

「うう！今日は早くから教室の準備をする予定だったのに」

僕と秀吉とムッツリーニ、そして須川君で教室を喫茶に改造すると決めていたんだ

集合は6時…文月学園は結構早くから学校を開けてるんだね～と思ったりする

「今は5時40分…どうにか間に合うかな?」なんでこんなに早くからするのかと言うとAクラスの梅ノ森さんが指揮する梅ノ森財閥が協力してくれるからなんだ

遅くなったらいい迷惑だからね

梅ノ森財閥は7時に手伝いに来てくれる予定だから少しでもやりやすくしとかないと駄目だしね

「雄二…そうだ雄二は朝からなんかの用があるらしいから来ないんだった。雄二め!今はFクラスを優先するべきでしょ」

流石に朝の5時は静かだ…まだ空も暗いから仕方ないか…

前に捕まった信号も今は青だ!

「よし!間に合うぞ!」

あとはこの道を曲がったら…

「！！きゃああ」

ドーンと誰かにぶつかる音が響く…声からして女性だね…

「痛たた…」

「痛てて…あっすみません！大丈夫ですか！？」

僕は謝りながら素早く手を差し伸べた

「…！あっごめんなさい！大丈夫です！」

その人は慌てながら手を差し出してきた

制服からして文月学園の学生か…

「私…結構不注意でして…本当に大丈夫ですか？」

その人は顔を上げて心配してきた

トクン…

「はい…大丈…夫です」

トクン…

「良かった～。あれ？Fクラスの…吉井さんですよね？」

ドクン

「は、はい…。何で僕の名前を…」

「あっ…それは最近私のクラスでFクラスの吉井明久と言う人の噂で持ちきりでして…」

そこで彼女は言葉をきり慌てて口を開いた

「あっすみません！自己紹介がまだでしたね…私…2年Aクラスの泉比奈っていいます！よろしくお願いします♪」

ドクン…

「えっあっうん…！よろしく泉さん！僕は2年Fクラスの吉井明久です！」

「あっ比奈でいいですよ。やっぱり吉井さんだったんですね！」

彼女はふわりと微笑み目をキラキラさせている…可愛い…

「吉井さんて噂では可愛い受けの男子と言われてますが…」

誰だ…そんな噂を流した奴はああ？

「吉井さんて噂とは違って格好いいですね！」

ドクンドクン

「ほえ？」

つい間抜けな声が出てしまった…だってなのはやフェイト以外に格好いいなんて言われたことないから

「あ、ありがとう！ひ、比奈さんだって可愛いね！」

「ふぇ？／／」

あっしまった…！

「……／／」

／／／そ、それじゃ僕は用事があるから！」

沈黙を破ったのは僕だった。はは…間に合うかな？

「あっはい！また学園で…」

「あっうんそうだね♪」

さっきのは不自然じゃないよね！だって比奈さんも同じ学園だし

けど…何で胸が熱くなったんだろう

NEWキャラ紹介（前書き）

今回は新キャラ紹介です！

NEWキャラ紹介

泉　比奈（いずみひな）Aクラス、Eカップ

見た目…アキちゃんを可愛くした姿。髪をセットすることでバカとテストと召喚にっ！に出た秋子ちゃんにもできる

普段はポニーテール

明るく親しみやすく誰からも好かれる性格

明久と運命的に出会った彼女が後の話しを大きく左右する

川澄（かわすみ）　絵里（えり）

Aクラス、Fカップ

見た目…バカとテストと召喚にっ！に登場した土屋香美をさらに可愛くした姿

性格はムッツリーニと似てクールだが明るく信頼されやすい

比奈とは明久とムッツリーニの関係なような存在、とても仲が良い

花檻　千代美（はなおりちよみ）

Aクラス、Eカップ

見た目…栗色の髪でストレートで後ろを一つにまとめている

性格はおしとやかで神秘的な人。翔子とも仲が良く比奈と絵里とは親友
たまに黒い性格になる

後藤慎太郎（ごとうしんたろう）
Ａクラス
後藤さんが若くなった感じ
クールでライドベンダー隊隊長だったが、青春と言う理由でライドベンダー隊から離れた。今は美波の彼氏として学園生活をｅｎｊｏｙしている

恋と準備と始まり（前書き）

今回も戦いはありません。砂糖が出ないことをお祈りします（笑）

特別問題
あなたは気になっている異性がいますか？

吉井明久の答え
『朝早く僕はある女性と出会った。これって恋なのかな？』

瑞希のコメント
明久君とりあえずお仕置きです

泉比奈の答え
『優しい人がタイプです（にっこり）』

教師のコメント
いえ、タイプは聞いていません

恋と準備と始まり

『メズール！メズール！』

ガメルが必死に呼びかけてもメズールはぐったりとしていた

オーズとの戦いでコアメダルを４枚も失ったメズールは力が衰えてしまったのだ

『俺のコアメダルあげるから…俺のお菓子あげるから…』

ガメルは泣きじゃくりながら必死に呼びかける…そのガメルの頭をウヴァは優しく撫でた

『ちっ…オーズの奴め…』

『なんであのオーズはあんなに強いんだろう…』

舌打ちをするウヴァにカザリは問いかけた

『わからん…馬鹿だからかあるいは…』

ウヴァはそう言いながらガメルの頭をポンポンと叩いた

『とにかく今は奪われたコアメダルを取り返す』

カザリはウヴァの言葉に頷き何かを思い出したような顔をした

『そうだ…僕欲望を作り出すいい場所を見つけたんだ』

『何っ？』

カザリは仮面ライダーオーズこと吉井明久が通う文月学園の制服を羽織った

『この学園にはね…欲望が沢山あって…オーズがいる』

それを聞いてウヴァはニヤリと笑う

『なるほどな…欲望祭りの始まりだ！』

ウヴァとカザリは笑いあった

明久ｓｉｄｅ

「…で…して」

あの子可愛かったなあ

「明久ー。聞…」

今思いだしても胸が熱くなる…

「明久！聞いておるのか！？」

パアアンと何かがはじけて僕は正気に戻った

「あっ…秀吉…？何？」

「何ではなかろう！今説明していたではないか」

そう言って僕を叱るのは美女の秀吉

「あ…ごめん！もう一回説明してくれないかな？」

「仕方ないのう…今からこの部屋の駄目なものを全て外すから明久には窓を外して欲しいのじゃ」

そうだ…今は準備の途中だった

「うん！わかったよ」
「それじゃ…財閥が来るまでに全部片付けるぞ！」
「「「オー！」」」
須川君の合図と共に僕らはそれぞれの仕事に取りかかる
「よいしょ…うわ埃だらけ」
よくもまあこんな窓で過ごせてきたなあと思いつつガタガタと外して行く
ちゃんと学園長からの許可はとってあるから大丈夫
「さてと…秀吉！手伝うことあるー？」
「大丈夫じゃーそれよりムッツリーニの所をお願いするのじゃ」
「うん！わかった」
秀吉は須川君と畳を外している。ボロボロだから簡単にはずせてる

「ムッツリーニ手伝うよ！」
「……すまない」

いつも物静かなムッツリーニはやることを終えて買い出しに行くところだ

「いいよいいよさっ行こうムッツリーニ！」
「……（コク）」

こんな朝から店が開いてる所なんて…

あるんだよねー

『スィーツ・クスクシエ』という店が

そこは健康の為や朝から働く人にと店長が考えて朝の６時３０分にはもう入れるんだ

普段は喫茶店なんだけどスィーツを作る材料があるんだよね～

ちなみに巧達の店からは材料を出させてないよ

「ムッツリーニ…ようやく行けるんだね僕達」
「…噂に聞く楽園の喫茶店」

僕とムッツリーニはポ～とした顔になった

スィーツ・マドンナは美人が多くて大人気なんだ…今まで行こうとしたけどそのたびにヤミーがね…

「ムッツリーニ、秀吉達だけで大丈夫かな？」
「……問題ない。高町達も後から来る」

良かった…なのはの家は喫茶店だから本格的になりそうだね

そんなこんなで喫茶店に僕らは到着した

「おはようございます」

カランカランとよく喫茶店にある鈴がなる

「うわあ…凄いなあ」「……Aクラスの設備」

豪華な使用で喫茶店とは思えないなあ

「お帰りなさい！今日はメイドフェアでーす。あらっ明久君！？」

元気よく一人の女性が調理する場所から現れた

彼女は店長の知世子さん。姉さんと同級生だったんだ。
綺麗だなあ…

「おはようございます知世子さん。僕達今日は学園の祭の為にケーキの材料買いに来たんです」

「あらそうなの～。じゃああっちに材料が売ってあるから♪」

店には既に何人かカップルやサラリーマンがいる

「あら…？お友達の人どうしたの」

「えっわああムッツリーニ！！」

ムッツリーニが鼻血を出してノックアウトしてるうう

「…明久。ここは美女の楽園」ガクッ

「ムッツリーニイイイ！」
「あら…鼻血が出てるわ…星野さん！救急箱お願いできるかしら？」
そう知世子さんが言うと近くにいた女性メイドが頷き走って行く
ううう…ここは本当に女性ばかりだ
「じゃ…じゃあ僕は買い物するのでムッツリーニをお願いします」
「わかったわ～」
籠を持って僕は食品、材料売り場に向かった
「うわあ…凄い…」
品揃えが凄いなあ…流石知世子さんだ…
「えっと…ショートケーキにチーズケーキ、クッキーやクレープに…」
僕は作るスィーツを確認し材料を入れていく

「さてと…こんなもんかな結構多いなあ…」

籠を二つ持ってレジに向かう。さてと買ったらムッツリーニを起こさなきゃね

「すみませんお願いしまーす」
「あっ…はーい」

さっきまで接客をしてた女性がレジに向かって…

「すみません！あっ…吉井さん？」
「い、泉さん…」

なんで泉さんが…

「あっ…私、ここでバイトをしてるんです」
と言いながら泉さんはにっこりと微笑んだ

可愛いい…メイド服だから余計に…

「？どうしましたか吉井さん？」
「あっごめん…ごめん。じゃあお願いするね」

「かしこまりました。ご主人様♪」

（ううっ…ヤバいよ）

僕は顔を真っ赤にしながら照れた

「ありがとうございました♪」

「さ、さて…ムッツリーニは…」

「……明久…休憩したい」

そうだね…ムッツリーニは鼻血が出たから栄養とらなきゃ！

「知世子さん！ちょっと食べていっていいですか？」

「あら！嬉しいわ～じゃあこの中からメイドさんを指名してね♪」

（えっ……）

知世子さんからメニューと『メイドさん名簿♪』を貰いパラパラとめくっていく

たまには贅沢しような？

えっとメニューは…

メイドさんの熱々クレープ
メイドさんの愛情ケーキ
メイドさんのラブラブクッキー…って

「ちょっとマテエエエイ！」
「あら？どうしたの明久君？」
「ここはメイド喫茶ですか！？メニューまで変わりすぎでしょ！」
知世子さんはほっこり微笑んで
「大丈夫よ！今日だけだから～」
と笑顔満々で言った…

「あの…普通のメニューは「今日だけだから是非選んでね！」ぐ…」

くそっ……仕方ないか…

「じゃあ…僕は『メイドさんの愛情ケーキで』ムッツリーニは？」

「……俺も『メイドさんの愛情ケーキ』を頼む」

「わかった！すみませーん『メイドさんの愛情ケーキ』を二つお願いします！」

すると知世子さんがやってきた

「メイドさんも指名してね～」

な、何っやはり

「あの、無しは『駄目よ～メイドさんも待ってるから～』ぐう…」

キャンセル不可！なんてこった

「はあ…じゃあ僕は……『泉…さん』で…」

「……俺は『川澄』で頼む」

「了解よ～。アクアちゃーん！アートちゃーんご指名よー」

「「ちょっとマテエエエイ！」」

僕とムッツリーニは同時に叫ぶ

「誰だよアクアちゃんって！」

「…アートちゃんなんて知らない！」

「あら～二人のニックネームよ」

「「（いや…無茶ありすぎる）」」

ムッツリーニと同時にツッコミながら待ってると

「すみませんお待たせしました！」

「…ケーキ二つでしたよね？」

比奈さんとまるでムッツリーニのように静かな川澄さんが笑顔でケーキをテーブルに置いた

「あっどうも」

「（パシャパシャ）」

僕は照れながらムッツリーニは写真を撮りながら赤い液体を出している

「「大丈夫ですか！？」」

くっ泉さん可愛いすぎる…

ズボッ！

「ふん…大丈夫」

「……もんたいない」

「…ティッシュ」

「ふふっ面白いですね」

川澄さんと泉さんが微笑みながら僕らを見る

「「！？／／」」

「「では隣失礼させていただきますね」」

ゑ…！？

「えっどういうこと！…」

「メイドフェアですから…はいご主人様あ、あーん／／」

ケーキをさっくりと刺し笑顔だけど恥ずかしそうに僕にケーキを向けてくる

そりゃあ…初めてだから恥ずかしいよね

「あ…あーフゴゴゴ」

でかい！ケーキが丸ごとおお！口がああ

「…ご主人様あーん」
「……っ！あーフゴゴゴ」

隣を見るとムッツリーニも同じことにいい

「あっすみません！（うるうる）」
「バクン！問題ないよ！」

し、幸せだ…

「バクン！…これくらい朝飯前」
「…凄いです！／／」
「（ブシャアアア）」

僕らはしばらく泉さん、川澄さんと楽しくお話をして店から出た

「じゃあ、行こう明久君！」

「そうだね比奈ちゃん！」

僕らはあの幸せだった短時間でだいぶ距離が縮まったような気がする

「…ムッツリーニ君も行こう！」

「…（コクン／／）」

青いストレートな髪をした川澄絵里ちゃんはムッツリーニとかなり仲良くなっている

きっとクスクシエは女性と仲良くなれるんだ！だったらみんなにも教えて少しでも危険を減らさなくちゃ

「どうしたの明久君？」

「な、何でもないよ／／」

比奈ちゃんといると何故か胸が熱く苦しくなる…なんでだろう

まさか…これが恋って言うのかな？

お仕置きと約束と漏れ出す欲望

「……」

（何故…こんなことに）

「アキ君…ＯＨＡＮＡＳＨＩしよっか」

「ちょっと待ってよなのは…誤解なんだよ！」

僕、吉井明久は今、生まれ変わったように綺麗な喫茶店教室の片隅で…

悪友坂本雄二、エロ仲間の土屋康太（通称ムッツリーニ）と一緒に異端審問にかけられている

さかのぼること数分前

「へえ…比奈ちゃんは将来服のデザイナーになりたいんだね」

「うん。自分が考えた服が外国にも人気がでるくらい凄い服を作るの♪」

「…ムッツリーニ君写真撮るのが上手いんでしょ？」

「そんなの常識」

「…なら私を撮ってくれないかな？」

「そんなの朝飯前。（ダラダラ）これは疲れのせい」

なんて楽しい会話をしてた時にあいつと出会ったんだ

「ん？…明久、ムッツリーニじゃねーか」

「雄二！急用だったはずじゃ」

「ん？ああ…もう終わった」

嘘だ！絶対こいつ遊んでたな！

「じゃあその人誰？」

「勘違いするなよ！こいつは…花檻は朝出会った同級生だ！」

雄二は頬を赤くしながら強気で言った

「「なるほど…（ニヤニヤ）」」

「うるせえ！お前らだって誰だその女性は？」

「誰だとは失礼な！この人は学園の天使！泉比奈ちゃんだ！」

「…自惚れるな明久…。川澄絵里こそが学園の天使」

しまった！余計なことを言っちゃったよ…

「違うぞ二人共。花檻千代美こそが学園の天使だ！」

雄二も乗っかってきた…ってまさか…

「二人共こっちに来て」

「なんだ明久？」

「ムッツリーニは僕と行動したからわかるけど…雄二もしかしてクスクシエにいたの？」

「なんで知ってんだ明久…あ。」

「やっぱり！普段恋愛に興味なさそうな雄二なのにおかしいと思ったよ」

「う、うるせえな明久／／。お前らだって同じだろ」

「「う……／／」」

僕らはクスクシエで同時に恋をしたのか…

「…明久…お前の好みは知ってる」

馬鹿な…ムッツリーニ！なんで僕のエロ本を！？

「…明久はポニーテールにバストが大きい人が好みと重点的に学習している」

「な、何故ムッツリーニが知ってるんだ！？」

「ふっそんなの常識（ニヤリ）」

えっ僕の好みが知られているのって常識なの！？

「ムッツリーニ…お前も人のことが言えないぞ」

そう言ってニヤリと笑い雄二が取り出したものは…

「…！？俺のトップシークレット！」

ムッツリーニのエロ本だった…

「ほお…ムッツリーニは髪が青く明るい奴が好みか（ニヤニヤ）」

「…／／／ぐっ」

なるほど…だからムッツリーニは川澄さんを…

けど…

「残念だったね雄二！」

僕が取り出したもの見て驚く雄二

「馬鹿な…明久何故お前が！？」

雄二のエロ本をヒラヒラさせながら笑ってみせた

「え～と雄二は栗色で長い髪をして穏やかな人が好みなんだね（ニヤニヤ）」

「ぐっ…／／」

つまりまとめると…

比奈ちゃん→ポニーテールで胸が大きい

川澄さん→青い長い髪で明るい

花檻さん→栗色で長い髪で穏やかな人

「ふっ…明久…お前は告ったのか？」

「ふ…無理に決まってるじゃないか

ムッツリーニこそどうなんだい？」

「……簡単に行くはずがない」

僕らは同時に肩を落とした

「「「告ったら確実に嫌われそう…」」」

そして同時に呟いた

それに僕らには他の好きな異性がいる

もし、…まとめて付き合えたらどんなにいいだろうか…

『明久君どうしたんだろう？』

『…ムッツリーニ君も何か変』

『雄二さんも…もしかしたら告白の準備ですかね？／／』

『『！？／／／』』

この後…校舎に入った途端姫路さんと会ってしまうなんて

「明久…とりあえず楽になろう」

「嫌だ！死にたくないよ！ってフェイト！？」

何時の間に！？

「それに…僕らただ…話をしていただけで」

少しなのはとフェイトの顔が緩んだ

良かった…とりあえずわかって

「嘘です！」

もらえなかった…

「だってあんなに楽しそうにしてたじゃないですか！！」

「何を言ってるんだ姫路さん！」

「そうだ姫路！何を言ってるかわから…あがが翔子待ってくれえええ」

「……浮気は許さない」

「…さあ～てムッツリーニ君…本当のこと話してもらおうやないか（ニコニコ）」

「……お、俺は嘘をついてない」

教室には僕らと女性陣しかいない…何故なら

男子はクスクシエを紹介したらまっさきに飛び出して行ったからだ

…少しでも危険は軽くなった

「明久…特別に私は許してあげるわ」

「本当！？ほむらさん！」

「当たり前じゃない…私は暴力をしてまで納得する人間じゃないから」
「ほむらちゃんがそう言うなら…私も…だって明久君が可愛そうだよ」

まどかも教室から出て行った…
まどかは何もせず痛そうだなあ…て顔で見てただけなんだ

……そうだ…まどかに言わなくちゃね…この祭が終わったら

「確かに暴力はよくないよね…Aクラスの教室良かったら来てね明久♪行こはやて、翔子」

「せやな。ほなまたな～」

「……雄二ごめんなさい」

フェイトと霧島さんはAクラスに八神さんはBクラスに帰って行ったフェイト、八神さん、霧島さんも教室から出て行った

Aクラスはどんな出し物をするんだろう…

「暴力で解決することなんておかしいね…ごめんねアキ君」

なのはが罪悪感が混じった顔で謝ってくる

「そんな…いいよ！僕が早く戻って来なかったのが悪かったんだから！」

僕はなのはの肩に手を置きすぐに謝る

確かに僕らが休んで行こうと言わなかったらこんなことにはならなかったんだろうな…

でも、やっぱり比奈ちゃんが忘れられない

「そうだ！アキ君これ」

そう言ってなのはが渡したのは…お弁当？

「アキ君仮面ライダーなんだから…たまには栄養つけないと駄目だよ！」

「うん…ありがとうなのは／／」

僕は頬を指でかきながら笑った

「翔子には悪いことしちまったな…」
「…それは俺も同じ」

「明久！無事だったようじゃの」

秀吉と須川が教室に入ってきた。手には大きな荷物を抱えている

「うん…それよりそれ何？」

「これは衣装じゃ。八神から貰ったのじゃ」

「凄いのはやてちゃん！」

ポニーテールに大きなバスト…

なのはも好みに当てはまっている…
実際なのはは幼なじみ感覚だと思ってたけど…違うのかもなあ…

「おはようみんな！」

教室に巧達が入ってきた

家康は相変わらず芹沢さんに蹴られている

「おはよう巧。材料買ってきたから後は頼むよ！」

「了解！さあ…土屋、文乃、希、高町、須川頑張るぞ！」

巧の言葉でみんなは頷き厨房室へ入って行った

「それにしても本当にFクラスの教室とは思えんな」

「これも全部「この私！梅ノ森のおかげよ！」出たの」

出た…でもまあ…梅ノ森さんのお陰だしね

「ありがとう梅ノ森さん！」

僕はニっと笑いながらお礼を言う

「ま、まあ当然よ…仲間だから」

ん？なんだろう最後が聞き取れなかった

梅ノ森さんは二人のメイドに連れられて教室から出て行った…

本当に耳がいいから驚くよ

「めんどくせえな…」

アンクは舌打ちをしながらも自分の服を着た

「似合ってるよアンク…くく」

「笑うな！！」

まあコスプレ喫茶だからね

女性陣は召喚獣と同じ姿の少し露出がある服

男性陣は召喚獣と同じ服だからＦＦ団はそのまま

「明久君凄く似合ってます」

「似合ってるわよアキ」

「そうかな？…」

うーん…まるで不良みたいな着方だなあ

赤いシャツを着てボタンを止めずに羽織ってるだけだからね…

「ちょっと！これ露出多くない！？」

厨房室から芹沢さんの叫びが聞こえるけどごめん。姫路さんの転校がかかっているんだ

「よし…仕込みもＯＫだ」

「衣装合わせもＯＫだね」

明日への準備は大丈夫だ！

「みんな明日は頑張るぞ！」

『『オオオオ！』』

「お姉さま…許しません後藤慎太郎！」

私からお姉さまを奪いさらにはＡクラスだなんて

「お姉さまは…私だけのものです」

「吉井君…君はなんで僕に気づいてくれないんだい」

僕はそう言ってテスタロッサさんを見る

吉井君がテスタロッサさんにデレている光景を僕はよくみる

「きっと吉井君には沢山の害虫が…」

「…必ず学園からあいつを叩き出し私が学園を支配するんだ」

「ああ…アキちゃんに会えないかな…」

「畜生…吉井…坂本絶対復讐してやる」

『ねっ言ったでしょ。欲望が沢山あるって』
『ああ…これなら確実にオーズを倒すことができる』

『お前の欲望解放しろ』

開催と怪力と戦闘開始

「みんな気合い入れていけよ！」

「「オオオオ！」」

清涼祭当日、僕らは雄二の言葉でやる気がＭＡＸだ

姫路さんの為にも頑張らないとね！

ちなみに僕はウェイターだ。幼なじみのなのはの実家は喫茶店だからバイトをさせてもらってるんだ

「のう…なんでワシだけメイドなのじゃ？」

「何を言ってるんだ秀吉！秀吉以外誰がメイドをやるんだよ！」

「ワシは男じゃ！」

そう言って反発している美少女秀吉は昨日とは違いメイド服を着ている

『ウィーン』と自動ドアが開く音がした

さっそくお客様が来たね

「いらっしゃいませ！コスプレ喫茶へようこそ！」

「凄い…ここ本当にFクラス？」「ウェイトレスさん格好いいじゃない」

入ってきたのは女性だ。感動しながら僕を見て格好いいと言ってくれた

「ありがとうございます。ではあちらへどうぞ」

僕は巧がいるテーブルへ行くように促す

「きゃああ！この人も格好いい！」
「いらっしゃいませ…こちらにお座りください」

巧が二人を座らせメニューを渡した

『ウィーン』

次々に人が入ってくる

「いらっしゃいませ！コスプレ喫茶へようこそ！」

隣ではなのはが接客をしている

流石に士郎さんの娘さん。接客も完璧だね

「チーズケーキセットお待たせしました」

アンクが器用に持ちながら置いて行く

ちゃんとやってくれてて驚いたよ…

「いらっしゃいませ！」

「サンドイッチと紅茶がお二つですね？かしこまりました」

「お待たせしました！クリームソーダです」

「ありがとうございました！」

次々と人が入ってきて僕らはこまねずみのように動き回る

厨房では希さんやムッツリーニが手早く作り待たずにすんでいる

『ウィーン』

あっまたお客様だ！

「いらっしゃいませ…フェイト？それに八神さんも」

入って来たのはメイド服を着たフェイト（凄く可愛い…／／）とウェディングドレスを着た八神さんだ…

「フェイトちゃん、はやてちゃんどうしたの？」

「うん。Fクラスの喫茶が気になってさ」

「コスプレ喫茶やもんな…なのは似合っとるで」

「ありがとう。二人もお似合いだよ！はやてちゃんはウェディング喫茶？」

「せや。みんなBクラスのウェディング喫茶に来てな～」

『『必ず行かせてもらいます！八神様！』』

さっきまで接客をしていたみんなが一斉に八神さんに向かって言った。

僕も後からA、Bクラスに行ってみるかな

まさか根本はいないよね…

「明久…似合ってるね。格好いいよ」
「ありがとうフェイト…フェイトだって似合ってるよ／／」
僕はフェイトに向けてにっこりと微笑んだ
「ありがとう明久／／」

「フェイトちゃん……いいなあ」
なのはが何か呟いていたけど聞き取れなかった
なのはの服は召喚獣と同じでバリアジャケットだけど、肩や胸の部位が露出している

「大丈夫…まだいける」
「アキ君？」

くっ…首を傾げてくる姿も可愛いなあ！

「さてさてアキ君達一緒に何か食べようやないか」

はやてさんがそう言って僕となのはを座らす
ちなみにこのテーブルは一つに六人が座れるようになっている

「そうだよ明久。何か食べよう」

「ちょっと待って僕にはウェイターの仕事が…」
「大丈夫。坂本君に任せてあるから」

馬鹿なっ…雄二貴様！裏切ったな！

「（いつもの仕返しだ）」

雄二はニヤリと笑いながら接客をしていた

そうだ巧！

「にゃ…巧次お願い」
「わかった。行くぞ家康！」
「はいはーい」

駄目か…

ならば座る前に逃げ出すか…

「アキ君、フェイト
の隣に座ってね」

何ということだ！

窓際フェイト、隣僕、隣になのは、フェイトの目の前が八神さん

逃げ出せない…

「八神さん僕と変わろう」
「はやてでいいんやでアキ君。後それは無理やな」

はやてさんはニヤリと笑いながら僕達を見ている

「お待たせしました！クリームソーダとクレープセットが二つです！」

「ありがとな♪」

お礼を言うはやてさんの前にはクリームソーダ、なのは、フェイトにはクレープセットが置かれた

『美波助けてよ！』

美波はにっこりと笑い笑顔で
『頑張ってねアキ♪』と言った

嬉しくない！今は嬉しくないよ！

何故か接客をしている姫路さんからオーラが出てるし！

「ほな食べようか！」

「「そうだね♪」」

はやてさんはそう言うとクリームソーダのアイスを食べ始め、二人はクレープを切って口に入れ始めた

「じゃ、じゃあ僕も何か頼も「大丈夫だよアキ君」

なのはに遮られた…

「私のクレープをあげるから。はい…あーん」

ちょっと待つんだなのは！その服じゃいろいろと危ない！

「食べないの？」

「え…あ、いや…じゃあ有り難く。あーん

」

なのははクレープをフォークごと僕の口に入れた

「おいしい？」

「うん。甘いイチゴとクリームが美味しさを引き出し何といってもこの練乳は絶品だね」

「じゃあ次は私の番だね。明久あーん」

ちょっと待つんだフェイト！そのメイド服は可愛さが最大限に引き出されてるから鼻血がでそうだ…

「あ、あーん」

フェイトもフォークごと僕の口へ

「うん。美味しい！
チョコレートとクリームの絶妙なバランス。さらにアイスが入っているのもまた美味しいね」

二人共幸せそうな顔をしてる…

「……ハッ！」

いつの間にか意識がどこかへ吹き飛んでたよ…危ない危ない

「アキ君二人に見とれてたやろ？」

はやてさんがいきなり小声で言ってきた

「な、何を根拠に」

「二人共プロポーションええもんな～」

「そ、そんなこと」ブシャアアア

「アキ君！？」

「明久！」

二人が心配して体を押し付けてくる…

な、何という破壊力だ…

「おい明久」

「あっアンク」

アンクは僕を立たせると小声で話しかけた

「ヤミーだ。しかもこの学園にいる」

「!?…」

なっ…文月学園に…それはまずいよ!

「みんな、ちょっ、ちょっとトイレに行ってくる!」

「大丈夫アキ君?召喚大会までには帰ってきてね?」

「うん勿論だよ!」

僕はそう言った後、雄二達に任せて教室を出た

「アンク!ヤミーはどこにいるの!?」

「…Aクラスだ」

「Aクラス！？まずい…霧島さんや比奈ちゃんがいる！」

僕はさらに速度を上げて教室に向かった

まさかヤミーが学園に出てくるなんて…

『ウィーン』

「Aクラスの皆さ『ぐおおお』うわああ」

教室に入った途端ヤミーがこっちに吹き飛んできた…

え…？

「ふんにゅ～！」

比奈ちゃん！？え、あれって冷蔵庫だよね！？

「ふんにゅ！」

『ぐおおお！』

比奈ちゃんが投げた冷蔵庫はアゲハのようなヤミーを押しつぶした

「……はは…」

苦笑いするしかないよ…何という怪力なんだ…

「あっ明久君！」
「や、やあ比奈ちゃん」

メイドの姿をした比奈ちゃんはこっちに気づくと恥ずかしそうに出迎えた

怪力だけど…やっぱり可愛いいなあ…

「見られちゃいましたね…／／」

フォローせねば…

「大丈夫だよ。誰も君を馬鹿にしないよ。それよりもヒーローだよ比奈ちゃん！」

大丈夫！怪力な女ならFクラスにいるから…

「だから恥ずかしがらなくて大丈夫だよ」

「違うわよ吉井君」

いつの間にか僕の隣に秀吉の姉、木下優子さんが立っていた

「違うって何？」

「比奈は吉井君だから恥ずかしいのよ」

え…何？どういうこと？え？え？

『貴様……』

忘れられていたアゲハヤミーは起き上がって比奈ちゃんを襲った

「きゃああ！」

やはり怪物には勝てないらしく手首を捕まれた

『…邪魔をするな！』

アゲハヤミーは比奈ちゃんを殴ろうとしたがそうはいくか！

「だっしゃああ」

僕はアゲハヤミーに跳び蹴りをかました

『うおおお！』

アゲハヤミーはよろめいて倒れた

「今だ！比奈ちゃん逃げるんだ！」

「うん！」

比奈ちゃんは頷いた後木下さんと一緒にみんなの所まで離れた

さすがはＡクラス…みんな落ち着いてる

「明久！奴をセルメダルにしちまえ！」

アンクが三つのコアメダルを投げた

「了解！さあいくぞ！」

ベルトを取り出し腰にセットし自動で巻かれる

そして三つのメダルを入れて左についているスキャナーで読み込む

「変身！！」

『タカ！トラ！バッタ！タットッバ！タトバ！タットッバ！』

いつもの歌が流れ僕は仮面ライダーオーズタトバコンボに変身した

『オーズ…！』

さあ…戦闘開始だ！

邪魔と大会とそして記憶はなくなった（前書き）

いや～最近更新が早くできて嬉しいです！

皆さんに質問です

明久と皆さんはどのカプがいいですか？また雄二に新しい愛人ができるとしたら誰がいいですか？

明久のカプ候補

高町＆フェイト

まどか＆ほむら

比奈

瑞希

もしかしたらこの中から本当の恋人を決めるかもしれません

よろしくお願いします！

邪魔と大会とそして記憶はなくなった

「ハアア！」

学園の外にヤミーを追い出し勝負する

トラクローで切り裂こうとしたが避けられる

「くっそ！」

『遅いぞ！オーズ！ふん！』

アゲハヤミーが放った鱗粉を僕は直で受けてしまった

「しま…うわああ！」

体中が爆発して僕は倒れこんだ

火力が半端ないや…

『ふん！』

「！？うわあ」

アゲハヤミーが飛び交ってきたのを素早く避ける

「うおりゃ！」

素早く回し蹴りを頭に放つ

『ぐっ…』

「はあ！てりゃあ！」

二回連続で回し蹴りを放ちチャリチャリとアゲハヤミーからセルメダルが落ちる

「よし！おりゃあ！」

『ぐっ…ふん！』

殴った瞬間再び鱗粉を浴びてしまった

「しまった！うわああ」

さっきよりも爆発が出かく僕は転げ回った

だって熱いんだよ！？

『…はあ！』

「げふああ！」

のた打ち回っている所をアゲハヤミーにアッパーされた

卑怯だぞ！

「明久！何馬鹿やってんだ！」

アンクが腕だけの状態で怒鳴りつける

「いや…だってぐおおお」

再びアッパー！己卑怯ものめええ

「はあ！…せいや！」

殴り蹴り飛ばしを連続で放った

『うおお！』

「はあ！！」

そして脳天に回し蹴りを放つとアゲハヤミーはよろめいた

今だ！

『オーズウウウ！』

「うわあ！」

いきなり突進を受けて僕は壁に叩きつけられた

「チッ！ガメルか！」

「痛たた…」

まさかグリードが…

「メズールのメダル返せええ！」

「え？うわあ！」

突進を避けながら僕はガメルに話しかけた

時間がないから一か八か

「メズールがどうしたの？」

するとガメルは素直に話始めた

『メズール…コアメダルがなくなって弱ってる…意識が戻らない！』

ふむふむなるほど…つまりこうすればいいのか

「アンク」

「何だ？」

ガシッ

「何しやがる明久！うあ！」

アンクから二枚のコアメダルを取り出した

えーとこれで大丈夫だね

「メダル返すよ！だけどこれしか返せないけど…ねっ！」

そう言って僕はガメルにウナギとタコを投げた

ポス

『メダル！メズールのメダル！ありがとうオーズ！』

ガメルは嬉しそうに帰って行った

グリードにもあんな奴がいるんだね…

「おい！明久！てめえ何グリードにメダル渡してんだ！」

アンクはやっぱり大激怒した

「痛てっ…まあまああのグリード幸せそうだったからいいじゃないか」

「ハッ！馬鹿が。おらあいつ倒せ」

そう言って僕に二つのメダルを渡した

「わかってるよ！」

トラとバッタを外し新たに二枚入れる

『タカ！カマキリ！チーター！』

「いくぞ！せいや！」

カマキリソードを展開させ素早く切り裂いたが

『甘い！ふん！』

上空から鱗粉を浴びてしまった

「うわあああ！」

そんな。あいつ空を飛べたのか！

上空からじゃ太刀打ちができず

「うわああ！」

「ぐああ！」

「ぐはっ…」

何度も爆撃を受け僕は倒れてしまった

『欲望の邪魔をするな…』

そう言ってアゲハヤミーは飛びさっていった

なのはｓｉｄｅ

「アキ君まだかな～」

私は今、もうすぐ大会が始まるのでパートナーのアキ君を待っているの

「ごめん！ごめんなのは！ちょっと用事があってさ」

アキ君は謝りながらダッシュでこっちに走ってくる

何か…体がふらついて見えるような？

「大丈夫アキ君？」

アキ君は頷きながら汗を拭っているけど
本当に大丈夫かな…？

「それより早く大会に行こう！」
「そうだね！」

大丈夫だよね？本人がそう言ってるから

高いステージの周りには沢山の生徒や、先生、保護者の方がいっぱいいるね…

「リラックスなのは！頑張ろうね！」
「うん…！」

相手は…女子の仲の良さそうなペアだね

『対戦科目は…家庭科！』

やった！私の得意な教科なの！

「「行きます！サモン！」」

相手のペアは同時に召喚獣を召喚する

Ａクラス　中川悦子
家庭科　３８０

Ａクラス　吉田光子
家庭科　３５０

流石はＡクラスだね！だけど…

「行くよアキ君！」
「了解！」

「「サモン！」」

ポンと音を立て私達の召喚獣が現れる

Ｆクラス　高町なのは家庭科　５６０

Ｆクラス　吉井明久

家庭科　２５０

「凄いよ！アキ君勉強したの？」

「うん…なのはの足を引っ張る訳には行かないからね…何せ僕は仮面ライダーだから！（ニコッ）」

今の言葉に私はキュンと来ました

「「行くわよ！」」

「「ごめんね勝負だから！」」

突っ込んで来る相手の召喚獣を私達は迎え打つ

「アキ君は点数は負けてるけど、操作では学園一なんだよ！」

えっへん！と私は胸を張りながらそう言いってみせた

Aクラス　中川悦子
家庭科　　0

Aクラス　吉田光子
家庭科　　0

『勝者Fクラス！』

ワアアアと歓声の声が聞こえ私とアキ君ハイタッチをする

「まずは一回戦クリアだね！」
「うん！」

「じゃあ…教室に戻…」ガクン

アキ君が急に膝をついて顔をしかめている

「大丈夫アキ君！？」

やっぱり何かあったんだ…とりあえず保健室に

「大丈夫だよなのは！ただのギックリ腰さ！」

アキ君はそう言ってから普通に立ち上がった

いや…アキ君…それはギックリ腰じゃないよ？

「ゑ？」

この時のアキ君の顔はとてつもなく印象的だったの

「営業妨害？」

Ｆクラスの教室…もはやＡクラスに近い教室に戻ってきた私とアキ君は秀吉ちゃんから三年生の先輩がクレームを次々に言っていることを聞いた

「…何とかしなきゃね」

アキ君が考える前に…

「うわああ！二度とこんな店くるかああ」

「ひいいい！」

坊主の先輩とソフトモヒカンな髪をした先輩は逃げて行きました

「ふん…二度と来るな」

アンク君が…どうやら追い出したようだね！

ナイスだよ！

「あれはヤバいな」

「雄二！終わったの？」

坂本君は顔をひきつらせながら明久君と話ている

「ああ楽勝だった…俺は何としても勝たないと行けないんだ…じゃなきゃ俺の人生は」

坂本君のペアは翔子ちゃんだったよね…何かあったのかな？

「アンク君…一体あの人達に何をしたの？」

「んあ？これだ」

そう言ってアンク君がみせたものは…

瑞希ちゃんの…手作りワッフル…

「あれは凄かったのう」

「……当分何もできない」

「まっ…これで一件落着だな」

「えっ何!?凄く気になる!」

「私もアキ君と同じだよ!」

瑞希ちゃんのワッフル…どんな破壊力が…

このあと常夏コンビと言われている先輩方はこの祭の記憶が消えていたのでした♪

不戦勝とおかしな女子達と明久の推理（前書き）

だいぶグダグダになってしまいましたが勘弁して下さい（汗）

不戦勝とおかしな女子達と明久の推理

常夏コンビが消えてから数時間後…

接客で忙しい僕だったけど…

「吉井君ー！」

「可愛い！」

「きゃーこっち向いてー」

何だこれは！？

えーと状況を簡単に説明するとー

僕は今女子生徒に襲われている

「わああ！何なのみんな！」

タンマ！タンマああ！押しつぶされるうう

「明久大丈夫かー！」

秀吉！どこにいるかわからないよ！

「ちょっと待ってろ明久！今助け…ぐふあ」

巧！？巧ー！

「きゃー可愛い！」

僕は可愛くないよ！

「メイド服着せましょ！」

やめてー！そんなことしたら…お婿に行けないよ！

「とりあえず服を剥ぎましょう！」

何…！？

「どうせなら童貞…」

童貞!?童貞が何なの!?

「待ってよみんな!ストップ!」

「「……可愛いい!」」

ふざけるなああ!何が起こってるの!?

何故こんなことにいい!

『バッ!』

!?上着が!!

このままじゃ本当に…やばいよ

『アキ君!!』

こ、この声は…

「なのは！」

群がる女子の中から幼なじみの手が見えた

手を伸ばさなかったら必ず後悔する！

それが嫌だから

『手を伸ばすんだああ！』

グイッ

「……える？」

「私を選んでくれたんだねアキちゃん！」

パッ←手を離す

再び群がる女子の中へ…

誰だあの人…

僕のことをアキちゃん…て

『アキ君!!』

「わっ!」

急に後ろから体を掴まれそのまま引き寄せられた

「うーん!よいしょ!きゃあっ」

「わああっ」

ドターンと音を立て瞬間に柔らかい何かが…

「えっと…」

恐る恐る後ろを振り返ると…

なのはが僕の下敷きになっていた

状況を説明すると…僕に抱きついて倒れた幼なじみ

そのまま倒れたので柔らかい素晴らしいものが僕の背中に当たっている…

「…ｌ！？ｍｗ．ｇａｐｍ！／／／」

素早く起き上がって離れたがなのはは…

「にゃはは…ちょっと失敗しちゃったね」

と笑いながら起き上がった

あれ?何だろう後ろからピンクの殺気が…

「何よあんた!」
「アキちゃんを横取りするき!?」

「ちょっと待ってよ!みんな一体何なの!?」

いきなり教室に入って…僕に抱きついて…はアキちゃんて…

「私達はアキちゃんに会いにきたの!」

「そうよ!吉井君は女の子でしょ!」

ちょっと待って!僕はれっきとした男だよ!

「お客様すみませんね…こいつはれっきとした男です」

雄二が詫びながらフォローに入るけど全然嬉しくない!

何がすみませんなんだよ!

「嘘よ！こんな可愛い子が…」

「違うよアキ君は格好いいんだよ！？誰かさんと違って」

「高町…何故俺を見る」

雄二…君のことは忘れないよ

「そうですよ皆さん」

おっ家康がフォローに…

「こいつは女の子ではないですが女装好きな男子です」

入らなかったあああ！

「「じゃあ私達が女装させてあげるよ吉井君！」」

「冗談じゃないよおお！」

ダッシュで教室から抜け出し全力で逃げる

捕まったら終わり…

「!?アキ君待ってよ!家康君!坂本君!後でＯＨＡＮＡＳＨＩだよ?…」

「「いやあああああ!」」

どこへ逃げる!?どこへ逃げればいいの!?

「アキ君ー!」

「なのは!?どうやって!?」

「そんなことより逃げなきゃ危ないよ？」

わかってる！そうだ…！

「なのは付いてきたなら付き合って貰うからね！」

「ほえ？きゃっ」

なのはの腕を掴み全力でダッシュ！

何故か…廊下にいる生徒が一斉に僕を見る…

『あいつFクラスの吉井明久だよな？』

『何でテニス部で有名な高町といるんだ？』

そりゃ…なのはが付いてきたから

『付き合ってるとか？』

『…殺したい…』

殺したい…？殺すじゃなくて！？

あと僕はなのはと付き合っていないよ！！

そりゃ…付き合いたいと言われたら…

「ふえええ～アキ君～！速いよおお」

か、可愛…ゲフンゲフン

「とうっ！」

勢い良く僕らはＡクラスに入った…

「あれ？消えた！？」

「きっとあっちよ！」

ドドドド

「良かった…どうにかまいたようだね…『お帰りなさいませご主人様』うわっ！」

急に声をかけられて僕は飛び上がった

「どうされましたか？」

「ひ、比奈ちゃん…」

メイド服をまとった比奈ちゃんが出迎えてくれた…

「いやちょっとびっくりしてさ…はは」

「……」

「そうでしたか…こちらへどうぞ…」

まあ立場上今はお客様だから僕となのははテーブルに座らせてもらった

少し休んでから出るかな…

「メニューです！決まったらお呼びください」

「あっどうも…」

流石Ａクラス…やっぱり設備が凄い…

「なのはしばらく休憩して行こうよ」

ここならそう簡単に入ってこれないと思うし、なのはに付き合ってなんか言っちゃったからね

「うん。そーだね」

あれ何か変な気が

「なのは…どうしたの？」

「別に…アキ君が泉さんにデレデレしてたのを怒ってるわけじゃないから」

つまり…なのはは僕が泉さんに見とれてたの怒っていると…

「なのは…僕は別に比奈ちゃんに見とれてなんかないよ？」

これは本当のこと…よくよく考えてみたら…初恋じゃないよあれは…あの時の胸の苦しさは何かまた別のものだったんだ

「でも比奈ちゃんて言ってるあたり…」

「な、なのはそれは比奈ちゃんとはただ今日友達になりたいと言ったら呼び捨てでいいよと言われたけど馴れ馴れしいからちゃん付ことにしたわけで…」

全部本当のことさ…確かに比奈ちゃんはとても可愛いけど…

ただ…

「……ちょっと安心したかな」

「えっ？」

「何でもないよ…ほら何か食べよっ」

「えっ…あっそうだね！」

僕は微笑みながらメニューを開くなのはの横顔を見ていた

「……だよ。なのは」

「ん？何か言った？」

「うんうん…何でもないよ！」

ただ…比奈ちゃんは恋愛対象じゃないことがはっきりとしたかな

そしてなのはが普通の幼なじみじゃないことも

「すみませーんふわふわシフォンケーキを二つお願いしまーす」

『メズール！これ！』

『ガメル？これは…』

『メズールのコアメダル！オーズがくれた！』

『オーズが？』

『オーズ本当はいいやつ！』

『何を言っているガメル…オーズは敵だ』

『そうだよガメル。オーズは君を騙そうとしてるんだよ』

『……うう』

『…そろそろ動くか…ヤミーもいい具合にセルメダルがたまっている。いくぞガメル』

『気をつけてねウヴァ。オーズは強いわ』

『わかってる』

カチャンとスプーンを置き僕は考える…

大会?

何故か食中毒で倒れて不戦勝だったんだよ

まさか姫路さんのワッフルを…

「早くあれをどうにかしなきゃFクラスには戻れないか…」

FFF団は…まあ大丈夫でしょ

「それにしても周りからの目線が…」

仕方ないよねオーズに変身しちゃったんだし

「どうしたのアキ君？しかめつらなんかして」

露出が多い服のため無理やり学ランを着せられた（僕が着せた）なのはが心配そうに覗き込んできた

「…うん。これからのことを考えてて」

とにかく…ヤミーやあれをどうにかしないと…

待てよ、ヤミー?

「もしかしたら…あの人達はヤミーに何かされたんじゃ」

僕はさっきの人達を思いだす

「そうか!わかったぞ!」

「どうしたのアキ君?」

あれは確実にヤミーの仕業…そしてさっきの生徒は二年のE、Dの生徒

おそらく何か暗示をかけて僕のことをアキちゃんだと認識させたんだろう…

ということは次の狙いは…

凄いや僕!

「アキ君?」

「ごめんなのは…すぐに戻るから！」

「へっ…ちょっとアキ君！？」

なのはの分まで支払って僕は教室から出た

正直なのはともう少し一緒にいたかったなあ

玉野と奇跡の合体と白いコンボ（前書き）

お待たせしました！今回は凄いことが起こります！

玉野と奇跡の合体と白いコンボ

Cクラス…元根本君の彼女だった小山さんがいる…

もし、小山さんまでおかしくなったら根本君に誤解されちゃ困るし…僕の身だって危なくなる！

「何としても防がないと…」

『Cクラス：中華喫茶ヨーロピアン』

ガラッ！！と思い切り戸を開ける

「いらっしゃいませー！中華喫茶へようこそ！！…吉井君？」

出迎えてくれたのは小山さんだった

「こんにちは小山さん。何か異変とか起こってない？」

「いえ…普通通りよ」

良かった…どうやらまだヤミーはまだ来ていないようだ…

ちょっと待てよ…もしかしたら僕の推理外れた?

「どうしたの吉井君?まるで何かに絶望してるわよ?」

「何でもない…何でもないよ…はは」

とりあえずここで待たせて…『ガラッ』

「あ……」

『次はここだな…あ』

まさかのアゲハヤミー出現

「だっしゃああ！」

『ぐふう！』

僕は勢いにまかせ廊下へ殴り飛ばした

「見つけたぞ！今度こそ倒してやる！」

『オーズ！？……読まれていたのか』

アゲハヤミーはバサッと翼を広げガラスを割って逃げていった

「待て！」

ガシッ

「は…？」

何かに掴まれたと思い振り返ってみると見知らぬ女子生徒だった

「駄目アキちゃん！私の欲望の邪魔をしないで！」

「はいい！？誰君？」

三つ編みの髪をした女子に僕はアキちゃんと言われた

「私の名前は玉野美紀！よろしくアキちゃん」

「ちょっと待ってよ玉野さん！僕はアキちゃんじゃないしあのことは全部君の仕業？」

玉野さんはわびれた様子もなく頷く

「そうよ！みんなに明久…アキコちゃんの素晴らしさを教えようと思ってるの」

なんだその欲望はああ！？

「玉野さん！僕は明久だよ！何で名前を言い換えたの！」

「大丈夫！みんなアキコちゃんのことは受け入れてくれてるから！」

「違うよあれはヤミーの仕業で…」

みんなが僕の女装を気に入る訳ないじゃないか！

「目標はこの学園に明久…アキコちゃんファンクラブを作るの」

嫌だあああ！そんな欲望絶対に…

「そうはいくか玉野さん！僕が君の欲望を破壊するよ！」

正直…今まで救ってきたけどこの欲望は救う必要がないと思う

「アキちゃん駄目！そんなことしたらアキちゃんがみんなに認めても「僕は明久だああ」」

玉野さんの言葉を遮って僕は窓から飛び降りた

「待って！アキコちゃーーん」

早く倒そう…あのヤミー

「待てえええ」

『ちっ…邪魔くさい』

全力ダッシュで飛ぶヤミーを追いかける

「はあ…はあ…駄目だ…やっぱり早いよ」

『吉井さ～ん』

どこからかが鴻上ファンデーションの秘書里中さんの声が聞こえた

「里中さん!?えっ?どこ?」

『ここでーす』

「うわあ!」

すぐ隣にリムジンに乗っている里中さんがいた

毎回びっくりするなあ…

『鴻上会長からのプレゼントです』

そう言って走っている僕に渡したものは…

「カンドロイド?」

タコとは違う青いカンドロイドだ

「うわあ!ありがとうございます!」

絵柄からしてウナギだ…！

「よーし！早速試してみよう！」

ドライバーを取り出し三枚のメダルを入れる

素早くスキャナーで読み込んだ

『タカ！トラ！バッタ！タットッバ！タトバ！タットッバ！』

お馴染みの歌が流れメダルの仮面ライダーに変身した

「はああ…はあ！！」

足をバッタの足に変形させ思い切り飛び上がった

「くらええ！」

空中で素早くアゲハヤミーに蹴りを放った

『うおお』

アゲハヤミーは蹴られた衝撃で地面に叩きつけられる

よし！勝負だ！

アンクは来ない…よね？

今アンクのメダル以外全部は僕が持っている

アンクを戦いに巻き込む訳にはいかないからね

「うおおお！」

アゲハヤミーに突っ込むが見事によけられた

『ふん！』

鱗粉！？しまった！

「ぐああ！」

爆撃され、僕は跪いた

『ははははは！くらえ！』

今だ！

「おりゃあ！」

アゲハヤミーを足で引っ掛けて転ばせる

『うおお』

「はっ！！だりゃりゃりゃああ」

倒れた所を連続で何回も殴りつける

『ぐふあ…』

「お前のせいで僕はあああ」

どうしてくれるんだ！ＦＦＦ団を完全に敵に回してしまったじゃないか！

『知ったことか！！ふん！』

「ぐふあああ」

真下から鱗粉を喰らい吹き飛ばされた

『邪魔をするな！』

アゲハヤミーは翼を広げた…チャンスだ！

「今だあ！」

さっきもらったウナギカンドロイドを奴に投げる

『ウナギ～』

『ぐあああ』

ウナギはヤミーに巻きつきビリビリと電撃を流す

おお…便利だなあ

『邪魔をするなオーズ』

バキッとウナギカンドロイドは殴られアゲハヤミーは解放された

「ぐあ！え…？」

いきなり攻撃を放ってきた方向を見ると

緑のグリードウヴァとさっき戦ったガメルがいた

『久しぶりだなオーズ…』

『……』

「まさかグリードまでここにいたのか…」

僕は苦笑いをしながらトラクローを展開した

『残念だったなオーズ！いくぞガメル』

『俺いかない…』

僕は来ると思い構えていたがガメルは動かなかった

『どういうことだ貴様』

『オーズ…メズールにメダル返した』

「一部だけだけどね…」

『メズール元気になった！』

そりゃ良かったのかな？

『だからどうした！』

『オーズ…本当はいい奴かもしれない』

そういうとガメルは座り込み動かなくなった

……どういうことだ？

『何をやっているガメル！早く戦え』

『嫌だ命の恩人とは戦いたくない！』

ガメル…でもあいつはグリード…けど何故か悪い奴に見えないよ

『勝手にしろ！ああ！』

ウヴァはキレながら僕に攻撃を仕掛けた

「うわっと！」

上手く交わしトラクローで切り裂く

「はあ！おりゃ！」

『ぐっ……ふん！』

「うわああ！」

『はああ！』

「ぐはっ」

ウヴァに真正面から電撃を受け空からアゲハヤミーの鱗粉を喰らった

『おら！おらあ！』

「ぐっ…があ！」

ウヴァに何度も切り裂かれ僕はダウンした

くっこうなったらメダルを変えるしか…

『おらああ！』

「うあああ！」

ウヴァにクローで切り裂かれ僕はメダルを落とした

『返してもらったぞ…俺のメダル』

しまった…今のでクワガタとカマキリを奪われてしまった

『ふはははは』

ガシッとアゲハヤミーに掴まれアゲハヤミーは上空に飛ぶ

「うわああ！」

そのまま建物にぶつけられ大ダメージを受けた

うぐ…体中が痛い

『ふん！トドメだあ！』

くっやられる！

『待ってウヴァ！』

負けると思ったその時ガメルがウヴァを突き飛ばした

『ガメル何をする！？』

『オーズ…助ける！』

「え……」

『何を言っている貴様は！オーズは俺達の敵だ！メズールも言っていただろ』

『違う！昔のオーズ悪い奴…でも今のオーズはメズールが言ってることが間違ってる！』

ガメルは子供のようなグリード…だけど…今のガメルはヒーローに見えた

『立てオーズ…！俺のメダルやる！』

「えっ…あっ…わかった」

僕はガメルが体内から取り出したメダルを貰った

「ならこれは君に返すよ…君が怪物じゃないことを信じて」

『怪物じゃない？』

「そう…君は正義のグリードなんだよ…」

もしかしたらグリードも救えるのかもしれない

「だから…良かったらグリードをやめて僕と戦ってくれないかな？」

『わかった！俺もオーズになる！』

ガシャリとガメルはセルメダルとコアメダルに別れて

僕の体内に入った？

「えええええ!?」

ちょっと待ってコアメダルが僕の体内に入ったんだけどおお!

『…馬鹿な!?ガメルが吸収された?』

いやいやいや!?

『オーズと一緒に戦う!…』

「!?」

体内から三つのメダルが現れた

あれ?僕…あと三つあるんだけど…

ヒュンと音を立てその三つも体内に消えた

「どうなってるのおおお！？」

『何が起きたんだ…！！オーズウウ！』

ウヴァは怒り狂って電撃を放った

うわっ…！！

「何が何だかわからないけどとにかく」

三つの白いメダルをドライバーにセットしスキャナーで読み込んだ

コンボは体中にダメージがいく…フィードバックの何百倍も…

けど

「今はやるしかない！」

『サイ！ゴリラ！ゾウ！』

『サゴーゾ…サゴーゾォ！』

鋭い角が特徴の白い頭
ゴリラのようにたくましい銀色の体
ゾウのように重い灰色の足

僕はタトバからサゴーゾコンボへと変わった

ガタキリバ、ラトラーターに続く新しいコンボだ！

力と疲労と子供達

「ウオオオオ！」

大きく相手を威嚇し僕はドラミングを始めた

サゴーゾコンボの力はガメルと同じ重力とパワー

「オオオオ！ウオオオオオ！」

胸を叩いた瞬間に大きな波動が放たれる

コンクリートが剥げて土が敵を覆う

『うおお！』

『！？』

ウヴァとアゲハヤミーは重力を奪われ空中何度もぶつかり合った

「オオオオオ！」

『ウオオオオ！あああああ』

ウヴァを重力操作で建物に何度もぶつけダメージを与える

今の僕は無敵の状態だ

これがサゴーゾコンボ！

『グエア…』

ウヴァの体から三つのコアメダルがこぼれ落ちた

「ウオオオオオ！」

僕は敵を重力操作を解除して地面に叩きつける

『ぐああ…俺のコアメダルが…くそ』

ウヴァはふらふらしながら逃げていった

流石は虫…逃げ足だけは速い

『ぐああ』

アゲハヤミーも地面に叩きつけられ僕はスキャナーを取り出す

トドメだ

『スキャニングチャアージ！』

「ふん！！」

地面から重量の力で浮き両足で着地

ゴゴゴゴ

足から波動が流れ壊れたコンクリートは戻り相手の重力を奪う

『！？！』

相手をこっちに引き寄せる

重力を奪われた敵は抗うことができない

「オオオオ！セイヤアアア！」

相手が来た所を角と腕についているガントレットを叩きつけた

『ぐあああああ』

アゲハヤミーは爆発を起こしセルメダルに分解された

やった…

「う…あ…」

体力がもう限界だ…

強制的に解除され

僕は膝をついた

「ハア…ハア」

やっぱりコンボの力は凄まじいよ…

「は、早くみんなの所へ…」

僕はふらついた体を無理やり起こしさっき落ちたコアメダルを拾った

「クワガタとカマキリ二枚…」

クワガタとカマキリは取り返した

けど

「あいつ…何で鎧が破壊され…なかっ…たんだろう…」

いや…僕の前に現れた時も鎧があった

まさか…コアメダルを？

『ウヴァ？大丈夫なの！？』

『くそ…ガメルがオーズの味方に』

『ガメルが…馬鹿な』

『ぐ…６枚のうち三枚を取られた…』

『ガメルが…そんな』

『仕方ないよメズール。ガメルは温厚なグリードだから僕らと少し外れている存在だったからね』

『とにかく気をつけろ…体内にコアメダルを吸収したオーズは強いぞ』

「ぜえ…ぜえ…」

汗がダラダラと流れ落ちる…

「僕の体内にコアメダルが…」

そしてグリードがいる…

「どうなるんだろうなあ僕」

苦笑いしながら汗まみれになった制服を脱ぎ捨て替えに着替えた

流石ははやてさんだ…

『なあなあ何か食べたい！』

体内からガメルの声が聞こえた…

「そっか…でもごめんね。もうちょっと…我慢したら食べられるよ」

『わかった！我慢する！』

ガメルの気配が消えた…きっと眠ったんだろうな

更衣室から出てふらついた体に鞭をうつように走る

『只今より第三回戦を行います』

周りから歓声が聞こえる中僕はなのはから目をそらしていた

「アキ君！なんでそんなにふらふらしてるの！？」

「別に大丈夫だから…」

正直言うとかなりきつい状態だ

『青コーナー吉井明久！高町なのは！』

さて相手は誰かな？

『赤コーナー根本恭二！小山優香！』

まさかの根本君か…

「高町！？吉井！？お前達が対戦相手か…」

根本君はこっちを見て驚いている

「どうしたのよ恭二。相手はＦクラスよ？」

「き、棄権します！」

「はあ！？…まっいっか」

『勝者高町、吉井ペア！』

「あ、あれ？勝っちゃったね？」

『く…くそ…あいつらが居るとは想定外だ！召喚獣で勝てる訳がない…まあいい吉井、高町、坂本にはこいつで借りを返してやる』

『根本…約束覚えてるわよね？』

『優香！？待ってくれ！』

『さようなら恭二』

『畜生がああ！』

『！？きゃああ』

巧ｓｉｄｅ

「三回戦も不戦勝だったね」

希と話ながら俺は教室へ戻る

相手はまさかの家康と千世と来たもんだ

風を引いたことでFクラスになった希だけど実力は本物だ

楽勝かなあと思っていたら勝手に仲間割れ…

自爆して不戦勝になってしまったという訳だ

「にゃぁ…お店大丈夫かな」

「今は昼だからだいぶ落ち着いてる…みんな休憩に入ってるよ」

希に微笑みながら言いながら歩いているとFクラスの教室前に三人…いや…四人の子がいた

どうしたんだろうな

「君達こんにちは。どうしたんだい？こんな所で」

「こんにちはです！あ、あの。葉月はお兄ちゃんを探してるんですっ」

ツインテールで可愛い緑色の目をした女の子が話始めた

「お兄ちゃん？　名前はなんていうんだい？」

「えっと、それが分からなくて……」

『そっか…それなら、何か特徴はわかる？』

『えっと……バカなお兄ちゃんでした』

す、凄い特徴だな。

「うーんでもこのクラスには……沢山いるぞ？」

「いえ、他には凄く優しいんです」

赤い髪をした男の子が丁寧にフォローしている

「にゃぁ…みんな優しい」

希はうーんと考え込みながらそう言った

確かにこのクラスは優しい奴が多いもんな

「あ！その人はとても格好いいんですよ！」

ピンク色をした女の子が目を輝かせながら言った

「にゃぁ…格好いい？」

「はい！フェイトさんを助けてくれたんです！」

テスタロッサを…うーん何か…わかってきたぞ

「他には…そうです！キスをしてました！」

黒い髪の女の子が爆弾発言

絶対明久だろ！？

「あと……すっごくバカなお兄ちゃんだったんです！」

「やっぱり明久か！」

「にゃぁ…明久だね」

ああ。あいつしかいないよ

「たぶん君達の探している人ならこの教室に居るよ」

「本当ですかあ！？」

「ああ！本当さ」

『ウィーン』

『明久（アキ君）～！』

『あはは…なのは、フェイトくすぐったいよ～！』

『……』↑ＦＦＦ団の死骸

「あ、バカなおにいちゃんだ！」

『えっ？…！？葉月ちゃん』

『ウィーン』

「教室を間違えたようだ」

「何でですか！？バカなお兄ちゃんいたですよ？」

「「……明久さんでしたか」」

「にゃぁ…巧ぃぃ」

「うわっ！の、希！？」

さっきのは見なかったことにしよう

「「「エリオ君〜！」」」

三人の可愛い女の子に抱きつかれる男の子と美女に抱きつかれる俺…

なんだこれ…？

「どうしたお前ら？」

向こうからアンクが杏子と…ツインテールの女子生徒と歩いてきた

「入んないのか？」

『ウィーン…』

『ウィーン』

アンクは速攻で出てきた

「…グリードの俺でもあれは無理だ」

「だろうな」

メイドと後藤と二人の危機

僕は今、Ａクラス教室前にいる

一年前にあった葉月ちゃんやエリオ君と再会して昼飯を食べにいく所だ

２年Ａクラス　『メイド喫茶　ご主人様とお呼び！』

看板がＡクラスの前に置かれていた。

なんと言うか…凄いね

「綺麗な服です～」

近くのメイドさんを見て、葉月ちゃんは呟いた。

うんうん…葉月ちゃんなら似合うね

「そうですね。一度着てみたいです」

姫路さんも目を輝かせながらそう言った。

そんなことより…

「ねえ雄二。いい加減覚悟を決めなよ」

「そうよ坂本。逃げるなんて男らしくないわよ？」

「いや、分かってはいるんだが……」

僕は今、雄二を美波と説得してるところだ。このＡクラスには雄二の彼女である霧島さんがいるからね。きっと大丈夫だよ霧島さんだから。

「雄二。確かに僕等はお昼を食べに来たけど、これは偵察でもあるんだ。相手のことを知るのも大切なんだよ」

「坂本…諦めろ」

アンクまで溜め息をつきながら呟く

そう言えばアンクに話してなかったなあ…コアメダルのこと

「……！！（パシャパシャパシャッ！）

雄二を説得していると隣で、いろんな角度からメイドさんを、指が擦り切れんばかりにシャッターを押すムッツリーニがいた。

「……ムッツリーニ？」

「……人違い（ブンブン）」

「どう見ても土屋でしょうが。いったいここで何をしてるのよ？」

「……敵情視察」

それは視察とは言わないと思うけど。

「全く。ムッツリーニ。そんなことしたら女の子がかわいそうだと――――――」

「高町とテスタロッサの。一枚二百円」

「３ダース貰おう。――――――思わないのかい？」

「アキ君……。普通に注文してるよ？」

しまった……

「……そろそろ交代だから戻る」

そう言って写真を渡してムッツリーニは戻っていった。

レア物ゲット…

「さて、そろそろ入ろうか？」

「明久君。その写真、どうするんですか？」

う……

「え？　や、ヤダなぁ。もちろん処分するに決まって――――――――
半分以上が男の足ばかりじゃないか！　畜生！！」

だ、騙されたああ！

「やっぱり見るんじゃないですか！」

「すみまへん…くひをひっぱらないで」

葉月ちゃんが思い切り僕の頬をつねる

子供だけど痛いよ

「全くアキ君たら…」

なのははそう言うと僕に抱きついてきた

「ちょっなのは!?」

えっ何これ…!!あっ柔らかい感触が

「そんなことしなくてもいいのに／／」

「明久さん凄いです」

「バカなお兄ちゃんモテモテです～」

えっみんな何?姫路さんから怖いオーラが…

「と、とりあえず入ろうよ!」

「そうじゃの」

秀吉達は頷きながらＡクラスの教室に入っていった

「「お帰りなさいませご主人様」」

この声は…霧島さんとフェイト！

「雄二…僕らも入るよ」

「そうだよ坂本君」

「けっ…」

『ウィーン』

「お帰りなさいませお嬢様」

「二人共綺麗だね！」

本当に綺麗だね…

「うわあ…やっぱりＡクラスは凄いなあ」

なのはに続いて僕らも入る

『…お帰りなさいませ。今夜は眠らせませんダーリン』

『お帰りなさいませ。今夜は甘い夜を過ごしましょうダーリン』

霧島さんは雄二を出迎えフェイトは僕を出迎えてくれた

「おい明久」

「何雄二？」

「何かおかしいよな」

「奇遇だね…僕もそう思う」

「「ダッシュ！！」」

「「今日は帰らせませんダーリン」」

僕らはすぐに捕まった

アンクは女子生徒と一緒にどこかへ消えた…あいつ

『お帰りなさいませご主人様』

「後藤さん！」

捕まった僕らを出迎えてくれたのは元ライドベンダー隊隊長の後藤さんだ

「似合ってるね…」

「ありがとな」

そう言った後、後藤さんは美波と楽しく会話を始めた

確か美波の彼氏だったっけ

「羨ましいな…美波ちゃん…」

なのはは憧れの目で二人を見ている

「メニューになります」

フェイトが僕らの前にメニューを置いた

メニューまで豪華だなあ…

「ウチは『ふわふわシフォンケーキ』で」
「あ、私もです」
「葉月もーっ」
「じゃあ、私もそれにします」

「では、ワシはサンドイッチに紅茶とするかの」

「僕は『果実たっぷりタルト』にします」

「わたしは『イチゴパフェ』にしようかな」

「「じゃあ、僕（俺）は――――――「ご注文を繰り返します」」」

フェイトと霧島さんによって僕と雄二は遮られた。

「『ふわふわシフォンケーキ』が四つ。

『サンドイッチ』が一つ。『紅茶』が一つ。『果実たっぷりタルト』が一つ。

『イチゴパフェ』が一つ。……『メイドとの婚姻届』が二つで宜しいでしょうか？」

「「「ぜんぜんよろしくないんだけど（だが）（よ）（ですが）！？」」」

馬鹿な…まさかこんな罠が！？

「……では、食器をご用意いたします」

そう言って霧島さんが食器を持ってくる。

姫路さん、島田さん、葉月ちゃん、キャロちゃん、エリオ君のところにはフォークが。

なのはのところにはスプーンが、僕と雄二のところには朱肉と印鑑が置かれた。

な、何いい！？

「しょ、翔子！？　これ本当にうちの実印だぞ！？　どうやって手に入れたんだ？！」

「フェイト…これ僕の家のなんだけど…」

まさかフェイトが僕の家に侵入した！？

「うん！事情を話したら明久のお母さんから貰ったの」

母さんんんん！？

あなたは何をやってるんだよ！

「フェイトちゃん…できれば私のも」

「いいよなのは♪」

そして＋2になった

「雄二…」

「明久…」

ダッシュ！

教室に出る前に僕はなのはとフェイト、雄二は霧島さんに捕まった

結婚式と秘密と根本襲撃

危うく人生が終わる所だった…

「ここも凄いね…」

Bクラス　ウェディング喫茶：今日結婚します！

と言う看板が置いてある

大丈夫！…さっきみたいにはならないはずだ

「結婚かあ…」

美波が頬を赤らめながら呟いた

うん。きっと後藤さんと幸せになられるよ美波！

「…結婚は人生の墓場」

ムッツリーニ…何時の間に

ムッツリーニは高速でシャッターを押している

注意しなきゃね

「こらこらムッツリーニそんなこ「……まどかとほむらの一枚二百円」二ダースもらおう…可愛そうだと思わないのかい？」

「明久君思い切り言葉に出てます」

姫路さんから恐ろしいオーラが流れているんですが…

「……教室に戻「いらっしゃーい！」！？ブシャアアア」

はやてさんがいきなり現れムッツリーニに抱きついた

「は、はやてさん！？」

「いらっしゃーいあき君！」

ウェディングドレスの姿をしている…羨ましいぞムッツリーニ！

「そや！あき君お嫁さんたちが待ってるで」

そういうとはやてさんはムッツリーニを連れながら僕を教室に入れた

「「……あれ？」」

後のみんなを置いて

『『３２５人目ご結婚おめでとうございまーす！』』

ウェディングドレスを来た女子がお出迎えだ

結婚おめでとう…て

『吉井明久様ですね…あなた様には代表が決めた特別プランがあります』

そう言うとタキシードを着た僕に白い結婚のタキシードを着せてそこへ促した

本物の結婚式場みたいに綺麗で階段まである

『『明久（アキ君）』』

「え…」

そこはさらに綺麗で…とても美しい花嫁がいた

白い純白なドレスに綺麗なヴェールをかぶっている

「「アキ君（明久）」」

天使と女神の微笑みを持つなのはとフェイトはにこやかに呼んでいる

「「えへへ（……）」」

可愛さが満点なまどかは恥ずかしそうにクールだけど美しいほむら
さんは無口だけどニコッと微笑んでいる

「／／／／／…は！！」

夢から目覚めたようにはっとする

「…みんな綺麗だね／／」

「「！？／／／」」

本当…綺麗だ

「では只今より新郎新婦による結婚式を始めます！」

はやてさんが司会をしながら周りから凄い拍手が送られた

「えっ!?ちょっと待って…まさか本当に…」

「うん…そうだよ」

そう言って僕を押すなのは

「…ええっ!?／／」

ちょっと待ってよ!!本当ってことは…まさか…き、キスも…

「大丈夫やてあき君。すぐに終わるから」

はやてさんはニカッと笑った

「では…吉井明久…あなたはこの四人を将来愛し続けると誓いますか?」

神父の格好をした男子にそういわれた

「ちょっと待ってよ…僕は…「形だけでもいいやで」うう」

まいったなあ…四人が緊張したような目つきで見つめてる

「えっと…ち、誓います／／」

「「!?／／」」

四人は顔を真っ赤にしながらこっちを見ている

まるで告白じゃないか…

「ではあなたは片はこの人を将来愛し続けると誓いますか?」

四人は僕が好きなはずないから…きっと形だけで終わるんだろうな

「「誓います」」

四人は真っ直ぐと決意のある声で僕を見ながらそう言った

「……／／」

え…？まさかみんな

「では誓いのキスを」

「ほ、本当にやるの！？」

はやてさんは笑いながら口を開いた

「四人があき君を本当に好きならする、嫌いならしないってなっとるから安心せいや」

どちらも複雑な気持ちだ

願わくば…好きであって欲しいかな

「ーーえ?ーー」

何か頬に柔らかい感触がした

「え…?」

僕はいきなりのことすぎて処理が追いつかなかった

ＮＯｓｉｄｅ

『素晴らしい!体内にコアメダルとグリードを宿す男、吉井明久。彼はセルメダルの戦士、コアとセルメダルの戦士を凌駕する存在になる』

『それって危なくないですか?』

『安心したまえ里中君。彼の体内にいるグリードが力を制御している』

鴻上はケーキを切り分けコアメダルを乗せる

『彼はやがて…アンクのメダルも取り込むだろう…いや、グリードのメダルを吸収してしまう！素晴らしいではないか』

鴻上は眉を寄せて直ぐに厳しい顔になった

『だが、コアメダルを吸収した彼の体はただではすまない。そして何より黒いコアメダルが彼に不幸を呼ぶ存在となるだろう』

里中にケーキを置き鴻上は呟いた

『予期せぬ事態が起き始めている…』

なのはｓｉｄｅ

「…」

「どうしたのなのは？」

「ふえっ？あっ何でもないよ！あはは」

アキ君にいきなり話かけられて私は飛び上がった

その理由は…何か違和感があるの

私の体の中で何かが起きているのかな？

「そうだなのは！僕何か買ってくるからそこに座ってて！」

アキ君はそう言うと屋台に走っていった

Bクラスの教室を出た後、急にアキ君が私達にデートしない？と言い出したのがきっかけで…三人が終わり今は私の番なの…

「アキ君とデートかあ…」

今、何か事件があったみたいで大会は一時中断してて…しばらく休憩してこいっと坂本君が言ったからこうしてアキ君と外で歩き回ってるの

外も賑やかで祭り以上かな…さすがは文月学園だね！

あっ服装はコスプレ喫茶ってことでメイド服を着てるんだあ

「それにしてもアキ君遅いなあ…」

何かあったのかな？

とりあえず私は立ち上がってアキ君が向かった方へ歩く

「アキ君!?」

「なのは来たら駄目だ!」

「高町なのはか?探す手間が省けたぜ!」

根本君!?けど何かおかしいの…

「なのは早く逃げて!こいつヤミーに寄生されてるんだ!」

「えっ!?」

「高町いいい！」

根本君の目が赤く光り私の方に走ってきた

「きゃ！」

根本君の突撃を避けてアキ君の方に走る

「なのは大丈夫！？」

「うん」

アキ君は安心したような顔をすると同時に私を押した

「なのはは早く逃げるんだ！僕がなんとかするから」

「アキ君…私も戦うよ！」

「駄目だ！なのはは何事もなかったかのように教室に帰ってて」

「それじゃあアキ君が！！」

アキ君は微笑みながら走り出した

「僕は…大丈夫。慣れてるから…」

そして根本君を掴みかかる前に呟いた

「みんなが楽しめれば…いいんだ」

「…え？」

根本君を殴ったアキ君は根本君を掴み学園から離れて行った

根本と姫路さんと救出（前書き）

今回は姫路さん久しぶりに登場です…アンクは…まだ出ません

根本と姫路さんと救出

「根本君！何が目的なんだ！」

根本君は叫びながら掴みかかってきた

「吉井明久あ！…許さねえ！うがあ！」

「うわあ！！」

根本君はヤミーに取り付かれているから化け物のような力がある

僕は根本君に投げ飛ばされた

とにかくヤミーを中からださなきゃ

「吉井いい！死ねえ！」

「うわっ！」

すんでのところで避けて根本君のパンチは木を破壊した

「あああ！」

ブンと回転させ根本君の拳は僕の鳩尾に直撃した

「うがああ！」

そねまま吹き飛ばされ建物に激突した

「げほ…」

口から赤い液体を吐き出し突っ込む根本君を殴る

「うがあ！」

根本君は地面に倒れこんだ

「高町いい…」

なのはの名前を呼んでいる…

そうか！根本君の欲望は僕らに復讐することか！

「あああ！」

むちゃくちゃに放ったパンチが僕の腹に当たる

「ぐほっ！…」

苦しい！

「このお！」

「あがああ」

根本君を遠くへ殴り飛ばし僕はまた血を吐き出す

「がはっ…僕となのはは根本君にビンタとアッパーをして、雄二は…代表だからか」

たったそんな小さな欲望で…みんなに

「アキ君！！」

あり得もしない声が聞こえて僕は振り向いた

「なのは…？」

何で来たんだ…！

「うあああああ！」

根本君の体内からヤミーが現れた

『ウオオ…！』

すぐに姿が変わった

あれはハイエナ…？

「きゃああ！」

「なのは！！」

しまった！…根本君！？

「吉井！こいつは誘拐させてもらうぜ！」

根本君はなのはを気絶させると学園へ連れて逃げ出した

「なのはああ！」

僕はふらつきながら根本君を追いかけようとしたがヤミーに阻まれた

『死ねえ！』

「うわあ！」

ハイエナヤミーはクローで切り裂こうとしてきたのでギリギリ避けた

「くっ…こんな時に」

『ウオオ！』

「ぐあ！」

しまった！

「うう…」

腕を切り裂いてきたので交わしたが少し切れてしまった

『ふん！！』

「くっ！」

避けながらオーズドイバーを取り出す

そして腰につけた

「ぐあ！」

クローで腹を切られながらもメダルをセットした

『ウオエ！』

「……！！！」

スキャナーを取り出した所でハイエナヤミーの蹴りを受けて僕は草村に飛ばされた

「…う、く…」

ハイエナヤミーは走り去って行った

自力で体を起こしタカ缶を買い追跡させた

「近くて…よかっ」

僕の意識はそこで途絶えた

「…久君…」

僕は声が聞こえて目を覚ました

「比奈ちゃん?姫路さん?」

ふわふわのビンタ色の髪をした姫路さんと茶髪で可愛らしいリボンをつけた比奈ちゃんが心配そうに覗き込んでいた

「二人共…どうして…痛つつ」

「駄目ですよ明久君！じっとしててください！」

「ここは保健室です。明久君倒れてたんだよ？」

そうだ…確か根本のヤミーに…はっ！！なのは！？

「早く行かなきゃ！」

「駄目です明久君！」

姫路さんに抑えられ行く手を阻まれた

「どいてよ姫路さん！行かなきゃならないんだ！」

「わかってるよ明久君…明久君仮面ライダーだもんね」

比奈ちゃんは俯きながらそう言った

「…！姫路さん」

「これは返しません！」

姫路さんの手にはメダルとドライバーが握られていた

「明久君…またヤミーと戦ったんですよね？」

「…うん」

「明久君…無理しちゃ駄目だよ…明久君が傷つくことで…悲しむ人がいるんだよ？」

「比奈ちゃん…」

わかってる…そんなのわかってるよ

だからなおさら

「姫路さん…返してくれないかな？」

「嫌です！」

そう言って姫路さんは僕に抱きついた

「姫路さん！当たってるよ！」

「明久君…他人に頼っていいんですよ！」

「姫路さん…」

「明久君は頑張りすぎです…」

「今回の件は警察に任せて明久君は休んでてください」

「僕は…」

その時…電話がなった

「はい…」

『よお吉井い』

「根本！」

『お前の大切な奴らは預かったからな』

『アキ君！来ちゃ駄目！』

『明久！私達は大丈夫だから！』

『うるせえ！』

『きゃあ！』

『なのは！』

「お前…！」

『悔しければ俺のとこへ来るんだな！ハハハ』

プツンと電話が切れて僕はギリギリと歯を食いしばった

「明久君！我慢です！」

「明久君…きっと罠だよ！？」

「でも僕は…」

二人を助けなきゃ！

「ごめん…」

姫路さんを押し倒してドライバーとメダルを取り上げた

「明久君!?」

そしてダッシュで比奈ちゃんを交わして保健室を出た

「待ってください明久君!明久君ー!」

姫路さんが後ろから走ってくるけど僕は振り向かずそのまま走り去った

「明久君…どうしてですか？」

「ムッツリーニ！居場所わかった！？」

『…学園の近くにあるカラオケボックス』

「ありがとう！」

電話を切って学園の外へ出た

「待ってて二人共！！」

バンとドアを開けカラオケボックスの中に入った

「おじゃましまーす」

「死ねえ吉井!!?何!」

根本君はナイフを持って僕を突き刺したがそのナイフははじけとんだ

「ほい」

「ぶげらああ」

僕はオーズに変身していたから傷一つない

そのままデコピンで根本君を気絶させた

「アキ君!!」

「明久!」

「やれええ！」

根本君の他にチンピラがいたがそいつらもデコピンをして気絶をさせた

二人は僕に抱きついてきた。

「もう大丈夫だよ…」

『ウオオ！』

「！？はあっ」

ハイエナヤミーの攻撃を交わして蹴りを入れた

「今のうちに早く逃げて！」

「「無理だよ！」」

わからずやああ

僕は二人を外に連れ出しペットのトラカンドロイド…名前はライをライドベンダーに合体させ二人を乗せた

「じゃあライ！よろしくね」

『ガオオン！』

ライは二人を乗せ学園に向けて走って行った

さてと…後は

『ウオオ！』

「せいや！」

飛びかかってきたハイエナヤミーを回し蹴りを放ち吹き飛ばした

「この祭…僕が守る！」

みんなが楽しめれば倒れることなんて…訳ないよ

「一気に行くぞ！」

タカ、トラ、バッタを抜き取り、しまった

「ガメル…力を貸してくれ！う…！」

体内から白いメダルが出てきてキャッチした

サイ

ゴリラ

ゴリラ

「違ーーう！」

三枚を体内に戻した

『ウオオ！』

「邪魔だあ！」

『ゲフウ！』

腹に拳を叩きつけ吹き飛ばした

『ヒュン！パシッ』

ゴリラ

ゾウ

ゴリラ

「頭がなーい！違うよガメル！ゴリラが一枚余分！」

『ごめん…次こそ』

体内に戻し再び白いメダルが出てきた

『サイ！ゴリラ！ゾウ！』

『サゴーゾ…サゴーゾォ！』

サークルの動物が重量系に変わりタトバからサゴーゾへと変わった

「ウオオオオ！」

限界と対決グリードと新たな戦士（前書き）

カウンズメダル！
現在オーズの使えるメダルは
タカ
クワガタ×２
カマキリ×３
バッタ
ライオン
トラ
チーター
サイ×２
ゴリラ×２
ゾウ×２
ウナギ
タコ

限界と対決グリードと新たな戦士

「ウオオオオ！」

胸を叩いてドラミングをする。地面は浮き上がりハイエナヤミーは重力を奪われた

「はあああ！」

手についているガントレットをロケットパンチのように発射した

『ぐええ！』

顔面に直撃し、ハイエナヤミーは吹き飛ぶ

「オオオ！」

胸をドンドンと叩きハイエナヤミーを引き寄せた

「ウオオオ！」

ガントレットで殴りつけ蹴り飛ばす

「はああ！」

「おああ！」

「ウオオオオ！」

角で突き上げ、踏みつけ、蹴り上げ

力の限り叩きつけ、殴りまくる

コンボを長時間使うことができないから早く倒さないといけない

『ウアア』

かなり弱っている止めだ！

『ハアア！』

「ぐああ！」

いきなりクローを突き立てられ吹き飛ばされた

「く…うわあ！」

起き上がった所を水流弾を受ける

「この…！ぐああ！」

濡れた体に電撃を受け体に強烈な痺れが伝わった

「ぐは…」

『久しぶりねオーズの坊や』

『僕らのコアメダルを返してもらうよ』

『お前にはここでくたばって貰う』

「そんな…グリードが…三体！」

嘘でしょ…これは本当にヤバいよ…

けど…やらなきゃ！

『ふふ…ガメルを返して貰うわよ』

「冗談じゃない！ガメルはグリードをやめて仮面ライダーになった

んだ！」

『ならあなたを殺して無理やり奪うまでよ！』

三体のグリードは一斉に攻撃を仕掛けてきた

「せいや！」

『ぐお…』

左腕でウヴァの頭を殴り

「はああ！」

『ぶ…』

右腕でカザリの顔面を殴り

「おらああ！」

『『ぐああ』』

片手で二体を持ち上げて投げ飛ばした

「ぜえぜえ…」

くそっ…もう限界だ

『はああ！』

「おりゃあ！」

『う…』

メズールの蹴りを避け角で胸を突き刺した

「あ、あれ？感触がない」

『（カチン）それは上半身が不完全だからよ！はあああ！』

「ぐべらああ」

何かスイッチが入ったメズールは蹴りを思い切り脇腹に打ち込んだ
後投げ飛ばした

「ぐ…」

これ以上は危険だ

素早く白いメダルを戻した

『本当に体内にコアメダルを吸収したわ…』

そして素早く新たなメダルを入れる

『ふん！』

『おらあ！』

「うわああ！」

ウヴァとカザリの攻撃を受け地面を転がる

「く…」

素早く起き上がってスキャナーで読み込んだ

『クワガタ！カマキリ！チーター！』

トラとチーターは一枚ずつメズールに取られてしまった…

カザリの鎧が戻ってるってことは吸収したのか…

おまけにメズールも足が復活している

勝てるのだろうか？こんな体で…

「考えている暇はない！はああ！」

チーターの力を使いメズールの前に立ちふさがった

『！？』

「せいや！」

頭から電撃を放ちメズールに浴びせる

『きゃああ』

メズールは水…だったら雷は有効だ！

『おらあ！』

「せい！」

『ぐお！』

ウヴァが攻撃してきたのでチーターの足で高速キックをお見舞いした

「そしてお前はこれだ！」

『く！』

カマキリソードを展開させカザリを切り裂いた

「よし！くら…」

ガクンと体が崩れた

『ハアア！』

「うわああ！」

隙をみてカザリは僕を殴り飛ばした

「ぐ…がは」

『ここまでのようね』

『期待はずれだよオーズ』

『消えろ！』

『『『ハアア！』』』

ウヴァの雷、メズールの水、カザリの砂をまとめて受け吹き飛ばされた

「うわあああああ」

そして変身が解除されメダルが落ちる

「う…」

さっきの反動で残りのメダルも何枚か落としてしまった

『返して貰ったぞ俺のコアメダル』

『ふふ…オーズの坊やありがとうね』

『僕のコアメダルはないか…まっいいさ』

そして三体が近づいてきた

チーターだけはベルトに残っている

『じゃあ…バイバイ』

カザリが砂を放つ

くっ…結局ハイエナヤミーは取り逃がし

コアメダルも取られた

「何やってるんだよ僕…届く範囲なのに守れてないじゃないか」

ああ…死ぬのかな僕…

僕は目を閉じて防御の構えをする

防ぎきれる訳ないのに

ガキンと音がして僕は目を開けた

「死んでない？」

そう…僕は死んでなかった

「え…？」

「大丈夫か？」

僕の目の前に誰かが立って砂を防いでいたからだ

『誰！？』

『何よあれ？オーズ？』

『貴様誰だ！そのメダルは何だ！』

メダル？

後ろ姿しか見えないけど騎士のような戦士だった

「ああ…俺は仮面ライダーディアス」

彼はそう名乗った

『ＨＡＰＰＹｂｉｒｔｈｄａｙディアス！！』

ディアスと銀色と器（前書き）

短いですが新ライダー登場です！

カウンザメダル

現在オーズの使えるメダルは

タカ
バッタ
ライオン
トラ
チーター
サイ２
ゴリラ２
ゾウ２

ディアスと銀色と器

「いくぜ！」

『銀色のコアメダル！？』

大ピンチの僕の前に現れたのは騎士のような戦士…新たな仮面ライダーだった

「よっ」

ディアスと名乗った仮面ライダーはグリードの攻撃を避ける

「はああ！」

『ぐあっ！』

ディアスは腕についている剣を展開させ切り裂いた

『くらえ！』

後ろからカザリが攻撃を仕掛けるがヒュンと音を立て後ろに回った

『なっ！？』

「遅いぜ！」

カザリが振り向いた瞬間に蹴りをお見舞いした

「は、早い…」

スーツは黒色で鎧が銀色だ…中央には…狼の姿が…

「コアメダル！？」

僕が全く知らないコアメダルだ…

『はあ！』

「くっ…」

メズールの水流弾をくらい一歩下がったが全然効いてない

「おいおい…その程度かよっと」

『きゃああ！』

「おまけだ！」

『ぐああ！』

ディアスは腰にある大剣を抜きウヴァとメズールを切り裂いた

「よしっ…」

ディアスはベルトから一枚のコアメダルを抜き剣に入れた

『ウルフブレイク！』

「はあああ！」

ディアスは剣を構え輪を作りグリード達に発射した

『くっ…何だよこれ！』

『動けない！』

「いくぜ！」

ディアスの後ろに銀色の狼のビジョンが現れる

「おりゃあああ！」

そのまま大剣を地面に振り下ろし

『ぐあああ』

『きゃあああ』

大量の斬撃がグリード達を切り裂いた

そして爆発を起こす

『チャリン…』

何枚かメダルが落ちた音がした

『くそっ…覚えてろ』

ウヴァが二体を背負い逃げていった

「す、凄い…」

「さっきはありがとう！」

僕はメダルを拾って仮面ライダーにお礼を言った

「…はあ…無茶すんなよ…明久」

溜め息をつかれ何故か僕の名前を言うと

「先に帰ってるからな」

後ろを向き校舎へ歩いて行った

「え…？何で僕の名前を…？」

巧ｓｉｄｅ

「どうだった？」

「ああ…問題ないよ」

俺は明久を助けた後、校舎に戻ってきた

まあ随分と留守してたんで文乃こってりと叱られた訳で

今は文乃、希に変身した感想を言ってるんだ

「流石にグリード四体は無理かな」

「にゃぁ…巧は無理しないでね」

「あんたが倒れても心配なんかしないんだからね！」

「ああ…サンキュー二人共」

ピーンと銀色のメダルを弾きキャッチする

「アキ君…どうして」

高町が溜め息をついている

簡単に言うと高町は明久が好きな訳で…心配して明久を助けようとしたんだけど明久に帰れと言われて落ち込んでるんだよな

俺が知ってる理由?それはヤミーが出たから向かってたら一部始終を見たのさ

俺が仮面ライダーなのを知っているのは…文乃、希、そして坂本だ…

そう物語は…俺らが教室にいた時だ…

『いらっしゃいませ！』

『ＨＡＰＰＹｂｉｒｔｈｄａｙ！』

いきなりとても甲高い声でそう言われた

『あ…あのどうしたんですか？』

『見つけたよ！君が銀色のコアメダルの器だったとはね』

『は？』

メダル？メダルと言えば明久がオーズになる為の

『何をしたいのかわかりませんがコアメダルに関しては吉井明久に尋ねてください』

『素晴らしい！その真っ直ぐな性格！ますます騎士にふさわしい！』

騎士と言えば…ドラゴンを倒す戦士のこと言うはずだが今はどうでもいい

『どういうことですか？』

『これは私からのプレゼントだ！受け取りたまえ！』

『は、はあ…ありがとうございます』

何かの社長かな？なら失礼な態度は取れないよな

俺は大きな箱をもらった

いかにも高そうだ

『君が持っている石盤とこれがあれば新たな戦士が誕生する！』

何のことか全く意味が分からない！

『ちょっと待ってください…どういう…あれ？』

気づいたらその人は消えていたんだ

変身とビンタと4回戦（前書き）

今回は回想と少し暗いです

カウンザメダル！
現在オーズの使えるメダルは

タカ
クワガタ
バッタ
ライオン
トラ
チーター
サイ2
ゴリラ2
ゾウ2
ウナギ
タコ

『何だろうな…これ』

俺は都築　巧

今、明久達がAクラスに行っている間、俺はFクラスの教室に残っていた

そして変な社長さんからこんなものをプレゼントされたんだが…

『こいつは明久と同じものかもしれないな』

と言って明久達を追いかけて行った

『にゃぁ…巧…その大きな包みには何が入ってたの?』

そう言って紅茶を持ってくるメイドの服を着ている子は猫耳のような髪と赤い瞳が特徴な希だ

『えーと…狼のような絵柄をした銀色のコアメダルが一枚…鹿のような絵柄をした銅色と熊の絵柄の銅色のコアメダルが一枚ずつだ』

『それは何なの?』

食器を片付けている髪が茶色く綺麗な瞳をしているこの女は幼なじみの文乃だ

『えーと…『ディアスセイバー』だってさ』

そう言って俺はこの単剣を取り出す

「銀色の剣…だね」

「…待てよ…もしかしたら」

コアメダル…オーズ…仮面ライダー

俺はこの時を望んでいたのかもしれない

俺がヒーローになれる時を

いつも明久に任せて…逃げていた

馬鹿だけどあんなに優しく勇敢なあいつを見て悔しかったんだ

けど最近のあいつは何故か元気がない…

今日も我慢しているように見えて…

誰かが明久を助けなくちゃいけない

きっとそれは俺なんだ…！

あいつが昔…俺を助けてくれたように

今度は俺が…！

次怪物が出たときは俺も！

そして運命の時は訪れたんだ…

しばらくすると

高町が元気が無い顔で戻ってきたんだ

俺は理由を聞いた時…走らずにはいられなかったんだ

そして…グリードに追いつめられた明久…

俺は銀色のコアメダルとあの社長が言っていた…乙女姉さんから貰ったお土産のベルトのような石盤

そして…ディアスセイバーを使い

俺は仮面ライダーとなったんだ

『あなたは!?』

『俺は…仮面ライダーディアス』

☆

明久ｓｉｄｅ

「…ただいま」

僕はフラついた体でＦクラスに戻った

「明久あ！」

アンクが掴みかかってきた

「ちょっアンク？何!?」

「お前…何故ふらついている」

「何のことだか…」

「何故ヤミーの気配がしたのにすぐ消えた?」

「それは…」

「お前…また勝手に戦ってだろ?」

「……」

「戦ってだろ!?どうなんだ!ああ!?」

アンクは黙っている僕を突き飛ばし教室に帰って行く

「ごめん…アンク」

アンクは舌打ちをすると

「俺の目的は完全復活することだ…忘れんな」

と言葉を吐き捨て教室に入って行った

…仕方ないさ。うん！同情してた僕が馬鹿みたいだ！

よしここは張り切って

「ごめーん！遅くなっちゃったよ！」

笑顔で教室に入る

みんなは馬鹿にしながらも迎えて入れてくれた

一人を覗いては

「アキ君」

「あっなのは！ごめん…ちょっと遅くなっちゃったよ」

パアアアン！と僕の頬に強烈な痛みが伝わった

「なのは？」

「アキ君…おかしいなあ…何でそんなにボロボロなのかな？」

魔王が降臨した

「な、何のことだか…それよりフェイトは大丈夫？」

「フェイトちゃんはアキ君を心配してたよ」

僕は腫れた頬をさすりながら苦笑した

「ごめんね…」

「私…なんでアキ君を叩いたかわかる?」

「え…?」

「私達はアキ君の体が心配だから…怒ってるんだよ?」

「なのは…」

気まずい雰囲気が流れながら僕となのは会場に向かった

『これより第第４回戦を行います！』

相手は…

「明久君…なのはちゃんと何を話していたんですか？」

「瑞希…落ち着いて！」

黒いオーラを出している姫路さんとそれを押さえている美波が相手だった

「たいしたことじゃないよ…ＯＨＡＮＡＳＨＩをしてただけだよ」

なのはムスッとしながら静かに答えた

僕と美波は震えていた

「アキ…何をやらかしたのよ！」

「う…」

「明久君！覚悟してくださいね？」

「アキ君…行くよ」

怖い…本当に怖いよ…

早く二人を何とか…その前になのはを何とかしなきゃ

でも今回ばかりは僕が悪いよね…

巧に聞いたけど…なのは…泣いていたんだよね…

はあ…自分が本当に情けないよ

「アキ君！！」

「え…？」

ぼーとしていたらしく…試合が始まっていたことを忘れ

Fクラス　吉井明久
古典　　0

気づいたら姫路さんに討ち取られた

「ぎゃあああ！背中がああああ！」

グリードもろくに倒せないで何が仮面ライダーだ

大好きな人を泣かせて何がヒーローだ…

目の前のことをすっぽかして何がヒーローだ

「畜生…」

仲直りと悩みと一日目の終了（前書き）

コメント返せなくて申し訳ないです！

できるだけ返せるように努力します！

仲直りと悩みと一日目の終了

「…なのは」

「やっぱり強いね瑞希ちゃん！」

Ｆクラス　高町なのは古典　１５０

Ｆクラス　姫路瑞希
古典　３４６

こんなの…無理だ…

なのはが姫路さんにかなうわけないよ

「きゃああ！やりますねなのはちゃん！」

え…？

姫路瑞希　２１０

「凄い…」

なのはは姫路さんに攻撃されないように距離を取る

「甘いですよ！」

しかし姫路さんは隙を見てでかい大剣でなのはの召喚獣の腹をえぐった

「あちゃあ！」

高町なのは　８０

「なのは…やっぱり無「私ね…仮面ライダーって凄いと思うんだあ」え…？」

なのはは笑いながら姫路さんの攻撃を避ける

「だって…いつも誰かの為に手を差し伸べるんだもん」

「それでも僕は…」

目の前にあることをすくえなかった

「けど…仮面ライダーはいつもみんなを守って…一人でいろいろ背負って…きっと辛いんだよね」

なのはの召喚獣が杖を構える

「だって…自分の命を投げ捨てて…人を救うことばかりで…誰にも助けを求めないんだもん」

「なのは…」

「確かに一生懸命戦うのは素晴らしいことだよ…誰かの命を守る…格好いいこと」

なのはは杖に力をためる

「でもね…そんな素敵な仮面ライダーがね…ボロボロじゃ…意味がないよ」

「でも…誰かが傷つくのは」

「わかってるよ…けどね…私だって…フェイトちゃんだって…アキ君が傷ついてほしくないんだよ?」

なのはは悲しい顔をしながら続ける

「だからね…私達…アキ君が何を言ったって一緒に戦う…アキ君の命を守ることが今の私達の役目だから」

「なのは……ごめんね」

「謝ることじゃないよ…アキ君が居場所を求めてるなら私が作ってあげるから」

なのははそう言った後、姫路さんの攻撃を避け杖から桃色の閃光を発射した

「ディバインバスターアア！！」

巨大な閃光は姫路さんの召喚獣を飲み込んだ

姫路瑞希　０

『勝者吉井、高町ペア！』

すっきりした顔のなのはは僕の方を振り向き笑った

「アキ君……ありがとね」

「え…？僕は何も…」

「ううん…違うよ…本当…アキ君で良かったよ！」

なのは満面の笑みで微笑んだ

どういうことなんだ

「仮面ライダーオーズ…吉井明久は私のヒーローだよ」

そうだ…僕はこの笑顔が見たくて…みんなの幸せを守りたくてヒーローになったんだ

なのはに心配をかける事態で僕は…

「ありがとうなのは…確かにヒロインは必要だよね！」

「アキ君…どうやったらそう解釈できるのかなあ？」

なのははそう言いながら笑った

「あはは…ごめんごめん！…じゃあなのはは僕にとって…」

あれ？何だろう…

なのは幼なじみ…だけどしっくり来ない…今日から一緒に戦うヒロ

イン?それも違う

なのはは期待しているような目で見ている

「うーん…言葉じゃ表せない大切な人かな…」

それを聞いたなのははじけたような顔をしながら真っ赤になった

「あ、アキ君!」

「何?」

なのはは頬を赤くしながら緊張したような声で喋る

「(やっぱり…耐えれないよ…ごめんねフェイトちゃん)アキ君…私ね…」

雄二ｓｉｄｅ

俺は明久と一緒にババアに本当のことを聞きに行った

どうやら…教頭の野郎といろいろあったらしい…

遊園地のペアチケットが優勝賞品にしていただとおお！？

翔子の手に渡る訳には行かねえ！

俺は明久に勝つように言ったんだ

今日はちょっと事故があったらしいから４回戦で中止になった…

次は明久達とだったから危なかったな

勝ってたら大変なことになる所だった

話を戻し…ババアの部屋から出て明久に勝つように言った

だが明久は…

「……／／／はあ」

溜め息を吐いてばかりだ！

こんな時に限って明久はどうしちまったんだ！

「たくっ教室に帰るぞ明久」

「うえ！？無理だよ！／／」

「一応聞くが何故だ…」

「そりゃ…その」

俺は呆れ果て教室に帰って行った…

明久は何故かAクラスの教室に入って行きやがった

まあ…そんなこんなで今日の祭は終わった

「みんな今日はゆっくり休んで明日はさらに売れるように頑張るぞ

！」

なんか俺に似合わないセリフだ

『『オオオオ！』』

まあみんなはやる気満々だから良しとするか…

「おい坂本」

「なんだ鳥もどき」

「ああ？…明久はどこだ」

しゃーね…教えるか

「Aクラスにいる」

『『ザッ』』

みんなが一斉にAクラスに向かって行きやがった

まっいっか…

「坂本君…なんだ高町…うお！」

そこには魔王がいた

夜道と気持ちとフェイトと歩く

「はあ…」

只今１９時…だいぶ暗くなっている中、僕…吉井明久は買い物袋を持ちながら歩いている

「とりあえず…アンクは家にあるアイスですむとして…やっぱりゲームを買うのは控えた方が良さそうだね」

趣味に金を使い…おかげで今日はラーメンだけ

なのはの家は喫茶店でバイトをさせてもらっている

今日は運悪く休みだった

「はあ…なのは達に心配させない為にも…ちゃんと栄養を取って…んおお！？」

いやいやいや…あれはヤバいよ

『満～』

『三菱～！』

『チュ…ンチュ』

「ディープ…僕にはレベルが高すぎる…」

よく思うけど平然とあんなことできるって凄いと思う

『明久～お腹減った～』

体内からガメルの声…

「ごめんね！もう少し我慢してね」

早く…帰ってラーメン食べなきゃ

『満～ンチュ』

「！？／／／」

急いでその場から離れた

「カップルか…」

呟いた言葉で僕はあの時の言葉を思い出し顔が真っ赤になった

「／／…はあ」

はっきり言ってしまおう

僕は今日の４回戦が終了した時…

なのはに告白をされたんだ…

僕ははっきりできず…祭の終わりにと言ったんだ

さらには放課後フェイトにＡクラスに来るように呼ばれて…

行ってみるとフェイトだけしかいなくフェイトは夕日に照らされながら微笑んだ

可愛いではなく美しいがふさわしかった

そして告白をされたんだ

結局フェイトも祭に終わりにと言ったんだ…なのはやまどかと同じか…

「僕って以外とモテるのかな…いやかなりモテる…」

そういえば…姫路さんからも帰る前に告白されたんだっけ

美女達から告白されまくる僕って

「やっぱり美少年…なのか」

そうだよ！僕は美少年なんだ！

「さあ…早く帰って勉強しなきゃ！」

「あれ？明久」

急に暗い道から綺麗な声が…

「フェイト？」

あの綺麗な声と言ったらフェイトしかいない

「やっぱり明久だ！」

フェイトはこっちへ嬉しそうに掛けてきた

「どうしたのフェイト？こんな時間帯に」

「…ちょっとお買い物…エリオやキャロにね」

僕は納得しながら一緒に歩く

「でもこんな夜道に一人は危ないよ…ましてや美女なんか余計だよ」

「び、美女！？／／」

どうしたんだろう…顔が赤いよ…

「だ、大丈夫だから！すぐそこだし」

「でも危ないよ。…僕も付き添ってあげるからさ」

「え！？／／ぁありがとう」

「うん！どういたしまして！」

そんな訳で僕はフェイトの家を目指して一緒歩く

「ねえ明久」

「んー何？」

「明久って…なのはが好き？」

「ぶげふ！い、いきなりどうしたの！？」

何で唐突にこんな質問が…！

「だって明久…なのはと話してる時凄く嬉しそうだから」

「え…？」

「…ちょっと悔しいかなあ…」

フェイトは苦笑しながら喋った

フェイトがそんなことを考えている何て思っても見なかった

「そんなことはないよフェイト」

「え？」

「今こうしてフェイトと話せているこの瞬間もとても嬉しいよ」

フェイトならあのことを言ってわかってくれるかもしれない…

「明久…／／」

「そうだ…」

ポケットから僕はネックレスを取り出した

「フェイト…これさ…一年の教室で売ってたからあげるよ」

フェイトは驚いた顔でみていた

「いいの!?」

そのネックレスは…黄色い花の形をして中央には綺麗な宝石がついている

「うん!フェイトに似合いそうだったから」

「ありがとう／／」

良かった…気に入ってもらえたようだ

「明久…」

「何？」

「ネックレスかけてくれないかな？」

「え…あっうん！わかった／／」

フェイトは嬉しそうに近寄る

「／／／…」

凄い緊張する…

目の前にはフェイトが…

「……（我慢だ…耐えるんだ）」

フェイトは目をつぶっていて余計に美しさをかきたてる

「……よ、よし。つけれたよ」

「ありがとう明久！」

危なかった…あやうく理性が飛ぶ所だったよ

「明久ここでいいよ！」

「大丈夫なの？」

「うん。あれだから」

「わかったよ…じゃあ僕も帰るね…」

どうやらフェイトの家についたらしい

ちょっと残念かな

「じゃあ…おやすみフェイト」

フェイトは僕の方に走ってきて

「おやすみ明久！」

そう言ってから僕の唇に口づけをした

「／／／／うん！」

僕は手を振りながら走った

今起きたことが何を言いたかったのかは鈍感な僕でもなんとなくわかった気がした

迷いと恭也さんと真夜中の（前書き）

特別アンケート

好きな異性と勉強するなら何の教科にしますか？また教えてもらうなら何の教科がいいですか？

高町なのはの答え

「『教える…数学、教えてもらう…保健体育』アキ君の保健体育／／…」

教師のコメント

おや、高町さんは吉井君が…応援してますよ

吉井明久の答え

「『教えてもらう…発達保育』」

教師のコメント

どうしたのでしょう？

坂本雄二の答え

「『教える…人権について』」

教師のコメント
涙の跡ではないと信じたいです

迷いと恭也さんと真夜中の

「現在…夜の9時…」

僕は教科書や参考書を積み重ねている

「明日は霧島さんと雄二…なら多くでも点を取らなきゃ」

得意な日本史から始める

カチッと時計の針が動く

「アンク…寝たのかな?」

まだ怒っているのだろうか…いやアンクのことだからそれはない

「明日の夜…」

答えを出さなきゃいけない

誰が好きなのか…

「みんなの気持ちは嬉しいけど…せめて二人かな…」

前何人でもと言った自分が恥ずかしいや

「……」

一人は決まっている

大事な大事な人

「……さあて勉強を続けるかな」

カチリと針が１０時を示す

「……うん‥」

全然わからない！！

「えっと次の図形の面積ぃ？」

こんなの誰が作ったんだ…

「駄目だあ！頭に入らないよ」

「仕方ない…あそこに行くかな」

「……」

僕は幼なじみ…高町なのはの道場で座禅をくんでいた

懐かしい…昔…ここで剣技を習ってたんだよね

心を空っぽにして…瞑想する

『オーズの力はこの程度か』

『がっかりさせないでよね』

『ガメルのコア…返しなさい』

「はっ！」

額には汗が流れ…僕は無理やり目を開けた

「はあ…はあ…もう一回」

再び瞑想をする

大丈夫…今度は大丈夫だ

『アキ君！』

『明久！』

『明君！』

『明久君！』

僕を呼ぶ…美女達…

『ピシャアアン！』

「あだああ！」

いきなり頭を叩かれ僕は現実に引き戻された

「心に迷いが見えるぞ明久君」

「恭也さん…」

僕の目の前に士郎さんと一緒に剣技を教えてくれたなのはの兄…恭也さんがいた

「力がわからない？」

「はい…」

僕は恭也さんに悩みを打ち明けた

とりあえず…オーズとバレないように召喚獣のことにした

「強力な力を使おうとするとついていけなくて」

「…だから勝てるか不安なのか…」

「はい…」

恭也さんは頷きながら僕の額をつついた

「あたっ！」

「だからと言って…無茶をするのは感心しないな」

「う…」

「見てたよ…かなりハードな特訓してたじゃないか」

「あはは…見てたんですか…」

「腕立て２００…腹筋３００…スクワット２００…素振りを４００…体が壊れるぞ？」

「ちょっと邪念を払おうかと」

「明久君…別に力を求めなくてもいいと思うぞ」

「え…」

恭也さんはにっこりと笑った

「力を求めれば…自我を失う…下手したら心すら制御ができなくなるんだよ」

「…でも…このままじゃ駄目なんです」

グリード一体すら勝てないなんてこの先勝っていきない

「明久君…君は無欲だ…だからこそ危ないんだよ」

「それってどういう…」

恭也さんは立ち上がって僕に飲み物を渡す

「あっ…ありがとうございます」

「明久君…強くならなくていいんだ…君には仲間がいるだろ？」

「はい…」

「強くなりたいと言うよりも誰かを守りたいと言う方が力ってのは自然と身につくんだよ」

「誰かを守りたい…」

「けど…それで行き過ぎたら…結局は同じだがね」

そうだ…強くなりたいんじゃなく…誰かを守りたいと願えば

「ありがとうございます！恭也さん！」

恭也さんはふっと笑うと僕に飲むよう促してくれた

僕はそれを頷きキャップを開けて飲み始めた

「それにしても明久君…君はなのはが好きなのかい？」

「ぶほおおおっ！」

なんだこの罠は！？

ああ！僕のドリンクが…

「いきなり何ですか恭也さん！」

「ははは！ごめんごめん！でも本当だったとはね」

「う…そりゃあ幼なじみですから…何年も一緒だと流石に」

「へえ…誤魔化さないか…うん流石はなのはの彼氏だな！」

「だから違いますって…！！／／」

「あはは…じゃあ今からなのはに会うかい？」

「今１１時ですよ！？…」

何を言ってるんだ恭也さん…会えるなら会いたいけど

「だそうだなのは」

「えっ！まさか」

「はは…冗談だよ…で、本当は？」

「会えるなら…いや会いたいです」

どうせいないんだし冗談ぽく

「だそうだなのは」

「そうなのアキ君？」

「な、ななのは！？」

「じゃあ頑張れよ仮面ライダー」

「へっ！？」

振り向くと恭也さんは手を振って出て行った

「ちょっと待ってください恭也さん！何故僕が仮面ライダーなのを…」

追いかけようとしたらぐいっと引っ張られた

「な、なのは…」

「アキ君…勉強しよ！フェイトちゃんも呼んで」

上目づかい…そして微笑み…胸

「男とは無力だ…」

「？」

こうして僕は二人に朝まで教えてもらった

やましいことはしてないからね！！

二日目とＶＳ魔法美女とディアス

「おはようみんな…」

僕は欠伸をしながら教室に入る

「おはようなのじゃ明久」

美少女の秀吉がこちらに微笑む

「うん…ってうお！」

今日の秀吉は猫耳メイドだと！？

カメラ！カメラはどこに…

「そうだ！ムッツリーニに！」

『ムッツリーニ君…今日の夜は楽しみにしとくんやで』

『夜…（ブシャアア）』

『駄目だよはやてちゃん…ムッツリーニ君は３Ｐが好きなんだから』

『…そんなものに興味など』

『またまたムッツリーニ君は嘘つきやな！』

『…この破壊力は（ブシャアア）』

駄目だ！ムッツリーニは既に力尽きてる…

『…雄二…今日の夜は』

『そんなもの興味ねえ』

『そうですか？坂本君。本当は期待しているんじゃないですか？』

『ま、マミ！？ぐっ離れやがれ！待て翔子もくっつくな！／／』

『じゃあ私もくっつかせて貰います！』

『千代美まで！／／』

何だ…このそこはかとない怒りは…

「何故…不細工でゴリラの雄二が…」

巧にでも借りるかな

「巧…カメ『巧～！』」

『うお！なんだ千世！』

『にゃぁ…当たってる』

『はっ！悪い希！／／』

『巧！六回死ねえ！』

『ぐはああ』

何だこのハーレムは…

「全く…巧はけしからん奴だ」

「家康…。そうだね…」

同士がいた…二次元人間が…

「「「あいつら…拷問…いや死刑…」」」

そうだ…僕にはＦＦＦ団と言う同士がいたんだ！

「みんなあいつらを懲らしめるぞ！」

「「「オオオオ！」」」

鎌を持ちフードをかぶりＦＦＦ団は降臨する

「異端審問だああ」

「「「うわああ！」」」

「追え！あいつらを逃がすなあ！！」

「「「オオオオ！」」」

ＦＦＦ団はドドドドドと音を立て奴らを追いかけた

「だから違うつってんだろ」

「ふ～ん…私はこの人が好きだけどね」

「先輩と言えど容赦しませんよ」

教室に入ってきた木下さん、杏子さん、後輩のティアナ…

そしてアンク

「明久…家の鍵だ」

「ああ。ありがとうアンク」

「……」

「……」

「……異端審問だああ！」

「「「オオオオ！」」」

残ったみんながアンクを殺しに行った

「ふざけんな明久！どういうつもりだああ」

ドドドドドと追いかける音が響いた

「ハハハハハ！最高に気分がいいや！」

「あれ？明久君？」

「あっ比奈ちゃん！どうして？」

「千代美についてきてって言われて…今日は元気そうだね」

「うん…スカッとした気分さ！」

「ふふふ…良かった元気になって」

「うん。ありがとね……はっ！！殺気！」

素早く椅子から離れるとザクザクと椅子に何かが突き刺さった

「アキ君…おはよう♪」

後ろにはにこにこと笑うサイドテールのなのはがいた

「お、おはようなのは」

「昨日のこと覚えてるよね明久？」

そっ…その声は…

「フェイト…」

腰まである美しい髪が特徴の天使…フェイトが笑っている

「明君は他の人にも告られていたんだね」

「まどか！？」

「はあ…明久は浮気が得意なのかしら」

「ほむら!?」

幼稚園の幼なじみと今日の朝告白してきた黒髪の美女が立っている

大丈夫…少なくとも二人は攻撃しないはず

「明君…嫉妬しちゃっていいかな?」

「え…」

「たまには私達も…」

「何を言っているんだよ…」

まずい…これは非常にまずい…

くそっ一か八か

「おはよう佐々木さん！」

「「え…？」」

振り向いた！今がチャンスだあああっ

「だっしゃああ」

僕は窓から飛び降りた

『タットッバ！タトバ！タットッバ！』

勿論高いから変身するけどね

「とう！」

上手く着地して急いで逃げる

冗談じゃないほどオーラが伝わってくる！

「確かに告白されてるのに異性と仲良く話すのは失礼だよね！」

とりあえずライドベンダーライドベンダー…

学園から離れ外に逃げる

大丈夫！時間までに戻れば

「シュート！」

「ファイヤ！」

上空からいきなり閃光弾がああ

「うわあああ！」

『タカ！ゴリラ！バッタ！』

ガントレットで素早く防ぐ

「げっ…二人共」

「アキ君…ＯＨＡＮＡＳＨＩしよっか」

「大丈夫だよ明久…暴力は振るわないから」

「本当に！？」

良かった！まだ希望は…

「Ｒ１８なことするだけだから」

なかった…

「ちょっと待ってよ！何考えてるの！」

「暴力は駄目ならせめて体で…それに」

なのはは顔を赤らめながら俯く

「いつも…助けてくれるお礼が…」

何だこのエロアニメのような展開…

喜ぶべきか…

「だ、駄目だよみんな！指定１８以上じゃないからこの小説」

オーズの力があればこの程度…いけ

「！？バインド？」

「「逃がさないよアキ君（明久）」」

「な、んだと…」

二人の後ろには弓を構えるまどかが

「ごめんね明君！☆」

「絶対詫びてないでしょおお…」

これから僕は美女達に…

意識が遠のいていく

巧ｓｉｄｅ

「はあ…酷い目にあった」

「大丈夫か明久？」

俺は仕方ないよなと思いながら疲れ果てている明久に声を掛けた

「ふっ…あそこであああなるとは」

駄目だ…明久完全に我を失ってる

『ウォウ！』

おっ見つかった

「巧…何それ？」

明久が不思議そうに尋ねてきた

まあ無理もないか

「これはウルフカンドロイドだ」

「ウルフ？僕が持っているのは…えっとタカ、バッタ、タコ、トラ、ウナギ」

そう言えば明久…トラカンドロイドを飼ってたよな？

「って何で巧が持ってるの！？」

「反応が遅いような…まっいいか。明久ヤミーが見つかったって…どうした？」

「すっかり忘れてた…」

「はあ…とにかく行くぞ！」

「ちょっと待ってよ巧！巧は戦えないよね！？」

まあ…あいつから見ればそうだけど…今は違う

「とにかくついて来いよ！」

「あっ待ってよ巧！」

俺と明久は教室から出た

大丈夫だ。雄二には言ってある

「いた！」

俺と明久は学園長の部屋の前でドアを壊そうとするヤミーに飛びかかった

「「うわああ」」

が、すぐに投げ飛ばされた

「あれは根本君のヤミー！学園長の部屋に一体なんで！？」

「大方…明久に殴られて女装させられたのを学園長のせいにしようとしたんだ」

あいつは腐ってるからこういうことをするはず

「だが、親の根本は…」

明久はにっと笑うと

「大丈夫！今頃アンク達が捕まえてるよ！」

と安心する一言を言った

「じゃあ…あとはこいつの始末だけか」

「巧！？生身の人間じゃヤミーには」

確かに…けど今の俺は

「大丈夫だ…俺にはこれがあるしね」

銀色のコアメダルを明久に見せる

今の俺は仮面ライダーだから

「巧!?それってまさか」

『ウオオオ!』

「ぐあっ!!」

「うぐ!」

ハイエナヤミーに首を掴まれ校舎の外まで連れられた

「好都合!」

明久はそう言うとハイエナヤミーを外に蹴り飛ばした

『吉井…許さねえ』

全く…本当にヤミーは親に似てる

「いくぞ明久！」

「え…う、うん」

明久はベルトを腰に付ける

俺はディアスドライバーを腰に付ける

「巧？まさか君…」

「ああ。俺も仮面ライダーさ！」

明久は驚きながら三枚のメダルを取り出す

俺は銀色のウルフメダルとセルメダルを取り出す

「とにかく行くよ巧！」

「ああ！」

明久は三枚のメダルをセットし

俺はディアスドライバーにセル、コアと順番に中央の穴に入れる

明久はスキャナーを取り出し読み込み

俺は短剣をメダルの上から穴に入れた

「「変身！」」

同時に叫ぶ約束の掛け声

『タカ！トラ！バッタ！』

『ウルフアップ！』

『タットッバ！タトバ！タットッバ！』

明久は三つのサークルが中央に刻まれオーズとなり

俺は中央がウルフの紋章が刻まれディアスとなった

「凄い！あの時グリードと戦ってたのは巧だったんだね！？」

「そう言うこと。けど俺の力はコアとセルから引き出されてるから明久よりは強くないんだ」

「そうなの？」

「ああ。明久はコアメダルの力が十分に引き出されてるしね」

「そうだけど…魔法美女達に負けたからなあ」

「ちょっと待ってくれ…どういう」

『ウオオオ！』

「「はあ！」」

ハイエナヤミーを同時に蹴り飛ばす

「行くよ巧！」

「話スルーか！無理するなよ明久！」

明久はトラクロー、俺はウルフソードを展開し構えた

「でやあ！」

ガキンとハイエナヤミーのクローと火花を散らす

「いけ明久！」

「ＯＫ！ハアア！」

俺の肩を踏み台にしてトラクローでハイエナヤミーを切り裂いた

『オオオ…』

「おまけだ！」

弱った所をソードと切り裂いた

『吉井…』

「時間がない…明久決めるんだ！」

「了解」

『スキャニングチャージ！』

「ハアア！ハア！」

オーズの足がバッタの足になり高くジャンプ

「ハアアアアアア！」

翼が生え三つの巨大なサークルをくぐりながら両足でキックをする

『ギアアアア！』

必殺キックをくらいハイエナヤミーはセルメダルに分解された

五回戦と覚悟と愛ずる（前書き）

いつも感想ありがとうございます。

返信が遅くなりすみません。

勝手ではありますができる時は返したいと思います。コメントを返せない時がありますがすみませんが見逃してください

今回はメズールの心境が…

五回戦と覚悟と愛ずる

『はあ！』

ズボッとメズールの体から一枚だけ残してコアメダルが取り出された

『ウヴァ…カザリ…』

メズールは人間の姿になり二人を睨む

『ごめんねメズール。』

『あいつらに勝つには進化が必要だ…』

二人はメズールから取り出した六枚のコアを半分ずつ取り込んだ

『私を捨てたと言うの？』

『優しいグリードなんかいらないよ』

『お前はガメルとオーズに同様してたからな』

メズールは危機感を覚えて逃げ出した

『…文月学園に逃げるの？』

『あそこは欲望の渦だ…貴様を殺すヤミーなどいくらでも作れる』

メズールはそれでも必死に逃げ出した

『あなたは…ガメルを助けたように私も』

『逃げても無駄だかな』

ウヴァは汚いセルメダルを割りなげた

そこから黒いクズヤミーが生まれメズールを追って行った

『ウヴァ…実験を続けようよ』

『ああ…もうじき新しい仲間がくるからな』

「まさか巧が仮面ライダーだったとはね～」

「文句あるのか？」

「いや…僕は巧が仮面ライダーで正解だと思うよ」

さっきのことを話しながら僕と巧は教室に帰った

「アキ君！良かったあ…5回戦始まるよ！」

なのはは僕に気づき5回戦の始まりを教えてくれた

「もうそんな時間！？」

「早く行こう！」

「うん！」

会場に向かって走る

確か…相手は…

「よう明久」

「やっぱり雄二か…」

悪友はニヤリと笑いながら霧島さんと一緒に僕らを見ていた

「遅刻しかけるなんて随分余裕そうだな。まさか高町と何かあったか？」

そうは行くか！

「雄二こそ…霧島さんと何かしてたんじゃないの？」

睨み合う僕と雄二

（（絶対こいつには負けない））

『青コーナー吉井、高町ペア！赤コーナー坂本、霧島ペア！』

周りからは昨日より凄い声援が聞こえた

全力で行く！その為に勉強してきたんだ！

『『サモン！』』

掛け声と共に現れる

対戦科目は…

化学！

Ｆクラス　吉井明久
化学　１２３

Ｆクラス　高町なのは化学　３２１

Ｆクラス　坂本雄二
化学　１６５

Aクラス　霧島翔子
化学　３６２

「ほう…頑張ったじゃねえか明久」

「僕だってやればできるんだ！」

雄二はニヤリと笑いながら喋る

「面白れえ…完膚無きまでに叩き潰してやるよ」

「なのはは霧島さんを頼むね」

「わかったの」

「さあ！行くぞ雄二！」

「きやがれ明久！」

木刀を構えて召喚獣の頭を狙った

「甘いぞ明久！」

「な、なにい！」

雄二は木刀を掴むとそのまま引き寄せ顔面を殴った

「あぐっ！」

フィードバックが顔面にいい

「よそ見してる暇はないぜ！」

雄二の召喚獣はガガガガガと殴ってきた

「ぐっ…」

木刀と防ぐも点は減らされる

雄二…召喚獣を操るのは初めてなのに強い

「…！そこだあ」

召喚獣の足を狙って木刀を叩きつけた

「ちっ…やるな明久」

「まだまだあ！」

木刀を上へ投げパンチを放つ

「おりゃああ」

蹴りを放って雄二の召喚獣を吹き飛ばした

Ｆクラス　吉井明久
化学　５３

Ｆクラス　坂本雄二
化学　０

「な…」

「僕の勝ちだね」

雄二の敗因は僕との操作の差

初めてに対して僕は観察処分者だからね操作は上手いんだ

「なのは大丈夫！？」

Ｆクラス　高町なのは化学　１２３

Ａクラス　霧島翔子
化学　２４５

「流石は霧島さんか」

「…貰った」

なのはの召喚獣が斬られそうになり僕がとっさに素手で受け止めた

「痛っ」

「アキ君！？」

僕は素早く霧島さんの剣を蹴り飛ばすが逆に盾で殴られた

「ぐぼあっ！」

僕は頬を押さえながら召喚獣を動かす

「…雄二の仇は私がとる」

「うわっ！」

霧島さんの召喚獣は剣を拾い斬りつけてきた

「アキ君！」

なのはが弾を放ち霧島さんの召喚獣にダメージがいく

「ありがとうなのは」

危うく斬られるとこだったよ

「アキ君…ディバインバスター決めるから時間稼いでくれない？」

「わかった！」

木刀を拾い霧島さんの召喚獣と斬り合いを始める

「てえええい！」

ガキンと剣で防がれ逆に斬りつけてくる

「うわっ！」

「…はっ！」

真上から振り下ろされた剣を木刀で受け止めた

「アキ君！下がって」

なのはは巨大な閃光弾を放った

「ディバインバスター！！」

「うわあああっ」

僕は素早くよけさせディバインバスターは霧島の召喚獣を飲み込んだ

Aクラス　霧島翔子

化学　　0

『勝者！吉井、高町ペア！』

「「やったああ！」」

僕となのははお互いに抱きついた

「すまない翔子…俺が」

「…雄二は悪くない…私が弱かっただけ」

「……そんな訳ないだろ」

「…え」

「ありがとな翔子」

良かった…二人共仲良くやってて

なのはと別れ僕は外にいた

「次は決勝戦か…」

姫路さんの転校がかかっているんだ負ける訳には行かない

『きゃああ！』

女の子の悲鳴声！？

僕は急いで叫び声が聞こえた場所へ行った

「あれは…」

ヤミーがいる…しかも沢山

けど黒いなあ…

「そんなことより…うおお！」

ヤミーに襲われている女の子を助けるべくヤミーに突撃する

「おりゃあ！」

『ぐおお』

ヤミーは簡単に吹き飛び木にぶつかった

「あなたは…」

女の子は同年代の人だった

「早く逃げるんだ！てえやあ！」

ヤミーを殴りながらその人を逃がす

「だっしゃあああ」

『うおお』

おかしいな…殴ってもはいがるよ

「明久あ！」

「アンク！？」

木の上にいつの間にかアンクがいた

「こいつら何なの！？」

「そいつはクズヤミーで強くないが面倒だな」

そう言うとアンクはメダルを投げた

「明久！タトバのメダルはくれてやる！」

「でもアンクのメダルが…」

「そのかわり取られるなよ」

アンクは真っ直ぐこっちを見ていた

信頼されてると受け取っていいのかな？

「じゃあ…後のメダルはアンクにあげるよ」

「ハッ！全部俺のだろうが」

僕はふっと笑いドライバーを腰につけメダルを入れる

スキャナーを取り出し読み込む

「変身！！」

『タカ！トラ！バッタ！』

メダルが僕を囲む

『タットッバ！タトバ！タットッバ！』

サークルが刻まれオーズに変身した

「ハアア！」

メダジャリバーを振るいクズヤミーを破壊した

「確かにこのメダル使えないね」

「オーズ…」

さっきの人が呟きアンクが近づいた

「お前…メズールか」

「えっ！」

ちょっと待ってよ…こんな可愛い女子があのグリード？

「あなた…失礼なこと考えてなかったかしら？」

ヤバッ！

「いやいや全然！」

「何故お前がここにいる」

メズールは深い溜め息をした後…喋り出した

「グリードの進化…それによって私のコアメダルはほとんど奪われたわ」

グリードの進化？

「ウヴァとカザリか」

「ちょっと待ってよ！君…昨日あいつらと一緒に僕を襲ったじゃな

いか…なんで」

おかしいよ…仲間のメダルを奪うなんて

「オーズの坊や…グリードは欲望に忠実なの」

メズールは座ったまま喋る

「だから裏切りなんか当然のことなのよ」

「だからって…」

おかしいよ…そんなことでこの人はこんなめに合わなきゃいけないの？

「とにかく手当てしなきゃ」

メズールに手を伸ばすがメズールは眺めていた

「なんであなたは私を助けようとするの？私はグリードよ」

「そんなの決まってるじゃないか…」

グリードとか人間とか関係ない

「傷ついた人をほうっておける訳ないからだよ」

「人……？」

「そうだよ…仲間に裏切られても怨まない…その心は人間の心さ」

「人間だと笑わせるな明久」

「黙れアンクー」

僕はアンクを黙らせメズールを見る

「ガメルは何故…あなたに」

「決まってるよ…ガメルには人としての心があったから」

「……」

救える命は…必ず救う…そう決めたんだ

「やっと見つけた」

ふいに後ろから攻撃された

「ぐああ！」

「カザリ…ウヴァ」

「久しぶりだなアンク」

グリード…！？

「オーズ…ついでだ貴様のメダルも貰う」

僕はメズールをかばいながら構える

「何をしたいのかわからないけどさ…仲間を見捨てるお前達は許さない！」

「明久ー！」

この声は…

「巧！？」

「大丈夫か？変身！」

『ウルフアップ』

巧は走りながらコアとセルを入れ剣を刺しディアスへと変身した

「何?銀色のコアメダルだと」

初めて見たアンクは驚いている

「来たか…銀色のコアメダルの戦士」

「僕が相手をするよ」

「うおおお!」

「はあああ!」

僕はウヴァにメダジャリバーで切り裂き
巧はカザリと火花を散らす

「おりゃあ！」

「おらあ！」

ガキンとウヴァのクローとぶつかり合う

「お前には借りがあるからな…おらあ！」

「ぐああ！」

蹴り飛ばされ木に建物にぶつかった

「君の力…見せてもらうよ」

「はああ！」

「はっ！」

バキイと攻撃がぶつかり合い巧が吹き飛ばされた

「ぐああ！」

「巧！うわあ！」

クローをくらい吹き飛ばされる

こいつら昨日はこんなに強くなかったはず

「あいつら…ぐあ」

アンクはウヴァの電撃をくらって木から落ちた

「アンク！うわあ」

「よそ見している場合か？ふん！」

「ぐああ！」

つ、強い

「昨日のお返し！ふん」

カザリの砂嵐を受け巧は建物にめり込んだ

「ぐはっ…」

「巧！？ぐあああ」

ウヴァのクローを連続で受けてダウンする

「おらああ！」

「ぐあ…」

蹴り飛ばされ車にぶつかった

「明久！」

「さてと…実験を始めようか」

「ああ…」

く、何をする気なんだ

ウヴァとカザリはメズールに向かって黒いコアメダルを二枚投げた

「何…？黒いメダルだと？」
何だあのメダル…邪悪なオーラが

「あああああ！」

メズールは怪人に戻り姿が…

「まさか…完全体？」

「違う…あれは」

僕を起こしたアンクは驚いていた

「チッ…まさかコアメダルを集中して入れたのか」

「え？」

「あああああ」

いきなり大量のセルメダルが地中から現れメズールを飲み込んだ

「これは…」

何だよ…あいつら。結局…裏切って…完全な怪物にしやがった…

『ギィアア！』

メズールは巨大な怪物となり飛び上がった

「失敗か…」

謎の声が地中から聞こえ…すぐに消えた

「へえ…まさかこうなっちゃうとはね」

「ふん…メズールは哀れだな」

「お前らああ！」

「ぐっ！」

僕と巧は立ち上がり二人を切り裂こうとする

『『ハッ！』』

「うあああ！」

「ぐあああ！」

電撃と砂嵐をくらって再び吹き飛ばされた

「君達は見ていなよ」

く…救わないと…メズールを

「明久？」

僕はフラついた体を無理やり起こす

「待ってて…絶対助けるから…ガメル！」

僕は叫んだ瞬間に体内からガメルのコアメダルが出た

「何？明久！お前まさか」

「ごめんアンク！今は話している暇はない！」

全力でこいつらを叩きのめす！

『ギィアアア！』

そしてメズールを

ガメルのコアメダルをセットしスキャナーで読み込む

『サイ！ゴリラ！ゾウ！』

サークルは白の絵柄になる

『サゴーゾ…サゴーゾォォ！』

「俺も手伝うよ明久」

巧はディアスドライバーに熊のコアメダルを入れる。そして剣を突き刺した

『ウルフベアーアップ』

ディアスのスーツがボディが銀色から銅になり

ディアスセイバーが消えハンマーが腰にセットされた

ボディはガッチリとして目と足は銀色のままだ

『ウオオオ！』

『ウアアアア！』

僕はドラミングをし、巧は吠えた

『ギィアアア！』

重力操作でメズールを地面に落とす

「へえ…面白いね…」

「俺達に勝てるのか？」

勝てなきゃ…手を伸ばせないだろ！

暴走と強化とカポン…（前書き）

遅くなりました！今回は三人目の…

暴走と強化とカポン…

「ウオオオ！」

サゴーゾコンボになった僕はウヴァに立ち向かう

「はああ！」

ガントレットで腹を殴る

「その程度か？ふん！」

「うおお！」

そんな…効いていない…と考える暇は無く電撃を受けた

「ウラアアア！」

巧はハンマーを振り下ろしカザリを攻撃するが…

「効かないなあ！」

「ぐあああ」

水流弾を受けて吹き飛んだ

「巧!?ぐああ」

なっウヴァまで水流弾を使えたのか!?

「「うあ!」」

僕らはそのまま吹き飛んだ勢いで建物を破壊し、電柱にぶつかった

「ぐ…ウオオオ!」

ガントレットを飛ばしロケットパンチを放つ

「馬鹿が…おらあ!」

「跳ね返…うおおお」

ガントレットが跳ね返って僕に直撃する

「明久！」

「よそ見してる余裕なんかあるの？」

「ぐあああ！」

ガシャンと巧は壁にめり込んだ

「ふん！ふん！」

そのままカザリに連続で水流弾を喰らう

「巧！ウオオオ！」

ドラミングをして相手の重力を奪った

「オラアアア！」

力の限りガントレットをカザリとウヴァに叩きつける

「「ぐ！」」

やった！効いてる

「オオオオ！」

「ぐあああ！」

ウヴァの水流弾を喰らい僕はダウンした

「消えろおお」

しまった電撃…

「ぐあああああ！」

「明久ああ！」

コンボの限界もあり僕は強制的に変身が解除された

「うぐっ」

そのまま地面に這いつくばる

「くっ…うおお」

巧がハンマーを投げ捨てカザリに殴りを入れた

「うあっ」

そしてすぐにハンマーを持ちセルメダルを入れた

『ウルフブレイク！』

ハンマーが牙のような形になりウルフの紋章が浮かぶ

「おあああああ！」

そしてカザリに思い切り叩きつけた

「うあああ！」

カザリは吹き飛び建物にぶつかった

「くっ…セルメダルしか落ちないのか」

ガクと力が抜け巧は荒い息をする

「隙がありすぎだ！」

ウヴァは後ろから巧を攻撃した

「ぐあ…」

「た、巧！アンク…メダルを…」

「チッ…これでいけ！」

アンクは三枚メダルを投げる

「ぐ…変身」

フラついた体を起こし再び変身する

『クワガタ！トラ！バッタ！』

ガタトラバに変身した僕は頭から電撃をウヴァへ放った

「ぐっ…」

ウヴァは防御しながらこっちへ突っ込んできた

「ウオオオ！」

負けじと僕も突っ込む

「オラアアア！」

「ぐあああ！」

やっぱり亜種じゃ駄目だ…

「明久！」

『ギィアアア！』

「なっ…ぐあああ！」

「巧ー！」

巧は重力から解放されたメズールの暴走した姿に弾き飛ばされ変身が解除された

「ぐあ…く」

「畜生ー！」

このままじゃ…手を伸ばすことも救うこともできない

「うあああ！」

ウヴァの攻撃を受けて吹き飛ばされた

「オーズ…メダルを頂戴よ…僕らはもっと強化するんだからさ！」

「ぐあ！」

いつの間にか起き上がったカザリの砂嵐を受けてダウンする

「オラオラオラ！」

「ぐっ…がっ…」

ウヴァの攻撃を何発も受ける

「明久！…こいつに変えろ！」

アンクは覚悟したかのようにメダルを投げる

「ぐっ…うおお」

頭から電撃を放ち二人を吹き飛ばす

「ぐっ…」

メダルをキャッチしてすぐに入れ替える

『ライオン！トラ！チーター！』

『ラッタラッタ～！ラトラータ！』

サークルは黄色になり体も頭と足がライオンとチーターに変わった

ラトラーターコンボか…やるしかない！

「ウオオオ！」

頭から光熱の光を出し二人のグリードを攻撃した

「ちっ…」

「逃げるよウヴァ」

効いたようすもなく二人のグリードは逃げていった

「ぐ…」

駄目だ…力が出ないや

『ギィアアア！』

「……！」

暴走したメズールに噛みつかれ動きを封じられた

ほどく力もない…

「明久！」

巧は変身しようとするけど…

「ぐ…」

フラフラの状態だ

「ぐ…うお」

そんな…ラトラーターの力ですら

やっぱり駄目なのか？僕はまた助けられないの？

『ギィアアア！』

「ぐああ！」

ギリギリと噛み砕かれるような音が響く…

「明久ああ！」

く…アンク…巧…みんな…

そんな時アンクが何故か違う方向を見ていた

「え？」

銀色の鎧に黒いスーツ

まさか…仮面ライダー！？

その仮面ライダーはある人に手で合図をし、その人は車を出して帰って行った

何かを閉じセルメダルを取り出しベルトに入れる

キリキリと回した後

『カポン』

そんな音が聞こえた

バースと破壊と悪友と（前書き）

すみません…こっちの都合が悪くコメントが返せなくなりました…
その分早く投稿できるように全力を尽くします！

ちゃんと要望なども考えています！あとオリジナルバカテス問題を
出して欲しい方はじゃんじゃん言ってください！

バースと破壊と悪友と

『果たして彼は適任でしょうかね…』

『大丈夫だドクター。俺の弟子だぜ！』

『だから心配なのです』

『あらっ…坂本ちゃんはちゃんと稼いでくれるさ！』

『それは楽しみですね…』

『さあ…初陣だぜ初代バースの弟子さん！』

「何だあいつ」

「ぐあ…」

敵に噛みつかれながらも謎のライダーを見た

キリキリとガシャポンを回すような物を回すと

『カポン』

という音が響く

そして次にベルトのカプセルが開き

『ブレストキャノン』

と響く

謎のライダーには沢山のカプセルがありボディのカプセルから無数の機械が現れキャノンとなり体に装着された

凄い…セルメダルであんなキャノンが…

謎のライダーはさらに二枚のセルメダルを入れて再びキリキリと回す

『セルバースト！』

ギュオオとキャノンがチャージされ巨大なビーム砲が放たれたああ！？

『ギィアアア！』

「うわあっ！」

暴走したメズールにキャノン砲が直撃して大爆発を起こし僕は衝撃で口から吹き飛んだ

「痛てて…」

ん？あれって

「明久！メダルだ！」

やっぱりか！

「はっ！」

空中で素早くキャッチする

「……」

謎のライダーはそのまま去って行った

けど今は…

「待ってて…僕が今…救うから」

ガチャンとドライバーを横にして新たに緑のメダルに変えた

「明久！お前ボロボロだろ！」

ごめん巧…僕は…

スキャナーを震える手で持ち読み込む

『クワガタ！カマキリ！バッタ！』

サークルは緑色に変わり体に刻まれる

『ガータガタガタキリバッ！ガタキリバッ！』

頭はクワガタ、体はカマキリ、足はバッタのガタキリバに変わった

時間が無い！

５０人に分身してスキャナーで再び読み込む

『スキャニングチャージ！』

「すげえ…あれがガタキリバ」

５０人一斉に舞い上がり

『『『セイヤアアア』』』

暴走したメズールに向かってキックを放つ

『ギィアアア！』

悲鳴…まるで助けを求める声が…

「「「ウオオオ！」」」

５０人の必殺キックを喰らったメズールは大爆発を起こし大量のセルメダルになった

「ぐっ」

僕はなんとか着地をした

「…！！」

アンクは腕を飛ばし散らばったメダルを回収しようとした

その時ーパシパシとさっきのグリードが…

「まっこんなもんか」

「うーん…そうだね」

ウヴァとカザリ…

「卑怯者…ぐ」

「オーズ…また会おう…」

「ディアスまた相手になるよ」

ウヴァとカザリは直ぐに姿を消した

「メダル…かなりもっていかれたね」

「ふん…取り返せばいいだけだ」

アンクはメダルを握りさっさと歩いていく

「メズール…今…助けるからね」

僕は変身を解いてさっき体内で取ったメズールのコアを広げた

一枚…けどこれはメズールの

『オーズ…の坊や？』

人工コアだ…

「君も僕と一つになろうメズール…そしたら怖いものなんかないよ」

『……ふふ…相変わらず可愛くて面白い子だわ…わかったわ…よろしくねオーズの坊や』

「うん…」

これでいいんだ…メズールを救えたんだ

ポケットからウナギ、タコを出す

そして人工コアのシャチと一緒に体に押し当てた

『ガメル…』

コアメダルは僕の体内に入り込んだ

よろしくねメズール…

一緒に戦おう

巧を担いで僕はアンクに追いついた

「ちょっと待ってよアンク！」

「お前が遅いんだよ」

こいつもあんな風になるのかな…？

『ガシャン』

音がした方を見ると

さっきの仮面ライダーがいた

「よう」

「誰だお前？」

アンクが怪しげに聞くと謎の仮面ライダーは何かのマニュアルを取り出した

「これだ明久」

「えーと仮面ライダーバース？ってこの声…まさか」

バースはセルメダルを抜きとった瞬間変身が解除された

そして目の前に現れたのは

「雄二いいいいい！？」

僕の悪友だった

決勝と変身と二人の会話（前書き）

まさかのあの人が登場します

決勝と変身と二人の会話

「痛たた…」

保健室…僕らは新ライダーバースに助けられ今に至る

まさか雄二だったとは…

「ほら…動くな。悪化するぞ」

「すみません…」

保健室で傷を手当てしてもらいながら先のことを考える

コンボですらグリードに勝てなくなってきている

もっと鍛えなきゃ

「それにしても…がっちりしているのになんでこんなに傷だらけなわけ？」

包帯を巻いてもらいながら必死に考える

「いやー女子の力が強くてですねー」

先生は笑いながら巧も手当てをする

「そういや…よく関節を外されてるもんな。よしこれで大丈夫だ！」

「ありがとうございます伊達先生」

「なあに…お安い御用さ。また関節外されたら、手当てしてやる」

「はは…僕が関節外されるの決定なんですね」

巧と一緒に保健室から出て行く

「さてさて…あいつらと坂本ちゃんの相性はどうなることやら…今日はおでんだな」

「「まず…ごめんなさいいい」」

僕と巧は全力で女子に謝った

「悪気はなかったんです！」

「ただ…悲鳴が聞こえて」

ああ…僕はまた関節を外されるのかあ…痛いだろうなあ

「じゃあなんで腕や首に包帯を巻いてるのかな？」

「巧もよ。どうして顔に湿布が貼ってあるのよ」

「それは…」

「廊下で…」

「「転んだんだ！」」

「嘘です！きっと明久君と巧君はいけないことをしたんです！」

ここで黙ってた姫路さんが割って入ったああ

「そうなのアキ君…？」

「違う違う違う違う！」

「姫路…その発言はおかしいぞ！」

姫路さんはぷくうと頬を膨らませた

「嘘です…きっと二人はもう取り返しがつかない…」

「ヤーメーテー！」

話がややこしくなるからやめてくれえええ

「アキ君…」

「違う違うよなのは！僕は女の子が好きだからね」

「二人共…誤解だから…文乃は拳をひっこめて」

死を覚悟したその時…

「何やってるのみんな？」

メシアが舞い降りた

「泉先生！？」

黒く長い髪が特徴で家庭科担当の泉比奈先生が教室に入ってきた

「先生…なんでここに？」

ちなみに泉比奈はこの学校に二人いる

一人はＡクラスの比奈ちゃん

そしてもう一人が泉先生

どちらも綺麗だから人気があるんだよね

あれ？おかしいな。なんで比奈ちゃんの話になると顔が熱く…比奈ちゃんには恋愛感情じゃなかったはず…

「あまりにも吉井君と高町さんが遅いから呼びにきたの」

僕となのははお互いに顔を見合わせ

「「決勝戦！！」」

しまった…忘れてたよ

「早く行こアキ君！」

「うん！」

ダッシュは出せないけどなんとか間に合った

『皆さん拍手で迎えてください！Fクラスの吉井、高町ペアです！』

歓声があがり僕らは階段を上がった

相手は…

「明久達…遅かったね」

「アキ君がまた無茶したの…」

あれ?フェイトからもオーラが凄まじい

大丈夫だよね?姫路さんのこと言ってあるから…

『では…始めてください』

対戦科目は…

日本史！

「「じゃあ始めようか」」

なのはとフェイトから…殺気が

「なはは…あき君も大変やなあ～」

フェイトのペアのはやてさんは笑ってはいるが汗がつたっていた

『サモン！』

明久　日本史　３００

なのは　日本史　２１０

ＶＳ

フェイト　日本史　４２０

はやて　日本史　２０３

開始された直後に僕の召喚獣が光だした

『おおーと！なんと言うことでしょう！吉井君の召喚獣が光輝いています』

決勝戦と言うことで実況付きだが…

「なんじゃこりゃあああ」

そんなのはどうでも良かった

「アキ君の召喚獣が…オーズになった！？」

「どう言うことや」

「何が何だかわからないけど…」

僕はオーズを動かしフェイトに攻撃をしかけた

「今は勝つことが大事だよね！」

メダジャリバーでフェイトを切り裂いたと思ったけど

「そうだったね…忘れてた」

「な、なのは!?」

バインドをかけられていた

「アキ君…」

「明久…」

二人は再びオーラを放ちこっちを見た

「ひぃいい!」

怖い!冗談抜きで怖い

「「ＯＨＡＮＡＳＨＩしよっか」」

にっこりと微笑んで攻撃を開始した

「危なっ！」

きんきゅいかいひー！

「あっ外した…」

あんなの喰らったらフィードバックレベルじゃない

「ディバイン…バスター」

「わああっ！」

横へそれて急いで回避

死ぬ…本気でヤバいから…

「こうなったら…」

オーズにメダルを取らせてコンボチェンジした

『おおっとー！吉井君の召喚獣がオーズになりそしてメダルチェンジだああ』

『クワガタ！カマキリ！バッタ！』

『危機的状況なので歌省略』

凄っコンボにもなれるのかこれ…

って二人がキタアア！畜生！

一か八かだああ

『スキャニングチャージ』

『ちょっアキ君!?フェイトちゃんやばいよ!』

『／／／』

『フェイトちゃん!?』

「ごめん三人共!」

『５０人にオーズが分身して三人にキックだああ』

実況の子は女の子とはおもえないほど興奮している

『セイヤアアアア』

「ちょっあき君待ちいな！」

チュドーンと爆発し三人は０点になった

「ぐふ…はあはあ」

これはコンボの疲労と同じ…

疲労までついてくるのか…何というか…はあ

『勝者は…仲間を巻き込んだＦクラスの吉井明久だああ』

ワアアアと歓声があがる中、僕は気合いで体を動かしなのはを起こしてあげた

良かったの…かな？

ちなみに召喚獣だったので数分したら疲れは消えた

この後表彰式があり

優勝した僕となのはには僕には黒金と白金の腕輪…なのはには紅の腕輪が渡された

そして…如月グランドパークのチケット×４も

誰と行こうかな？

ちなみに根本はヤミーの事件により本当に反省して教頭は殺人容疑で逮捕されたらしい

いやはや…とにかく凄い一日だったなあ

さてと…チケットを霧島さんにあげなきゃ…

そう言えば残念なことがあった…姫路さんにお礼とか言われて手作りケーキを食べさせられたのだ

生死をさ迷う結果となり…姫路さんの好感度は下がりっぱなしだよ…

「バカなお兄ちゃん格好良かったです！」

「おめでとう吉井さん！」

「おめでとうございます吉井さん」

「ぐふ！ありがとう葉月ちゃん…キャロちゃん。エリオ君」

そういえば葉月ちゃんとキャロちゃんのタックルは効いたよ…

場所変わって屋上

『火野先生…』

『やだなあ…映司でいいよ比奈ちゃん』

そう言ってくれるけど呼び捨ては…やっぱり駄目だよね？

『じゃあ映司君』

『うん。何?』

『吉井君は大丈夫かな?』

映司君はいつものように笑った後

『それは俺達じゃわからないよ…けど…同じオーズとして頑張って欲しいかな』

そう言いながら映司君は空を見上げた

私達がどうこう言う必要はない…彼らの物語は彼らが進めるのだから

『そうだ映君…夜のフィナーレが何か知ってる?』

『うーん…わからないなあ』

『ダンス何だって…良かったら踊らない？』

『ダンスかあ…俺下手だけど…いいかな？』

『うん！』

私は映司君の手を引っ張り屋上から出て行く

後藤さん…あなたと同じ名前の人は彼女がいるみたいですよ

里中さんと仲良くしてくださいね

『ほら始まっちゃうよ』

『わかったから…ちょっ早い』

後夜祭と告白と明久の答え（前書き）

祭編完結です。

原作と違う所に注目です

後夜祭と告白と明久の答え

僕らは教室で後片付けをしていた。売り上げも良く…これなら…机が買えるかな

とにかくあのみかん箱とはおさらばだ

「良かったね姫路さん」

「はい…皆さんのおかげです」

姫路さんはあの後お父さんと会ったらしくFクラスの良さをわかってもらえたようだ

これで姫路さんは転校することがなくなった訳だ

良かった良かった

後夜祭…それは祭りの終わりに開かれるフィナーレのようなものだ

吹奏楽が雰囲気にあった甘い曲を奏でながら

飲み物を飲んだり、巨大な炎の周りでダンスをしている人だっている

「いや～終わったね」

「ああ…システムデスクを狙ってたんだが…惜しかったな」

雄二は少し残念そうだった

まあ常夏さえいなければ…行けたよね

「でも良かったじゃないか雄二。ほら教室だって改造されたんだから」

いわゆる結果オーライって奴だ

「まあ…そうだな」

雄二はそう言いながらジュースを飲んでいた

「ねえ雄二…雄二は何で仮面ライダーに？」

「ああ…簡単に言えば師匠のかわりにセルメダルをあつめてんだ」

「へえ…」

「あっいました」

突然の声に僕らは振り向いた

雄二はあんぐりと口を開けている。いかにも馬鹿そうだ

「…雄二…答えを聞きたい」

「雄二君…」

「坂本さん…」

霧島さんに、花檻さんに、マミさんか

「ハーレムだね雄二」

「馬鹿！今そんな場合じゃ…」

雄二は霧島さん達に連れて行かれた

何というか…

周りを見ると曲の雰囲気もあってか次々に告白をしている

「優香…もう一度やり直してくれないか…生まれ変わった俺と」

「はあ…しょうがないわね…」

実に王道らしい告白だね…

「お兄ちゃん…私と付き合ってください」

「ミチル…」

まあ…まだ大丈夫だよね

「比奈先生…俺」

「ごめんなさい…火野先生が待ってるから」

まあ仕方ないよね…ドンマイ

あれ?火野ってどこかで

「明久!ここにい…」

「「「行くわよ」」」

アンクもハーレムだなあ

『諸君！　ここはどこだ！？』

『『『最後の審判を下す法廷だ！！』』』

『異端者には！？』

『『『死の鉄槌を！！！』』』

あれは駄目だ。完全に駄目

僕は椅子から立ち上がりスタスタと人がいない場所へ行く

『オーズの坊や…どうしたの？』

メズールの声が聞こえた

「ちょっと…判断に戸惑ってて」

『もしかして恋愛かしら？』

流石グリード…

「うん…実は昨日今日と告白されて」

『オーズの坊やはモテるのね…』

あれ？メズールの声が低いような

「それで…判断に戸惑ってるんだ…ふられた人に申し訳ないしね」

『オーズの坊や…それはあなたが決めることよ…その結果に口を出す人なんていないわ』

頑張ってねと言いながらメズールとの会話はそこで切れた

「アキ君?」

びくっとしながら振り向くと…幼なじみがいた

「やあなのは…」

「アキ君…どうしたのこんな所で」

「あ、い、いやあちょっと…打ち上げ見ようかと…はは」

なのはは納得したよな顔しながら近寄ってきた

立ってるのもあれだから僕らは近くのベンチに座った

ちなみにここは体育館裏口だ

「わあっ…綺麗」

空を見上げると季節的には早い花火が上がった

それでも綺麗だ

あっ…いけない…答えを出さなきゃ

しばらくなのはと花火を見つめていた

さてそろそろ答えを出さないとね

「な、なのは…」

「どうしたの…？」

「昨日の答えを…」

なのははさっきとうって変わって真っ赤になった

「う、うん／／」

頑張れ吉井明久！勇気を出すんだ

「僕は…君のこ「なのはー！」」

フェイトの登場により緊張感が倍増した

「フェイトちゃん…今からアキ君に答えを聞く所だったの」

「そうなの明久？」

「う、うん…フェイトにも言うね」

ヤバい…さらに緊張感が…

「う、うん／／」

なのはとフェイトは目を潤ませながらこっちを見つめる

ゴクリと唾を飲み込み…

拳を握る

「えっと…高町さん！テスタロッサさん！」

「「は、はい！／／」」

じっと二人を見つめ…口を開いた

「僕と…」

ムッツリーニや雄二は今頃ハーレム状態に…

「付き合ってください！けど、愛人としてまどか、ほむら、姫路さんがいます…が」

必死に考えた結果だ。まどか、ほむら、姫路さんに告白された時成り行きで愛人関係になってしまったんだ

二人は笑いながら納得してくれたけどなのはやフェイトはどうなんだろう…

やっぱり愛人を持ちながら付き合うのはマズいかな？

「わ、私なんかでいいの明久？／／まどかやほむらや瑞希がいるよ？」

フェイトは真っ赤になりながら上目使いで尋ねてきた

「う、うん…だって…」

少し緊張感を解き、にっこりと微笑んだ

「僕はみんな好きだけど…二人のことが大好きだから…それにフェイトは魅力的だよ…だから惚れたんだ」

フェイトは頭から湯気を出しながら口をパクパクとさせていた

「なのはは…二股になるけど良いかな？」

「はにゃー…／／」

なのはは真っ赤になりながら停止していた

「な、なのは大丈夫！？」

「ふぇっ？えっ、あっ…うん／／！よろしくねアキ君！」

なのはガバッと抱きついてきた

「あっ！なのはズルい…私も！」

ちょっフェイトまで…嬉しいけど…

「…ＦＦ団の前田君」

まさか…鉢合わせするとは…

「みんな吉井が高町とテスタロッサさんに抱きつかれてるぞ！」

『『『異端者には死だあああ』』』

「わあああああ！」

全力で僕、雄二、ムッツリーニ、アンク、巧はＦＦＦ団から逃げながら…

祭りの夜の炎は明るく…空には綺麗な花火が上がった

けど…この時の僕はまだ知らなかったんだ…新たなコアメダルが体内にあったのを…

現在オーズの使えるメダルは

タカ
クワガタ
カマキリ
バッタ
ライオン
トラ
チーター
サイ２

ゴリラ2
ゾウ2
シャチ
ウナギ
タコ

プテラ

予期せぬ事態と赤いコンボと火野映司（前書き）

新たな展開が始まります。何故火野がいるのかもあかされます！

予期せぬ事態と赤いコンボと火野映司

文月学園二年Ｆクラスの坂本雄二は今、鴻上ファンデーションの会長室にいた

「で、話ってなんだ」

「君達に伝えておきたいことがあってね…」

雄二は後ろ髪をかくと首を傾げた

「俺…達？」

その時後ろから一人の男が走ってきた

「すみません…って雄二！？それにあのときの」

彼は雄二と同じクラスの巧だ

「久しぶりだね都築君！いやディアス」

鴻上はいつものようにでかい声で喋る

「で、用件って何だ？」

失礼な態度に秘書の里中はムッとしたが鴻上がそれを静止した

「君達を呼んだのは他でもない。実はＤｒ．真木の研究結果からこんなものがでた」

鴻上はそう言うとモニターを見せる

「坂本君のバース、都築君のディアス、そして吉井君のオーズ」

モニターにはセルメダルのバース、コア、セルのディアス、そしてコアメダルのオーズが映っていた

「ちょっと待て…なんで明久があんなにパラメータが高いんだ」

雄二はオーズのパラメータを指差した

「流石だね坂本君。そう、これは君達の力を現しているんだよ」

「俺と雄二はほぼ同じですね」

「そう！だが、オーズ…吉井君のパラメータは高い。何故だと思うかね？」

「コンボ…か？」

雄二の回答に鴻上は叫んだ

「惜しいよ！答えはこれだ」

鴻上はモニターを変えた。そこには明久が映っていた

「これは…」

「まじかよ…」

「わかったかね。これが答えだ。吉井君の体内には既にコアメダルが9枚ある」

二人は息を飲む

「都築君は前にグリードと戦ってわかっただろう?」

「あ…確かメズールのメダルを」

「そういうことか…つまり明久はグリードと同様にコアメダルを体内に取り込んだ…だからグリードと同様…パラメータが上がってるのか」

「その通り！！彼はグリードとの融合によって既に人間を越えているのだ…素晴らしいいい！」

鴻上は叫びながらモニター切る

「しかし残念なことに…それは大変な方向へ進んでいる」

「えっ…どういうことですか？」

鴻上は一度間をおき再び口を開いた

「黒いコアメダルの誕生だ…黒いコアメダルは一枚だけでも邪悪な力を備えている」

巧は何かを思い出したように口を開けた

「確か…メズールに黒いコアメダルを…」

「そうだよ都築君！黒いコアメダルは凶暴にさせる力を持っている！非常に危険な存在だ」

鴻上は続けて話す

「それが今…君達の近くに存在している…やがてそれは吉井君に不幸を招くことになる」

二人は愕然としながら話を理解しようとしていた

「そして…黒いコアメダルの持ち主…それは吉井君のすぐそばにいる！」

「一体誰なんですか？」

「高町なのは君だ…。」

「えっ…！？」

「高町がか…」

「君達には吉井君から引き離して欲しいのだよ…災いを防ぐ為にね」

二人は俯きながらも頷いた

しかし彼らは知らなかったのだ…

さらに危険な力が吉井明久に迫っている

紫の覚醒…それはさらなる不幸を招くものとも知らず

火野映司…彼と同じ欲望を持たずに仮面ライダーとして戦う男だ

そんなオーズの世界にいた彼は何故か吉井明久達の世界にいた

理由は…ヤミーと戦っている時だった

『変身！』

『タカ！トラ！バッタ！タットッバ！タトバ！タットッバ！』

いつものように変身をする

『さあて…稼ぎますか』

『カポン』

そして伊達明こと仮面ライダーバースもグリードから街の平和を守る為に戦っていた

『映司！こいつで行け！』

『これは…』

映司はコアメダルを変える

『キアア！』

攻撃してきたイグアナヤミーを吹き飛ばしメダルを詠み込む

『タカ！クジャク！コンドル！』

炎をまといオーズは赤い姿になった

『タ～ジャ～ドル～！』

『ハア！』

タジャドルコンボになった映司はスキャナーで再び詠み込む

『スキャニングチャージ！』

『ハアア！セイヤアア！』

空高く舞い上がりプロミネンスドロップを放った

『セルバースト！』

『ハッ！』

バースもバースバスターから必殺技を放ちヤミーを撃破した

『フン…上出来だ』

映司がアンクにメダルを返した時に事件は起きた

『よし！…おでん食べに行こう！』

『またですか伊達さん…』

『誰が行くか馬鹿が』

『俺は行きますよ。比奈ちゃんも行こうよ』

『うん』

『じゃあ…早速出…何だあれ？』

伊達が見た先には大きな渦があった

『何でしょう…ってうわあ！』

映司は巨大な渦に吸い込まれてしまった

『映司君！きゃああ』

『比奈ちゃん！うわああ』

『伊達さあーん！うわ！』

『映司ーー！ぐああ！』

４人はあっという間に巨大な渦に飲み込まれてしまった

そしてたどり着いたのは…

バカテスの世界だった

不安と行方と両手に花（前書き）

カウンズメダル！

現在映オーズの使えるメダルは…

映司

タカ１

プテラ２
トリケラ１
ティラノ２

明久

タカ
クワガタ
カマキリ
バッタ
ライオン
トラ
チーター
サイ２

ゴリラ2
ゾウ2
シャチ
ウナギ
タコ

プテラ

不安と行方と両手に花

「早くアンク達を探さなきゃ」

火野映司はバカテスの世界に飛ばされ鉄人と出会ったはずみで教師となり今は比奈、伊達と一緒にマンションに住んでいる

火野は世界史、比奈は家庭科、伊達は保健体育だ

「この世界にもヤミーやグリードがいる…けど今の俺じゃあ」

アンクとアンクに取り付かれた比奈の兄泉慎吾と後藤慎太郎はこの世界にいると確信しながら火野は手の平を広げた

そこにはタカが一枚だけだった

戦いたくてもこれでは変身ができない

「この世界のオーズに任せるしかないか」

火野はそう呟きながらベランダから出て行った

「どうしよう…」

アンクを見ながら僕、吉井明久は呟いた

アンクに取り付かれた青年を僕はずっと助けられないかと考えていた

だが、今の僕じゃ…全く解決策が見つからない…

「焦っちゃ駄目だ…冷静にならなきゃ」

でも…アンクはどうなるんだろう…そんなことを考え僕は明日の準備をしていた

「明日は二人と如月グランドパークに行くんだよね」

傍らでアンクはメダルをケースに入れていた

「明久…」

「何かな？」

「メダルの匂いがする…しかもお前の身近にいる奴からだ」

「それってまさか！？」

「いや…ヤミーじゃなくグリードの気配がする」

まさか…僕の他に体内にコアメダルを？

いや…深く考えすぎかな

「そんなわけないじゃないか～」

笑いながら焦りをごまかした

最近…グリードが強くなっている…コンボでも太刀打ちができるのか不安だよ

それにしても…あの時、メズールに入れたコアメダルは一体…

「とにかく…勝てば問題ないでしょ。僕は寝るよ」

「ああ…」

不安と心配を振り払いながら僕は自室へ歩いて行った

「雄二…本当にやるのか？」

「ああ…仕方ないが…他に方法が見つからない」

「明久との衝突は覚悟した方がいいな」

「ああ…」

☆

「うわあ…凄いね」

翌日…僕はなのはに起こしてもらった後、フェイトと合流して如月グランドパークに訪れた

「とりあえず腕組もうよアキ君！フェイトちゃん」

「そうだね。いいよね明久？」

二人は満面の笑みで見上げる

「う、うん。まあデートらしくなるからいいんじゃないかな？／／」

「じゃあお言葉に甘えて！」

「私も」

二人はそう言うとピッタリとくっついた

ちょっと恥ずかしいけど…これがカップルなのかな？

やれやれ…僕は幸せ者だよ

「「如月グランドパークへようこそ！」」

僕らを待っていたのは…

「秀吉？それとまどか何やってるの？」

「私達はここのスタッフです」

「……そう言えば鳴子（なるこ）　叶絵（かなえ）さんが…他の男と」

「なんじゃと！？」

本性を表した秀吉。ちなみに叶絵さんはCクラスの代表であり文乃の親友だ

秀吉は叶絵さんが好きなんだよね

「ボロが出たね秀吉。」

しばしの沈黙が流れた後

「（ウェディングシフトで確実に仕留めるのじゃ）」

通信機を取り出し怪しい会話をしていた

「で、まどかは何やってるの?」

「私はここのス「まどか…来週の日曜日あいてる?」うん!」

再び沈黙が流れた

『フェイトちゃん…』

『何なのは?』

『やっぱりまどかちゃん達も…』

『私もそう思った…明久に相談してみよっか』

『うん』

二人は後ろを向いて何かを相談していた

何だろう?

「明君！私日曜日あいてるよ！」

「良かったあ…ちょっと付き合って欲しいんだ」

「うん！了解だよ！」

まどかは愛人だから別に大丈夫だよね

…こんな可愛い顔されたら…愛人にしたくなくなってきたよ

けど…最大二人くらいまでしか許されないと思うし

「諦めろ明久…」

後ろから足音が聞こえた後、

「俺達は無力だ」

悪友…雄二が出現した

「雄二…」

「…雄二…私楽しみにしてる」

「何を言っているんですか霧島さん。私が先です」

「いえ、ここはみんなで」

君はなんて幸せ者なんだ

「霧島さんに花檻さん！」

「あっ！マミさん！」

（巴マミはまどか達と同じ年に設定してます）

女子達がわいわいと会話する中、僕と雄二は話し合っていた

「どうする雄二」

「逃げるぞ。このままじゃ俺達の人生はゴールインだ」

「確かに…けど逃げられそうにないよ」

「仕方ねえ…あいつら誘っていくか」

雄二はそう言ってから女子達に近づいた

「みんな、今から自由行動だ。」

「「え…？」」

雄二は表情を崩さず

「みんな、俺と明久はヤミーに狙われている。みんなを巻き込む訳にはいかない…」

そして頭を下げる雄二

「お願いだ。俺や明久はみんなが傷つくのはみたくない…だからみんなは自由に遊んでくれ」

「そこまで言われたら…」

「うん…」

「わかったよ坂本君」

「ありがとう」

流石雄二…みんなの機嫌を損なわずに見事に退いた

「じゃあ僕と雄二が変わりに払うから他のみんなも呼ぶといいよ」

「ありがとうアキ君！」

ふう…助かったあ…

「明久…懐は大丈夫か？」

「うん！今日で尽きるよ！」

ピースサインしたら雄二にへし折られたああ

「ぐぎゃああ」

「アホが。夕食どうすんだ」

「あ…」

「たくっ！」

ううう…今日は久しぶりに水と塩で決定だよ

「（全く…だが、これで明久とサシで話せるな）」

「あれ？二人共どうしたの」

まどかと巴さんが残っていた

「嘘…ですよね坂本君？」

「な、何故気づいた」

流石は巴さん…簡単に雄二の嘘を見破った

「はあ…しゃあねえ…マミ、とりあえず一緒に来るか？」

「はい♪」

「そうだね。僕だって雄二と一緒なんて嫌だし…という訳でまどかも行こうよ」

「わ、私も！？でも私…」

まどかは俯きながら考えている

やっぱり愛人じゃ可哀想だなあ…

「大丈夫だよまどか！行こ？」

「うん！ありがとう明君！」

まどかはにっこりと微笑んだ

やっぱり可愛い／／

何はともあれ…今日は満喫するぞ！

お化け屋敷と幼なじみと新たな欲望

「とりあえずここから行くか」

「お化け屋敷…ですか？」

「怖いのか？マミ」

「そんな訳ありません…」

「はあ仕方ねえな。ほら」

「ありがとうございます／／」

やばっ砂糖が…

僕らはまずお化け屋敷に訪れていた。

あんな甘い雰囲気見せられるとこっちが恥ずかしいよ

周りに人が沢山いるんだから…

「じゃっ先入るな」

「うん。行ってらっしゃい！」

雄二とマミさんは腕を組んでスタスタと行ってしまった

「あれ？所でなんで三人がいるの？」

「「「ギクッ！！」」」

三人とは姫路さん、秀吉、美波だ

着ぐるみしてるけどバレバレだよ

「あなたは誰？」

フィーの着ぐるみをかぶった姫路さんが僕に尋ねてくる

やれやれ…

「バイトやってるの姫路さん？」

「いいえ…違いますよ～？」

そう言ってフィーは殺人オーラを放つ

何だろ…助からない気がする

「ともかくお二人方も入ってください」

青い着ぐるみをかぶった秀吉が促す

「それもそうだね…行こうかまどか？」

あれ？姿が見えない

「…私はいいよ…明君だけで行ってきてよ」

まどかは僕の後ろに隠れながら怯えている

まさか怖いのかな？

「ははっ大丈夫だよまどか。何か出ても僕が守るし、お化け屋敷はカップルの醍醐味と言うしね」

どうせ作り物だ。早く歩いてしまえば問題ないだろう

「…明君が言うなら」

まどかはひょこっと出てきて苦笑している

やっぱり怖いよね…

「ほら腕出して。組んでいけば離れないから」

「えっ…う、うん／／」

スッと腕を回しまどかはガッチリと組んでいる

これなら大丈夫だね

「じゃあ行こうか」

「うん！」

「お気をつけて～」

秀吉の言葉に送り出されて中へ入って行った

『（アキは気づいてないわね…まどかはお化け屋敷が怖いんじゃなくて姫路が怖かったのよ）』

「へえ…校舎をモデルにしてるのかあ」

「雰囲気あっていいね！」

あれ？まどかが妙に元気だ…怖かったんじゃないのかな？

「それにしても明君の腕ってたくましいね♪」

まどかはにっこりと笑った

「そ、そうかな…」

毎日無理な筋トレをしてるからかな？

まるで夜中の校舎を歩いているような感覚だなあ

まどかは苦笑はしてるけど震えてないから安心だ

しばらく歩いているといきなりバットを持った人が現れた

「死ねえ！」

大丈夫。あんなこと言うけど…ただ脅してるだけだから

「死ねええ吉井いい」

あれえええっ！？振り下ろしてきたんだけど！

「明君危ない！」

まどかの叫び声で僕はすんでのところで避けて気絶させた

「ごめんね…鈴木君」

倒れたクラスメイトはブクブクと泡を吹いていた

「ぎゃあああああ」

「「うわあ（ひゃあ）！」」

突然の叫び声に僕らは飛び上がった

何?今の叫び声…まさか雄二…

「あはは…迫力あるね」

「いろんな意味で怖いよ…」

しばらく歩いていると腕に力が入っていたことに気づいた

「どうしたの？」

それは幼なじみのものだった

「明君…私ね…何の取り得もなくて…戦うことしかできなかったけど…明君の支えになれて」

まどかは悲しそうな顔で続ける

「本当に嬉しかったんだあ。こんな私でも誰かを助けられるから」

胸がチクリと痛んだ…

僕はもしかしたらあの清涼祭の日に何かを…失ったのかもしれない

僕はまどかを受け入れなかったんだ…

でも本当は…

お化け屋敷を無事出れたけど雄二が震えていた

何を見たんだろう?

「死ぬかと思った…」

「大丈夫?雄二さん」

そしてマミさんと進展したようだ…

「いかがだったでしょうか？」

「うん。まあまあだね」

「途中怖かった部分もあったがな」

それは雄二だけだよ

あれ？雄二の方から悲鳴が聞こえる…

苦笑しながら見てると緑色の虫が飛び跳ねてきた

「これは…バッタ缶だ！」

『おい明久！』

バッタ缶からあいつの声がする

「アンク！？」

『ヤミーだ！観覧車の近くにいる！』

「わかった…」

まさか…こんな時にまでヤミーが…

「明君？戦いに行くの？」

まどかが心配そうな顔で覗き込んでいた
またチクリと胸が痛む

「大丈夫だよ。すぐ帰るから」

まどかは我慢するように頷く

僕は帰る証としてまどかに鞄を渡して観覧車に向かった

アンクと合流した僕は観覧車へ向かった

『…破壊だ！』

「あれだね…カブトムシかな？」

カブトヤミーは観覧車を破壊しようとしていた

「やばっ！やめろおお！」

カブトヤミーに飛びかかるがすぐに投げ飛ばされた

「うわあ！」

そのまま地面にぶつかる

「痛たた…」

『何やってんだ！さっさと変身しろ』

言われなくたってわかってるさ！

「ぐっ…」

体内からゴリラのメダルを取り出す

アンクは黙りながらそれを見ていた

「誰の欲望かわからないけど…」

ドライバーをつけメダルをセットする

「とにかく倒さないとね！変身！！」

『タカ！ゴリラ！バッタ！』

「はああ！」

いつもとは違い今回は体がゴリラだ

『オーズ…破壊だ！』

「おりゃあ！」

カブトヤミーが殴る前に先手を打つ

「オラアア！」

ガントレットで顔面や体を殴りつける

「だっらしゃああ！」

ガントレットを叩きながら相手を殴りつける

『ぐ…オーズ…』

「僕は早く戻らなきゃいけないんだ！」

だから早く倒さなきゃ

「でえやあ！」

『ぐ…』

よしあと少しだ！

『明君…』

突然脳裏に浮かんだ幼なじみの顔…

魔法少女として戦った幼なじみ

僕のことを一番心配してくれた幼なじみ

「まど…か」

「何やってんだ明久！」

「へ？ぐふ！」

カブトヤミーのパンチが腹に響く

「ぐ…げほ」

『壊す！めちゃくちゃに！』

「がっ！」

後ろから切り裂かれて火花が飛び散る

「く…そんな」

ヤミーが増えた

「こいつら何だ？いきなりもう一体から生まれるとわな」

アンクは高い所に非難しながら疑問を抱いた

『破壊だ！』

『壊す！めちゃくちゃに！』

「ぐっ…」

突如現れたクワガタヤミーにより立場が変わった

「はああ！」

ガントレットでクワガタを殴る

『アア！』

「ぐあ！」

後ろからカブトヤミーに殴られダウンした

『『アアア！』』

2体のヤミーの電撃を喰らい僕は吹き飛ばされた

「うわあ！」

ガシャンと係員がいる窓口に激突した

『きゃああ』

女性係員はすぐに逃げ出す

「く…コンボで行くしか…うぐ」

立ち上がる前にガクンとダウンする

くっ…早く帰ると言ったのに…

「まどか…」

「チッ！奴らに対抗できるメダルは…ん？」

「え…？」

ヤミー達も僕らが見た方向を向く

そこには

「よう明久…もうくたばったのか？」

悪友がいた

喧嘩とウナギとブレストキャノン

「よう明久…随分といい格好じゃねえか」

目の前に現れた悪友に驚きながらも言葉を返す

「この状態のどこがいいのさ」

ゆっくりと体を起こしながら睨みつける

「お前がボコられている所だ」

雄二はドライバーを腰につけるとセルメダルを取り出した

「お前は足手まといになるからすっこんでろ」

「冗談…誰が足手まといだって?」

僕がにっと笑いガントレットを構えると雄二はふっと笑った

ピーンと指で弾き片手でキャッチする

セルメダルを入れてキリキリと回す

「変身」

『カポン』

変な音と共に雄二に装甲が装着された

銀色と緑色が特徴の仮面ライダーバースへと変身したのだ

「さあて…稼ぐか」

手をパンパンと叩き、僕は構えてた

『仮面ライダー…破壊だ！』

『壊す！めちゃくちゃに』

「行くよ雄二」

「馬鹿が。それはこっちのセリフだ」

足を踏み込み走り出す

「「うおおおお！」」

「「くたばれえええ！」」

僕は雄二の顔面に向けて、雄二は僕の腹に向けて殴る

「「ぐはっ！」」

「卑怯だぞ雄二！」

「それはこっちのセリフじゃボケ！」

なんて奴だ！戦いの邪魔をするなんて

『『……』』

「今度こそ！」

「行くぞ！」

再び敵に向かって走り出す

「「しねえええ！」」

再びお互いの拳がぶつかり合った

「「いってええ！」」

おのれ…雄二、また不意打ちとは卑怯な

「あいつら何やってんだ」

「おらあああ！」

「くらうか！逆にしねえええ！」

繰り出されたパンチをよけガントレットで殴る

「ぐは！…やっぱりコアとセルじゃ力の差があるか」

「とどめだああ」

バースに向かってガントレットを殴りつける

『キャタピラレッグ』

「俺にはこいつらがあるんだ！はっ！」

「何！うわああ」

突如現れた巨大な足に蹴り飛ばされた

「痛てて…」

なるほど…姿を変えるオーズに対してバースは武装か

『いい加減にしろおおお！』

『壊す！めちゃくちゃにいい』

「「うるせえええ！」」

カブト、クワガタに僕は殴り、雄二は蹴り飛ばした

『…理不尽だああ』

『壊すめちゃくちゃにいい』

まあ敵からしてみればライダーと戦うのは当然だし、それをウルサいは確かに理不尽だね

「たくっ…邪魔しやがって」

「本当だよ。もう少しで倒せたのに」

僕はゴリラを体内に戻し腰からトラを取り出した

『タカ！トラ！バッタ！』

『タットッバ！タトバ！タットッバ！』

「さて、明久勝負しないか？」

「勝負？」

「ああ…俺はクワガタ、お前はカブトムシ。先に倒せるか勝負だ」

へえつまり喧嘩を売ってるんだよね

「いいよ。僕が先に倒したらマミさんにキスしてもらうからね」

「ほお、なら俺が勝ったら鹿目にキスしたあげく恋人にしろ」

なっ…

「二つは無理だよね！？」

「馬鹿が。誰が一つだけと言った。先に口走ったお前のミスだろうが」

「畜生！それに恋人なら既に…」

「お前…まさか最低二人だけだと思ってんのか？」

「ふぇ？違うの？」

「やっぱり馬鹿だな」

「何だとおお！」

『壊すめちゃくちゃにいい』

「「話の邪魔をするな！」」

顔面を二人で殴り飛ばした

全く人の会話を邪魔するとは

「明久…お前が気づいてるかは知らないが鹿目…本当は我慢してんだぞ？」

「え…？」

「マミから聞いたんだ。まああいつは優しいからな…」

また胸がチクリとした…僕の答えは…

「さてとじゃあ勝負開始だ」

我に帰り僕は改めて敵を見る

「それじゃあ始めようか雄二」

ダンッと地面を蹴り敵に向かって走る

「アンク！チーターを」

アンクは無言でチーターを投げた

トラとバッタを入れ替えてスキャナーで読み込む

『タカ！ウナギ！チーター！』

体は青い鞭を持った姿になり足は黄色いチーターだ

高速で走り、相手の背後に回る

「おりゃあああ！」

バチンバチンバチンバチンバチンバチン！と2体のヤミーを電撃鞭で叩く

『カポン』

『ブレストキャノン』

「ハッ！ハッ！」

『ぐわああ』

『壊す…めちゃくちゃに』

おかしい…雄二がいない

「雄二何やってるんだ…」

僕は気になって雄二の方を見た

『セルバースト』

溢れるぐらいまでセルメダルを入れるバース

隣に置いてあるミルク缶にセルメダルを入れていくゴリラのカンドロイド

『セルバースト』

「まだまだあ！」

あいつ何やろうとしてるんだろう

「明久！そいつらを捕まえとけ！」

どでかい声が響き思わず僕は鞭で奴らを縛り付けた

『…ぐ…』

『壊す…めちゃくちゃに』

「雄二これでいい…の？」

『セルバースト！』

「ＯＫだ！じゃあくたばれ明久あああああああ」

戦艦よりもどでかいビームが僕とヤミー達を包み込んだ

「雄二いいいいいい　いいいいいいいい」

ビームはヤミーも僕も大爆発させた

衝突と決断と新たなグリード

「雄二いいい貴様あああ！」

ブレストキャノンの最大出力を受けた僕は真っ黒になりながら変身を解いた

「何だ…生きてたのか？」

バースも同様に変身を解き雄二に戻る

「貴様！僕を殺す気だったな！」

指を指しながら訴えるが簡単に無視される

「お前が逃げないからだろ？」

こいつ…反省すらしないのか

「全く…セルメダル回収しなきゃ」

僕はふらふらと爆破された所へ歩く

「あ、あれ?セルメダルは?まさか消えた!」

「な訳あるか」

バチンとアンクのチョップが炸裂した

「痛!じゃあ何でないんだよ」

「俺が回収したからだ」

雄二がミルク缶を背負いながらジャラジャラ音を立てる

「あーそういえば」

雄二の奴セルメダル全部貰うっていってたよね

「なーんだ。そういうことなら仕方ないね」

「ああ…そういうことだ」

「あはははは…痛！」

再びアンクのチョップが炸裂

何なんだよ！

「坂本…セルメダルを渡せ」

「無理だな。こっちはいろいろと交渉してもらってんだ」

睨み合う二人を無視しながら僕はこれからのことを考えていた

「まどかにキス…まどかにキス」

顔からは湯気が昇る

「明久…罰ゲームだ。わかってるな」

「言われなくてもわかってるよ」

雄二を睨み付け僕はまどかの所へ戻り始めた

「はあ…どうしよう…」

僕はいいのだがまどかはどう思うんだろう…やっぱり嫌がるかな？

考えながら歩いていると人とぶつかった

「あっごめんなさい！」

「……ああ？」

髪がアンクのように金髪で赤と黒い服を着た人はこっちを睨み付けながら見ている

感じが悪い奴だ

こういう奴は無視するのが一番だ

「早く行かないとまどかに悪いな～」

小走りでその場から逃げる

チラッと見るとそいつはまだこっちを見ていた

『…なんだ?あいつからコアメダルの…つけてみるか』

『キイー!』

『あいつを追え』

『キイー〜!』

「ごめんまどか！」

「明君！？」

まどかは僕に気づくとこっちへ歩いてきた

「時間かけちゃってごめんね」

「ううん。いいよ」

再びまどかと歩き出す。一目につかない所がいいかな…

「まどか…観覧車に乗らない？」

「え？観覧車に？」

「うん…実は話があるんだ…」

まどかは驚いたような顔だったけどすぐに頷いてくれた

「じゃあ行こうか」

「うん！」

「絶景だよ明君！」

「はは…そうだね」

さてどうしたものか…いきなりは悪いし…

「まどか…」

「何明君？」

にこやかにこっちを振り向くまどかはいかにも楽しんでいる顔をしている

「あ、あのさ観覧車でカップルがよくやること知ってる？」

「へ！？／／」

しまった！いきなりカップルはまずかったかな

「えっと…ハグかな？」

こんなことでも一生懸命考えてくれるまどかは本当に優しいなあ

「ううん…」

やっぱり嘘はつけないよね

「互いの唇にキスするんだよ／／」

よし言った！頑張った僕！

「ええ！？／／／そ、そうなの」

「うん…だから…」

ええい！こうなりゃやけくそじゃああ

「明君？えっと…／／だ、駄目だよ…なのはちゃん達に悪いから」

「わかってる…けどまどかは本当にあれで良かったと思ってるの？」

聞きたい…まどかの本当の気持ちを…

ゴウンゴウンゆっくりと観覧車は動く中、まどかは何かを耐えるように俯いている

「う、うん。私は大丈夫だよ。明君の隣にいるのは私じゃないから」

僕はまどかから離れポスッとソファーに座った

「…私は支えになれればいいから…勿論明君のことは大好きだよ…幼なじみじゃなくて一人の異性として」

僕は黙りながらまどかをじっと見つめた

内心イライラしているのが伝わってくる

まどかを受け入れなかった自分と抗わないまどかに

「まどか…今の僕の気持ちを伝えておくよ」

拳を握りしめながらまどかの目をじっと見る

まどかは少し目を潤ませながら僕を見ていた

「まどか…僕は」

続けて話そうとした時ガクンと観覧車が揺れた

「きゃああ」

「うわっ！何！？」

ガタガタと観覧車は揺れ必死にしがみついていた

「くっ…何が起きてるんだ?」

「明君!!」

「え?うわああ」

まどかがいきなり叫けぶと同時に僕は空中に放り出されていた

いや…

『ガギイイ』

ヤミーに放り出されたがふさわしいだろう

「なっ…ぐぶ」

驚いている暇もなく殴られる。必死に観覧車を無我夢中で掴む

何でまたヤミーが…

「しゃああ！」

ヤミーを蹴ったが逆に足がしびれた

「うぎゃあああ！痛いい」

何だこいつ！凄く固い

『オーズ！』

ヤミーは姿から見てサソリだ

サソリヤミーは手についている針を突き立てようとしてきた

「うわ！」

何とか避けヤミーを力の限り蹴り飛ばした

『ぐっ…』

顔面を蹴られたヤミーはそのまま落ちていった

「ふう…うわあ！」

安心できる状態じゃなかった…

風に飛ばされ観覧車を掴んでいた手がすべる

「うわあああああ！」

「明君ー！」

まどかの叫び声が聞こえるがかなり離れている

「やばい…このままだと確実に死ぬよ！」

ドライバーを急いで腰に巻きメダルを入れる

「へ、変身！」

スキャナーを急いで取り出しすぐに変身

『タカ！トラ！バッタ！』

『タットッバ！タトバ！タットッバ！』

「わあああああ」

変身した直後地面に衝突した

「痛てて…危なかったあ…うわあ！」

起き上がった瞬間に強烈なパンチが当たった

「ぐう…」

『きゃあああ！』

係員さんは逃げ出したのを合図に周りの人達も逃げ出す

「ハッ！」

敵を見ながら構える…体が固そうな鎧に覆われ両手と尻尾にはでかい針…

こんな奴見たことがない

『貴様がオーズか…なる程…確かにコアメダルを取り込んでいるようだ』

地中から声が聞こえた

「へ？誰？」

『少し遊んでやろうか』

声が観覧車のエリアに響いた後、

地面がゴゴゴという音と共に割れ

『ふん！！』

「はいい！？」

地面から新たなヤミーが現れた

「いや…違うあのベルト…」

まさかグリード？

『俺の名はスル…甲殻類のグリードだ』

「スル？」

頭は骸骨のような顔にサソリの兜があり、体はカニのようにでかいハサミがついている…足は何もない黒色だ

「こんなグリード…いなかったよね」

『ああ…貴様は知らない…アンクもな』

こいつアンクのことを…

『オーズ…お前の力…見せて貰おうか』

スルはグッと構え僕はトラクローを展開させた

『スル様…私は』

『お前は奴を殺せ』

『御意！』

「あっ！待て！」

ヤミーは地中に潜り消えてしまった

『貴様は俺の相手をしろ』

「!?ぐああ」

早い!?

『ふん!』

「ぐはあ!」

スルは素早く蹴りとハサミで殴りつけた

「うぐ…」

一発一発が重い…

『どうした？もっと楽しませろよ』

コイツ…

「しゃああ！」

バッタの力を使いジャンプし素早く蹴りを叩き込んだ

『ぐは…』

ポロポロとセルメダルが落ちる

「なんだ…案外弱…ぐはああ」

ズガンと建物にぶつかった

『さてと…そろそろ本気でやるか』

ハサミが消えて剣が現れる

「ぐ…」

僕はメダジャリバーを取り出し構えた

「うおお！」

ブオンと剣を叩きつけるが

『何だ？本気か？』

腕で掴まれ逆に剣で切り裂かれた

「ぐあああ！」

痛い…体が痺れる

『俺の剣は毒があるのさ』

「このお！」

ベルトからメダルを取り出す

『オーズの坊や…あれは危ないわ』

（メズール…？）

『私達も知らないグリード…そしてあの毒…確実次受けたらまずいわ…あれはコアメダルの力を吸い取っているのよ』

（そんな!?コアメダルの力を吸い取る?ならどうやって戦えば）

『オーズの坊や…逃げなさい…あなたとは相性が悪いわ』

（けど…あの観覧車にはまどかが）

ふらふらな体を無理やり起こして体内からコアメダルを取り出す

『ほお…』

『サイ!ゴリラ!ゾウ!』

『サゴーゾ…サゴーゾォ!』

力を吸い取るなら吸い取れない程の力を出せばいいはずだ！

「ウオオオ！オオ」

胸を叩きドラミングをする

『何！？ぐお』

どうやら奴にはこのコンボは有効だ！

「いくぞおお！」

ガンと拳を叩きスルを殴る

『ぐああ！』

「オラア！」

次は左だ！

『ちっ！』

剣を取り出しガードするが怪力の前には…かなわない！

「セイヤア！」

『ぐあああ！』

「ハア！」

蹴り飛ばし殴る

『グウウ』

「オアアア！」

力の限り叩きつける

『ぐあ』

体にヒビが入った

何だこのパワー…ウヴァやカザリと戦った時はこんな力

『馬鹿な…』

そうか！コアメダルを体内に吸収して強くなったんだ

「ハアアア！」

『グアアア！』

渾身の一撃をお見舞いしスルからメダルが飛び散った

『馬鹿な…オーズはこんなに強かったのか…』

スルは体を押さえながら地中へ消えて行った

「待てスル！」

『借りは返すぞオーズ…』

そんな言葉と共に奴は消えて行った

「くっ…うあ」

コンボの限界がきて、その場で跪いた

危なかった…もしまだ戦ってたら

「とりあえず…収穫があっ…たし…」

僕は三枚の黒いコアメダルを拾った

「はあ…はあ…観覧車をまた動かさないと」

ふらふらと係員がいた場所へ行き止まっていた観覧車を動かした

「これ…で安心だ」

やばい…疲労感が

「うう…」

僕はその場で意識がなくなった

明久と無欲と繋がれない心（前書き）

明久の秘密が一部わかります

明久と無欲と繋がれない心

『…予期せぬ事態だ…』

まさかあのコアメダルを手に入れてしまうとはね…

『だが…彼なら大丈夫だろう』

全く持って素晴らしいよ！黒い力の誕生だ！

『だが、そうなればなおさら高町という子を野放しにはできない』

「…明…ん」

う…僕は何をやってたんだっけ？

「明君！」

「はっ！！」

僕はまどかの声で目を覚ました

そうだ…確かグリードと戦って…

「大丈夫明君？」

「うん…平気だよ」

ムクリと立ち上がって砂をはらう

「全く…いきなり襲うなんて酷いよね」

苦笑しまどかを見るが目は笑っていなかった

「そうだね…体大丈夫なの？」

「ん？まあ慣れてるからね」

笑いながらベンチに座る

グランドパークはさっきのようにまた賑やかになっていた

観覧車も大丈夫みたいだ

「そうだ！明君何か欲しい物ある？私が奢るよ？」

欲しい物か…うーん

「別に…カロリーは足りてるから…これといってないかな」

それよりもヤミーを探さなきゃ

「そう…なんだ」

まどかは苦笑すると隣に座った

「明君…さっきの話って何だったの？」

まどかが言ってるのはきっと観覧車の時の話だろう

僕は何を考えていたのだろう…

「…まどか…僕…なのは達と恋人関係になったよね？」

「うん…」

「けどね…そう思えないんだ」

「え？…」

わかってるんだ…この先僕に何が起こるのか

「そんな…あの二人は明君を」

「わかってる…わかってるよまどか…でも僕は」

まどかｓｉｄｅ

明君…いきなり何を言い出すの？

二人は明君に認めてもらえて嬉しかったんだよ？

私だって本当は…けど明君には二人がふさわしいから

なのに明君は…それすらも遠ざけるの？

「明君…やめてよ」

「え？」

「私だって明君が本当に大好きだよ」

「まどか？」

「明君は何で逃げるの？」

あの告白は形だけ？

「違うよまどか・僕は二人が大好きだよ…けど」

「けどじゃないよ！それって二人を不安にさせない為じゃないの？」

明君は私から少し離れるけど私は逆に詰め寄った

「本当は…」

明君は目を反らしながら続ける

「本当は…君が」

明君は途端に喋らなくなり大勢の人がいる中へ走っていった

「明君…」

何で…いつも距離を置いてるの？

どうして…あの時黙ったの？

「ねえ…答えてよ明君」

私はいない彼に一人尋ねた

雄二ｓｉｄｅ

「面倒なことになったな…」

「そうですね…」

俺とマミは遠くからあいつらの様子を見ていた

明久の奴…いつもゲームに誘っても断るのも俺らから距離を置いてるからか？

「歯がゆいな…」

結局罰ゲームは実行せず逃げたか

あいつからキスなんてみたことがないしな

それにあいつはそういうことすらしない

「無欲か…」

あいつにあるもの…欲望ではない人を救いたいという心

自分を犠牲にしてでも助け出す

「彼は…吉井君は執着心が無いですね」

「まあな…カロリーばかり求めてるがな」

なんでカロリーだけは大事なんだよ

ポケットが光っている

「電話か…マミ少し外れるから鹿目を頼んだ」

「わかりました」

俺はイラッとしながらも電話に出た

「よう明久…金が無くなったか？」

『それはどうにでもなるとして…雄二新たなグリードが出たんだ！』

「何？」

『名前はスルって言って甲殻類のグリードなんだ…しかもそいつから黒いコアメダルが出てきて』

黒いコアメダル…

潮時か

「明久…グランドパークの外で待ってろ」

『え？わかったよ』

静かに会話を切りすぐに電話をかけた

「巧か？グランドパークに来てくれ」

俺は外へ向かって走っていた

これが鴻上の言ってたことか…

だが、高町は…

『よう…お前…コアメダルを狙ってるんだってな?』

いきなり声が聞こえ振り向くと赤のジーンズに白と黒の服を着た金髪野郎がいた

「なんだあんた？」

男はニヤリと笑う

『俺が手伝ってやる』

喧嘩と合体ヤミーと大ピンチ

「雄二達遅いなあ…」

雄二に呼び出されグランドパークの外で待っているけど…

来ない…こっちは急いでるのに

「あっ…明久！」

こっちに向かってきたのは雄二ではなくて

「巧？」

親友だった

「ストレイキャッツは？」

「ああ…大丈夫。みんな手伝ってくれてるから」

ストレイキャッツは巧の家でもあり大事な職場だ

巧はストレイキャッツの仕事を手伝っている…いや、ほとんど仕切っていると言っても過言じゃないだろう

「おお来たか巧。」

「「雄二！」」

悪友は笑いながら歩いてくる

「雄二…遅いよ！ヤミーが動いているんだよ？」

一刻も早くと言おうとした所で雄二が割り込んだ

「巧…聞いての通りヤミーが中にいる。すまないが変わりに戦って

くれないか？」

巧は何かを感じとったように頷きグランドパークへ入って行った

「よし！僕らも行こう」

走ろうとした瞬間、雄二に掴まれた

何をするんだ雄二？

「お前には話がある」

「そんな暇はないよ！後で聞くから「ほお…人を心から信用しないお前がか？」」

雄二は見下したように見ながら僕の腕を突き放す

「…。どういう意味だ雄二」

僕が人を信用してない？

「お前だって気づいているはずだ」

ベルトを腰にまく雄二

何をする気だ…

「明久…高町と別れろ」

雄二の一言に僕は体から痺れを感じた

「何を言ってるんだ雄二…何で」

「いいか明久…高町の体内には、コアメダルがある」

そんな!?

アンクが言ってたのは…

「しかも黒いコアメダルだ…」

雄二はこっちを見ながら続けて話す

「理由はわからないが彼女をオーズであるお前と一緒にする訳には行かない」

「どういう…」

「お前が知る必要はない。それにな明久…お前だって本気で付き合ってんじゃないんだろ？」

体から力が抜ける…

こいつ何を知ってるんだ

「冗談じゃないよ雄二…僕はなのはが好きだ…彼女に側に居てほしいんだ」

「それは本当か？」

「……」

「じゃあ何で鹿目は側に置かない」

雄二の一言一言はずしりと重く感じた

「お前…鹿目好きなんだろ？」

「……」

「答えないか…まあいい。だがこれだけははっきりしろ…高町と別れる気はあるか？」

理由もろくにわからないし…彼女と別れろだって？意味がわからないよ

なのは大事な人だ…

答えは決まっている

「何がなんだかわからないけどー」

雄二の目を見ながら答える

「無理だよ」

「そうか…」

雄二はゆっくりとセルメダルを取り出した

「なら…お前の体内にあるメダルごと奪う」

こいつ…僕が体内にコアメダルを宿していることを…

「悪く思うな明久…」

ピンとセルメダルを弾きセルメダルはそのまま入れる場所へ入る

「変身」

キリキリと回し

『カポン』

と音が響くと同時に雄二は装甲に包まれバースになった

「お前をオーズにさえ変身させなければ問題ねえ」

ゆっくり歩いてくる雄二

こうなったら…僕が勝ってあいつから全て聞き出す

「雄二がその気なら…変身」

『タカ！トラ！バッタ！』

『タットッバ！タトバ！タ・ト・バ！』

オーズに変身して僕もゆっくりと歩く

「明久…覚悟しろ」

「雄二こそ…」

「「はあああああ！」」

拳を握りしめ走り出す

「「くらえええ！」」

繰り出された拳は近くにいたヤミーに当たった

『ぐああ』

さっきのサソリヤミーではなく新たなヤミー

「ほお…ライオンにクラゲか」

「合体ヤミーだね…」

また新しいヤミーが出たけど関係ない…

「明久…一連卓上だ」

「足引っ張るなよ雄二」

ライオン…つまり寄生ヤミーか…面倒な奴だなあ

「何が目的かは知らんがいい度胸だな」

「全くだよ…人の喧嘩を邪魔するなんて」

『カポン』

『ドリルアーム』

右腕にあるカプセルから機械が出現し、ドリルになった

僕はメダジャリバーを取り出し構える

「いくぞ！」

「おう！」

『グオオ！』

ライオンクラゲに向かって僕は剣できりさく

『グオオ！』

「うわあ！」

すぐに蹴り飛ばされた

「オラア！」

ギュインギュインとバースのドリルアームがヤミーの体を削る

『グオ！』

「うお！」

殴り飛ばされ建物にぶつかった

「雄二！はああ！」

剣にメダルを入れてスキャナーで読み込む

『トリプル！スキャニングチャージ！』

「セイヤア！」

『ふん！』

放った攻撃はライオンクラゲの覇気により逆に返ってきた

「わあああ！」

くそっ！強い…

『明久！何やってんだ！』

「アンク！？」

アンクはヒュッとメダルを投げた

「こいつに変えろ！」

「これは…よし！」

「どりゃああ！」

雄二はバスターでヤミーを打ちまくる

『ライオン！カマキリ！チーター！』

「うおお…」

雄二はヤミーに殴り飛ばされ転がった

「はあああ！」

十分に加速をして

「おりゃああ」

素早く切り裂く

『グオオ！』

ライオンクラゲは吹き飛ばされビルにぶつかった

「おりゃああ」

ビルを駆け上り

「セイヤア！」

追撃のキックをお見舞いした

『グオオ！』

ヤミーはそれを避け逆に殴ってきた

「がふ！」

くっ…顔があああ

「明久！おりゃあ！」

すぐにビルの上に来た雄二が素早く蹴りを放った

『グオオ！』

「うわっと」

叩き落とされ転がった

「くっ…ウオオオ！」

頭から光を発した

クラゲがあるなら有効なはず

『グオオ！』

すぐにかき消されてしまった

なんで？

「チッ…ライオンの部分がクラゲをカバーしてやがる…」

「アンク！ならコンボしか…ぐわあ」

何だいきなり攻撃が…

『やあオーズ』

「カザリ…」

「どわああ！」

雄二はカザリにいきなり攻撃されビルから落とされた

「雄二いいい！」

『オーズ…メダルを貰うよ』

カザリは連続で攻撃を繰り出す

「ぐあ！うわああ」

強い…

『グオオ！』

さらにライオンクラゲの攻撃も受けてしまう

「がは…ぐは」

2体のヤミーの攻撃を受けてダウンする

『ハア！』

「くあああああ」

強烈な一撃をくらい変身が解けメダルが散らばる

「ぐ…」

駄目だ…奴に渡す訳には

「うぐあ！」

メダルを必死に寄せ集めた手がカザリに踏まれる

『ふん』

「がああ」

グリグリと踏まれメダルを落とす

「明久！うお！」

アンクは持っていたメダルケースをライオンクラゲに取られた

『これで…僕のコアメダルは…八枚…あと一枚で』

まさか…完全復活！？

カザリはゆっくりとメダルケースを開けようとしていた

「やめろ！カザリ！」

熊と怒りと呼び起こす力（前書き）

展開が早いですがいよいよあのメダルが解禁されます

熊と怒りと呼び起こす力

「さてヤミーはどこだ？」

大勢の人がいる中で俺は辺りを見回す

話によると地面から現れるんだよな

人がいない場所へ行きベルトを腰に巻く

「えっとこいつが有効だっけな」

熊の絵柄が描かれた銅色のメダルを取り出す

「変身」

セルとコアをベルトに入れて上から剣でさす

『ベアーアップ』

いつもとは違いスーツは黒、ボディは銅色に目は青の姿になった

「よし…やるか」

巨大なクローを地面に突き刺す

クローからは特殊な波動が流れ地面がゴウンゴウンと音を立てる

「……」

よし…地中の内容はわかった…そこからメダルの電磁波を感じ取れば…

「そこか！」

ガンと地面を叩きつけるとヤミーが現れた

『貴様はーディアス！』

俺のことを知ってる？

雄二から聞いた通り…新種のヤミーか

『邪魔をするなああ』

サソリのヤミーは針を突き立てる

「効かないぜ！」

クローで針を破壊する

ベアースタイルは力だけを集中させた姿だ

「おりゃああ」

思い切り相手の体を切り裂き鎧を破壊した

『うお…お』

なる程…甲殻類は確かに固いけど…砕いてしまえば後は簡単だ！

「せりゃ！」

アッパーを喰らわせて吹き飛ばす

とどめだな

俺は目を赤くし、ベアーハンマーを取り出す

色は銅色だが尖っている

セルとベアーコアを入れる

『ベアーブレイク』

ゴウンゴウンと地面が揺れて沢山の岩がサソリヤミーを閉じ込める

『何!?』

「はあああああ!」

岩に近づき力一杯ハンマーを振り下ろした

「でやあああああ」

振り下ろされたハンマーをあっという間にヤミーごと岩を砕いた

岩からは大量のセルメダルが飛び散った

「一体誰の欲望だったんだ？」

それより早く二人を止めないとな

『今日…僕は完全体になる！』

カパッとホルダーが開かれる

このままじゃカザリが完全体に…

『……な』

聞こえたのは嬉しい声ではなく驚いている声だった

『全部…セルメダル…！』

僕は思わずアンクを振り返った

「俺が何の対策も取らないとでも思ったかカザリ？」

流石アンクだ…まさか先にメダルを取り出してるとは

『アンク…お前…！？』

アンクは腕だけ発射しカザリから何かを奪い取る

「はっ！やはりな。お前が俺のコアメダルを持ってるくらいわかってたんだよ」

アンクの手には赤いメダルが握られていた

『な…。まあいいさ君からメダルを取れば全て解決するからね』

確かにそうだ…アンクは残りのメダルを持っている…アンクさえ潰せばカザリは完全体になる

アンクはニヤリと笑った

「まさか俺が持ってるとでも思ったか？」

え？違うの

「メダルを持っているのはあの馬鹿だ」

アンクはそう言って僕に指さした

『何？』

「何言ってるんだよアンク！？」

勿論持っている訳がない

持っていたらとっくに使っているよ

まさか自分だけ生き残ろうとしているのか？

『そうなんだ…ならオーズを殺せばいいんだよね！』

カザリはそう言って突っ込んできた

ああああ畜生！なんでみんな僕に酷いことするんだ！

僕は馬鹿じゃないんだ…なのにみんなは僕を馬鹿にしてばかり

『明久は馬鹿だよな』

『…馬鹿が取り得』

『アキは本当に馬鹿なんだから』

『明久は馬鹿じゃからの』

『明久君て本当にお馬鹿さんなんですね』

『馬鹿か明久』

今まで抑えていた物が溢れ出すように怒りがこみ上げてくる

『お前のせいで康夫は』

『お前なんか弱いくせに！』

『お兄ちゃん…助けて』

小さな少女の声が蘇り僕は叫んだ

「うわあああああ！」

何かが共鳴するように光り出す

『な、何だ！？』

「何！？」

ヒュンと音を立て黒いメダルがベルトの穴に入る

『何だあのメダル！？』

スキャナーを手にとり読み込む

「変身…」

もう誰も今の僕を止めることはできない

「アキ君…」

感じるアキ君の怒りが…

黒いメダルを通して

「明久…」

伝わる明久の怒り…悲しみ

私の体内にある金色のメダルから

「明君…駄目だよ怒りまかせちゃ」

体内にある紫メダルから激しい怒りが伝わってきた

『始まったか…』

鴻上はモニターを見ながらケーキを作る

『黒いメダルの力…それは怒り…そして！その力は眠っていた力を呼び起こす！』

そして黒いメダルが力を現した時…彼にも影響が及んでいた

「う…ぐ…」

そんな抑え込んでいる紫のメダルの力が…

「が…うぐ」

火野映司…そして吉井明久

コアメダルの戦士となった彼らの運命は…

闇と悲劇と対峙する二人（前書き）

黒いコアメダル…怒りに反応し黒いオーズに変身させる。オーズの心が黒い程、支配する力を強める

カウントザメダル

現在オーズの使えるメダルは

明久

タカ
クワガタ
バッタ
トラ
サイ2
ゴリラ2
ゾウ
シャチ
ウナギ
タコ

プテラ

映司

プテラ２
トリケラ
ティラノ２

タカ

今回明久がかなり黒くなってます…

闇と悲劇と対峙する二人

「あぶねえ」

俺はカザリに弾き飛ばされた後クレーンアームで何とか助かった

あの馬鹿ちゃんと戦ってるだろうな?

「よっ」

アームを使い上手く着地した

「ふう…またせ」

なんだ?急に力が抜ける!

この圧倒的なオーラは一体?

俺はつい明久を見た

「！？」

あいつからは黒いオーラが漂っていた

「変身」

掛け声と同時にスキャナーで読み込む

『サソリ！カニ！エビ！』

「新しいコンボだと？」

アンクは見たことのないコンボに驚いていた

『サッカービ！サカビ～サカビ！』

いつものように変な歌が流れ明久はたちまち黒いオーズに変身した

頭はサソリのように鋭く赤い目、体はガッチリとし、両腕にはハサミがついている

足はエビの模様が入っている

「サカビコンボ？」

こんなオーズ見たことがねえ…しかも未だに黒いオーラがでていやがる

「ウオアアア！」

明久は空に向かって叫んだ

空はたちまち暗くなり、闇の中にいるようだ

「ひゃっはあ！」

『何だ？うわあ！』

『グオオ！』

『ぐああ』

何!?いきなり攻撃が

くそっ暗くて見えない

「さてと…いたぶってやるよ」

明久の声が聞こえた…今まで聞いたことがないような恐ろしい声だった

「おらよ!」

『ぐああ』

今の声はカザリか!?

明久ｓｉｄｅ

『うぐああ』

何だよ手応えないな～

「おらよ！」

僕は両腕をシザーアームに変え

大きなハサミでカザリを切り裂く

真っ暗だが僕には見えている

『あああ！』

ズバッと切り裂かれ叫ぶカザリ

はは…最高だよ

「おらよ！メダル落とせよ！」

『ぐうう…』

カザリの腹を刺してメダルを弄る

ズボッと抜きカザリを踏みつける

「へえ～案外少ないなあ」

黒いメダルとメズールのメダルをジャラジャラと手の中で鳴らす

『ぐ…』

あーうるさいな～

「吹っ飛べよ！」

回し蹴りを放ちカザリを遠くのビルまで飛ばした

『グオオ！』

「残念」

ライオンクラゲが後ろから攻撃するが地面へ潜った

『何？』

探してる探してる

「ここだよ馬鹿」

地面から出てライオンクラゲの頭を掴み

「しゃああ」

ガツンと地面に叩きつける

楽しい！

「オラオラ！」

ガンガンと何度も叩きつけ寄生された人を取り出す

「誰君？」

ポイッと投げ

再びライオンクラゲを叩く

「吹っ飛べよ」

頭を掴み思い切り投げ飛ばした

『グオオ！？』

あはは…飛んでる飛んでる

エビレッグを使い地面を飛び上がる

「ふん！」

顔面を蹴り地面へ落とした

『スキャニングチャージ』

「おらよ！」

地面に倒れたヤミーをハサミで掴み角で背中を刺した

『ぐ…あ』

内部からメダル以外を溶かしていく

「じゃあね」

メダルだけが地面に散らばりヤミーは溶けた

「あっけないな～」

地面を飛び上がり雄二がいた場所に着いた

「明久…お前」

「明久！」

「アキ君！」

いつの間にか、なのは、フェイトが来ていた

そうか…そうだよね

こいつらもメダル持ってたもんね

「何みんな?」

「どうしたの明久!」

「何か変だよ!?」

ちっ…戦い見てたか

「そんなことないよ」

「ううん！明久はそんな戦い方しないよ！」

はあ…

「ならさ…そんなに変身解いて欲しいなら」

目を光らせみんなを見た

「みんなのメダル全部ちょうだい？」

「え？」

遅いなあ

「あぶねえ！ぐああ」

なのはを攻撃しようとしたら雄二が庇った

「邪魔だなあ雄二！」

「ぐっ！」

素早くバースを殴り倒し顔を踏む

「うがあ」

「君はいつも邪魔なんだよ…」

ガンガンと腹を踏みつける

「ぐはああ」

「「やめて！」」

二人が押さえてくるが構わずなぎはらう

「「きゃああ」」

倒れたなのはに近づく

メダル貰わないとね

「い、いや」

なのはは魔法少女にならず僕から離れようとしている

「させると思ってるの？」

ガシッとハサミを閉じた手でなのはを掴む

「いやああ！」

「なのは！」

「ぐっ…」

『カッターウィング』

バースの背中に何かが装着され飛び二人を素早く掴む

「オラア！」

そのまま僕に向けてそれで切り裂いた

「…いて」

バースは二人を掴んだまま飛んでいった

「逃げられたか」

僕はずっと後ろにいるアンクの方を見た

「明久…お前」

「何だよ?そうか…」

アンクだってグリードだもんね

「はあああ!」

体からどす黒いオーラを放つ

「ぐ…う…うあ」

アンクの腕から吸い取られるようにメダルが出る

「ぐあああ」

アンクはセルメダルになりメダルは僕の所に飛んできた

「はは…これで君も自由だよ」

手には二枚のタカメダルがあった

セルメダルはバラバラと落ち、アンクが取り付いていた人はパタリと倒れた

「やはりしぶといね」

手の中でタカメダルがバタバタと暴れていた

これがアンクの意志があるコアメダルか

『ほお…黒いコアメダルとはな』

いきなり後ろから誰かの声が聞こえた

「君は」

あの時、ぶつかった奴か

アンクと同じ手をしていて金髪だ

『映司…バースを倒した奴がここにいる』

あいつはバッタ缶で連絡を取っていた

「コアメダルの気配がする…わざわざ取られにきた訳？」

『ハッ…誰がコアメダルに支配されてる奴なんかに取られるかよ』

君も馬鹿にするんだ…

「アンク！…オーズ！？」

屋上へ誰かが走ってきた

そいつは僕に驚いている

「何でオーズが人を？」

『あいつは今、コアメダルに支配されている…』

アンクって言うんだ…

まさかアンクが二人もいるとはね

「あなたも邪魔するなら消しますよ？」

今の僕は怒りで一杯だ

「確かに…黒いオーラが出てる」

『映司…奴の力は未知数だ…気をつけろよ』

アンクはそう言うとメダルをヒュンと映司さんに投げた

「わかってる…これでまた変身ができる」

僕と同じドライバーをつけてメダルを入れた

スキャナーを手にとり僕を見る

なんだよその目は

「…どんなことがあっても仮面ライダーは人を傷つけちゃいけないんだ」

「知らないよ…」

「なら…倒すしかないかな…変身！」

『タカ！トラ！バッタ！』

『タットッバ！タトバ！タ・ト・バ』

映司…いや映司さんは変身し僕と同じオーズになった

「同じオーズとして俺が君を救ってみせる！」

「偽物が…うるさいよ」

互いに睨み合い同時に拳を繰り出した

火炎と最強と映司の決断（前書き）

いろいろと皆様から意見がありましたが…悩んだあげくこうなりました

皆様の要望に応えることができず申し訳ありません

カウント・ザ・メダルズ

現在オーズの使えるメダルは

明久
タカ２
クワガタ
バッタ
トラ
サイ２
ゴリラ２
ゾウ２
シャチ３
ウナギ

タコ２
サソリ２
カニ
エビ

プテラ

映司

タカ２
クジャク２
コンドル
クワガタ
バッタ
トラ
チーター
サイ
ゴリラ
ゾウ
ウナギ

プテラ２
トリケラ
ティラノ２

火炎と最強と映司の決断

「う…！」

くっ…強い

「おりゃあ！」

「うっ…ぐ」

繰り出されたハサミをジャリバーで防ぐ

やっぱりタトバとコンボじゃ力の差があるか

「ハア！」

素早くハサミをどけて切り裂く

「…」

「ハッ！セイヤ！」

隙を見て何度も斬りつけるけど黒いオーズは一向にひるまない

「はああ！」

「ぐうっ」

逆に相手の攻撃をくらって吹き飛ばされた

「強い…あんなメダルがあったなんて」

『映司！しっかりしやがれ！』

腕だけ飛び出しアンクがメダルを投げた

「よっと…これは！」

アンクお前！

「おりゃああ！」

「うわっ！」

黒いオーズ…サカビコンボがでかいハサミで攻撃を繰り出しなんとか避けた

今の状態ならいける！

攻撃を避けながら素早くメダルを変える

「うわああ」

最後にセットした所で後ろから攻撃を受けてしまった

「ぐ…」

俺はただ見ることだけしかできなかった

この世界のオーズに任せるしか

けど…アンクからいきなり電話がかかった時は俺はまた変身できる

人を救える…それが嬉しかったんだ

だから人を守る力で君も守ってみせる…だから

「そのコンボを倒す！」

腰についていたオースキャナーで読み込む

『タカ！クジャク！コンドル！』

サークルは今までと違い一つの絵になる

『タ～ジャ～ドル～！』

歌が流れ炎に包まれ顔も変わる

「ハア！」

タジャスピナーと言う盾のようなものが装着され炎が消えた時には
炎のコンボ…タジャドルコンボになった

（タジャドルのテーマ曲が流れていると思ってもらえるといいです）

「ハアァァ…」

翼を開き飛び上がる

「何だあのコンボ？タジャドル？」

サカビコンボは首を傾げている

「ハアア！」

急降下しながらタジャスピナーから光弾を発射する

「ぐあ…」

「ウオオ！」

怯んだ所を突撃して吹き飛ばした

「ぐああ！」

「効いてる！」

地上に着地してタジャスピナーをスキャナーでスキャンする

『ギンギンギンギンギンギンギンギンギガスキャン！』

スピナーにエネルギーが溜まり俺はサカビコンボに向けて発射した

『セイヤアアア！』

スピナーから銀色のリングが飛び出しサカビコンボに直撃した

「ぐああ！」

爆発を起こしサカビコンボは吹き飛ばされた

「ハア…ハア…やった…！」

これで変身は解けるはずだ…

「！？空が暗く…」

アンクの連絡を受けて向かった時見たように空が暗くなっていった

「視界が…暗くてあいつが見えない…」

このままだと取り逃がしてしまうかもしれない

『映司後ろだ！』

アンクの声が聞こえ振り向くと同時に切り裂かれ火花が散った

「ぐああ！」

くっ…まさか！けどどこから

「おらあ！」

「ぐ！」

地面が割れサカビコンボが殴ってきた

「く…地中から？」

まさか地面に潜ることができるのか…？

「おせえよ！」

「ぐっ…」

再び攻撃が繰り出されたのを避け腕を掴んだ

「ハア！」

パンチを繰り出しサカビコンボを殴る

「しゃああ！」

サカビコンボは怯むことなくカニアームで切り裂いた

タフな上にパワーまで強い

「ぐう…」

「おらおらあ！」

ガンガンと何度も殴られて吹き飛ばされた

「ぐ…」

タジャドルコンボが通用しない！？

「ハア！」

コンドルレッグで蹴りを放ったがすぐに弾き返された

「ぐ…」

『映司！まだいけるならこいつに変えろ！』

ヒュンとメダルが投げられ受け取る

「ぐ…なる程…堅い相手にはパワーだな！」

「おりゃあ！」

「うっ！」

サカビコンボに殴り飛ばされながらもメダルを変える

『サイ！ゴリラ！ゾウ！』

『サゴーゾ…サゴーゾォ！』

サークルは白と銀、灰色にかわり

歌と共に重量系のサゴーゾコンボへと変わった

連続でコンボはきついけど今はやるしかない！

「ウオオ！」

胸を叩きドラミングをする

「なに…ぐああ」

相手を地面に叩きつけ素早く殴る

「ウオオ！ハア！」

「ぐああ！」

胸を叩き何度も殴る

「ぐ…貴様」

「ハアア！」

ガンッと鈍い音が響きサカビコンボを吹き飛ばした

「ぐ…」

今だ！

「ハアア！」

ガントレットを飛ばしサカビコンボに直撃させた

「ぐ…」

サカビコンボはフラフラしながら立ち上がる

「いくら闇に支配されていてもコンボには限界があるはずだ…」

体がガクンとなり膝をつく

俺も限界か…

「ハア…ハア…お前の負けだ…」

「ふざけるな…僕は」

後はドライバーさえ傾ければ

「ここで終わる訳にはいかないんだああ！」

「グオオ…」

そんなまだあんなに力が

サカビコンボは黒いオーラをまといながらこっちへ向かってきた

連続コンボのせいで体が

「うらああ！」

「うぐああ！」

サカビコンボはカニアームを変形させクラブのようなハサミに変えて俺を殴り飛ばした

「ぐ…ああ」

オーラングサークルが傷つきへこんだ

『お前なんかに負けるかああ！』

『スキャニングチャージ！』

「う…」

フラフラになりながらも体を起こすが

「目障りなんだよ！」

カニアームに掴まれ動きを封じられた

「ぐっ…」

「しゃああ！」

顔面を何度も殴られる

「ぐ…ぐは」

ボキンとサイの角が折れてしまった

「ハアアア！」

サカビコンボの角が伸びて背中をブスリと刺された

「ぐ…うわああ」

駄目だ…このままじゃ負ける

やっぱりあれしか方法は…

「ウオオ！」

目を紫色に光らせたと同時にサカビコンボは吹き飛ばされた

「ぐあ…なんだと?」

『映司…まさかお前』

仕方ないんだアンク…

あの子を救う為にもこれを使うしかない

「ぐ…」

体内から紫色のコアメダルが現れ掴む

暴走の危険があり…そしてグリードにさせてしまう恐ろしいメダル

「吉井君…戻ってくるんだ」

俺が紫のメダルと戦ってるように君も

「やってみろよ」

…今の君はいつものように明るい生徒じゃない

俺と同じように誰かを救ってきた生徒には見えない

コアメダルの毒に支配されてるんだ

なら俺は教師として仮面ライダーとして

彼に手を差し伸べるだけだ！

紫のメダルをサゴーゾのメダルと入れ替えた

その為にも…吉井君を助ける為にも

「コアメダルを砕く！」

ディアスと明久、映司オリジナルコンボ（前書き）

新ライダーディアスとオーズのオリジナルコンボ紹介です！

ディアスと明久、映司オリジナルコンボ

仮面ライダーディアス

迷い猫の主人公が変身するライダー

コアとセルを使って戦う

見た目はナイトに似ているがマントはなく、色は銀色で顔は狼をモチーフにしている

ディアス　ウルフスタイル

狼のコアとセルを使って変身するディアスの基本スタイル

武器は両腕についている剣とディアスセイバーという大剣がメイン

ディアスセイバーにコアメダルを入れることで必殺技のウルフブレイクが発動する

ディアス　ベアーアップ

ウルフスタイルに熊コアを追加したことで体と両腕がベアースタイルになる

ベアースタイルは動きが遅いので素早いウルフスタイルとは相性が良い

武器は剣からハンマーに変わる

ディアス　ベアースタイル

熊のコアを使って変身した姿

力だけに集中しており早さはほとんどないがパワー一撃必殺級を誇る

見た目は仮面ライダータイガに龍騎を加えた感じ

武器は両腕についているでかいクローとベアーハンマー

ベアーハンマーに熊コアを入れることで必殺技ベアーブレイクが発動する

ディアスには狼、熊の他に2枚のコアメダルがある

しかしセルメダルがない場合ディアスの力は半分しか出せない

仮面ライダーオーズ　サカビコンボ

シュウ様からのアイデアのオリジナルコンボ

黒いコアメダルの「サソリ」・「カニ」・「エビ」をオーズに吉井明久が使用した

ヘッドは「サソリ」（仮面ライダーサソードの頭部、カラーは黒で眼は赤）

アームは「カニ」（仮面ライダーシザースの鎧がモデル）

レッグは「エビ」（エビの模様が足に描かれている）。

能力：どんな強固な地面も潜れる「地面コンボ」。エビレッグは強力なジャンプで空中も水中もぴょんぴょん跳ねる、カニアームは両手がシザースの「ストライクベント」のようなハサミ「クラブシザー」になり攻撃に使ったり地面を掘ることができる、サソリヘッドは暗い所でも目が見える暗視能力がある。

必殺技：両手の「クラブシザー」で相手の両手を掴み動きを封じサソリヘッドの尻尾の部分が伸びて敵に刺さり強力な猛毒を打ち込み相手を内側から破壊する「ヘルポイズン」が必殺技（セルメダルに猛毒は付着しない）。

しかし変身する者怒りが強い程制御できない

変身した者に強い心がなければ我を失い残忍な性格となり悪のライダーとなってしまう

映司が変身したタジャドルのギガスキャンを受けてもびくともせず攻撃力はサゴーゾのボディに傷をつけ角を折る程最強と言っても良い

仮面ライダーオーズ　シンリュウコンボ

火野映司が赤と金色をしたコアメダルを使って変身する

名前とコアメダルは全然関係がない

「リュウ」
「ドラゴン」
「ドラグーン」

破壊と違いと砕かれた闇（前書き）

サカビコンボ対オーズ決着です！

少し微妙ですが読んでくださる皆様が満足できたらいいなと思っています

破壊と違いと砕かれた闇

ガチャリとドライバーを上げる

ゆっくりと映司はメダルを変えた

紫色に光りドライバーを傾けスキャナーを取る

「君を…助ける！」

スキャナーでメダルをスキャンしそのまま腕を胸まで上げた

『プテラ！トリケラ！ティラノ！』

サークルは今までと違い枠がメダルのようになり紫色だ

『プトティラノ～ザウルス！』

いつものように歌が流れた後オーズの周りからは凄まじい冷気が立ち上った

「ぐ…」

サカビコンボにも冷気がかかり凍ってしまった

「うおおおお」

映司は雄叫びと共に冷気を振り払った

たちまち冷気は消し飛びサカビコンボも吹き飛んだ

「ぐああ」

かつてない力のオーラを感じたのかサカビコンボは後ずさる

冷気を振り払った時、オーズは最強の姿プトティラコンボへと変身

していた

「紫色のオーズ！？」

馬鹿な…こんな奴見たことが

そんなことを考える暇もなくプトティラは雄叫びを上げながら向かってきた

「ウオア！」

バキッと音が響き僕は吹き飛ばされた

「ぐああ」

馬鹿な…この僕が

「ウアア！」

「ぐあああ！」

回し蹴りを放たれ一回転しながら吹き飛ばされた

なめやがって…

「ウオオ！」

地面にクラブシザーで穴をあけ潜ろうとした時

「ぐあ！」

いきなり強風が襲った

「ハアア！」

プトティラコンボは背中についていた物を羽にして強風を巻き起こした

「ぐ…ああ！」

吹き飛ばされ建物にぶつかる

なんてパワーだ…

「ウオオ！」

「ぐが…！」

プトティラコンボはすぐさまパンチと蹴りの嵐をかました

「ぐ、がああ」

「ぐ…」

ガクンとダウンする…強すぎる

「オアアア！」

「ぐああ」

蹴りを放たれボディにはヒビが入る

「げほ…がは」

化け物のパワーだ…

こんなコンボが存在してるなんて！

「ウオ！」

プトティラコンボは地面から何かを取り出した

「何…」

こいつ武器まで持ってるのかよ

「ハアア！」

ギャリンと響きクラブシザーが破壊された

「がああ！」

さらにプトティラコンボは斧を振り下ろす

肩のアーマーが吹き飛んだ

「ぐがああ」

「オアアア！」

プトティラコンボは容赦ない攻撃をする

「うわああ！」

何発も攻撃を受けて体はボロボロになった

「ウオ…ぐ」

プトティラコンボもガクンと膝をつく

いくら強くても弱っている状態で変身すればボロボロになるのは目に見えている

「ぐ…はあ…はあ」

「何故だ…」

プトティラコンボはゆっくりと顔を上げこっちを見る

「何故お前はボロボロになりながらも戦う」

「それは…君だって言えてるはずだ」

プトティラコンボは本当の僕に言っているのだろう

無駄なのに…あいつは深い闇の底にいる

「君だって無茶して…自分のことを考えずに人に手を伸ばす」

く…体が動かない…

「俺と同じ…だから俺も君のことは理解できる…」

プトティラコンボはゆっくりと立ち上がった

「俺も君と同じオーズだから」

プトティラコンボはゆっくりとこっちへ歩く

やめろ！来るな！僕はまだ…

「怒りたいのはわかる…俺だってそう…」

「来るな！くるなあ！」

「でも…君は馬鹿じゃない…だから人を…仲間を傷つけるな」

「何だよ…何もこいつのことわからないくせに」

「ああ！わからないさ…けど…人を救いたいなら…」

プトティラコンボはゆっくり斧を振り上げた

「コアメダルなんかに負たら駄目だ…それに君は馬鹿な程本当は愛されているんだ」

（君は…俺とは違った生き方ができる…）

僕は何が何だかわからなかった

気づけば…

プトティラコンボは斧を振り上げたまま手を差し伸べ僕は…

その手を掴んでいた

「なんだよお前！あんなに馬鹿にされたのになんで戻ろうとするんだよ！」

ガンガンと自分を殴る

「やめろ…」

ガシッとその腕が掴まれた

プトティラコンボからは冷気が出ていた

「あ…」

足は凍りつき動けなくなっていた

「コアメダル…あいつの邪魔をするな」

ヒュンと斧が振り下ろされた

「ぐがあああ」

ビキビキとコアメダルにヒビが入る

「コアメダルに覆っている黒い力は…俺が砕く！ハアア！」

斧を下に振り下ろし

僕は完全に砕かれた

「嫌だ…僕はまだ！うわあああ」

爆発が起き僕は消滅した

映司ｓｉｄｅ

「ぐが…はあ…はあ」

メダガブリューを落とし膝つく

変身は強制的に解除された

紫のコアメダルは再び俺の体内の中に入る

「ぐ…」

サカビコンボは変身が解け俺の知っている生徒吉井明久に戻った

吉井君はゆっくりと倒れチャリンとドライバーから黒いコアメダルが落ちた

「…」

彼の体内にはこの世界のアンクのコアメダルが吸収されている

彼はそれを知ったらどんな表情をするんだろう

「グリードだけにはならない…で…くれ」

俺はそう願いながらゆっくりと意識を失った

自分がグリード化が進んでいるのはわかっていながらも

傷と半端と戦う覚悟

鴻上はゆっくりと赤いコアメダルを手に取った

「まさか…この世界にもう一人のオーズが来たとはね」

笑いながらケーキにメダルを置く

「だが…油断してはならない…黒いグリードに続いて新たなグリードが彼らの前に現れるだろう」

鴻上はケーキを箱に入れて里中を呼んだ

「なんですか？」

里中は鴻上が作ったケーキを食べ終えていた所だ

「これを吉井君に渡してほしいのだよ。アンク君が吸収された今、彼にはこれが必要だ」

「了解で～す」

里中は箱を受け取り部屋から出て行った

「紫のコアメダル…それがグリードを倒す鍵だ！」

鴻上は高らかに笑った

「そしてその力を解放するには彼の力が必要となるのだ！！」

吉井ｓｉｄｅ

「おはよう…」

僕は力のない挨拶をしながらいつものように教室に入った

黒いコアメダルによって我を失ってから

今日で十日…昨日まで僕は意識を失っていたらしい

それでも何が起きたかはわかっていた

アンクを吸収したこと…

アンクがいなくなってしまい…彼が再び危うい状況になったこと

フェイトや雄二が怪我をしたこと

火野先生と戦ったこと

もう一人の僕が消えたこと

沢山のことがありすぎて僕は疲れ果てていた

それでも…前向きにならなくちゃ

じゃなきゃ人を救うことはできないんだ！

改めて言い直す

「おはようみんな！」

「おはようアキ君」

「おう…もう大丈夫なのか？」

出迎えてくれたのは少し暗い顔したなのは、頭に包帯をしている雄

二だ

ズキンと頭痛がした

「うん…早く復帰しなきゃいつまたヤミーが「明久君！」うわあ！」

いきなり僕に飛びついてきたのは姫路さんだ

「明久君！私心配したんですよ！」

「ごめんね姫路さん…もう大丈夫だから」

姫路を離して立ち上がる

『吉井を殺せえええ！』

『ＹＥＳ！ｂｏｓｓ！』

須川君の命令ですぐさま十字架に張り付けられた

「うわああ！みんな何すんの！？」

『女たらしのお前なんか死刑だ！』

『『憎たらしくシネエエ！』』

彼らはいつものようになのはにより藻屑にされてしまった

「お前ら！何をやってる！」

鉄人が効果音が出る勢いで現れた

「全く…それと吉井！」

「は、はい！！」

鉄人の声にびびりながらも立ち上がった

「火野先生がお前を呼んでいる。行ってこい」

「…へーい」

火野先生が…なんだろう？

生徒指導室を静かにノックした

「どうぞ」

「失礼しまーす」

あれ？女の人？

ガチャリと開けて入って行く

いつも鉄人が居る

が

指導室に入った時に目に入ったのは黒い長い髪をした泉先生

そして…オーズに変身した日本史担当の火野先生だ

「こんにちは吉井君。とりあえず椅子に座ってよ」

「はい…」

火野先生に促され椅子に座った

「とりあえず…久しぶりだね吉井君」

「はい…あの時はすみませんでした」

火野先生は少し微笑み気にするなと言うように手を振った

「でも正直…あの力には驚いた…まさか紫のメダルを使うことになってしまったからね」

泉先生は少し表情が暗くなっていた

「すみません…でも紫のメダルって何か悪いことがあるんですか？」

つい言葉に出してしまった…

「ああ…あるさ。紫のメダルは暴走する危険が強いんだ」

「え？」

暴走？…僕のあれは怒りから出たものだ

「暴走していたら…きっと君を殺していたかもしれない」

火野先生の言葉が一言一言胸に突き刺さった

それほどまで危険なもの僕は発動させてしまったのか

「俺が君を呼んだのは…戦う覚悟があるか聞こうと思ったんだ」

「戦う…覚悟」

「ああ…今の君にちゃんとあるか知りたくてね…」

「勿論ありますよ！けど…また誰かが傷つくと思うと」

火野先生は少しだけ僕を睨んだ

「吉井君…わかっていると思うけど…それは君がやったことだ」

黙るしかなかった

「それは君の意志の弱さがそうさせているんだ…」

「映司君…」

「わかったよ…今の君は戦う覚悟ができていない。中途半端な覚悟じゃ君はまた人を救えないんだ」

「……」

「映司君！いいすぎです！」

「！？……ごめん」

「火野先生が謝る必要はないですよ…僕が弱いのがいけないんですから」

僕はゆっくりとメダルを机においた

「吉井君…」

「覚悟が出来たら…取りに来ます」

椅子から立ち上がってドアまで歩いて行った

「吉井君…君の答えがそうなら俺は何も言わない」

「失礼しました」

部屋から出て行きガチャリと扉をしめた

傷と半端と戦う覚悟（後書き）

カウント・ザ・メダルズ
現在オーズの使えるメダルは

明久
タカ２
サイ２
ゴリラ２
ゾウ２
シャチ３
ウナギ
タコ２

プテラ

映司
タカ２
クジャク２
コンドル
クワガタ
バッタ
トラ
チーター
サイ

ゴリラ
ゾウ
ウナギ
プテラ２
トリケラ
ティラノ２

＋明久のメダル
クワガタ
バッタ
トラ
サソリ２
カニ
エビ

休息と異変と失った力

ゆっくりと階段を上がる

火野先生に言われたことに唇を噛み締めながら

「僕じゃ…オーズの力は」

罪もない…そして力をくれたアンクを僕は

「アンク…」

アンクがいる腹を押さえながら僕はゆっくりと廊下を歩く

廊下を歩いていたらいきなりＡクラスの扉が開いた

「明久……？」

「フェ…イト」

フェイトはぎこちない笑顔で僕の横を通り過ぎた

「……」

ぎゅっと拳を握りしめる

どうしようもないんだ…僕はフェイトを傷つけた

フェイトは包帯を巻いている腕を見せないようにしていた…心配をかけたくなかったんだよね

「でも…何か寂しいな…」

僕がオーズになったせいで…みんなを

「こんな力…」

今まではこの力を使って人を救ってきた…手を伸ばしていた…そう
思っていたのに本当は

「だったらこんな力…」

グッとオーズのベルトを取り出して窓を開けた

けど…いざ投げようとしたら手が

震えていた

「あれ?何でだよ…僕はもうこの力は」

それでも投げれない

手放したくとも体は言うことを聞かないんだ

「そ…そんな」

途端に何かが蘇ってきた

『…必ず…みんなを救う…ヒーローになってね』

ごめん…まどか

約束守れそうにないよ…

いない恋人に語りかけ僕は学校から出た

変わってしまったこの世界…求めていたものは何だったっけ？

「わかってたさ…僕が僕じゃないことくらい」

本当は存在が許されない

僕はこの世界に否定されている

それでも望んだんだ

それでも彼女を蘇らせたんだ

戻りつつある記憶

オーズの記憶…僕の記憶

「きゃあああ！」

人の悲鳴声が聞こえ気づけば足を動かしていた

「やっぱり…捨てきれないんだ」

ベルトを腰につけメダルを入れる

「変身」

『タカ！ウナギ！タコ！』

やっぱり目の前で起きていることをほっておけない

「うおおお」

同じ学校の子が襲われかけ鞭で動きを封じた

「今のうちに逃げるんだ！」

「う、うん！」

彼女を襲っていたのはウヴァのヤミーだった

「何故止める」

姿は仮面ライダーを思い出させるようなバッタの姿だ

「奴は人にぶつかっておきながら謝らない」

「だからといって襲っていいはずがない！」

鞭を素早く叩きつけ電撃を流す

「ぐああ」

「ハッ！」

両腕を素早く縛り付け電撃を流す

「ぐあああ」

「どうだ！抵抗できないだろ！」

おまけだ！吹っ飛べ！

「セイヤ！」

「ぐおお」

ズガンと響きバッタヤミーを壁に叩きつけた

「明久！お前また」

「勝手に戦うなって」

雄二と巧がバイクに乗りながら現れる

「ふん！」

「うわっ！」

ヤミーは鞭を解き素早く攻撃してきた

僕は機転を利かせ素早く交わし構える

「たくっ…無茶すんな」

雄二と巧はそれぞれベルトを巻いた

「変身」

雄二はセルメダルを弾き、弾いた手でキャッチしベルトに入れた

キリキリと回しカプセルが開く

『カポン！』

雄二はたちまち装甲で覆われた

巧はセルメダルと狼コアを入れる

「変身！」

剣を突き刺した途端銀色の光をまとった

『ウルフアップ』

雄二は目が赤く発光し仮面ライダーバースに、巧はディアスへと変身した

「さあて…稼ぎますか」

「明久大丈夫か！？」

二人が加わり勝負は有利になった

増幅と合体と巨大ヤミー

「ぐわっ！」

バッタヤミーの強烈な蹴りを喰らいディアスがふきとんだ

「ハア！セイ！」

鞭で攻撃するが素早く避けられた

「俺の正義の邪魔をするな！」

回し蹴りを喰らい吹き飛ばされた

「ぐう…」

強い…ヤミーがだんだん強くなってきている

「ドリルアーム」

バースはセルメダルを入れキリキリと回す

途端にメカが現れドリルに変わった

「おらあ！」

「ぐっ」

ギュイイと音を立てながらドリルアームを振り回し腕を攻撃した

「そこだな！」

バースは低くかがみこんでドリルアームを腹に突き立てた

「ぐ…お」

ドリルアームはセルメダルを吸収していく

バッタヤミーは苦しみながらもバースを弾き飛ばした

「ぐ…やっぱり難しいな」

「雄二…バスターで援護して！」

「了解だ」

僕はメダルをウナギからゴリラへ入れ替えた

「ハッ！」

セルメダルを消費しバスターを連射する雄二

「はあ！」

ディアスは後ろからバッタヤミーを切り裂いた

「ぐう…」

『タカ！ゴリラ！バッタ！』

青いウナギボディからガッチリとした銀色の体に変わる

「ハアア！」

ガン！と拳を叩きつけ重い一撃をかました

「ぐ」

「ぐっなんだこいつ！」

「雄二！？」

バースが地面を転がりながら敵の攻撃を交わしていた

「新しいヤミー！？」

姿はヒョウの姿をしている

「ぐああ」

後ろからバッタヤミーの蹴りをくらい吹き飛ばされた

「ぐ…」

「がはあ！」

「た、巧！」

ディアスが壁にめり込んだ

「ヴモオオ！」

「また新しいヤミー！？」

姿はエイに見えるけどサイが混じっている

「ぐ…まさか合体ヤミーか」

バッタヤミーの蹴りを防ぎながらガントレットで殴る

まさかヤミーがこんなに現れるなんて…

「厄介だな」

バースはセルメダルを取り出しドリルアームに加えてさらに武装した

『ショベルアーム』

「…こいつらを野放しにしてたら大変なことになるぞ！」

ディアスはコアメダルを取り出し新たに入れる

『ウルフガゼルアップ』

足の部分が緑と茶色の形をした鎧に変わった

「ちょうどいい…たまってたストレスを解放させてもらうか！」

バースはヒョウヤミーの腕をショベルアームで抑えドリルアームで削り始めた

「明久…同時攻撃行くぞ」

「わかった」

ディアスは足に力を込め、僕はガントレットに力を込めた

「「しゃあああ！」」

ディアスは足の剣を、僕はガントレットを飛ばしそれは一つに重なり巨大な鎌鼬になり2体のヤミーを破壊した

「「ぐああ」」

『セルバースト』

「仕上げだ！おらああ！」

バースはドリルアームで真っ二つにしヤミーを破壊した

「えっ！なんだあれ」

爆発したヤミーのメダルが集まり巨大なエイの化け物になった

『キイアア』

「「「うああ」」」

エイヤミーのビーム攻撃で橋が崩壊し、僕らは吹き飛ばされた

「つ、強い」

『キイアア』

エイヤミーは容赦なく僕らにビームの雨を喰らわせる

「ぐ」

「ぐは…」

「くそ…」

どうしようもない状況にさらにエイヤミーは突進をしてきた

ちょっとまて…しゃれにならないよ

「ぐはああ」

「「うくっ」」

バチンと突進を受けて海へ落とされた

「明久！」

「ぐ…」

『カポン』

『カッターウィング』

僕は橋から落とされ海に投げ出されたが

バースが素早く助けた

「足ひっぱんなよ明久」

「ありがとう雄二…」

バースに橋まで運んでもらいバースはそのままヤミーに突撃した

『キアアア』

「ぐああ！」

「「雄二！」」

エイヤミーの突進を喰らい雄二は吹き飛ばされてしまった

秘策と大量とVSカザリ

「どわああ！」

容赦ないエイヤミーの攻撃になすすべもなく倒れる僕ら

「ぐ…どうすりゃいい」

確かに…緑のメダルは今はないし

うん？これは…

ゆっくりと広げた手の平には火野先生に渡したはずのトラとバッタがあった

そうか…あの時カザリから奪い取ったんだった

「しゃーねえ…俺が一発…ぐ」

「フラフラなのに無理するな雄二」

ディアスに助けられたバースはフラフラだ

正直言ってでかい攻撃は無理だろう

「どうやったら勝てるんだ」

「秘策ならある」

いきなりバースがセルメダルをベルトに入れた

「三人で同時に攻撃だ…あいにくブレストキャノンは打てないがな」

「なる程。名案だね」

ガチャリとメダルを入れ替える

そしてスキャナーで読み込みタトバコンボへと変身した

「だが、三人でやるにはかなり危険だ。同時にやることでエイヤミーの攻撃を受けちまうからな」

「ああ…一発勝負と気合いだな」

僕らは頷き合い僕は腰のオーズスキャナーを取り巧は足ついている剣にセルメダルを入れ、雄二はバースバスターのポッドを取り外した

「いくぞお前ら！」

「「おう！」」

『キアアア！』

「「ぐああ！」」

「う…ぐう」

エイヤミーの目の前に立ち強力な突進を喰らうがなんとか立つ

『スキャニングチャージ！』

僕は足をバッタにして高く跳躍すると三つの輪が出現した

『セルバースト！』

雄二はポッドを銃口に付けて目が赤く発光し、バスターからはギュイイと巨大な音が響いた

『ガゼルブレイク！』

巧の足から巨大な剣が出現して地面に突き刺さる

そこから植物や木の触手が生えてたちまちエイヤミーを拘束した

「「「いくぞ！！」」」

三つの輪をくぐりながら翼が生えて両足で必殺キックを炸裂させた

「セイヤアアア！」

雄二のバスターから巨大な弾が放たれ彼の足が地面に埋まった

「ハアアア！」

巧は地面から剣を突き放し逆さまになった状態で巨大な剣の斬撃を放つ

「デヤアアア！」

三つの攻撃が一つとなりエイヤミーに直撃した

『キアアア！』

エイヤミーはたまらず大爆発を起こした

スタッと着地したらセルメダルが降ってきた

うわあ…凄い数だ…

「おしっ！大量だな」

『カポン』

『クレーンアーム』

なああ！雄二！セルメダルを全部とるなあ！

「全く雄二は欲望まみれなんだからさ」

「無欲なお前には言われたくないな」

「なんだと？」

睨み合い…殴ろうとした所で巧に止められた

くそっ…おあずけか

「「ぐああ」」

瞬時…僕と雄二は何かに切り裂かれた

「明久！雄二！」

素早く起きると目の前にはグリードがいた

「カザリ…」

因縁のあるグリードだ

「久しぶりだねオーズ…メダルを貰うよ」

そうは行くか…僕はアンクを

「今日こそ決着をつける」

メダジャリバーを取り出して構える

「俺達も行くぞ」

「ああ！」

「ハアアア！」

勢い良く走りカザリに攻撃を仕掛けるがカザリはクローで受け止める

「今日でお前のメダル全部貰うよ！」

「逆に僕が完全復活をするけどね！」

ガキイと火花をぶつけ合う

「フン！」

「うわあ！」

砂嵐を受けて地面に飛ばされた

「ぐ…」

『カポン』

『ドリルアーム』

ドリルアームを装着したバースがカザリの腹を攻撃した

「効かないよ…」

ガリガリとカザリから吸収していたが逆にドリルアームが壊れ始めた

「うおっ！」

そのままバシンと叩かれドリルアームは破壊された

「ハア！ハア！」

クローで何度も切り裂かれてバースは地面に倒れた

「雄二！うおお！」

「ハアアア！」

僕とディアスが剣で攻撃するがカザリは逆に弾き返した

「ぐ…うわああ」

怯んだ所に回し蹴りを打たれディアスは宙を舞う

「巧！くそ！」

カザリのクローとぶつかり合う

「ハア！」

「ぐああ」

水流弾を喰らいダウンする…このままじゃ

「そろそろメダルを貰うよ」

ガツンと響き鎧に傷がつく

「ぐ…」

駄目だ…このままだと負ける

『ショベルアーム』

「うおお！」

バースが再び武装しカザリに攻撃をする

「ぐ…お前！」

カザリの腹に直撃しカザリは怯んだ

「おらあ！」

バースはショベルアームで顔を拘束し殴り飛ばした

「ぐああ！」

「うおお！ハア！」

僕もすかさず跳び蹴りを喰らわせカザリを吹き飛ばした

「ぐ…明久…次で決めるぞ」

ガチャリとポッドを銃口に装着する雄二

「ああ！勿論だよ」

けどその前にディアスが宙に浮いていた

「巧！？」

「うああ」

そのまま地面に叩きつけられ、そして僕らにぶつかった

「ぐは…」

「うぐ…」

「残念だったね。消えるのは君達だよ」

カザリから出ているあの力…まさか

「ガメルの…！？」

あいつガメルのコアメダルまで取り込んだのか

「残念だったねオーズ」

「うわあああ」

砂嵐と水流弾…さらに重力操作で地面に叩きつけられた

ぐ…体があちこち痛む

「フン！」

「ぐああっ！」

「「明久！」」

砂嵐を再び受けて倒れかけた

「一か八か…」

もうあいつを倒すにはコンボしかない

ならこのコンボで

体内からシャチ、ウナギ、タコを取り出した

「そうはさせないよ」

カザリが素早く攻撃を仕掛け吹き飛ばされた

「しまった…」

メダルが弾け飛び地面に転がる

「メズールのコアメダルか…」

ウナギ、タコを回収されるがシャチだけは回収される前に奪い返した

「させるもんか…このコアメダルだけは渡さない」

「オーズ…フン！」

「ぐああ」

クローで切り裂かれダウンする

「ぐ…あ」

「いい加減くだはりなよ！」

ズバアと切り裂かれ変身が解除された

「ぐは…」

「「明久！？」」

「うるさいなあ！」

砂嵐を喰らいバースとディアスも変身が解除された

「ぐ…」

巧の狼コアがカザリの下に転がって来た

「へえ…このコアメダルも貰ったよ」

カザリは狼コアも拾い僕を踏みつけた

「うがあああ」

手からトラとバッタが落ちる

「返してもらうよ僕のコアメダル」

カザリは二枚のコアメダルを拾い上げ全部まとめて吸収した

「う…ぐ…力が力が！うああ」

カザリはいきなり光だした

な、何だ

「…嘘でしょ」

カザリは姿が全く変わり体や足に銀色の棘が生え…顔も狼の形へ変貌した

「はあああ」

カザリが両手を広げた瞬間海が真っ二つに割れた

「まじかよ…」

「これがグリードの力…」

こんなのどうやって勝てばいいんだ

「君達には死んでもらうよ」

周りから凄まじいオーラが発生し僕らを吹き飛ばす

「うわああ」

体内から赤いコア以外のコアメダルが落ちる

「ぐふ…」

地面に叩きつけられ額から血が流れる

「くそ…」

カザリは僕らに迫ってくる…足が動かない

このままじゃ

「じゃあね…オーズ！」

砂嵐が僕に向けて発射された

「「明久！」」

僕じゃやっぱり勝てないのかな…結局

「諦めるには早すぎるんじゃないのかな？」

突如聞こえた声は僕を砂嵐から守った

火野先生…？

「…なんだあのカザリは」

「いいからいくよアンク」

メダルをアンクから受け取りベルトを付け先生は変身した

「変身！」

『タカ！トラ！バッタ！』

三つのサークルが現れ刻まれる

『タットッバ！タトバ！タ・ト・バ！』

黒い姿から色がつき仮面ライダーオーズへと変身した

『オーズ！？なんでもうひとり？』

「ハッ！」

バッと構えるタトバコンボ

「映司…奴は普通じゃない…気をつけろ」

「わかった」

それを合図にタトバコンボは走り出した

邪悪と協力と海のコンボ

「ぐわあ！」

タトバコンボは吹き飛ばされ建物に衝突した

「ぐ…」

「何でオーズがもう一人いるのかはわからないけど…」

カザリは腕の剣を素早く飛ばした

「僕の相手じゃないね！」

「ぐああ！」

カザリが飛ばした剣は立ち上がったタトバコンボを切り裂いた

タトバコンボからは火花が散る

「ぐ…やっぱりあのコンボじゃなきゃ…」

「馬鹿か映司！そんなふらふらな状態だったら確実に暴走するぞ！」

タトバコンボはぐっと拳を握りしめ走り出した

「うおお！ハア！」

繰り出した拳をカザリは避ける

「ふん！」

ズバッと剣で切り裂かれタトバコンボはまた吹き飛ばされた

「映司！？」

「火野先生！」

駄目だ…先生ですら勝てないなんて

僕に…何ができるんだ…

タカメダルをぎゅっと握る

「ママ～！どこいったの？」

小さな子供…まずい！

「俺はみんなを守って…」

「へえ…オーズ守れるもんなら守ってみなよ」

「やめろ！！」

カザリから剣が少女に向けて放たれた

「あの子をね！」

「うおお！」

僕は歯を食いしばって懸命に走る

何やってるんだよ僕…守るって

手を伸ばすって…諦めないって決めたじゃないか…！

それなのに怯えて逃げて…見過ごして

そんなことで…オーズの力を十分に

「使えるはずがないんだ！」

間に合う！間に合ってくれ！

僕は…仮面をつけていなくたって…いつだって仮面ライダーだ！

それを…僕は忘れていたんだ！

「うおおおお！」

「明久！」

「なにっ！」

手を伸ばせば…見えてくる

「ぐがあっ！」

グサリと剣が突き刺さる…血がポタポタと流れる

けど…

「大丈夫？怪我はない？」

笑顔で不安なこの子を撫でてあげる

「う…うん…お兄ちゃん…」

泣きながら僕に抱きつく少女…

「大丈夫…大丈夫だから」

ゆっくりと撫でて恐怖心を取り除いてあげる…

それが僕のやるべきことなんだ

「お兄ちゃん…ありがとう」

声も出せない程怖かっただろう…けど大丈夫

「うん…さあ早く逃げて…大丈夫。僕が守るから」

少女をゆっくりと押し出す。不安な顔だったけれどたちまち真剣な顔になる

「うん！」

そして力強く頷きその場から離れる

「逃がさないよ！」

カザリがセルメダルを投げてくる

少女の頭にスロットが現れる…こんな少女からヤミーを作り出させるもんか！

「しゃあ！」

バチンとセルメダルを叩き落とした

「なっ…」

「先生！今だ！」

タトバコンボは素早くカザリを切り裂いた

「うわあ！」

「ハアア！」

追い討ちを立てるように背中を切り裂いた

「うおおおお！」

僕も風のように走り

「だっしゃああ」

跳び蹴りをお見舞いした

「うわああ」

カザリはたまらず吹き飛ばされメダルが飛ぶ

「っ！」

アンクさんは素早く腕を飛ばすがその前に僕がキャッチした

「お前…」

「今までのメダルはあなた達にあげます…けど今からは…」

ドライバーをつける

「僕が頂きますから」

にかっと笑いながらタコを入れる

「お前…メダルを横取りする気か！」

ウナギをゆっくりと入れる

「違いますよ…先生…僕やっと答えを見つけました」

「吉井君…」

シャチをカチャンと入れる

カザリの前に立ち後ろから先生に喋る

「僕はこの力で…グリード達を倒します！もう…あんな悲劇を生み出さない為に！」

そしてもう迷わない！たとえ何があっても僕は…戦う！

「変身！」

「「明久…」」

スキャナーで三つのコアメダルを読み込んだ

『シャチ！ウナギ！タコ！』

サークルは青色になり上からシャチ、ウナギ、タコの絵柄に変わった

そしてサークルが刻まれ大量の水が覆う

『シャシャッシャウタ！シャシャッシャウタ！』

水が弾け飛んだ時にはシャウタコンボ…海のコンボに変わった

「先生！力を貸してください！僕だけじゃ限界があります！」

先生はゆっくり頷き立ち上がった

「映司…こいつでいけ！」

「ああ…わかったよアンク」

『タカ！クジャク！コンドル！』

『タ～ジャ～ドル～』

火野先生はタトバからタジャドル…灼熱コンボに変わった

「いくよ吉井君」

「了解！」

ババッと構える僕ら

「オーズが二人？」

「すげぇ…ダブルコンボだ」

「ああ…」

「「ハアア！」」

同時に走り出した

「くっ…フン！」

カザリは剣を飛ばすが僕は液体化、タジャドルは盾で防ぐ

「なに！」

「ハアア！」

液体化した僕はカザリに突進した

「ぐう！」

カザリは攻撃するがスカッとなるだけだ

「ハアア！」

タジャドルは手から炎を放ちカザリの剣を破壊した

「ぐ…お前ら」

カザリがタジャドルに水流を使う前に僕は素早く鞭をとりだした

「はああ！」

鞭でバチンと一気に数カ所を攻撃する

「あぐっ…あっ…うわ」

「くらええ！」

ヒュンと巧みに操り腕と足を拘束し電撃を流す

「あああああ！」

カザリは身悶えるように叫ぶ

「ハアア！」

そこへタジャドルが炎の拳を放った

「ぐはああ」

ジュウウと音を立て大量のコアが飛び散る

「よっ…ほっ」

カザリを拘束したまま散らばったコアを回収した

「お前！勝手に取るな！」

「まあまあ…アンク落ち着いて」

「貴様らあ…」

カザリは鎧が破壊されボロボロになっていた

「まだまだあ！」

ダダダと走り出し、タジャドルもそれに合わせる

「「セイヤアアア」」

僕は水をまとった両足キックを、タジャドルは炎をまとった両足キックを挟み撃ちにして放った

「ぐ…がああああ」

カザリはたまらずに吹き飛んだ

「よっ…これって…」

手にしたメダル…それはあいつのメダルだった

「お前ら…絶対許さないよ」

「黙れ猫怪人！あんな可愛い少女をよくも…さては」

ためを作ってからビシリと指を指す

「貴様…ロリコンだな！」

絶対そうだ！あんな少女に手を出すなんて絶対ロリコンだ！

「吉井君？」

「馬鹿かこいつ」

あ、あれ？何か変なこと言ったかな僕？

「はは…君ならあのコンボでも耐えれそうだ…な」

「先生！？」

タジャドルは変身が解除され火野先生へと姿が戻った

勿論…雄二や巧はその光景に驚いている

「はあ…限界か…」

無理もない…あんなにボロボロにされた所をコンボだ…そりゃいくら先生でも疲れるよ

「吉井君…君が決めるんだ」

そう言って先生はジャラリとコアメダルを渡した

「先生…」

「おい映司!?」

「いいだろアンク。あのコアメダルはこの世界の物だし…あくまで

も主役は吉井君なんだし」

この世界？主役？

「ハアア！」

「なっ…ぐお」

カザリが放った砂嵐を片手で受け止めた

「吉井君…君の決意見せてもらったよ」

火野先生はそう言ってからゆっくりと下がっていった

後は僕だけ…か

馬鹿で…なんの取り得もない僕だけど

確かにできることがあるんだ！

「うおおおお！」

雄叫びと共に海が龍のような姿をして現れる

「ハアア！」

海龍に乗りカザリに攻撃する

「ぐああ」

「いくぞおおお」

僕の決意…絶対成し遂げる！

『スキャニングチャージ！』

鞭でカザリの腕を拘束し海龍が放った水流をまといタコドリル足に
変化させトドメを放った

「セイヤアアアアアアア！」

ガガガガガとカザリの腹を破壊していく

「はあああああ！」

さらに力を込める

これで…最後だあああああ

「そんな…僕が…うわあああ」

カザリの腹が貫通しカザリの…ベルトが破壊された

カザリは大爆発を起こしそこから六枚のメダルが落ちた

「ほっ…やった」

見事にキャッチした

「ついにグリードを…」

体が痺れる

「あれ？…意識が…」

そうか…全く…無茶だけは止めれないや

バタンと倒れ意識が遠のいていった

邪悪と協力と海のコンボ（後書き）

カウントザメダル

現在オーズが使えるメダルは

明久
タカ２
クジャク
クワガタ
バッタ
ライオン３
トラ３
チーター３
サイ２
ゴリラ２
ゾウ２
シャチ
ウナギ
タコ
プテラ
サソリ
カニ
エビ２
オオカミ

映司
タカ２
クジャク
コンドル
クワガタ
カマキリ
バッタ
ライオン
トラ
サイ
ゴリラ
ゾウ
プテラ２
トリケラ
ティラノ２

二学期と祈りとオーズの部屋

夏が終わり僕らは二学期を迎えた…

途中いろいろあったけど…平和に学園生活を楽しんでいる

一人をのぞいて…

『須川が逃げたぞ！』

『『逃がすなああ！奴は確実に異端審問だあ』』

『待てみんな！吉井が来たぞ！』

「おはようみんな！」

『『ｐａｒｔｙｔｉｍｅ！』』

入るなりそうそう僕はＦＦＦ団に襲われた

「うわっ！」

攻撃を避けて一人気絶させた

「ごめんね新田君…まだやる？」

『『須川を引き続き追ええ』』

相変わらず切り替えが早いことで

「アキ君おはよー！」

そう言って幼なじみは抱きついた

「っとおはようなのは」

カザリを倒してから数日…ヤミーが現れなくなり僕らはいつものように学園生活を満喫していた

いろいろいざこざがあったけどなのはやフェイトとは一旦別れ…今では普通の友人に戻っている

決めたのは二人で僕のちゃんとした答えが聞きたいからしい

まあ…ちゃんとしなかった僕が悪いしね…改めていつか告白するよ

「おはようございます明久君」

「おはようなのじゃ明久」

「おはよう明久」

「にゃぁ…明久おはよう」

「みんなおはよう」

いつものように僕はみんなと挨拶をかわす

「おはよう明久」

「うん。おはようフェイト」

フェイトは申し出をだしFクラスに転入したんだ

フェイトだけじゃないけどね

「おはよう明君」

「おはよう…明久」

「おはよう二人共」

幼なじみのまどかやほむらも転入したんだ

理由は僕を守る為らしい…うーん何でだろ

「マミ、翔子！なんでお前まで！」

「坂本君と一緒にいたいからよ～」

「……そう言うこと」

雄二も雄二で大変らしく巧も巧で大変らしい

前にヤミーを倒した時…雄二が女の子を助けた時霧島さんがバースにアイアンクローを…

「席につけお前ら！」

鉄人が出現し僕らは素早く持ち場についた

教室は清涼祭以来戻してないので設備は綺麗だからまどかを入れても大丈夫だったんだ

ちなみに須川君…最近彼女ができたらしい

「もうすぐで合宿が始まる訳だが…」

僕は鉄人の声を聞きながらゆっくり手の平を広げた

アンク…僕の大事な仲間…彼を助ける方法を僕はずっと考えていた

「いいか…Fクラスは…現地集合だ！」

「「案内すらないのかよ！」」

教室に悲鳴が響き渡るけど…僕にはどうでも良かった

「以上だ」

鉄人はそう言った後教室を出て行った

机の上には合宿の案内や日程について書かれたしおりがおいてあった

「アンク…君を助けなきゃね」

けど…アンクを復活させたら体をのっとられていた人が…

「明君…」

気づくとまどかが覗き込んでいた

「まどか？どうしたの」

「やっぱりアンクが気になる？」

「うん…大切な家族だからね」

苦笑しながらタカメダルをポケットにしまった

「明君…努力は無駄なことじゃないよ…明君がちゃんとした答えを
見つけ出せるのを信じてるよ」

「ありがとうまどか」

そしてごめんね…僕は君を

ゆっくりと歩きながら僕は三つのコアを取り出した

「さてと…お話しようよみんな」

『僕は興味ないね…』

ライオンのコアはそう言う…

「カザリ…せっかくだし君と友好度を深めぐふう」

メダルが額にぶつかった

『冗談じゃないよ…誰が君と仲良くなるもんか』

『いいじゃないのカザリ…砕かれないだけましでしょ?』

『メズールまで…』

『明久…おやつ!』

サイのコアが動きながらそう言う…

全くグリードって本当に面白いよ

「わかってるってガメル。」

『オーズの坊や…言え…明久…アンクとは話せたのかしら』

「はは…できたら苦労しないよ…」

アンクのコアだけ話しても何も返ってこないんだ

それが凄く寂しくて…

『アンクアンクって君はグリードの仲で一番アンクを気にかけているんだね』

『まさか…やきもちかしらカザリ？』

『ち、違う！』

『やきもち食べるうう』

「あはははは！」

『わ、笑うな！』

「ごめん。ごめん…じゃあ帰ろ」

ゆっくりと三つのコアを体内に入れた

「お帰りみんな」

にかっと笑いながら僕は再び歩き出した

「……明久の真実？」

「そう！彼の本当の秘密を知りたくないかね？」

「アキ君の…本当の秘密」

久しぶりみんな。私は高町なのは

今、私、フェイトちゃん、まどかちゃん、ほむらちゃん、坂本君、土屋君、巧君に希ちゃん、文乃ちゃんに秀吉君で鴻上さんの所に呼ばれたの

「じゃあさっさと話してもらおうか明久の真実を」

坂本君たら相変わらず口調が荒いんだから

「いいだろう！」

鴻上さんはそう言った後に私達を別の部屋に連れて行った

そこは…オーズのメダルや立体像や剣など…沢山の物があったの

「ようこそ！王の部屋へ！」

私はその時…コアメダルに目がいった

沢山のコアメダル…

「ほお…やはり君はコアメダルに興味があるのかね」

鴻上さんは笑いながら私達に見せてくれた

「何だあのコアメダルは…」

「俺のと同じ銀色」

「そうだよ巧君！君のメダルは元々はオーズの物だったのさ」

鴻上さんはそう言いながら秘書の里中さんから何かをもらって私達に見せました

これは…

真実と再生と恐竜グリード（前書き）

明久の真実が明かされます

そして次回は明久の過去編です

真実と再生と恐竜グリード

「アンク…」

セルメダルに赤い布を敷き僕はタカメダルを乗せた

僕の隣にはアンクが体をのっとっていた生徒がいた

そしてここは僕の家…中には木下さん、杏子さん、後輩のティアナがいた

三人共アンクに思いを寄せている人だ

医者から言われた余命約2日…

この人はアンクが離れすぎたことでもう…命が助からないらしい

正直僕にとっては複雑でもあった

僕は医者を説得してこの人を家まで運んだんだ

新たな命を宿す為に

けど…それはもうこの人じゃない

アンクの命となるんだ…

正直嫌だった…それでも決心したのはこの人を救う為…そしてアンクに会う為だ

何でだろう…最初は追い出すことしか考えてなかった…

化け物としてしか見なかった

けど…こいつと一緒にいてそうじゃない

僕はあいつと友達になりたいんだ…そう思っていた

「アンク…お前の欲望…叶えさせるよ」

アンクの欲望…命…人間になることだ

確かにセルメダルだけだからアンクは化け物だ

けど命を与えれば…形ではなく人としてあいつは…

僕も考えなきゃ…あいつを本当の人間にする方法を

「蘇るんだアンク！」

呼応するかのようにアンクのコアはセルメダルを取り込み…たちまちあの人の体に入っていった

「アン…ク」

目の前には金髪で赤い服を着たあいつが立っていた

「久しぶりだなあ明久…」

「「「アンク～！（先輩！）」」」

「うわあ！なんだお前ら！」

良かった…アンクは必要とされてるんだ

「はは…お帰りアンク」

見つけ出すよ必ず…お前を人間にする方法を

『呼んでる…私を』

『まどか?』

『行かなくちゃ…』

私はほむらちゃんを制し鴻上ファウンデーションを後にした

『明君が呼んで…』

えっ!何?何で私…外に…

『うあっ…』

体内から何かが出る音がした…

天地を翻すかのように大雨が降り出す

『苦しいよ…なん…』

腕に違和感があり恐る恐る見る…

『えっ…いや！』

私の腕は黒と紫色の…怪物の腕に変わっていた

『いやあああ！』

私は叫びながら必死に走り出した

助けて…明…君

「雨だ…」

「かなり降ってるな…」

「どうしよう…」

ゴウゴウと音を立てる…凄い雨だ

「仕方ないよね…みんなしばらく休んでいくといいよ」

「ありがとう…吉井君」

木下さんはお礼を言いながらアンクを見ていた

僕は邪魔かな？

「そうだ…ちょっと買い物いってくるよ」

「この天気でですか！？」

ティアナは驚いたように立ち上がるが僕は笑った

「大丈夫。傘だってあるし…そうだみんなはアンクとゲームでもやりなよ」

「おい明久！どうして俺がこいつらと」

僕はウィンクをしてリビングから玄関へ向かった

「ちっ…余計なことを」

「じゃあ行ってきまーす」

ガチャリとドアを開けすぐに閉めた

「全くアンクは素直じゃないなあ」

苦笑しながら傘を開き外へでる

うわあ…強いなあ…こりゃあ傘が壊れそうだ

今日の夕飯を考え歩いているとポケットの携帯が鳴った

「はい…吉井です」

返ってきた声は思いがけない人だった

『明君…助けて』

まどか!?

「もしもしまどか?今何処にいるの!?」

僕は理由よりも場所を聞いた

弱った声…まどか傘持ってないのか…いやそんなことより何があったんだ

『文月…公園』

「わかった!すぐ行くから絶対に動かないでね!」

電話を切り傘を畳む

雨は冷たく…痛い…

「けど早く行かなきゃ！」

水が跳ぶくらい足を踏み込み走り出す

「はっ…はっ」

早く行かなきゃまどかが風邪を引いてしまう

ダッダッダと角を曲がったり物にぶつかるがお構いなしに走る

見えた！文月公園だ！

「まどかー！」

まどかはベンチで弱々しく横たわっていた

「まどか！…ぐがあ！」

な、何だ…何かが僕の体内に

「ぐあ…」

えっ…？何でカザリ達のメダルが…

訳がわからずとりあえずカザリ達のコアをポケットにしまう

「まどか！」

視界が…

僕は激しい目眩に襲われながらもまどかの元へたどり着いた

素早く内ポケットから携帯を取り出す

「もしもし…ほむら…文月公園にまどかがいるんだ！しかも弱っている…早く来てくれ」

ほむらは驚いたように返事をした

それを合図に電話を切る

まどかに傘を立ててふらついた体に鞭をうつように立ち上がって公園をでる

「ぐ…う…はあはあ」

激しい頭痛が襲い体はガクガクと震えだした

「なんだ…これ」

何で…体が

「う〝っ！」

駄目だ…意識が

明久は苦しむように倒れた

その目は紫色に光っていた

ＮＯｓｉｄｅ

オーズの部屋では沈黙が流れる

「では話そう！吉井明久の真実を」

鴻上は叫ぶと同時に語りだした

８００年前…王の命令によりとある錬金術師がコアメダルを作っていた

そして錬金術師は王の命令により十枚目のコアメダルだけを取り除いた

すると９枚のコアメダルがコアメダルを求めて一つの塊となった

それがグリード…

「そしてそのグリードを倒す為に王が使用した物がベルトとコアメダル」

「まさか…」

「そんな物がなんでこの時代に」

「そしてオーズとなとた王は圧倒的な力で敵をねじ伏せたのだよ」

「その中にいた一人がアンクか」

雄二は納得するように呟いた

「しかし…大量のコアメダルを使用したオーズは暴走し…グリード達もたちまち封印されたのだよ」

「そんな…力に溺れて自滅したなんて」

フェイトは悲しそうなに俯いた

「しかし！時が流れ…オーズは復活した！」

「けど…もし大量のコアメダルを使って王が暴走したと言うことはアキ君も」

なのはの言葉にみんなが俯いた

「その心配はないのだよ！！」

鴻上は高らかに吠えた

「吉井君こそオーズにふさわしい存在だ！」

「どういうことだ…何で明久がふさわしいんだ」

雄二の言葉にみんなが頷く

しかし鴻上は笑顔を絶やさない

「君達はわからないが吉井明久はかつて！仮面ライダーオーズに変身したのだ！」

鴻上の一言でみんなが驚いた

「そう…二年前…この時代にオーズが現れた」

「ちょっと待て！明久がオーズに変身したのは今年だ！」

「その答えは間違いだよ坂本君…いやバース」

鴻上は何かをめくるとそこには明久が映っていた写真があった

「どういうことだ…」

明久が変身している写真の下にはこう書かれていた

『吉井明久１５歳…死去』

「どういうことだ！嘘はたいがにしろ狸」

「落ち着け雄二！」

「君達にはわからない…何故なら吉井明久という本当の人物は一度死んだのだ！」

「そして鹿目まどか！彼女もまた本当の鹿目まどかとして死んだのだ！」

その言葉はみんなの心を凍らせた

「何より吉井明久はオーズ…クガ王の子孫だ！素晴らしいい！」

「どういう…こと？アキ君が死んだ？アキ君がオーズの子孫…」

なのはは何が何かわからず呟くしかなかった

過去と僕とオーズ（前書き）

カウントザメダル
現在オーズが使えるメダルは
明久
タカ２
クジャク
クワガタ
バッタ
ライオン３
トラ３
チーター３
サイ２
ゴリラ２
ゾウ２
シャチ
ウナギ
タコ
プテラ３
トリケラ３
ティラノ３
サソリ
カニ
エビ２
オオカミ

映司

タカ2
クジャク
コンドル
クワガタ
カマキリ
バッタ
ライオン
トラ
サイ
ゴリラ
ゾウ
プテラ2
トリケラ
ティラノ2

過去と僕とオーズ

「おっきろ～！」

「どわあ！ふげぶ」

幼なじみ…鹿目まどかに掛け布団を思い切り取られて僕はベッドから転倒した

痛い…頭が朝からかち割れそうだよ

「おはよう明君」

「おはようまどか…相変わらず乱暴なんだから」

まどかは笑ったまま喋る

「明君が起きないのが悪いんだよ？」

ううう…言いかえせない…本当に言いかえせないよ

「全く…今日は卒業式なんだよ?」

「わかってるよ…」

今日は長月中学の卒業式…僕とまどかは桜が満開なこの季節で卒業するんだ

今日こそ…伝えなくちゃ

「まどか…あのさ」

朝食を食べていたまどかは時計を見ていた

「あああああ!!」

まどかの大声が僕の声を遮った

「明君！遅刻だよ！！」

「えええ！？」

時計を見ると時間は８時

しまった…何のんびりしてたんだ僕は！

バタバタと鞄を持ち急いで外に出る

「最悪だ！最後の最後で！」

「とにかく走ろうよ明君！」

まどかに促され急いで走る

が、その足は急に止まった

「忘れ物しちゃった！！」

「えええ！？早く取りにいって明君！」

「サーイエッサー！」

まどかの叫びにびびりながらも素早く家に戻る

鍵を開けて素早くリビングに上がる…ドンとドアを蹴り飛ばし机に置いてあるメダルを取った

「これだけは絶対忘れないよね～」

再び鍵をかけ急いでまどかの元へ走る

コアメダル…僕の家に伝わってきた…家宝みたいな物だ

お祖父さんに渡され肌見離さず持っている

そしてもう一つ…僕の先祖が使っていたこのベルト…

これらはとても重要な物なんだ

「畜生！間に合わない！」

まどかを背負いながら全力で走る

「明君目が回るよ～」

ごめんねまどか…今止まったら僕が走れなくなるんだ

「うおおお！」

見せてやる僕の本気を！

「うおりゃあああああああああ」

風になるんだ僕！

一陣の風…

「ぐべらああ」

ドカアと壮大に壁に激突した

ふっ…まさかこんな罠が…

「明君!!」

目が～星が見えるよ～

『きゃあああ』

『うわあああ』

「ぐふ!あべし!」

え?何?何なの今日は!

みんな何故ぶつかってくるのさ!!

「明君…」

「何？」

幼なじみの弱々しい声が聞こえ尋ねてみる

「あれ…」

まどかが指差した方向に…何かがいた

「え？」

怪人？仮面ライダーじゃあるまいし…何かのショー？

いや…ショーならあんな光線当たらないよね？

なんてことを考えていたら光線はこちらに飛んできて頬をかすめた

「え？」

頬からは血が流れる

いやちょっと待って欲しい…

何これ？一種のパレード？

「明君！逃げようよ！！」

「えっ…あっ…」

まどかが何かに気づいたのか服を引っ張る

そうこうしている間にも光線が飛んできた

「うわあっ！」

なんとか避けて急いで逃げる

何なの一体！何で！

『きゃああ』

女性が打たれ…倒れる…血が…

「うぇっ…」

急に吐き気がこみ上げ思わず吐き出した

「あ、明君!?大丈夫?」

まどかは背中から覗いてくるが見せないようにする

あんな恐ろしい光景…まどかには見せれない

「げほっ…」

何が起きているんだ…あいつらは誰なんだ…

再びきた吐き気をこらえ再び逃げる

「がはっごほ…」

「明君…」

まどかにさすってもらいながら僕は胃液を吐き出した

悲惨すぎるんだ…現実じゃありえない

でもこれは現実

『うわああ』

また悲鳴が聞こえた

「うわあ！」

「きゃあ！」

建物が破壊され激しい風圧が襲う

「え…？」

こちらへ確実に向かってくる…あの悲惨な光景の元凶が

『コアメダルを渡せ』

『……』

二人いた…人間というレベルじゃない

化け物だ…

『コアメダルを渡せと言っている』

「あ…」

恐怖で声がでない

そういえば…昔お祖父さんから聞いたことがある

コアメダルによって出来た化け物がいたということを…

目の前にいる奴らは無口な奴は恐竜のような姿だ…

そして今喋っているこいつは…

『コアメダルを渡せ！！』

「うわっ！」

放たれた光線を避けまどかを連れて逃げた

もう一人の奴はユニコーンに似た姿…ケンタウロスのような足…そして翼…

金色の色をした化け物だ

けど…何だろう

何故か…僕はこれをわかっていた気がする

突如…何かのビジョンが見えた

それを理解した時…何をすればいいのかわかった

戦闘なんかしたことない

遊び感覚でしかなかった

でも…今は遊びじゃない

命をかけた…戦い

昔…僕の祖先がこの力を使ってたなら

「まどか…」

僕はゆっくりと幼なじみを見る

「逃げるんだ…」

「え？」

彼女を巻き込む訳には行かない…

「逃げて逃げて…逃げ延びるんだまどか…」

「明君…？」

「早く行くんだ！」

僕はまどかに叫んだ…まどかは悲しい顔をしていた

ごめんねまどか…

僕には結末がわかるんだ…

僕は…

「明君…連絡してね？」

これが幼なじみの最後の言葉だった

僕は頷くことしかできなかったんだ

昔…こう言われたんだ

『神の力に近づく者には…それなりの対価が下される』

僕は…馬鹿だけど…天然だけど…

ずっと…告白すらできずにいたけど

そんな僕だけど…今…確かに僕でもやれることがあったんだ

ゆっくりと封印のベルトをつける

ベルトの石は割れ、本来の姿が現れた

『…何？』

『それは封印の…』

ゆっくりと三枚のメダルを入れ…腰にある物で読み込んだ

何故かわかった…変身の仕方が

「変身！」

『タカ！』

僕が…

『トラ！』

僕が…！！

『バッタ！』

変身する！

『タットッバ！タトバ！タ・ト・バ』

姿が変わった瞬間巻き起こる巨大なオーラ

『ぐ……』

『ぐああ！』

オーラは街の一部を破壊した…

強力すぎる力…僕はそれに近づいてしまったんだ

彼女があの破壊された中にいないことを信じて…

もう後戻りは出来ない

この世に再び…王が…オーズが降臨した

封印と圧倒と爬虫類コンボ

「なんだ…この力は…」

「あれがオーズだと…」

二体のグリードが驚く中…メダルの戦士オーズは歩み始めた

それは…歩くごとに地面にヒビがはいり…威圧感が増した

「……」

メダルの戦士はグリードに歩みより攻撃を始めた

「ハアアア…」

繰り出された拳に恐竜のグリード…ギルは防ぎきれず腕を破壊される

「ぐは…」

セルメダルが落ち…ギルは跪いた

「ふん…！」

放たれた蹴りを受け止めオーズは逆に蹴りを放つ

「ぐがあ…」

「うお！」

タトバコンボは金色のグリード…カイに蹴りを放った

「ふん…」

しかしその蹴りは簡単に受け止められ逆に攻撃を受けてしまう

「ぐは…」

明久ｓｉｄｅ

「セイヤ！」

トラクローを展開し金色のグリードに攻撃を放つが簡単に受け止められる

強い…

「オーズとはその程度か…ふん！」

「ぐあ…」

くっ…恐竜グリードだけでも

恐竜グリードは腕が復活し…さらに強化していた

「何？」

「残念だな…俺の力を甘く見るな」

顔はティラノのような赤い目に牙…体はトリケラのようにがっしりしている…

足もティラノのように鋭く背中にはプテラの翼

「ハア…！」

恐竜グリードは剣を出し切りかかってきた

「ぐああ…」

切り裂かれ火花が飛び散る

さっきと違い…あの金色グリードより強くなっている

「余所見してんじゃねえよ!!」

「ぐあっ！」

蹴り飛ばされ光線を受けてしまった

「ぐは…」

つ、強い…

「なんだ?噂に聞くオーズとはこの程度か」

「とっとと消えろ雑魚」

言いたい放題言ってくれるじゃないか

「まあ…貴様が俺らに勝てる訳ないよな…なんせ俺らはお前が封印された後に覚醒したからな」

「何…どういうこと…覚醒って」

「オラアア！」

繰り出された攻撃を防御しながら反撃に出る

「やわだな！オラアア！」

攻撃は通じず逆に攻撃を喰らう

「ぐああ…」

「ふ…！」

恐竜グリードは手から光弾を放った

「ぐああ！…」

わからない…どうやったらこいつらに勝てるんだ

「オラアア！」

「うわああ！」

金色グリードの攻撃を受けて建物に衝突した

「がは…ぐは」

体中が痛い…苦しい

「ぐっ…うおおお！」

こんな所で負けるかあああああ！

「何っ…」

体中から力が溢れる…

いける…！！

「うおお！」

全力で走り加速する

「何…！！」

「セイヤアア！」

そのまま跳び蹴りを金色グリードに放った

「ぐお…」

メキメキと音を立てそのまま吹き飛ばした

「ぐがあああ」

金色グリードは吹き飛ばされビルに衝突する

「はあ…はあ…今のは？」

確か体中から力がみなぎって…

コアメダル…そうか！

「ふ！」

飛んできた光弾を避けて恐竜グリードを見る

「はああ…」

低く構えバッタレッグで飛び上がる

「くらええ！」

空中にいる恐竜グリードに目掛けて回し蹴りを放った

「ぐ…ぐお」

「しゃああ！」

怯んだ所を思い切り蹴り飛ばし恐竜グリードもビルに叩きつけた

「そうか…なんだか僕でもわかってきたぞ！」

これが神に等しい力…

「やってくれんじゃねえか…」

金色グリードがビルを破壊し光線を放った

「……ふ」

片手で受け止め逆に跳ね返した

「く…」

そうだよ…恐れることなんかないじゃないか

「覚悟しろ…僕は…この世界ごと壊してしまう」

「は…馬鹿なこと言ってんじゃねえぞオーズ！」

タトバコンボのメダルを抜き取り別のメダルを入れる

「お前を倒すことで僕は…」

この街を…

スキャナーを手に取り読み込んだ

『コブラ！カメ！ワニ！』

このメダルは昔…錬金術師ガラが封印したと言われている封印のメダルだ

『ブラカ～ワニ！』

サークルは金色や茶色の色に変わり

それにあわせてタトバから顔は紫色の瞳をした蛇…そしてターバン

体は恐竜グリードよりも堅い体

足はワニを連想させる鋭い足

これがコンボだ…

『うお…』

ブラカワニに変身した瞬間か砂嵐が巻き起こり街の半分を飲み込んだ

これじゃ…まるで僕が悪じゃないか

「面白れえ」

金色グリードは足をケンタウルスに変化させた

僕は紫色の瞳を光らせ相手を見た

「覚悟しろ…君のメダルも貰う！」

「ほざけ！！ウオオ！」

突進か…やる気満々だね

腕についている甲羅を突き出し突進を防いだ

「何っ！」

「ハアアア！」

そのまま飛び上がりワニの足で蹴り飛ばした

「がああ！腕が」

セルメダルが落ちその中にはコアメダルもあった

「三枚…十分だね」

「ふざけんなああ」

ケンタウルスの足を閉じ金色グリードは剣で攻撃する

「ハアアア！」

僕は蹴りを放ちその剣を砕いた

「ふっ…ハアアア！」

そのまま連続で蹴り飛ばし体を砕く

「セイヤ！」

「ぐおお…」

笛を取り出し吹き始める

さあ…頼むよ…！

「貴様…ぐお…」

笛を吹けば蛇が金色グリードの首を締め付ける

『シャアア』

僕のターバンの後ろから蛇が現れそのままグリードを攻撃…噛みついた

「ぐあぁっ！」

笛を投げ捨てスキャナーを手に取る

『スキャニングチャージ！』

「ぐ…はあはあ」

三つの輪ができて僕は地面をスライドする

「ハアアア！」

クネクネとヘビのように動き

「セイヤアアアア！」

そねまま両足でグリードを噛み砕いた

「ぐ…あああ」

「ハアアアア！」

グリードはベルトが砕け爆発を起こした

「馬鹿な…うわあああああ」

コアメダルを掴んだ

金色のコアメダルか…

「カイを殺るとは手応えがありそうだ」

地中から何かが現れ恐竜グリードではない声が聞こえる

「お前は…」

サソリ…カニ…エビい？

「スルだ…甲殻類グリードのスル」

スルはまるで武士のようなグリードだ…

…このコアメダルの…

「グリード…なら行くよ…」

ブラカワニのコアメダルを外し黒いコアメダルを入れる

「何っ…何故お前が」

「完全体のグリードは１０枚…けど黒いコアメダルは…１０枚じゃない１３枚あるんだよ」

わかってきた…なにもかも

僕は…このグリードに勝てる

「じゃあ…同じ力…どちらが強いか勝負だ」

スキャナーを手に取り読み込んだ

封印と圧倒と爬虫類コンボ（後書き）

カウントザメダル

明久（過去）

タカ
トラ
バッタ

カメ
コブラ
ワニ

サソリ
カニ
エビ

ユニコーン３
ペガサス３
ケンタウロス４

甲殻コンボと愛と神話のコンボ（前書き）

今回はオリジナルコンボの登場です。アイデアをくださり本当にありがとうございます！

甲殻コンボと愛と神話のコンボ

『サソリ！カニ！エビ！』

体から黒い波動が流れ姿が黒くなっていく

『サッカービ！サカビ～サカビ！』

「うおおお！」

覆われていた甲殻を破壊し僕は闇のコンボになった

『…俺と同じ…』

「そうさ。君と同じ姿だ」

見た目は全然違うけどね

「面白い…」

スルはゆっくりと剣を構え僕はクラブシザーを展開した

「「うおお！」」

同時に走り出した

「くらえ！」

スルが繰り出した剣をクラブシザーで挟む

全然甘いよ！！

「オラアア！」

蹴り飛ばし剣をへし折った

「ぐ…ああ」

「やっぱりグリードはたいしたことないね」

腰に手を当て胸を張る

「貴様…うおお！」

スルは体から波動を放った

「ぐ…」

なんて邪悪なパワーだ…

「うおあ！」

スルは巨大なクラブシザーを振り落としてきた

ちょっパクリ！？

「危なっ！…ぐ」

パワー比べか…喧嘩なんかしたことはないけど…

「ふぬぬ…」

スルの巨大なクラブシザーを持ち上げる

気合いなら負けない！

「な…うおお」

油断した所を蹴り飛ばした

ふう…

「ぐ…貴様」

「ハッ！」

地中に潜り僕は姿を消した

「何！？…こんな力俺には」

地中から狙いを定める…上手くいけば一撃だ

「まさか…オーズの力！？ぐお！」

「くっ…失敗した」

後ろを攻撃しようとしたけど見事によけられてしまった

「ふざけるな！うぐおお」

「ぐ…」

再び放った波動に吹き飛ばされる

正直…吹き飛ばされるって本当に痛いんだよね…

体中がまるで壁に思い切り張り付けられたように

「うおお！」

「ぐ…」

繰り出されたアームを避ける

「ふん！」

「ぐあ！」

早い…こっちが攻撃しても防いでもすぐに別の攻撃が

落ち着け…なら

「ハアアア！」

毒を流す！

繰り出されたアームを避け素早くスルにサソリヘッドを伸ばして突き刺した

「ぐ…」

「がはっ…」

僕はスルのクラブシザーをまともに受け後ずさる

流石に完全体連続は…キツいか

「ぐ…がふ…貴様まさか毒を」

「うん…君が繰り出した攻撃を受けることになったけどね…」

スルは苦しむようにクラブシザーを落とした

今だ！

「でやああ！」

「ぐお…」

スルを力の限り蹴り飛ばした

「ははっ…どうだ…うぐ」

何だこれ?頭が…

そうか…サカエビは…自らを喰らう…

「うわああ!」

気合いでスキャナーを手に取る

頭が…壊れそうだ

「うぐ…く…」

体の痛みに耐えながらもメダルを読み込んだ

『スキャニングチャージ！』

「うおおお！」

地面に潜りスルの後ろに回った

「何っ！」

時間がない！これで

「どうだあああ！」

クラブシザーで捕まえて頭のサソリヘッドで大量の毒を流す

「ぐ…ぐが…そんな」

「うあああああ！」

ぐ…頑張れ僕！

バキバキと毒はセルメダルを破壊していった

「ぐ…あああ！」

「うわああ！」

スルは爆発を起こし衝撃に巻き込まれ僕は吹き飛ばされた

「がっ…」

地面に叩きつけられたけど…どうにか破壊が…

「ぐ…あ」

急いでメダルを取り出し投げる

「うおりゃあ」

チャリンと音を立て黒いメダルは残りの１０枚の元へ転がっていった

「はあ…はあ」

サカエビコンボ…危うく闇に支配される所だったよ…

「後は…」

体中が痛む中ゆっくりと立ち上がる

『まさか…奴らが倒されるとは…』

あいつ…恐竜のグリードだ

「変身」

『タカ！トラ！バッタ！』

『タットッバ！タトバ！タ・ト・バ』

タトバコンボに再び変身して構える

これが最後だ…！

「こい！恐竜のグリード！」

『いいだろう…君を無に返してやろう』

恐竜のグリードは静かに降り立つ

今までとは比べ者にならない…威圧感

「うおお！」

僕が走り出し勝負は始まった

「はあ！！」

『ぐっ…』

繰り出した拳に…恐竜のグリード…ギルは後ずさる

「オラア！」

蹴りを放つが掴まれた

ちょっさっきのは演技！？

『はっ！』

「ぐべっ！」

ギルの拳を受けて変な声が出てしまった

『ふん！』

「ぐあ！」

ギルの猛攻は続き殴られ蹴り飛ばされ切り裂かれた

「ぐ…うう」

思わず跪く…パワーがケタ違いだ…

ん？黒いメダル！

「よし！」

黒いコアメダルを拾った瞬間にギルは冷気をまとった拳を放った

「うわ！」

とっさに防御に出たのが…不幸だったのか

「な…ええ！」

黒いコアメダルが3枚砕けてしまった

ギルの能力はコアメダルの破壊？

『ふっ！』

「うわっ！」

再び放った拳を避ける

『素早いな…なら』

ギルの足から何かが…まさか！？

『ウオオ！』

ギルは紫の波動を放った

「うわあ！」

まともに受けてしまい…

「ぐああ」

タトバのメダルは砕けてしまった

勿論…砕けてしまえば変身は…解除される

「うぐ…」

地面に叩きつけられ体が痛む

頭や首…腕や足から血が流れる

軽く骨折もしている…

それでも…あまり痛みを感じないのは…

『終わりのようだな…』

「まだ…だ」

自分を勇気づけているからだ

僕は…人を…街を破壊した

けど…僕は…それでも人を守りたいんだ

「たとえ一人でも…弱くても」

急に…血が流れている手が温かく感じた

「明君は一人じゃないよ…」

「まど…か？」

そこには魔法少女の姿をした幼なじみがいた

『…消えろ…』

ギルは紫の光弾を放った

「う…」

思わず目をつぶった…けど何も変化がない

「え？」

僕は守られていた…彼女から出ている何かに

「大丈夫だよ明君」

まどかはにっこり笑った

『何…？』

ギルが驚く中…僕は呆然としていた

「明君…戦って…もう一度…」

まどかはゆっくりとオーズドライバーを渡す

「…勝てるかな…」

メダルを砕くあんなグリード…僕は知らない…

そんな奴と戦って勝てるのだろうか

「明君なら大丈夫だよ…」

まどかはそう言って顔を近づける

ちょっ…えっ！？

まさか…

『…ふっ！』

ギルは光弾を放つが跳ね返って吹き飛ばされた

いやそれよりも…何か唇に温かい感触が

「頑張って仮面ライダー！」

僕は自然と笑顔になり頷いた

「うん！」

わかってる…この先何が起きるか…

「私なら大丈夫…どんなに街が消えても明君のそばにいるから」

ありがとうまどか

勝算が決まってもいい…けど諦めたくはない！

「変身！」

『ユニコーン！ペガサス！ケンタウロス！』

金色のコアメダルの力を使って僕は神話の力を手に入れた

サークルは金色に変わり僕を包み込む

『ユ～ガ～ロォォス』

「ハアアア！」

金色の波動が弾け飛び街がまた消える

（ユーガロスコンボ…見た目はユニコーンガンダムをオーズ風にしてラプラスの箱とＮＴ－Ｄと変形と武器を外して背中にペガサスの翼をつけた感じとなっています）

ギルの前に立つ…必ず勝つ

『貴様…その姿…そして何故そんなに平気なのだ』

「君には絶対わからないよ…愛の力が！」

大切な人が見守ってくれる…それは最強の鎧になるんだ！

『愛だと？ならばその力ごと無に返してやる！』

「砕けるものならやってみろ！！君じゃあこの鎧は破壊できない！」

静かに構える…神を連想するように

「行くぞ！」

ギルと同時に翼を展開し大空へ飛び立った

弓と決着と無限の力（前書き）

過去編終わります

いろいろと変な部分もありますが気にしないでいただくと嬉しいです

カウントザメダル

サソリ３
カニ３
エビ４

ユニコーン３
ペガサス３
ケンタウロス３

弓と決着と無限の力

「はあああ！」

『ぐお！』

最後の戦いが始まった…僕は空中で拳をギルに叩きつける

『おおっ！』

「ぐ…」

ギルもまた肩を殴ってくる……

ぐ…力は五分五分…けど油断したらやられる

「うおお！」

僕はさらに飛び上がる

「…はあああ！」

腕に力を溜める…拳は光り出し灼熱となった

「おりゃああ！」

空中から急降下し力の限り叩きつけた

『うがあ！』

熱がギルの鎧を溶かす…次は

「これだあ！」

足に灼熱をまとい地上へ蹴り飛ばした

『ぐは…』

ギルはそのまま地面に叩きつけられた

だいぶダメージを受けているはずだ

「はっ…」

翼を閉じ静かに降り立った

『なる程…オーズはやはり未知数だな』

煙が払われギルが立っていた

馬鹿な…ダメージは確実に通ったはずだ

『…オオオ』

な、何だ！？

「えっ？街が…！飲み込まれていく…」

いや違う…街がセルメダルになりギルへ吸収されてるのか…

『さあ…決着の時だ』

ギルは巨大なキメラへと姿を変えた

「ちょっ…でかいにも程があるって！」

『グガアア！』

もはや怪獣レベルだ…

『グガア！』

ギルは巨大な尻尾を振り回した

大丈夫…動きが遅いはず

「うわあ」

僕は尻尾に叩きつけられ吹き飛ばされた

「ぐあ！…は、速い…」

『グガアア！』

ギルは巨大な翼で飛んでくる…

僕は足についている双剣を取り出し構える

「こい！勝負だ！」

『ギアア！』

ギルが放った火球をかわしながら翼を広げ舞い上がる

「しゃああ！」

ギルの腹を双剣で切り裂いた

『グガアア！』

「ぐわ！」

ギルは怯むことなく僕を叩き落とした

「ぐ…！？うわあ」

巨大な火球が飛んできたのを避ける

『ガアア！』

ギルは火球ではなく冷気をまとった攻撃を放つ

「ぐ…うおお！」

すかさず剣で防ぐけど…なんてパワーだ…

「ぐああ！」

力負けをして吹き飛ばされる

「ぐ…」

何だ…？足が凍ってる？

『ギアア！』

「がはあ！」

ギルは巨大な足で踏みつけてきた

油断していた僕はまともに喰らってしまった

「ぐ…」

意識が…体が動かない

『ギオオ！』

「…っ」

再び踏みつけられ体中が悲鳴をあげる

声すらでない…

『グガアア！』

「　　」

どうすることもできない…このままじゃ死んでしまう…

『グアア！』

何度も踏みつけられ意識だけはかすかに残っていた

強すぎる…これが最強のグリードの力…

「明君！立ち上がって！」

まどか？

『グギャアア！』

ギルの攻撃が突如止まり…そっちを見ると…まどかが矢を放っていた

「明君…頑張って！」

まどかは僕の側に飛んできて矢を打ちまくる

『グガアア！』

ギルからは沢山のセルメダルが落ちる

「ぐ…あぐ」

ボロボロになった体を起こす…僕はまだ諦める訳にはいかない！

「明君…いくよ？」

「了解！」

腕や足、体中の骨はもうズタズタなのに…力が湧き上がるのは…

「うおおお！」

まどかのおかげだ…

ケンタウロスのように四つの足に変化させた

「明君！」

見える…そこだ！

僕は人間の視野じゃ見えない範囲から放たれた攻撃を防いだ

天馬のように…地上を…空を掛ける

「うおおお！」

『グガアア！』

ギルの攻撃を交わし腹を切り裂いた

さっきとは違い大量のセルメダルが落ちる

『ギアアアア！』

「…」

まどかは静かに矢を引く

終わらそう

さよならまどか

『スキャニングチャージ！』

スキャナーを投げ捨て双剣を合体させた

それは弓となり光をまとった

「……」

ユニコーンの角を矢に変える

そして静かに矢を引く

これで最後だ！

「「はあああああ！」」

まどかと僕が放った矢は合体して巨大な光になった

『ギ…ア』

巨大な光はギルを貫いた

『グガアア！』

ギルは大爆発を起こしチリになった

紫のメダルが静かに落ちる…

「終わった…」

辺りは何もなく…彼女とメダルしかない…

「……ぐ…」

体がガクンとなる…

「明君…」

変身を解き体から激しい疲れを感じた

「わかってるよ…」

ごめんね…まどか

「ありがとう明君…私明君と出会えて」

僕の頬からは涙がつたった

「僕は悪だ…人々の命を奪い…大切な人すら」

「違うよ…明君はみんなを守る為に頑張ったんだよ…明君は十分すぎる程人を救ったんだよ…？」

違う…僕は…無力なんだ…

「じゃあ…明君…私行くね？」

僕はまどかの腕を掴んだ

「明…君」

まどかをすっと抱きしめた

これしか出来ない…これしか…

「明君…」

コアメダル…その力は十分に解き放たれた時…器に等しい者が使用することで世界すら修復させてしまう…

十分に解き放つことができるのはオーズである僕だけ

そして器に等しい者は…僕かまどかなんだ

まどかは…錬金術師ガラの子孫だった

しかもまどかは特殊で…不思議な力があったんだ

それはコアメダルを生み出す力

それにより黒いコアメダル…金色のコアメダルが誕生した

そして…その力に反応するように紫のコアメダルが現れたんだ

まどかは…こういったんだ

『誰かの為に…人の命を救えるなら私はこの身を犠牲にしても構わないと』

僕が器になれないのはオーズの力を使用したからだ

それにより僕は力を解き放ってしまい…満たされないんだ

だから…力を使っていないまどかは簡単に満たされる

けどコアメダルの力は強すぎて…命を奪うんだ

まどかは紫のコアメダルの力を使い世界を修復させるつもりなんだ

でも紫のコアメダルは強すぎるからまどかは簡単に死んでしまうかもしれないんだ

それでも僕は彼女を救いたいんだ

「明君…私満足してるから…」

まどかの瞳から涙が落ちる

「僕は…満足していない…」

君が消えるから

オーズになったから満たされなくなったんだ

神に等しい力は大事なこと…人を奪っていくんだ

「まどか…」

「そんな悲しい顔をしないでよ明君！私…の方が…悲しく…なるよ」

「……うぐ」

僕らはもう一度抱き合った

例え悲惨な結果になっても僕はオーズに変身していた

僕は求めていたから…この力…そして愛を

「もし……私が…」

まどかは涙を流しながらゆっくり呟く

「私になれたら…結婚して…ね明君」

まどかの言葉にゆっくり頷く…大丈夫…何年でも待つから

「じゃあ…いくね？」

まどかはそう言って紫のコアメダルを取り込んだ

「ごめんね…きっと私以外にも犠牲者が出るから」

まどかはそう言って僕から金色のコアメダルと黒のコアメダル…オーズドライバーを受け取った

「行ってらっしゃいまどか」

「うん…」

まどかは紫の翼を広げ飛んで行く

僕はその姿が見えなくなるまで見つめた

本当にありがとうまどか

僕は君のおかげで戦えたんだ

僕の頭から何かが消えていった

「……」

膝をつきゆっくりと倒れた

こんなに眠いのは…

久しぶりだよ…

「ねえまどか…僕は君が」

そっと砕けたタカメダルに触れた

「さよなら…僕」

朝…僕は揺すられて起こされた

僕のベッド…二人の幼なじみが見守る中…

僕はゆっくりと起き上がった

「おはよう…二人共」

今日は文月学園の受験日だね

吉井明久は死んだ…そのことは誰もわかりはしないし…

本人すらわからない

コアメダルの力で吉井明久は蘇った…

しかし…それは本来の明久ではなく何もかもが違う別人の明久だ

そして鹿目まどかは死んだ…本当の彼女は…紫のコアメダルに眠っ

ているのか砕けたのか…知るよしもない

二人は新たに生まれ変わり…新たな人生を歩み出したのだ

二人にとってそれは悲しいことでもあるが…二人は気づかない

そして…コアメダル…この存在だけは…残っていた

何を意味するのかは…誰もわからない

ただ…吉井明久の欲望が存在しないことが過去を物語っている

弓と決着と無限の力（後書き）

カウントザメダル

明久が使えるメダルは

プテラ

目覚めと先生と殺意（前書き）

更新が遅くなるかもしれません

皆様の一言一言はとても嬉しいです

バカテス小説を読んでいただきありがとうございます！

目覚めと先生と殺意

「ぐ…うう」

ゆっくりと目蓋を開く…あれ？ここは

「アキ君良かったあ…」

「気がついたんだね明久」

「なのは？フェイト？」

体を起こし辺りを見回すと病院だった

「おはよう吉井君…」

隣から声が聞こえてきたのでそちらを振り向くといつもお世話にな

っている医師がいた

「シャマル先生…」

金髪に笑顔が似合う人だ…シャマル先生はここの病院の有名な医師なんだ

僕は関節やコンボで疲れた時はいつもお世話になっている

「気分はどうですか吉井君?」

「あはは…特に異常無しですね」

笑って答えるけどシャマル先生は困った顔をしていた

「それより僕は…まどかは!幼なじみは大丈夫なんですか?」

安心している場合じゃない!今はまどかが心配だ…

「落ち着いて吉井君…」

シャマル先生は僕を寝かせた

「まどかちゃんは大丈夫だから…ね？」

僕は力なく頷いた

「皆さん…私は吉井君にお話したいことがありますから…少し出て貰えるかしら」

なのははこくりと頷きいつの間にか雄二達を連れて部屋から出た

「吉井君…何度も言ってるけど…自分の体を大切にして…ね」

「先生…僕も何度も言いますが…無理なんです…」

シャマル先生は悲しい顔をしながら抱き寄せた

え?あれ?

「吉井君…あなたは本当に可哀想…私が変わってあげたい程…あなたは傷ついているわ…」

「シャマル先生…」

その後…僕はまどかの体調を聞いた…

幸いにも伊達先生が通っていたから素早く治療してくれたんだ

伊達先生は有名な医師らしいからまどかは今頃大丈夫なはずだ

ただ…気になるのは何故まどかが倒れたのか…僕に何が起きたのか

何かを感じたんだ…強力な何かを

『ヤミーが…いるぞ』

え?

『人を助けるんだろ?』

!?

僕は点滴を剥がしベッドから出た

「吉井君!?何やってるの?」

「シャマル先生…僕大丈夫ですから」

シャマル先生を押しのけメダルとドライバーを掴んだ

素早く部屋を出たのはいいけどなのはが何かを言っていた

「早く…倒さなきゃ!」

何かが僕を呼んでいる!

僕に戦えと何かが伝えている

「吉井君!待って!」

シャマル先生がすぐさま追いかけてくる

『あいつを殺せ』

え？何だ…また何か頭に

『邪魔なんだろ？』

「う…ぐ…ああ」

瞳が紫色になったことにも気づかず今の僕には激しい殺意が芽生えた

「うぐああ！」

大きく叫びシャマル先生に襲いかかった

「!?きゃあ!」

え?シャマル先生!?

何だ…僕刃物を…

手が止まらない!?

「シャマル先生!避けて!」

「きゃああ!」

間に合う距離じゃなくシャマル先生は悲鳴をあげた

「女性を刺そうなんて…駄目だぜベイビーちゃん」

いきなり現れた男性に僕は腕を掴まれた

「よっ」

「うぐ…」

バチンと叩かれ刃物が落ちる

「たくっ…何があった吉井」

「伊達先生…」

伊達先生はニカっと笑いながらも真面目な目をしている…

「何で…先生が」

「ああ…ちょっとな…」

伊達先生は苦笑いした後シャマル先生に手を差し伸べた

「立てますか？すいませんね…吉井の奴疲れているんですよ」

「あ…はい。わかってます…あ！ありがとうございます」

シャマル先生は俯きながら伊達先生に手を伸ばした

あれ？まさかシャマル先生…

「吉井…どうしたんだお前」

「ヤミーが……現れて」

先生はしばらく黙り込み僕を病室に引っ張った

えええ!?

「休め吉井…今のお前は戦うな」

「はいい!?」

シャマル先生は笑顔になり僕を後ろから押した

「ちょっ先生!僕は平「駄目よ」「安静にしろ」」

駄目だ…伊達先生力が強いから逃げられないや

「そういうことだからよろしくっ坂本ちゃん」

「…了解だ」

「雄二!?僕も行くから…助け「駄目だ」」

雄二は真剣な顔で言い放って助けてはくれなかった

なんで…

「アキ君…ゆっくり休んでね」

「無理しないで明久」

「俺と雄二に任せとけ」

ちょっと待ってよみんな！

「僕も行くから！」

「駄目よ吉井君はまどかちゃんと寝ましょう」

え？まどかがいるの？

伊達先生を見ると先生は目を逸らした

「そんなことより」

「離してよおお！」

恋心と治療とキャタピラレッグ（前書き）

題名の通り雄二が活躍します！

「あの…」

「駄目よ吉井君」

「いや…まだ何も話してないじゃないですか」

病室…僕は隣で眠っているまどかを眺めながらシャマル先生に質問を遮られた

「抜け出そうとしてたんじゃないですか?」

「う〝」

その通りだ…僕は早く行かなきゃいけないのに

「点滴してるから…それに伊達さんが今吉井君の診断結果を出して

るのよ」

「う…そ、そうですけど…」

確かにさっきの僕の行動を疑問に感じた先生は診察をしていた

シャマル先生…いきなり服を脱がせようとしたきたから大変だったなあ

「あれ?シャマル先生…確かこの病院に伊達って人は居なかったはずですよね」

シャマル先生は少し静かな顔になり口を開いた

「伊達さんは…頭に弾丸があったの」

「え!?」

初耳だ…伊達先生は保健室でヘラヘラといつも笑っていたのに

「伊達先生に初めて会った時…」

「…はい」

シャマル先生は有名な医師だから文月学園にもちょくちょく来るんだ

毎年、保健の先生に会いに行って講義しているらしい

「何故かわかったの…伊達先生に…弾丸が埋まっていたこと」

「……」

黙って驚くしかなかった…

「私はすぐに治療を始めたわ…伊達先生は相変わらず笑っていたわ…失敗したら命が無いのに」

「…あはは」

「無事治療は成功…その時のあの人の顔が忘れられないの」

先生は近くにあった花瓶を手にとった

「ふふ…『あんたの腕前に惚れた…是非この職につきたいって』…」

「…あ」

何故か喋ってはいけない気がした…

シャマル先生はもしかしたら…

「よっ何話してたんだ?」

「ひゃあああ」

伊達先生がいきなり現れシャマル先生は飛び上がった

「先生!いきなり現れないでくださいよ!」

シャマル先生…顔が真っ赤だ…

「わりい…ちょっといたずらしたくてな」

ニカッと笑いながらシャマル先生に謝っていた

…本当にびっくりしたよ…伊達先生は何者?

「診断結果が出た。吉井…お前…やっぱり戦うな」

「はいい!?」

いやいや!いきなり何言ってるんだ!

僕は何も異変ないし

「強がるな…お前の体…そろそろ限界だぞ」

「え?」

限界…?それって

「…吉井君…あなたやっぱり…」

「どういうことですか先生？僕何も違和感なんて」

「お前…コンボ使った時前の火野みたいに倒れてるだろ？」

火野？伊達先生は火野先生と知り合いなのだろうか？

「はい……」

「お前の場合…高校生だ。火野とは違う…」

伊達先生はそう言いながら何かを取り出した

「シャマル先生から貰った…お前の今までのカルテだ…」

そこには沢山のことがかかれていた

全身打撲…右足骨折…左肩脱臼…両手捻挫…全身骨折

「こ…こんなにすごいことになってたんですね」

「わかるか吉井？シャマル先生はお前の為にわざと見逃してくれてたんだ」

シャマル先生は俯きながら花瓶にふれていた

「それでも今は大丈夫ですし」

「それが怖いんだよ…いくら怪我は治ってもお前の場合は異常だ…必ず何かが残っている」

伊達先生は完全に治ってないと言いたいんだろう

「いいか吉井…お前はこの先戦えば必ず…体にガタくる」

伊達先生は真っ直ぐ僕を見たまま告げた

「恐らく…数回戦えばお前は…大変なことになるぞ」

雄二ｓｉｄｅ

「さあて…今日はだいぶストレスたまってるから発散させてもらうか」

ミルク缶をゆっくり下ろして俺は隣にいる巧に声を掛けた

明久がいない分結構厳しいかもな

「巧！一気に片付けるぞ」

「ああ…そのつもりさ！」

俺達は目の前にいるクロアゲハのヤミーを睨んだ

『何？欲望の邪魔しないでくれるかしら』

銀行を襲ったってことは金関係か…

全く…まいっちまうな

「そうもいかないんだよ。今日は翔子の電気スタンガン喰らってだいぶストレスがたまってんだ」

ベルトを腰に巻きセルメダルを取り出す

「たくっ…あの人形先生も変な趣味してやがる」

このベルトを作ったのは文月学園の教師真木だ

「まっ…俺にとっては得だがな」

巧もベルトをつける

ピーンとメダルを弾きキャッチする

「変身」

セルメダルを穴に入れてキリキリと回す

『カポン』

いつ聞いても違和感があるな…まあ明久よりはましか

装甲に包まれ俺は仮面ライダーバースに変身した

巧もディアスに変身したようだ

「さて…稼ぎますか」

パンと両手を合わせ素早くバースバスターを取り出した

明久の野郎…無茶ばかりしやがって

俺らが明久の分まで戦わないとな

「いくぞ雄二！」

「ああ！こんな雑魚すぐに片付けてやる！」

会話が途切れた瞬間俺は走り出した

「オラアアア！」

バスターからセルメダルの光弾を連射する

『きゃああ』

へっ！楽しいぜ

「まだまだあ！」

ズガガガと連射して的確にヤミーに当てる

一発一発は強力だからヤミーはたまらずに吹き飛んだ

「ウオオ！」

巧は巨大なハンマーを取り出しヤミーを殴る

「ちっ…弾ぎれか」

バスターを投げ捨て俺は肉弾戦にはいった

「オラア！」

ヤミーの顔を殴りつけヤミーが攻撃をしかけたらすかさず交わして

腹を殴る

『うう』

「しゃあ！」

回し蹴りをヤミーに決め巧が手についている巨大クローで殴り飛ばした

「はっ…やっぱりヤミーじゃ相手にならねえ」

コキコキと首を鳴らしながら構える

「雄二…ヤミーだからって油断すんなよ」

「ああ…わかってるさ」

セルメダルを取り出しベルトに入れる

そして再びキリキリと回す

『カポン！』

カプセルが開いた

『キャタピラレッグ』

両足のカプセルから機械が現れ俺の足に武装した

キャタピラレッグか…確かにでかいな

『くうう…おのれ』

ヤミーが立ち上がってきたか

「寝とけばいいのに…なっ！」

素早くキャタピラレッグで走り回し蹴りを放った

『くああ！』

「オラ！」

片方で踏みつけもう片方で蹴り飛ばした

『く…うう』

「俺の役目は…終わりだな」

巧は変身を解くが確かにトドメだ

もう一度メダルを入れて回す

『セルバースト！』

キャタピラレッグが光り俺は低く構えた

「しゃあああ！」

回し蹴りを何発も放ちトドメに跳び蹴りを喰らわせた

『く…ああ』

ヤミーは体が崩れていき爆発する

『あああああ』

セルメダルにたちまち分解されバラバラと降り注いだ

「おお…今日も大量だな。ストレスも発散できたから一石二鳥だな！」

セルメダルを抜き取り変身を解除した

だが妙だ…あのヤミー…本当に金目当てか？

「本格的にグリードが動き始めたのかもな」

俺は一人呟きミルク缶を背負った

ウヴァと危機と始まる戦い（前書き）

カウントザメダル
現在オーズが使えるメダルは
明久
タカ２
クジャク
クワガタ
バッタ
ライオン３
トラ３
チーター３
サイ２
ゴリラ２
ゾウ２
シャチ
ウナギ
タコ
プテラ３
トリケラ３
ティラノ３
サソリ
カニ
エビ２
オオカミ
映司
タカ２
クジャク
コンドル

クワガタ
カマキリ
バッタ
ライオン
トラ
サイ
ゴリラ
ゾウ
プテラ2
トリケラ
ティラノ2

ウヴァと危機と始まる戦い

『カザリも倒されたか…』

俺の前にはメズールとガメルのコアメダルがある

『あと2枚手に入れれば俺は完全だ』

その為に貴様らのコアメダルを使わせてもらうぞ

メズールとガメルのコアメダルを手にとり横にある大量のセルメダルを見た

「…それを取り込む気か」

椅子に座っていた黒いグリードスルが立ち上がった

「そうだ！俺はこいつらで強力な力を手に入れる！」

「ほう…無理な話だな」

「何？」

「お前のようなグリードじゃ無理だ」

「ふざけんなあ！」

スルに殴りかかった瞬間避けられ攻撃された

何だと

「ぐ…俺のコアメダルが」

奴の手には俺のコアメダル一枚が握られていた

「貴様は最強のグリードではない」

そう言った後にスルは地中へ消えていった

「ぐ…覚えてろ…」

俺はフラつきながらセルメダルを吸収した

明久ｓｉｄｅ

「ぐ…がは」

登校中…僕はうずくまりながら痛みに耐えていた

く…下手したら飲まれてしまうね…

伊達先生から戦うなと言われたけど僕はそれを断った

そんなことしてたら助けられないんだ

アンクは復活してからしばらく安静状態だ

大丈夫…バレていない

「ぐ…ああ」

何かがあるんだ…僕の体内に何か

それがコアメダルと言うことはわかる…

「けど…気を抜いたら意識が無くなってしまう」

頭を押さえながらゼエゼエと荒い息をする

まどかは相変わらず眠ったままだ…命の心配はないけど…心配だ

「ぐ…がは」

ズルズルと座り込む

やっちゃったよ…遅刻決定だ

「はー…はー」

汗が伝う…手が震える

「…」

だいぶ落ち着いてきた…これなら大丈夫かな

「……ヤミーだ」

何故かわかった…

とにかく行かなきゃ！

立ち上がって同時にある人と目があった

「明久…」

「フェイト」

フェイトはゆっくりとこっちへ歩いてくる

「大丈夫？手を貸すよ？」

「いや…このくらい平気だよ」

笑いながらゆっくりと立ち上がった

フェイトは何故か悲しい顔をしていた

「明久…まどかのことちゃんと守ってね…」

「何言ってるんだよ。当たり前じゃないか…僕はみんなを守ってみせるよ」

「……そう…なんだ」

「どうしたのフェイト？」

フェイトは俯きながらこっちを見て苦笑いをした

「何でもないよ…」

そう言ってフェイトは後ろを向く

何か言わなきゃ

「フェイト！前に言ってたハーレムだっけ？僕案外本気にしてるよ」

しまったあああああ

何を言ってるんだ僕は！

と、とにかく何か言わなきゃ

「え？」

ほら！フェイトも複雑な顔してるよ！

「えっと…ごめん！」

恥ずかしい…何やってるんだ僕は

「明久…」

NOside

「お前の欲望…解放しろ」

「あ…」

セルメダルを投げられ女の体からヤミーが現れた

「ひっ…」

女…姫路瑞希は驚くしかなかった

『アキヒサ…君』

ヤミーは何かを求めるように歩き始めた

昆虫のグリードウヴァは場所を移しさらに違う人にセルメダルを入れた

「うぐ…」

『オレノカノジョニ…』

男…須川から出たヤミーは直ぐにハチの姿へと変わった

「さて…準備は整った…決着の時だオーズ」

「ぐ…あ」

明久はヤミーが現れたことにより再び頭痛に襲われた

「またヤミーが…」

場所は学園…明久は息を飲んだ

「ぐ…うう！」

気合いを入れ直し明久は学園に走り出したが目の前に何かが降り立った

「ヤミー…恐竜!?」

『オーズ…コアメダルを渡せ』

『さもなければ無に帰すまで』

「ぐ…みんなが危ないのに」

その光景を空から別の何かが眺めていた

無力化とダメージと傷

な、なんだこいつら…新しいヤミー？

「オーズ…コアメダルを渡せ」

「く…」

プテラノドンの姿をした二体のヤミーが迫ってくる

奴らの狙いは…カザリ達…！

「あいにくだけど‥それはできないよ」

ぐっと足に力を入れる

「なら無に消えるがいい」

同時に走り出し攻撃を避けた

「おりゃああ！」

ブオンと素早く一体に拳を叩きつけもう一体に蹴りを放った

「「う…」」

今がチャンスだ！

「…っ！」

ベルトを腰につけて三枚のメダルを取り出した

「アンク…タカメダル使うよ」

カチャンと同時に入れてドライバーを傾ける

「…いくぞ！変身」

スキャナーを手に取りキンキンと音を立てながら読み込んだ

『タカ！トラ！タコ！』

いつもと違い足は水色に吸盤のついたタコレッグに変身した

「はっ！」

バッと構え相手を見据える

状況的には不利だけどやるしかない！

「…はああ！」

「「オオ！！」」

オスのヤミーに跳び蹴りを喰らわしメスヤミーにはトラクローで切り裂いた

「ふっ！てや！」

トラクローを上手く活用してメスヤミーを切り裂く

「う…」

やった！効いている

「ふ！」

「ぐああ！」

いきなり火炎弾が当たり転がった

くっオスのプテラノドンヤミーか

「ぐ…うあ！」

「この程度か」

「うわああ！」

プテラノドンヤミーに吹き飛ばされビルに叩きつけられる

痛たた…

「ぐ…」

足の吸盤を利用してビルに張り付いた

「はああ！」

メスのプテラノドンヤミーが突進してくるが上手く避ける

「ふん！！」

「ぐ…」

けどやっぱり不利な状況には変わりなくすぐに追い詰められてしまった

「はああ！」

「ぐああ！」

「ふ！」

「があ！」

火炎弾を何発も受けビルから墜落した

「うわああ」

叩きつけられ体中に激痛が走った

「ぐ…がは」

強い…耐久力で勝負したけど勝てない

「なら！これしかない！」

ヤミーの攻撃を避けながら二枚のメダルを取り出した

「うわ！」

繰り出されたパンチを交わしながら素早くタカ、トラを入れ替えた

「ぐわ！」

蹴り飛ばされ地面を転がり素早く立ち上がる

「…！」

スキャナーで読み込み胸の辺りまで腕を上げた

「サイ！ゴリラ！タコ！」

顔は鋭い角がついたサイヘッド、体はガッチリとしてガントレットがついているボディに変わった

サゴリタだ！

「いくぞお！」

ガントレットでヤミーに殴りかかり吹き飛ばした

「はあ！」

もう一体に殴られるがこの体はそんなんじゃ傷一つつけられないよ！

「りゃあ！」

「う」

サイヘッドで跳ね飛ばしオスヤミーをロケットパンチで吹き飛ばした

「はあ…はあ」

あれ？なんで僕こんなに疲れてるの

「ぜえ……ぐ」

スキャナーを手に取るけど震えていた

「く…うわ」

スキャナーをつい落としてしまい跪いた

なんで？力が入らない

「…無に消えるがいい」

「は…！」

気づいた頃には遅く2体のヤミーから黒い霧が放たれた

「うわあ！ぐ…ああ」

力が…抜け…る

変身が解除されメダルとドライバーが落ちた

コアメダルの力が無力化された？

「ぐあああ！がふ」

後から恐ろしい程の痛みが体中に伝わり叫んでしまった

痛…体中が痛い

「ここまでのようだな」

「……く」

震える手でコアメダルを掴む

「はっ！！」

「ぐわああ」

何！？腕が…

千切れそうな痛みが走り僕は逃げ出した

勝てない…

腕は流血している

このままじゃ駄目なのに…

僕は自分の家でなく知さんの店へ走って行った

「ぐ…うう」

頭に激痛が走る…ヤミー…だ

「行かなきゃ！！」

運がいいことに二体のヤミーはいなくなった

今がチャンスだ！

腕を押さえながら僕は器用に変身した

「変身！」

『ライオン！トラ！チーター！』

『ラッタッ！ラッタッ～！ラトラ～タ～！』

黄色いコンボに変身して学園に向けてダッシュした

みんなの欲望と一斉変身とＶＳ変態ウヴァ

俺は怖かった…彼女を取られるんじゃないかって

そして…吉井達の気持ちも理解できた

俺は何て奴なんだ…

「やめろ！やめてくれ！」

叫んでも俺の欲望は止まらない…

『ふん！』

「ぐ…が」

今まで彼女に手を出した奴らを俺の欲望は次々と刺していく

違う…こんなんであの子が喜ぶ訳もない！

猪瀬（いのまり）真理さん…ごめん

「何で…ですか？」

私は膝をつき目の前の光景に驚いていました

『明久君から離れて！』

私の欲望が…みなさんを

「…きゃあっ」

「く…う」

なのはちゃん…フェイトちゃん…！

二人は魔法少女に変身して私の欲望と戦っています

まるで…蝶の姿をした怪物は…みんなを

「私は…明久君を」

何でですか…私はこんなこと望んで…たんですか

明久君を一番知った気になって…嫉妬して

「やめてください…」

涙をポロポロと流しながら私は俯くことしかできませんでした

明久ｓｉｄｅ

ダッシュで学園に駆けつけた

大丈夫…コンボに慣れてきてる

変身したまま腕に鞄の中にあったスカーフを巻いた

「ふぅ…早く助けないと」

『吉井君！』

突然声が聞こえ振り向くと知った人がこっちへ走ってきた

「君は…Dクラスの真美さん…」

一度は欲望に溺れ…そして欲望に勝った女性だ

「明久君…亮君を…彼氏を助けてください！」

「え…」

まさか須川…亮君の彼女が真美さんだったとは…

不思議なこともあるんだね

「お願い！亮君は…私の為に…私が悪いの」

「わ、わかったから泣かないで！」

須川君め…彼女を気づけるなんて

「僕が必ず止めるから君は須川君を…」

「うん…」

彼女が頷いたと同時に再び風のように走った

雄二ｓｉｄｅ

「なんだこりゃ…」

学園の外には屑のようなヤミーが…中にはヤミーが４体もいやがる…

「どうなってんだ」

ミルク缶を背負い窓から飛び降りた

「…っと。さて…稼ぐか」

「きゃあああ！」

「来ないで変態！」

なんだ？あっちから女子が走ってきてやがる

『三次元は消えろおお』

まるで…そうだな猿のようなヤミーが女子に抱きつこうとしてやがる

本当に変態だな…大方家康から作られたヤミーか

「…きゃあ！」

女子の中に聞いたことがある声が聞こえた

「翔子！？」

俺は気づけば走り出していた

理由はわからねえ…だが

「おらああ！」

跳び蹴りを喰らわせた後ヤミーを投げ飛ばした

何故だか気分が悪い…

「…雄二」

「離れてろ翔子」

ベルトを巻きメダルを弾いた

「変身！」

キリキリと回しカプセルが開いた

『カポン』

装甲に包まれ仮面ライダーバースへと俺は変身した

「…雄二格好いい」

「離れてろって言ってるだろうが」

全く…正義のヒーローなんかじゃないのにな…

「いくぜ！！」

巧ｓｉｄｅ

「巧！何なのこいつら！」

文乃は回し蹴りで屑ヤミーを蹴り飛ばした

「簡単に言えば弱いヤミーだ！うわっ」

廊下では文乃、希、千世、大吾朗が屑ヤミーと戦っていて階段付近では俺が蟻の姿をしたヤミーと戦っていた

『シャアア！』

「うわっ！」

変身しようとした時蟻…つまりアントヤミーに攻撃されメダルを廊下側へ吹き飛ばされた

「しまっ…ぐ…あ」

アントヤミーに壁へ叩きつけられ必死に攻撃を避ける

「にゃぁっ巧！？」

「ぐ…誰かメダルを」

俺の言葉に気づいたのか大吾朗がメダルを拾い上げた

「巧！受け取れ！」

ヒュンと投げられたメダルを掴む

「サンキュー！大吾朗…ぐあ！」

投げ飛ばされて肘を打ってしまった

「早く倒しなさいよ！私を助ける為にね！」

相変わらずだな千世は

「言われなくても…」

コアとセルのメダルを入れる

今日はこれだ！

「ぐあ！」

アントヤミーに首を絞められる

「ぐ…うう」

『キシャアア！』

なんとか剣を中央に刺した

『ガゼルアップ』

音声と同時に木や葉が俺を包み込んでヤミーを吹き飛ばした

『キアア』

「ふう…なんとか変身できた」

銀色のスーツに緑色の鎧と足は尖って顔は鹿をイメージしたように
何本か鋭い角が生えて瞳は赤くなった

ガゼルスタイルだ！

ＮＯｓｉｄｅ

「きゃああ！」

女性達は逃げるも蝶のヤミーは飛んで追いかける

「くっ…みんなが」

なのはやフェイト達は大量の屑ヤミーや蜂のヤミーを相手にしていて守ることができない

「ファイヤ！」

フェイトが放った光弾は蜂のヤミーに直撃した

『ぐう…』

「変身！」

『クワガタ！トラ！バッタ！』

火野映司は仮面ライダーオーズに変身して窓から飛び降りた

「はあ！！」

そのまま頭から電撃を放って蝶のヤミーを落とした

『あなたも邪魔をするんですか？』

「早く逃げて」

映司は逃げ遅れた女性を逃がし構えた

「「まさか…火野先生!?」」

驚くなのは達に振り向いたオーズは頷いて再び構えた

「ここは俺に任せて!」

「友香!!」

根本は走り彼女を庇った

「ぐあ!」

「恭二!?」

殴り飛ばされた根本を小山友香は助けた

『ふん…弱いな…所詮は人間か』

「う…」

虫のグリードウヴァは屋上から飛び降り他の生徒を狙った

「きゃああ！」

ウヴァは女子更衣室を襲撃した

勿論ウヴァにはそれがどういうものかわからない

が、女子達は勿論

「きゃああ！」

悲鳴を上げるがウヴァは構わずに女子一人を捕まえた

「変態！きゃあ！」

女子は更衣中に入られたことに怒っていたがウヴァはそのまま壁に叩きつけた

「玲奈ちゃん！」

その中には明久の友達の比奈もいた

「あんた離しなさいよ！」

他の女子がぐいぐいと引っ張る

「っるせえ！」

ウヴァは頭にきたのかその女子め捕まえた

「きゃあ！胸掴まないでよ！」

『ギャーギャーうるせえんだよ！』

変態ウヴァの誕生である

ウヴァが武器を見せて壁に叩きつけられていた一人の女子が怯えた

『いい顔だ…殺すのにちょうどいい！』

「きゃああ！」

ウヴァがクローを突き立てようとした時、女子のみんなが押さえつけた

『なんだ貴様ら！』

「最低！」

「変態！」

ウヴァはいっきに払いのける

『貴様ら…ふざけるな』

ウヴァは頭部に電撃を溜めていた

「きゃああ！」

それに気づいた女子達は再び叫び始めた

「誰か！」

「助けて！」

比奈は手を合わせて握り何かを祈っていた

『うるせえ！！全員消えろ！』

電撃がバチバチと発射しようとしていた

女子達は怯えたり、泣いたりする人もいた

『消えろおお！』

「「助けて仮面ライダー！」」

途端に更衣室のドアをぶち壊しウヴァに蹴りが放たれた

「だっしゃああ！」

その光景を見て比奈は笑った

「来てくれたんだね…」

『な、なに！ぐわあ』

ウヴァはそのまま窓の外へ吹き飛ばされた

「…っと。みんな大丈夫！？」

オーズ…タトバコンボは立ち上がって女子達に声をかけた

『仮面ライダー！…』

一人が呟き女子達は仮面ライダーオーズに見惚れていた

「来てくれたんだね…明久君」

VSヤミーと雷撃と手懐ける力

「なんとか間に合ったよ…みんな大丈」

僕は咄嗟に後ろを向いた

いや…だっていくら仮面ライダーでも…更衣中の女の子を見るなんて最低だ

というよりここは女子の更衣室だったのか…畜生！あの虫野郎に踊らされた！

「あ、あの～」

一人の女子が近づいてきたことがわかりすぐに逃げ出した

「ごめんなさーい！」

かっこ悪い…そして恥ずかしい…

嬉しい部分もあったが…後が怖いよ

『かっこいい…』

『あれが噂の仮面ライダー』

「えっ…と確かこっちだったよね」

変態昆虫ウヴァが吹き飛んだ場所へ走る

「ぐ…」

なんだ?…また体に異変が

「が…」

何かが体内で強い力を放っている…

『戦え…』

誰?

『最強のオーズに変身しろ』

最強のオーズ?…誰なんだ!僕を呼ぶのは

『力をやるよ』

あれか…これはよく言う敵の幻ってやつだっけ？

催眠術をかけて操るような

『おい…勝手に突き進むな』

黙れ！この催眠術師！

貴様のような奴に操られる僕じゃない

『お前馬鹿か…？』

なっ！化け物からも馬鹿扱いされた！

いや…待てよ…これはあれだな…油断させようとしているわけなんだ！

卑怯だぞ！君には正々堂々って言う言葉がないのか！！

まるで雄二だ！

『いや…俺は』

ええい！僕の心に潜む悪魔め！今までの痛みや苦痛は君のせいだな！

『だ「よくも苦しめてくれたな！コンボで僕はボロボロなんだぞ！」』

さては雄二だな！

真木博士を利用して僕の心の中に侵入してきたんだな！

『いや…だから違「しゃあああ！」ぐはあ！』

・吉井明久は怪物をやっつけた

明久の攻撃力がＵＰした

何コレ？

『ぐう…こいつとんだ馬鹿だ…』

ああ！また僕を馬鹿にした！

アキヒサハタトバキックをクラワセタ

カイブツハタオサレタ

『……何故だかこいつの体内に入ったのを後悔してる』

意味わからない言葉と共に怪物は消えていつのまにか景色は文月学園に戻った

「あれ？さっきの何だったのかな？」

でも…わかることは僕の体内に新しい力が宿ったことだ

『アア！！』

え…ちょっちょっ！でかい雷撃が！！

「うわあ！」

間一髪で避ける

『チッ…』

「変態グリード…ウヴァ」

変態は何かブチギレたように僕に攻撃を仕掛けてきた

『オラア！』

「ぐ！」

グリードにタトバはやっぱり駄目…

「なわけない！」

右ストレートをウヴァの顔面に叩きつけた

『ぐう…』

「くらえ変態！」

追加で腹に連続で殴った

『ぐう…あ』

君のせいで僕はあああああ！！

『タイムだ！攻撃をやめろ！！ぐへあ』

バキャっと変態を殴り飛ばした

「黙れ！この変態！昆虫は大人しく森に還れ！」

僕はウヴァと睨み合う

何故だ…今の僕はこの変態に勝てるような気がする

『ふざけんなああ！！』

「うあ！」

雷撃を打たれ僕は吹き飛んだ

ううう…何あの破壊力…ボディが…ボロボロだ

『ふん……貴様も変態だろ！』

ウヴァは次に巨大な波を放ってきた

広範囲！？

「うぐああ！」

バッタレッグの膝部分が破損した

かなり痛い…

「ぐ…いっ！」

ええ！？何あれ！反則だよね！？

『オラアア！』

巨大な重力が僕の自由を奪い地面に叩きつけられた

「がはあ！！」

ぐ…タカヘッドの角部分が

『どうだ…。コアメダル…返してもらうぞ』

ウヴァはズンズンと迫ってくる

何か…コンボでいかなきゃ

それでも勝てるのかわからない

けどあの変態野郎は絶対許さない！

「うっあ…」

何?…体から何か底知れない力が

まさか…

『ウオオ!』

ウヴァは雷撃を再び放ったが僕はその瞬間に雄叫びをあげた

「ルオオオオアア!」

体からは巨大な波動が放たれ雷撃を打ち消した

『何!?』

未知なる力…暴れだす危険

手懐けるんだ！あの…怪物を倒したように！

巧ｓｉｄｅ

「ハッ！」

回し蹴りでアントヤミーを切り裂いた

『ぐう…』

「よっし！いくぜ！」

ダっと踏み込みガゼルの角を生かし敵を挟んだ

『キシャアア？』

「おりゃあ！」

ブオンと相手を外へ投げ飛ばす

やっぱりガゼルコアは強いな

「ハッ！」

窓から飛び降りヤミーの方へ向かっていく

「セヤアア！」

足のブレードを展開させ切り裂こうとした

が

『ギアア！』

アントヤミーは槍から黒い閃光を放った

しまった！

「ぐ…うわあ！」

目をくらませてる間にアントヤミーは複数の箇所を攻撃したらしい

俺はその攻撃で吹き飛ばされた

『ギアア！』

「ぐ…」

それだけじゃない

アントヤミーはあの槍から光弾を放った

「ぐ…ああ！」

まずい…近距離のガゼルじゃ攻撃が放てない

『消えろ！仮面ライダー！』

「え…ちょっまじかよ！」

アントヤミーは世に言う破壊砲ってのを打ち出した

これはまじでやばい！

「くっ…」

なんとかかわしたけど

『ズガアア！』

あぶねえ…校舎に危うく当たる所だった

「くっ…コアを変えるしか」

なんてことを思っていたら幼なじみのあいつが窓から叫んだ

「巧ーー！これ受け取りなさいよ！」

ヒュンと投げられたコアメダルは狼！

「文乃…」

「かっ…勘違いしないでよね…べ、別にあんたの為じゃな、ないから！／／／」

「わかってる。明久から預かったんだろ？」

「そ、そうよ！／／（本当は私が明久に返してと言ったんだけど…明久は何か笑ってたし…何なのよ二人して）」

「さて、いくぜ！」

『ウルフアップ！』

ガゼルを抜き取りウルフを入れ再び剣で読み込みウルフスタイルになった

「よし！！これならいける！」

ディアスセイバーを取り出してウルフメダルとセルを入れた

『ウルフブレイク』

『キアアア！』

放たれた光弾を交わし相手に近づく

「喰らえ！」

『キアアア！』

遅いぜ！

「てあああ！」

ズバアアアとアントヤミーを切り裂いた

『ぎ…ギアア！』

アントヤミーは爆発してセルメダルとなった

「はあ…はあ…よっし」

剣を地面に刺しみんなに手を振った

『にゃぁ…巧かっこいい』

『それでこそ私の家来だわ！』

みんながいろいろ言う中と笑っていたら何か寒気が襲った

「…これは…明久か？」

何だ凄まじい冷気を感じる

気づけば走り出していた

雄二ｓｉｄｅ

「オラア！」

ヤミーを捕まえてそのまま顔面を何発も殴る

『き…ぐ』

やっぱ張り合いがねえ…

セルメダルを入れてキリキリと回す

『カポン』

右腕のカプセルが開いた

『ドリルアーム』

無数の機械がドリルとなり俺の腕に武装された

「こいつは一番使いやすいな…オラア！」

ブオンと猿ヤミーの腹を殴りつけセルメダルセルメダルを奪い取る

繰り出された拳を交わし飛び上がる前に押さえつけドリルを突き刺す

『キイイ！』

へへっ…いい様だ

「よっ！」

跳び蹴りで吹き飛ばしセルメダルを再び入れた

『セルバースト！』

「逃がさねえよこの変態猿が！！」

ガシッと捕まえドリルアームを剣のように構える

「オオオ…」

ドリルアームにエネルギーがたまり猿ヤミーを思い切り切り裂いた

「オラアア！」

『ぐあああ…二次こそが全て…』

猿ヤミーはそんな言葉を残して爆発しセルメダルになった

『クレーンアーム』

すかさずクレーンアームを武装しセルメダルを吸引してミルク缶へ入れた

「はっ…こんなもんか」

やっぱグリードが一番大量だな…

「……雄二」

「なんだ翔子？まだい…うおああ！」

翔子がいきなりバースバスターで打ってきた

『グアア』

クズヤミーか？

「…油断しすぎ」

「翔子！お前なんでバスターを…」

翔子は頬を赤らめながらこっちを見た

「夫のサポートは妻の勤め」

いつもならつっこむ俺だが…あまりのことで呆然としてしまった

「……雄二？」

「…おっと…わりいな…」

翔子に謝った瞬時…とてつもない冷気に襲われたような感じがした

「……！？」

この冷気…まさか明久か？

「翔子…お前はここで待ってろ！」

「…うん」

明久の奴…一体何があったんだ！

ＮＯｓｉｄｅ

『タカ！クジャク！バッタ！』

タカジャバへと変身した映司は盾…タジャスピナーから炎弾を発射した

「ハア！」

『ああ！』

攻撃をくらったヤミーはふらつき、オーズは更に攻撃を仕掛ける

「何かやばいことが起きる…急がなきゃ！」

ヤミーの攻撃を交わして確実に攻撃を決める

アンクも驚いているが映司はよほど何か危険なことを察知したのだろう

「これで決める！」

タジャスピナーを開きメダルを入れる

そしてタジャスピナーをスキャナーで読み込んだ

『タカ！クジャク！バッタ！ギン！ギン！ギン！ギガスキャン！』

「ハアアア…」

溜めをつくり一気に円形状の攻撃を繰り出した

『セイヤアア！』

『アアア！…明久…君』

ヤミーに直撃し、たちまち爆発が起きた

「はっ…たいしたもんだ…」

「…！」

アンクの言葉を無視して映司は走り出した

（この感じ…紫の）

何かに焦りを感じながらもオーズは走しる

明久ｓｉｄｅ

「ウオアアアア！」

『ぐ…』

僕は高く叫び立ち上がった

僕にしかできない…馬鹿しかできないこと

僕は限界なんか知らない

自分がどうなっても人を助けたい

なら…この力を…僕は手懐けるんだ！

「ハアアア！」

体内から三枚のメダルを飛ばしキャッチする

恐竜…紫のメダル

「力が…溢れ出す」

メダルがガタガタと動く…負けてたまるかああ！

三枚のメダルをドライバーにセットしてスキャナーで読み込んだ

「ウオアアアア！」

僕は力の限り叫んだ

すると何かの波動が外へ吹き飛んだ

いくぞ！！！

最強と破壊と暴れ出す力

『がっ…うう』

映司は向かう途中に跪いた

体内にある紫のメダルが強い力を放っているのだ

『ぐ…ああ！』

映司の瞳は紫色になり、徐々に支配していく

『アンク！逃げろ！』

映司は後ろにいたアンクに叫ぶ

『映司…お前』

『早く！！』

必死の言葉はアンクを動かした

アンクは舌打ちをしてかる素早く逃げ去った

『う…がああ！』

ビリビリと頭に激痛が走る…

『ウオオオオ！』

映司が大声で叫んだ途端にオーズは紫のコンボになってしまった

それは最も恐ろしく未知なる力を秘めている

そして別の所で紫の力が覚醒していた

明久ｓｉｄｅ

『プテラ！トリケラ！ティラノ！』

三つの絵が重なり一つのサークルとなって刻まれた

「ウオオオオ！」

体から力が溢れ出す!?これは一体?

すると僕の体は金色になった後、みるみる本来の姿となっていく

スーツは白くそして紫色の姿…恐竜をイメージしたかのようなオーズとなった

『プ・ト・ティラーノザウルース!』

これが最強のオーズ

「ハアア…」

紫色の羽と尻尾を出しブワッとウヴァに向けて風圧を送る

凄い！？地面まで固まった

僕は悟った

「負ける気がしない！ウオオオオ！」

雄叫びにより氷が溶けウヴァが吹き飛んだ

僕は…力を手懐けたんだ！

『ぐ…な、なんだあれは』

「ウオオオオ！」

体から溢れ出す力を一気に解放する

ウヴァは再び吹き飛んだ

「凄い！凄いよ！」

これが…プトティラ…コンボ！

「いくぞお！」

バッと構えて変態を見る

いかにも変態な顔してるよね

『誰が変態だ！』

ウヴァは雷撃を繰り出してきた

あれ！？聞こえてたの！

『オラアア！』

巨大な雷撃が落ちてくるけど僕は軽く振り払った

『な、何！？』

「弱いなあ…まるでスタンガンみたいだよ」

ダッと地面を走る

「おりゃあ！」

ガスっとウヴァの腹に命中しウヴァは後ずさる

凄いパワーだ…

「ハア！」

回し蹴りを放ちウヴァの顔面に直撃させた

『ウグア！』

ウヴァの触角が砕けた

これは…あれじゃないだろうか

いわゆる…無敵状態！

仮面ライダーって最強の姿は最初は本当に無敵だよね

「しゃああ！」

跳び蹴りを放った後素早く地面へ叩きつける

『ぐ…』

「まだまだあ！」

顔面や腹、足などの鎧を壊しまくる

虫って生命力強いからこまめに破壊しなきゃ

『貴様…くふ』

喋る前にアッパーを打ち黙らせる

「りゃあ！」

再び跳び蹴りを喰らわせて蹴り飛ばした

『ウグオ…ガハ』

この力…本当に凄い…これなら雄二に勝てるんじゃないかな

「って正義のヒーローがそんなことしちゃ駄目だよね～」

『ふざけんな！』

「ほいっと」

繰り出された拳を避ける

「しゃあ！」

『ガハア！』

顔面を殴り飛ばして準備完了

グッと拳を握る

「このコンボのもう一つの力…見せてやる！」

『アアアア！』

ウヴァはダダダと走ってくる

狙いを良く定めて…

「今だ！！」

ウヴァの体内に手を突っ込みメダルを掴む

『な、何！？』

「くだけろお！」

バッタとカマキリの意志の無いメダルを掴み思い切り握りつぶした

『ガアアアアアアア！メダルが！！俺のメダルがあああ』

ウヴァは叫びながら後ずさる

ふう…これでよしっと

「君も僕が助けるから…必ず！」

『オーズウウウウ！』

スキャナーを取り出し再度読み込んだ

『スキャニングチャージ！』

「ハッ！」

肩の角が伸びる…凄い伸びるなあ

『グフッ』

ウヴァに突き刺さり僕は目を光らせる

あまりやりたくないけど

「ハア！」

ブオンと再び凍らせる

『……』

ウヴァは固まり動かなくなった

さあ！ここからが原作と違うよ！

「ハアアア！」

ダダダと素早く走る

風が…風が冷たいいいい！

「痛たたた！」

うわあ！風がまるで槍みたいだ！

「トオウ！」

バッと飛び上がり

「セイヤアアア！」

ぐるっと回し蹴りを決めた

あれだよ！アンクロストの回し蹴り！

バキイとウヴァは砕け散った

メダルがバラバラと飛び散る

「はあ…やった」

体中から力が抜けた

かなりの脱力感だよ…フィードバックよりきついんじゃないかなあ

「ふう…」

一息ついてからメダルを拾う

「4枚か…えっとこれが…意志のメダ『『明久!』』

うん?何か聞こえたような気が

「気のせいだよね…」

メダルを拾い上げ握りしめる

壊さないようにしなきゃ…

『明久！』

『アキ君！』

ん？やっぱり声が聞こえる…フェイトとなのは？

「ってそんなはずないか…」

ある訳ないよ。二人は学園にいるんだから

「明久！」

「へぶほ！」

えっ何！？この柔らかい感触！？

変身してても伝わるんだけど！？

「アキ君！」

「にぶら！」

背中！背中に何か当たってるうう！

羽？自分の羽だよね！？

ムニュンと伝わる感触…まさか

「なのはとフェイト？」

僕は試しに聞いてみた

うん。何かが顔に当たってるから見えないんだ

「……はわっ！／／」

「きゃうっ！／／」

何かに気づいたように二人が離れた

声からして間違いなく二人だ

「「ごめんなさい！／／」」

二人は僕にすぐさま謝った

「い、いきなりどうしたのさ二人共」

内心胸がバクバクするよ……

だって二人はバリアジャケットの姿で顔を赤くしてるし…

「「違うの！あれは体が勝手に」」

二人は同時に何かを謝っていた

「そんなことより…」

僕はらちがあかないと思ったから話を無理やり変えた

「その姿ってことはまさか戦ってたの？」

「「うん……」」

そうだったんだ…

「で、でも火野先生が助けてくれたから！」

なのはが慌てて上手く話を付け足した

「それなら良かったかな…」

火野先生なら大丈夫そうだ

「そんなことより明久」

この声は…まさか

「なにかな雄二…」

やっぱり悪友だった…なんだよせっかくのトークを邪魔する気？

「その姿はなんだ」

僕は改めて自分を見た

「プトティラだよ」

「「はあ？」」

巧と雄二は首を傾げた

「まあ簡単に言えば新しいコンボだね」

なんて話ていたら

『ウオオオオ！』

なに！？雄叫び！？

途端に地面が凍り一気に割れる

「！」

『ウオオオオ！』

「プトティラ…？」

僕らの目の前にプトティラコンボが現れた

氷河とフラグと鈍感（前書き）

お待たせしました！ちょっと急ぎ気味でしたので上手くまとまりませんでした

次回からはいよいよ終章の合宿編がスタートします！

氷河とフラグと鈍感

「ルオアアア！」

僕らの目の前にが氷り始めた

「火野先生…」

僕と同じ姿をして…今僕らを襲おうとしている人の名前を呟いた

「ウアアア！」

凄まじい冷気だ…

「きゃあ！」

「ぐ…」

みんなはあまりの力に吹き飛ばされた

「みんな！ぐ…火野先生…」

プトティラとなった火野先生は明らかに暴走している

僕が止めなきゃ…僕しか止めれない

「…ウオオ！」

空中へ大きく砲口して氷りを砕いた

同じ力だけど…暴走しているなら力の制御はできない！

「ハッ！」

バッと構える…先生は叫びながら突進してきた

「おりゃ！」

突進してきたのを利用して腹部を殴りつけた

「が…」

「せや！はああ！」

バキバキと顔を殴りつけ投げ飛ばす

「……フウウウ」

「効いてない…か」

やっぱり物理攻撃じゃ駄目か…

「ウアアア！」

「うわ！」

繰り出された拳をすれすれで避ける

「今だ！」

ガシッと捕まえて顔に向けて冷凍ガスを口から吹き出した

「ぐ…があ」

ピキピキとプトティラの顔が固まっていく…

「ぬおりゃああ」

ガッと顔を掴み思い切り叩きつけた

「ぐ…があ」

「ふう…とりあえず…」

安心したのもつかの間…すぐに起き上がってくる

どんだけタフなのさ！

「ウオオ！」

ワイルドスティンガーだったかな？

肩から角が伸びてきた

「うわ！」

バッとすぐに避けてもう片方を弾き返す

「う…」

怯んだ隙に跳び蹴りを放った

「まだまだあ！」

倒れたと同時に起き上がって顔面を殴る

「うおりゃあああああ」

「がああああ！」

このまま気絶させて暴走を…

「があ！」

「なわっ」

危ない…危うく殴られるとこだった

「それにしても…なかなか倒れないや…」

このままだと…暴走しすぎて先生の方が危険だ…

「明久！」

「く…」

『ベルトを傾けろ！』

突如謎の声が聞こえたけど今は振り返る余裕はない！

「しゃあああ！」

バッと飛びかかり素早くベルトを傾け変身を解除させた

「があ…うああ」

プトティラは変身が解かれ先生へと戻った

紫のメダルが先生の体内へと消えていった

先生…まさか先生まで…

「映司君！！」

「映司！」

さっき声がした方から二人の人が走ってくる

泉先生と…確かもう一人のアンクだったかな？

「映司君！しっかり！」

泉先生は先生を揺する

「ああ…あまり揺すらない方が」

僕は止めようとしたけどアンクが割って入り…仕方なく変身を解いた

「馬鹿が。また無茶しやがって」

「…ああ…今回は危なかったよ」

先生は意識を取り戻しゆっくりと起き上がった

「映司君…」

「ごめんね…俺また暴走しちゃって…同じ紫のオーズに助けられたよ」

先生は俯いていた…胸が痛む…

先生は…何と戦ってるんだろう

「いいよ…映司君が無事なら…」

「ありがとう比奈ちゃん…」

泉先生は火野先生が力無く答えているのが心配だったのか…

「「…え」」

「おっ」

抱きついた…え？

僕には何故か主人公とヒロインに見えてしまったよ…

まさか先生達って

「無理しないで…」

「うん…そうだね」

火野先生は驚きもせずに笑った

やっぱり二人って

「あの…先生」

僕が動く前にはやてさんが動いた

「何？」

「先生達って付き合ってはるんですか？」

はやてはニヤニヤと、二人は真っ赤になっていた

え？ええ！？

「ち、違うよ八神さん！私は…」

「はは～ん。さては既に」

はやての言葉で更に赤くなる泉先生

火野先生は少し赤いけどわらっていた

「そうだね…それもいいかもしれない」

あっ…口から砂糖が落ちそう

「ひ、火野先生！？」

アンクはふっと笑っていてはやて以外のみんなは真っ赤になっていた

ヤバいよ…僕も顔が熱い

「だって比奈ちゃん…俺に手を伸ばしてくれるって言ったでしょ？」

「あ、あれは…」

「とにかく俺は嬉しいけどね」

そういって火野先生は泉先生を抱き寄せた

「比奈ちゃん…ありがとう…」

「え、映司君…」

駄目だ完全に甘すぎる

「火野先生…大胆なの」

「うん…まさか明久も」

二人は何かを呟いて僕を見た

え？何かついてるのかな？

「駄目だあの鈍感」

「そうだな…（メール？やべっ乙女姉さんからだ！）」

「ありがとう吉井君…」

泉先生はそう言ってから火野先生の手を握りながら去って行った

「あれ？何で僕がライダーなの知ってるのかな？」

僕は首を傾げながら明日の合宿のことを考えていた

「明君」

と、後ろから優しい声が聞こえた

誰かはわかっている…だからこう言おう

「おはよう…まどか」

いつものように微笑むとまどかはニコッと笑ってくれた

「…相変わらず仲良しでいいわね。おはよう明久」

「おはようほむら。君だって大切な人だよ」

「た、大切？」

ほむらは頬を赤らめながら俯いていて、まどかは苦笑していた

あれ？何か変なこと言った？

「って大丈夫ほむら！？」

顔赤いし…熱があるんじゃないかな

「だ、大丈夫よ…！？」

ぴとっと手を額に置くとほむらは珍しくテンパっていた

「ど、どうしたの!?」

「な、なんでもないわ」

そうかな?僕としては可愛く見えるんだけど

「明君…なんで私の頭を撫でてるの?」

まどかは赤くなりながら見上げてきた

「あっ…駄目だったかな?つい…」

「だ、駄目じゃないけど…その」

何を言っているんだろ？やっぱり怒ってるのかな？

「アキ君～」

「明久～」

「なぶしえ！」

なのは、フェイトに抱きつかれ倒れてしまった

な、何！？

「やっぱり明久に抱きつかないと落ち着かないなあ」

「フェイトちゃんも？私もアキ君に抱かれなきゃ落ち着かないの」

ぐ…鼻が…血がああ

「二人共ずるいよ！ほむらちゃん私達も！」

「え？ま、まどか？」

さらに美少女が追加される

「ぬぐ…」

ぬああ！前後左右がサンドイッチにいいい

当たってるうう！あちこちから感触がああ

「「「「アキ君（明君）（明久）大好きだよ！（よ！）」」」」

吉井明久…生まれて初めてハーレムを味わいました

でもそんなことより

「り、理性がああああ！」

僕はプトティラと言う理性と戦うので精一杯だった

それと

場所が教室だったので

『『吉井明久あああ！』』

こいつらに襲われるのも時間の問題だったよ

制御と支配と悪夢（前書き）

カウントザメダル
現在オーズが使えるメダルは

明久
タカ２
クジャク
クワガタ
バッタ
ライオン３
トラ３
チーター３
サイ２
ゴリラ２
ゾウ２
シャチ
ウナギ
タコ
プテラ３
トリケラ３
ティラノ３
サソリ
カニ
エビ２

映司

タカ2
クジャク
コンドル
クワガタ
カマキリ
バッタ
ライオン
トラ
サイ
ゴリラ
ゾウ
プテラ2
トリケラ
ティラノ2

制御と支配と悪夢

「ふぐ…」

体が酷く疲れている感じがする…

『…せ』

だ、誰？

『ヨシイヲコロセ』

やめて…私は…

『コロセ！コロセ！』

「やめて！」

バッと起き上がり荒い息をする

夢？

「私が明君を…」

できる訳がないよ…だって私は

「あれ？私…」

左腕に違和感がありつい見てしまった

「…え…？」

左腕が…怪物みたいな腕に…あ

「まさか私…怪物になってきているの？」

嫌…誰か…明君…

「戻って…戻ってよ！みんなに見られて嫌われたくない…怪物になりたくない…」

私は静かに保健室で泣いた

「…うわ」

ガシャンと物にぶつかって気がついた

そうだ…今、鉄人の雑用やってたんだった

「なんか頭がぼーっとして…」

紫のコアメダル…力は抑えた…はずなんだけど…きっとまた

「まさか…ね。もう支配が始まってる訳ないよね」

だってさっきのことだったし…現に今だって

「それに僕にはみんながいるから」

ポケットからコアメダルを取り出す…新しい仲間が加わったんだし
しっかりしなきゃ

「えーと…これはあっちに運ぶんだったかな…」

荷物を持ち上げた瞬間…僕は両腕が変化していることに気がついた

「うわああ！」

つい荷物を落としてしまった

腕が…何だこれ？

「…まさか！？」

僕は何かを悟った…そんなはず…

もう一度両腕を見ると普通の両腕だった

「やっぱり気のせいだよね～」

まどかは大丈夫かな？

いきなり倒れた時はびっくりしたよ…後でお見舞いに行かなくちゃ

「明久」

どこからか静かな声が聞こえた

誰かはわかる…

「ほむら…どうしたのさ」

ほむらの顔はいつものようなクールな感じが見られなかった

「明久…まどかを助けて」

「え…？」

まどかに何かあったのかな？でもまどかは保健室に居るはずだ

「いいから来て。話があるの」

ほむらはそう言ってスタスタと歩いて行った

「あっ…待ってよ…」

荷物を置きすぐについて行った

ほむらは人気が少ない場所…つまりは立ち入り禁止的な場所に歩いて行った

「ね、ねえほむら…こんな所で一体」

「…明久」

ほむらはこちらを振り向くと真面目な表情をして近づいてきた

「あなたの体内…もう九枚あるのね」

そっと胸に手を当てられ目を見開いた

な、なんでほむらがそんなことを…

「明久…ずっと黙っていたけど私…体内に赤いコアメダルを宿しているのよ」

「え…」

突然のことすぎて驚くしかない

「赤いコアメダル…アンクの」

「そう…私は体内に彼のコアメダルが六枚あるの」

ろ、六枚…アンクのコアメダルが…

「そして…これが今の私」

ほむらは後ろに下がると背中から赤い翼が出てきた

「なっ…」

赤い翼が彼女を覆いたちまち彼女は美しい鳥のグリードになった

まるで…白鳥のように綺麗で…クジャクのように鮮やかだ

「これが今の私よ明久」

「まさか…グリードになるなんて…」

ほむらはすぐに戻り僕に近づいた

「ええ…でも不完全だわ…それにアンクにコアメダルを返さないといけないわ」

それはそうだよね…だって元々アンクのコアメダルだから

「でもそれはあなたに危機が訪れた時よ」

「え…？僕に危機？」

ほむらはまた胸に手を触れた

悲しい顔をしながら

「あなたは私とは違って紫のコアメダルに飲まれかけているわ」

僕は黙って聞いていた…わかるんだ…確かに何か胸が苦しいしんだ

「紫のコアメダルは強力すぎるわ…どのコアメダルよりも」

ほむらは僕の手を取り自分の胸に押し当てた

「ちょっ…！」

うわわ…柔らかい感触があああ！？

「アンクのコアメダルは簡単に制御できる…でもあなたのコアメダルは強力すぎて…いつ飲み込まれてもおかしくないわ…まどかのように」

まどか？…さっきまどかって

「ちょっと待ってよ！まどかがグリードって？」

「まどかは…紫のコアメダルに飲まれたの」

「は…？な、何を言ってるんだよ。だってまどかは」

何でそんな悲しい顔をしているのさ

「紫のコアメダル一枚が…たった一枚がまどかをグリードに変えたのよ」

「う、嘘だね。僕はグリードになっていないし」

ほむらはガッと襟を掴んだ

「まどかは私に話したのよ！自分はグリードになってしまった…あなたを襲ったって！」

静かに風が吹いた

「ま、まどかに襲われたことなんか」

「本当に言えるのかしら？紫のグリードはヤミーを自分で作れるのよ」

自分で…まさかあのプテラヤミーは…

「あなたは意志が強くてコンボに耐えれるから…まだ支配が少ないわ」

ほむらは手を離し僕に抱きついた

「えっ…？」

「お願い明久…戦わないで。あなたが戦えば戦うほど支配は強まるわ」

ほむら…の泣いた姿を見たの初めてだった

僕は優しく抱きしめることしかできなかった

今日のように先生みたいに暴走するのだろうか？

そして…グリードに

でも、なおさら後には引けない

まどかを助ける…

だから…ごめんね

アンク…ほむら…みんな

僕は…戦うしかないんだ

馬鹿でどうしようもないけどさ

確かにやれることがあるんだ

NOside

廃虚したビルに四つの影が映る

「いよいよ終焉の時だ」

「あら…随分と早いのね」

「二年前の借りをここで返す」

「オーズか…楽しみだな」

黒いコアメダル…
桃色のコアメダル…金色のコアメダル…龍のコアメダル…

完全体となった時…世界は破滅へ向かう

「……」

そしてビルの屋上に女のグリードが空を見上げていた

最も最強の紫のグリードだった

彼らは姿を戻し文月学園に向かった

明日の合宿…それが最後の舞台となることを知りながら

合宿と心理と脅迫？

翌日…まあ昨日の続きと言う感じでね

僕らは合宿の為に電車で向かっている

理由は簡単だ。Ｆクラスは現地集合…それだけ

なのに…凄く悲しいのは何でだろう

予想はできていたんだけど、改めて思うと正直差が酷すぎるんじゃないかな

Ａクラスはリムジンバス…Ｆクラスは現地集合…つまり案内無し…

くそう…あのババア

「明君…暇だね」

「うん…暇だね」

で、今は電車の中で隣に座っているまどかに返事を返した

ゲームはいろいろと考えて持ってくるのをやめた

ちなみに席は

窓側に僕、隣はまどかで僕の前はほむら、隣は秀吉

向こう側は手前から美波、姫路さんでその目の前はなのは、フェイトと言った感じだ

ちなみにアンクは雄二や巧達と一緒の後ろにいる

まどかはいつものようににこにこしているけど、もしグリードになったら

「明君?…どうしたの」

「え?あ、ああちょっと考えごと」

ほむらは僕を見つめていただけど気にしない

後、何体倒せば終わるんだ

いつまどかは救われるんだ…

不安が僕を襲う…

僕だってグリードに近づいている…わかってる

でも離したくない…この力が奴らを…

溜め息をつきながら辺りを見渡すと美波が本を読んでいた

ちょっと気になる

「美波…何読んでるの？」

「ああこれ？心理テストの本よ。試しにやる？」

美波は優しく問いかけてきた

最近美波が優しいなあ

「うん。じゃあお願いするよ」

「わかったわ…えっとアキに合いそうなのは…あった」

パラパラとめくった後、美波は何かを思案するようにそのページを

開いた

「じゃあ…始めるわよ。『次の色であなたが思い浮かぶ異性をあげなさい…赤、緑、金、黒、青、白、オレンジ』

ず、随分とこってるなこの本

「えっと…あれ？みんな怖いよ…」

僕に突き刺さる目線

こ、怖い

「えっと…赤がまどか、緑が美波、金がフェイト、黒がほむら、青が姫路さん白がなのは、オレンジが比奈ちゃんかな」

僕が答え終えて突如みんなが美波に詰め寄った

「「美波ちゃん！結果は！？」」

「ちょっ、みんな落ち着いて！」

みんなに詰め寄られ美波が本を落とした

チャンスだ！！僕だけ確認して…

「何なに…緑は親友青、オレンジは恋人、赤と黒と金と白はーむがあ！」

「雄二君！！」

みんなが雄二の本を奪おうと突っ込んでいく

うわ…雄二…ドンマイ

「それにしても姫路さんと比奈ちゃんが恋人…後のみんなはー」

「（どうしよう…後の色はみんな婚約者って知ったらアキが大変な目にあいそうだわ）」

美波は青ざめた顔をしながら雄二は死にそうな顔をしながら震えていた

『二回死ね！／／』

『ぐああ！』

向こうでは同じように心理テストをやっていたらしく

文乃が巧に蹴りを放っていた

照れ隠しなんだろうな…

「み、みんな落ち着いて…雄二が死んじゃうから」

「明久……助けてくれ」

雄二が死にそうな声で喋る

うわああ！やばい！

「ムッツリーニ！」

「……了解した」

僕と素早く起きたムッツリーニは雄二を助けるべく電気を体内に流した

「ぐべあああ」

ふう…なんとか復活

「危ねえ…！本当に死ぬかと思ったぞ！」

いや…逆に殺しかけた…

でも

「結果オーラーイ！」

「てめえ…」

☆

ムッツリーニが今まで寝ていたのには理由がある

簡単に言えば僕と巧は脅迫されていて、雄二は霧島さんに結婚させられそうになっていてる…その犯人の調査を依頼したんだ

雄二は録音した物を売ってる奴、巧は脅迫者の犯人

で僕も一応犯人探し

なぜ一応かと言うのは以下を見ていただこう

『あなたが大好きです…だから他の男の子とは話さないでください

もし続けるならこの写真をバラキマス』

これが脅迫の内容だ

うん…勝手すぎる！

ヤンデレ！？ヤンデレだよね？

文面から見て女の子だ

そしてバラキマスと言った写真はー

僕がオーズに変身している写真

ちょっと待とう。まず何かおかしい

男の子と話すなってー僕はそんなのに興味はない！

僕が男好きと思っているのかこの女性は！

そしてこの写真はさすがにまずいけど二枚目は

僕がニコッと笑っている写真

何がしたいんだあああああ！

こんな写真ばらまいて何がしたいんだよ！！

こんなの脅迫なの！？

別にばらまかれても大丈夫なんだけど

そして問題は最後…もう一枚紙があった

『合宿の初日…夜の0時に会いませんか?』

告白!?これって告白だよね!?おかしすぎる

正体ばらす気満々だ

結果として僕は脅迫状的なラブレターを貰ったんだ

みんなにはまだ知られてないよ

「はあ…初日からなんか疲れそう」

じっと窓を眺める

このまま平和に終わってくれたらな…

みんなを巻き込みたくない

この後みんなもわかると思うけど僕は姫路さんの手作り弁当で地獄に行きかけた

悪夢と犯人とメール

『あれ…？ここは何処だろう』

真っ暗な場所…僕しか居ない

何でこんな場所に…

『鏡？』

そこには大きな鏡があった…覗いてみるかな

『！？』

鏡に映ったのは僕じゃなかった

いや…僕であり、僕でない

グリード…恐竜のグリードだ…

『うわあ！』

突如腕が変化する

やめてよ！僕はグリードなんかに

『ぎ、逆の腕も』

嫌だ…嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ

『うぐああ』

体中がメダルで覆われていく…

僕がグリードに…

『うわあああああ』

「はっ！」

バッと体を起こす…

夢？悪夢だったのかな

頭が痛い…

「明久！目が覚めたか…」

アンク？いやアンクだけじゃない

「全く心配させやがって」

「尋常ではない状態だったぞい」

雄二や秀吉、みんながいた

「あれ？ここは…僕は確か」

「ああ…姫路の弁当を食べてお前はあの世に逝く所だったんだ」

巧は吐息をした後に淡々と語ってくれた

ここは合宿の部屋

僕、雄二、秀吉、ムッツリーニ、アンク、巧がメンバーの六人部屋らしい

実際は広くて六人でも十分にくつろげる

それにしても…最悪な夢だった…

グリードに…

「一体どうなってしまうんだろう」

すっとコアメダル…ウヴァ達を取り出しみんなから離れた

みんなは部屋を閉めてムッツリーニの調査結果を聞いている

『明久大丈夫？あなたかなり疲れてるわ』

「ありがとうメズール…大丈夫だよ」

『貴様に死なれたら俺らが困るからな』

『ウヴァは素直じゃないわね』

『全くさ…素直に死んでほしくないって言えばいいのに』

『うるさいカザリ！お前だってさっきまで心配してただろ』

みんなのやりとりは和むなあ…一時の苦しさを忘れてしまうくらいだ

『明久～大丈夫か～？』

「はは…ありがとうガメル…」

みんなを体内に戻したいのは山々だけど紫のメダルに押し返されてしまう

そう言えば…紫のメダルとは話したことないよなあ…

いつかみんなと仲良く話したい

「明久？何やってるんだ」

「あっ…ごめんごめん」

コアメダルをしまいみんなの所へ戻る

あれ？アンクが居ない

「…調査結果から巧と雄二は同一人物…明久は女性だということがわかった」

やっぱり…てっきり久保君かと思ったけど久保君は前にＯＨＡＮＡＳＨＩしたからなあ

「で、犯人は!?」

首を横に振るムッツリーニ…そうだよね

「…明久の犯人は美人で腹黒しかわからない」

「君は一体どうやって調べたんだ」

むしろそっちの方が凄いよ…

それにしても腹黒って

「それで雄二達は?」

「俺達も女だ…くそ」

うわ…かなり不機嫌そうだ

ここはそっとしておくべきだよね

「明久はいいとして二人はどうするのじゃ？」

秀吉の言う通りだ…僕は会う約束までさせられている

対して二人は本当の脅迫だ

「犯人がわからない以上は見つけられないよね」

「…いや，犯人は既にわかっている」

ムッツリーニは目を光らせながら言い放つ

いやいやそれなら最初に言おうねムッツリーニ

何で今になって言うんだよ

「…八神と工藤に情報捜索してもらった結果…犯人は明久に恋愛感

情を抱いている」

「「……」」

沈黙が場を覆った

は?どういうこと?

「明久…お前」

「またか…」

あ、あれ?みんなどうして呆れてるのさ

首を傾げているとメールの着信音が鳴り響いた

「ちょっと待っててみんな」

みんなから少し離れ携帯を開いた

「…？なのは？」

ｆｒｍなのは
―――――
ｓｕｂちょっと相談したいことがあるの
―――――
私達の部屋まで来てくれないかな？

「…なんだろう」

ＲＥちょっと相談したいことがあるの
―――――
わかった。雄二達はどうするの？

「送信…っと」

二十秒後くらいに返信が来た
内容は大丈夫のこと…雄二達にも関係しているらしい

これはもしかして…犯人絡みかな

「みんな…ちょっと話があるんだ」

なのは達のことを話すと雄二は頷いた

「なるほどな…その可能性は高いな」

「じゃあ早速行こうよ」

「ああ…」

明かりを消して窓側へ歩く

ちゃんと閉めておかなきゃと思い窓へ近づいた瞬間何かが僕を掴んだ

「…いっ!?うわああ」

そのまま窓から外を投げ出されてしまう

ぇっ!?何何!?

「明久!?」

雄二達の声はあっという間に聞こえなくなった

「うわああ!」

宙を舞いながら必死にベルトを取り出す

この際仕方ない！

三枚のメダルを入れてスキャナーを手にとり読み込む

「変身！」

いつものように合い言葉を口にする

たちまちメダルに囲まれて仮面ライダーオーズへと変身した

『タカ！トラ！バッタ！』

『タ・ト・バ！タトバ！タットッバ！』

「うわあああ」

そのまま地面へ激突する。変身したおかげで体には問題はない

「痛たた…」

合宿場の外…か

『さあ…始めましょう…オーズさん』

「…だ、誰だ?」

突如宙から舞い降りてきた怪物は…お辞儀をする

『初めまして…植物系グリードのサクハと申します』

「ぐ、グリード」

まだこんなグリードがいたのか

『そう構えないでください…私はあなたと戦う為に来たのではないのですから』

「え？」

サクハと言うグリードは姿が変わり人間になった

いや…この人は

「比奈ちゃん…？」

「明久君…久しぶりだね」

いきなりの状況に僕は呆然とするしかなかった

真実と同盟と迫る闇

「ひ、比奈ちゃんが…グリード」

目の前の現実から逃げたい…

比奈ちゃんまでグリードだったなんて

「明久君…私は戦うつもりはないから…」

え?…ああそうか…僕が構えているから

あれ?何で僕構えていたの?

「私は話しがしたいだけなの」

「…話し？」

理由なんか聞いていたらちがあかないから話しを合わせることにした

「うん…もうすぐ…世界が終わりを告げるの」

「え？」

間抜けな声を出してしまった。だってほとんどの人はまず信じない

「そう…グリードによって…世界が消えるの」

「…！！」

グリードによって…世界が…

鴻上さんなら知ってるかな

「ちょっ…ちょっと待ってよ！世界が終わるってどういうこと…」

比奈ちゃんは真っ直ぐ僕を見たままだ

「2年前…グリードの誕生…世界の終わり…オーズの復活」

比奈ちゃんは急にポツポツと喋り出した

「グリード？確かグリードは８００年前に…それにオーズが復活したなんて」

二年前…僕はみんなと卒業していたはずだ

それに世界だって平和だった

「な、何を言ってるのさ比奈ちゃん」

「これは女神のグリード…オルソナが残した記録…そして明久君の過去」

ますます訳がわからない…

「一体何なのさ！僕にそんな過去はない！君は…比奈ちゃんじゃない！」

トラクローを展開する

よくも比奈ちゃんに化けて現れたなグリード！

「うおおお！」

地面を蹴ってサクハに向かって攻撃を仕掛ける

「…寂しいね…明久君」

比奈ちゃんの姿からグリードに変化した

「……」

「!?」

攻撃が当たってない…なんだこの触手!?

「やめて明久君…戦いたくないの」

「ぐ…」

そんな悲しい顔をしたって無駄だ！

なんとかメダルを入れ替える

まずは触手をどうにかしないと

『クワガタ！カマキリ！タコ！』

頭部と体は緑色に足は吸盤のついた水色に変化した

「せりゃあ！」

腕についているソードを展開し触手を切り裂いた

「…きゃ！」

続けてクワガタヘッドから雷撃を放った

「喰らえ！」

青白い雷はサクハに直撃する

よし…次のメダルにチェンジだ！

「！…明久君やめて」

「う！？」

サクハの声でメダルを変えようとする手が止まった

まさか…本当に…

「…比奈ちゃん？」

サクハは…ゆっくりと起き上がり抱きついた

「良かった…正気に戻れたんだね…明久君」

「あ…」

さっきから揺れていた焦点が戻る

僕…比奈ちゃんを…

「明久君…落ち着いて。さっきまで明久君はメダルに飲まれていたの」

「メダル…に飲まれて」

サクハ…いや、比奈ちゃんは僕が息を整えるまで抱きしめてくれた

☆

「…ごめんね…僕がメダルなんかに飲まれたから」

「明久君のせいじゃないよ?…でも私が言ったことは本当だよ」

変身を解き僕らは近くのベンチに座った

もうすぐ…夕ご飯だ

「じゃあ…僕はその時…居たんだね」

「うん。だってオーズに変身したのは明久君だったんだよ」

少しの間沈黙が続いた

「僕が？」

「そう。８００年前とは違うグリードが現代に現れ…それを倒したのがクガ王の子孫…明久君だったの」

そう言って比奈ちゃんは僕の額に手を置いた

「今から明久君に…オルソナが残した記録を見せるね？」

「う、うん」

同意した瞬時…駆け巡るようにビジョンが映し出された

「…これが僕の記憶…」

そしてまどかがオルソナ…

オルソナは全てのコアメダルを取り込んだグリード…いや神

「わかった？」

「うん。僕が今やるべきこともわかった」

迷いなんてものはなくなっていた

グリードになっても僕は守らなきゃいけないんだ！

「…それで明久君に話しがあるのは…私達と手を組んでくれないかな？」

「君達が世界を滅ぼすんじゃないの？」

比奈ちゃんはゆっくりと頭を横に振った

「違うよ…世界を滅ぼすのは紫のグリード…まどかちゃんなの」

かつての恋をし、世界を守ってくれた彼女が…今は世界を滅ぼす存在

「…どうすればいいのさ」

「簡単だよ。私達が明久君に力を貸す…そして」

ゆっくりと比奈ちゃんが歩み寄ってきた

「真のオーズを呼び覚ますの…」

「真のオーズ…」

「二年前とは違う最強の…でも、苦しい戦いになる…まどかちゃんは創造の力すら手に入れたから」

比奈ちゃんはじっと僕を見つめた

きっと答えを待っているんだろう

決まってる

「まどかを…世界を救う！」

比奈ちゃんはにっと笑い後ろを振り向いた

「どうするのクドー？」

比奈ちゃんの後ろから茶色いグリードが現れた

爬虫類グリード？

『…いいだろう。私も奴らは気にくわない』

「ありがとう…。明久君…私達がずっとスル達を騙して入手した情報を伝えるね」

「う、うん！」

最後の戦いが始まるんだ

これで…終わる

「…え!?」

何か視線を感じ振り向いたけど誰もいなかった

「どうしたの明久君?」

「あっ…ごめんごめん。なんでもないよ」

本当に終わってくれるのかな…

僕と疑問と突撃女子

夕食が終わって僕らは自分達の部屋にいる…僕はボケーッとさっきのことを考えていた

「…世界の終わりか」

信じたくないけどこれは現実なんだ…もうじき奴らがメダルを狙って来るだろ

「…」

比奈ちゃんの情報によれば奴らは紫のメダルを必要としていて、僕から奪いに現れるらしい
そしてグリードとの対決…勝てるのだろうか？みんなを守れるだろうか？

（しっかりしろ明久！不安があるだけメダルに飲まれてしまうぞ！）

ありがとう…僕の心の悪魔…

（でもさ、グリードになったらきっとオーズより強い力が）

僕は天使を握りつぶした

（ぬあああああ！）

駄目天使だ。僕の天使は駄目駄目だ

「明久大丈夫かの？」

「ああ秀吉…うん。ちょっと天使退治をね」

「？」

向こうを見ると雄二が僕を見ていた

な、何かな？

「明久…お前ずっと何処にいた？あいつらが心配してたぞ」

「あはは…いきなりヤミーに襲われちゃって」

適当にごまかさなきゃ…みんなを巻き込む訳には行かない…

けどなのは達には謝っておかないと…

「それでなのは達は何を相談してたのさ?」

「……なのは達に変なメールが来たらしい。調べた結果雄二達の犯人と一致した」

「そうなんだ。ありがとうムッツリーニ」

僕は近くにある湯飲みを手にとりお茶を入れた

「何かおかしいな…」

雄二は考える仕草をしながら曇った表情をしていた

「どうしたのさ雄二？」

「いや…ちょっとな」

「脅迫犯のことかの？」

「ああ…ムッツリーニ」

雄二は何か言うとムッツリーニは親指を立てた

一体何を考えているんだろう

「…明久。メダルを見せろ」

アンクが何かいじりながら僕にメダルを見せるように言ってきた

というかいつの間に帰ってたんだ

「別にいいけど…」

アンクの元へ行ってメダルを渡した

ちなみに僕の所持メダルは

タカ２
クワガタ２
カマキリ２
バッタ２
ライオン３
トラ３
チーター３
サイ２
ゴリラ２
ゾウ２
シャチ
ウナギ
タコ
サソリ
カニ
エビ２

そして紫のメダルが9枚と言った感じだ

紫のメダルについてはアンクに話してある…全く制御しろだなんて難しいのに

「なるほどなあ…そして俺のコアで8コンボ可能か」

「え？アンクメダルが…」

アンクは黙りながら三つコアメダルを取り出した

「俺のメダルは今、４つだ」

クジャクとコンドルを見せながらアンクは呟いた

ほむらが渡したのか…

途端僕は彼女の言った言葉を思い出した

『あなたが危険な状態になった時…アンクに全てのコアメダルを返すわ』

寒気がするのはあれだよね?脅迫犯が怖いからだよね?

「明久…お前はグリードと打ち解けることができる存在だ…だからこいつらは持ってろ」

アンクは三つずつコアメダルを渡してきた

勿論グリード達の意志があるメダルだ

「明久…死ぬなよ…」

アンクはそう言った後部屋から出て行った

「アンク!?死ぬなってどういうこ…と」

ん?廊下から足音が…かなりの数だ

「…やっぱり来たか」

雄二が呟いた瞬間…

『無駄な抵抗はやめなさい!!』

女子達が勢い良くなだれ込んで来た

僕と疑問と突撃女子（後書き）

明久の所持メダル

タカ
クワガタ
カマキリ
バッタ
ライオン
トラ
チーター
サイ
ゴリラ
ゾウ
シャチ
ウナギ
タコ
プテラ３
トリケラ３
ティラノ３

アンク所持メダル

タカ
クジャク
コンドル
クワガタ

カマキリ
バッタ
ライオン2
トラ2
チーター2
サイ
ゴリラ
ゾウ
サソリ
カニ
エビ2

疑いと暴言と待ち受ける罠

「…う…」

駄目だ…がっしりと掴まれていて…ほどけない

「…俺達は違うと言ってるだろ！」

「信用できないわ！そんなこと言ってごまかせると思っているのかしら？」

雄二の言葉も聞かず女子達はさらに締める力を強めた

それは突然のことだった…。勢い良く女子達が入ってきて…すぐに動きを封じられた

小山さんをリーダーとして女子のみんなが僕らが風呂を覗いたと言ってくる

そんなはずがない…カメラがあると言われたってあれはムッツリーニのじゃないし、それに僕は比奈ちゃんと話していて、雄二達はなのは達の所へ行っている

どう考えても僕らがカメラを仕掛けれるはずがないじゃないか！

「全く…お風呂を覗くなんて最低ね」

「全くでございます千世様」

そんな…梅ノ森さんまで…

「観念しなさい…」

「みんな正直に言ったほうがいいよ」

く…なんで…みんな信じてくれないんだ…

「明久？」

「巧…僕らは何かしたのかな？」

巧はすぐに首を横に振ってくれた

ありがとう

「そんなわけない。俺達は何もしていないさ」

「巧…あなたも素直になりなさい」

「千世…俺は前から素直になってるさ」

『だいたいFクラスは問題起こしすぎよね！』

『そうそう！絶対犯人はあの二人よ！』

『吉井と坂本ってあの最悪コンビよね？』

『…絶対犯人ね！みんな力をさらに加えて』

Eクラス代表の言葉で力がさらに強まり関節がしまる

「があ…な、なんでさ」

くう…このままだと確実に骨まで折られてしまう…どうすれば

女子には暴力はふるいたくない

「はっ…お前らこそ卑劣だな」

どうしたらわかってもらえるか考えていたら雄二が呆れたように笑った

ついにおかしくなってしまったのか!?

「何がよ坂本…」

「俺なら構わずこの女子達を払いのける…だが明久の気持ちをうまく利用してくれるじゃねえか」

その言葉でみんなが動揺した…何?何?

「お前らは明久が暴力を振るえないのをいいことに俺より酷く力を加えている…下手したら確実に骨を折るきだろ」

「何よ?馬鹿にそんなことしても別にいいじゃない」

ええ!?骨折るきバリバリあったの!?いろんな意味でショックだよ!

「おや?どうやら俺が動くまでもないようだな」

雄二の視線が気になり僕や小山さん達も振り向いた

そこには…

「…へえアキ君達を理由無しに犯人扱いするんだ」

「明久達は罪がないのに…」

「あなた達に…明久を馬鹿にする資格があるのかしら?」

なのはやフェイト、ほむらさんが黒いオーラを出していた

「アキ達は覗きなんてしないわ」

「…雄二は正しい」

「坂本君に何をしているのかしら？」

「美波！霧島さんにマミさんまで」

「ちょっとあんたら何私の彼氏に手を出してくれとるんや？」

「覚悟はいいかな？」

「…はやてに工藤」

木下さんやティアナ、文乃や希まで…

「な、なによ…？」

「なんでみんなが吉井達の味方に」

驚く女子達を無視するかのようにみんなはオーラをまといながら部屋に上がってきた

「アキ君達を離してよ？」

「何言ってるの高町さん！あなた達はこいつらに騙されてるのよ！！」

突然パアアアンと鋭い音が走った

僕らは驚くしかない…

「騙された?それはあなた達じゃないの?」

「え?」

驚く小山さん達をよそにほむらがゆらりと僕の方に近寄ってくる

「明久を離しなさい」

その顔はとても冷たい目をしていた

「ほむら…」

「暁美さん!あなたこいつを庇うの!?」

「違うわ…私は騙されたあなた達に締められている明久を助けるだけよ」

さらに歩みよる…ほむら…君はそんなに僕のことを

周りでは雄二はマミさんに助けられムッツリーニや巧、アンクも救出された

なのは達は小山さんと言い争いになっていた

止めなきゃ…

「来ないで！」

僕の腕を掴んでいた女子がおもいっきり腕をひねった

その腕はプテラヤミー達に傷つけられた腕だったからかなりの激痛がきたんだ

「いっ…つああ！」

「明久！？」

今までの疲れもあってか意識が消えていった

『役立たずが…』

『役立たずは無に帰す』

『明君……』

合宿一日目は始まったばかりだ

眠りと狙いとアポロンヤミー

俺達は女子が消えた後、高町達と一緒に馬鹿の様子を見ていた

チャプチャプとテスタロッサがタオルを水で濡らす音が静かに響いた

「さっきはすまなかったな…」

高町達は俺達の味方についたせいで共に悪人扱いだ…畜生…誰の仕業だ

「いいよ…私達は何があってもアキ君達の味方だから」

そう言って微笑む高町…俺は静かにお礼を言った

「アキは大丈夫なの？」

「正直…頷けない」

島田の質問を返したのは彼氏である後藤だ

どうやら島田からの連絡を聞いて来てくれたらしい…ありがたいな

「これは…教師を呼ぶしかないな…」

後藤はそう行った後に部屋から出て行った

大方教師を連れてくるんだろう…

明久の方をチラリと見ると今だに起きず苦しそうな顔してやがる

くそっ…

「やっぱり今までの疲労が爆発したのかな…」

テスタロッサは再びタオルを水で濡らしよく絞った後明久の額に乗せた

「…一体犯人は誰なのじゃ」

秀吉の言う通りだ…こっちの切り札を潰してくるとはな…上等だ

「そうだ…高町達は騙されてるって言ってたよな?」

巧の質問に女子達は頷いた

「うん…全ての犯人は…『きゃああ!』」

高町の言葉を遮るかのように廊下から悲鳴声が聞こえた

おいおいまさかだと思うが…

『ウォ!ウォ!ウォ!』

「きゃ！何？」

突然響いた声になのははびっくりしていた

「悪い…こいつはヤミーの出現を知らせてくれるゴリラカンドロイドだ」

ゴリラカンドロイドはカタカタと腕を回しながら目を光らせている

「つまりヤミーが現れたの？」

「ああ…こんな時に…巧！」

「わかってる！」

俺と巧はすぐに部屋を出た

ちっ！これも犯人の仕業か？

☆

『…ふん』

女子達が入っている風呂の道でヤミーが一人の女を締め付けていた

く…まずいな！

「うおお！」

焦っていると巧は走り出しヤミーに突撃した

相変わらずな奴だ

『うお！』

ヤミーは首を絞めていた女子を離した

「大丈夫か！？」

「けほ……うん」

俺は安全を確認すると女子を逃がすように促した

一体どういうことだ…俺達を狙っているんじゃないのか？

『ほお…貴様らは吉井の仲間か』

奴はまるで神話の神…アポロンをイメージさせたようなヤミーだ

「やっぱり狙いは俺達か…」

俺達はそれぞれベルトを取り出し腰に巻く

『どうやらその様子からだと高町達が妨害したようだな』

何?こいつ何でそれを

『せっかく貴様らを犯人にしたてあげたのにな…裏切り者まで出たようだ』

「何をぶつぶつ言ってんだ…ストレスを発散させてもらうぜ」

ピーンとメダルを弾きキャッチする

巧はコアとセルを入れて短剣を構えた

「「変身！！」」

セルメダルを入れてキリキリと回す

巧は短剣を突き刺して両手を広げる

『カポン！』

『ウルフアップ』

俺達は装甲に包まれて仮面ライダーへと変身した

「さあて…稼ぐぜ」

俺はパンと手を合わせた後に構えた

『同時に来るがいい』

随分余裕そうじゃねえか…

「それなら遠慮なく行くぜ！」

俺達は床を蹴ってアポロンに攻撃を仕掛けた

「喰らえやあ！」

ガスンとアポロンに向かって素早く回し蹴りを放つ

『…弱いな』

「!?ぐあ!」

アポロンは見えない速さで俺に何発ものパンチを放った

「なんつーパワーだ…く…」

俺はよろめきながらバスターを手にとった

「はああ!」

ディアスは巨大な剣でガガガとアポロンを斬りつける

が全く効いた様子が見られねえ

『ふっ!』

「ぐわあ！」

ディアスはアポロンの回し蹴りが顔に直撃して吹き飛ばされた

だが…奴は引っかかった！

『なんだこれは…』

アポロンの周りには何本もの剣が突き刺さっている

そう…これはディアスが瞬時に腕の剣を無数にして放ったものだ

「ナイスだ巧」

メダルポッドをバスターの先端に取り付ける

『セルバースト！』

目が赤く光り、体中からバスターへエネルギーが集められた

「いくぜ！オラアア！」

トリガーを押しバスターから巨大な光弾が放たれた

『ウルフブレイク！』

ディアスに狼の紋章が浮かび上がった

「ハアア…」

剣に集中され刃先が巨大になった

すげえな…

「ウオリャアア！」

ディアスは素早くアポロンに近づき思い切り巨大な剣で切り裂いた

同時にディアスが避けた後、俺が放った必殺技がアポロンに直撃し、
爆発した

『ふむ…どうやら期待ハズレだな』

な…あんな必殺技喰らったのに傷一つないだと！？

「嘘だろ…」

ディアスも後ずさる…くそっ今までのヤミーと全然違う

『次はこちらの番か』

そう言った瞬間にアポロンヤミーは消えた

「「ぐあああ！」」

なんだと!?消えたんじゃなくて…一瞬で瞬間移動しやがった!

「がは…」

ダメージがでかい…このままだと装甲がもたねえ

「ぐ…」

『やはり貴様らでは相手にならんな』

奴の態度は俺をイライラさせた

なめやがって…こっちにはまだとっておきがある

だが…メダルが六枚必要になる…俺が持っているのはこいつらだけか

「く…」

セルメダルを入れてキリキリと回す

『ショベルアーム』

手にオレンジ色の巨大ショベルが武装された

『ほお…』

「ウォラ！」

繰り出した攻撃をアポロンはすっとかわした

くそっ！やっぱり駄目か！

『ぬるいな…』

アポロンは俺の背後に立っていた

振り返る暇もなくアポロンの火炎弾の餌食になってしまった

火花が飛び散り吹き飛ばされた

「がああああ！」

「雄二！」

変身が解除されて俺はガクンと倒れた

「くそ…」

メダルがない以上変身ができねえ

『ふん…』

アポロンヤミーはディアスの背後に回り同じように火炎弾を放った

「くあああ！」

ディアスも変身が解除され巧は壁に叩きつけられた

このままだと本当にやべえ

だがどうすれば…

『終わりだな…』

アポロンが迫ってくる中死を覚悟した

こんな奴に殺されるなんて俺は弱いな

攻撃が来ない？

『…本命のお出ましか』

奴は違う方向を向いていた

そしてそこにはあいつがいた…

「雄二…巧…遅くなってごめんね」

ベルトを腰に巻き堂々と明久は立っていた

僕と暴走とグリード化（前編）

「明久お前…」

僕はボロボロになっている雄二達を見た

「全く雄二達も無茶するよ」

人に言っておきながら自分達は何だって話になるよね

『来たか吉井明久』

今までとは違う風格を持ったヤミーがこちらを見る…姿からしてアポロンか

「悪いけど君と話す暇なんかないんだ」

ガチャンと一枚一枚入れていった

「明久大丈夫なのか！？」

やっぱり巧は優しいなあ…確かにまだ体は本調子じゃないけど…

「うん。さっさと終わらせれば大丈夫だよ」

『簡単に言ってくれるな…』

う…別に強がってなんかないぞ！それにもしもの時は

「僕達だって急いでいるんだ！」

スキャナーを持ちアポロンを睨みつける…生徒や教師はなのは達が避難させてくれてるし…思い切りぶちのめしてやる！

「変身！」

オーズドライバーを傾けメダルをスキャナーで読み込む

そして無数のメダルが現れ上中下と僕の前に現れた

『タカ！ウナギ！タコ！』

頭はタカヘッドで体は鞭の付いた電気ウナギ…足はタコだ！

「はああ！」

鞭をバチイと地面に叩きつける…はは調教師か僕は

『面白い…』

アポロンは手をかざし火炎弾を放ってくる

「はあ！」

鞭…まあウナギウィップって言うんだけどそのウィップで火炎弾を弾く

弾かれた火炎弾は横に逸れて壁にぶつかった

「げっ！しまった！」

教師が居ないのいいことに壁に穴を開けちゃったよ…

『ふん！』

放たれたパンチをうまく交わして鳩尾を狙い拳を叩き込んだ

『ぐふ…』

「お前のせいで怒られるじゃないかああ！」

怒りに任せウィップを叩き込んだ

くそっ鉄人にバレたらおしまいだ…きっと地獄補習がまってるだろう

『がああ！』

「たああ！」

ウィップで何度も電撃を流す

アポロンはダメージを受け跪いた

「今は早く終わらせて…壁を直さなきゃ！」

メダルを入れ替えて再び読み込む

『シャチ！ゴリラ！チーター！』

頭は青いシャチヘッドに体はガントレットが付いた銀のゴリラ、足は高速で走れるチーターだ

「うおりゃああ！」

高速で走りアポロンの火炎弾を避け素早くガントレットを叩き込む

『ぬぐあ…』

アポロンは後ずさり僕は鳩尾に何度も拳を叩き込んだ

こう言ったことはＦＦ団との戦いで鍛えられている…だから相手が何をしてくるのかが大まかに読み取れるんだ

『貴様…』

「うおおお！」

シャチヘッドから水流を発射してアポロンを怯ませ素早く蹴り飛ばした

『…強いな…流石はオーズか』

アポロンはすくっと立ち上がって炎に包まれた

な、何だ！？

『ウオオオオ！』

「うわっ！」

沢山の火炎が降り注ぐのかわしながら攻撃を仕掛けた

いや…待てよ…これは

「熱ううう！？」

超高熱が出ている！

痛い！そして熱い！

『では第二ラウンドと行こうか』

さっきまで全く近づけなかった炎が吹き飛びアポロンが現れた

「え…」

アポロンの姿はかなり変化していた

赤と金色だったからだはゴツい体からかなり痩せている

つまり普通のヤミーと同じってこと

そして体は金色と白色になり鎧が覆われ長い剣を持っている

「姿が変わりやがった」

そんなのあり!?

『一はあ!』

まるでアテナを連想させるかのような姿をしている

って速い!?

「ぐわああ!」

ズバッとアテナヤミーに切り裂かれ火花が飛び散る

「ぐ…あ」

う…体が苦しい…なんだ?

『余所見している場合じゃないわよ』

「ぬあ！」

振り落とされた剣をどうにか避けた

あ、危なかった

『吉井君…私の為に消えてくれないかしら？』

アテナはすっと剣を構えている…大方…この姿がヤミーの本来の姿

そして犯人の意志がある

「ちょっと待ってよ。君は誰なんだ？なんでこんなことをするんだ！」

『高町だったかしら…あいつらよくも邪魔してくれたわね…』

無視された…けど今の言葉にはイラッときたよ

「なのは達が邪魔した？何を言ってるんだよ…」

メダルを入れ替えてスキャナーで読み込む

「そんなに僕らに恨みがあるなら…いくらでも相手をしてやる！」

『シャチ！ウナギ！バッタ！』

体は再び電気ウナギに足はバッタだ！

『…何もわからないくせに』

アテナは重たそうに剣を上げて構えた

「はああ！」

ウィップを持ちウィップに電撃をビリビリと流す
電撃を帯びたウィップは金色になった

「明久…お前だけいい格好させるかよ」

「ああ…俺達も一緒だ」

雄二はバッグにさっき出た大量のセルメダルを入れた
巧はその一枚を持ちカンガルーのメダルを取り出した

「明久…これ使ってくれ！」

巧がヒュンとメダルを投げてきたからキャッチした…何のメダルだろう？

「巧…これは」

巧に振り向くとコクンと頷いてくれた

ありがとう‥

『はあああ!』

「しまっ…うわああ」

強力な斬撃を受けて僕は壁に叩きつけられた…頭が

「ぐう…」

「明久!?」

痛たた…うわっ

なんだ?違和感が

「大丈夫か！？」

「ありがとう：いくよ二人共」

雄二達はベルトを巻き変身し僕はメダルを入れ替えてスキャナーで読み込んだ

「「変身！」」

『カポン！』

『カンガアップ』

雄二は仮面ライダーバースに変身し巧はボクシングのグローブが付いた紅色のディアスカンガルースタイルに変身した

『タカ！ウルフ！バッタ！』

僕は巧から借りたメダルでタカウルバに変身する

銀色の体で肩や腕に棘があり手には長剣を持っている

「これで二刀流だ！」

メダジャリバーを取り出し構える

『ドリルアーム』

バースはドリルを武装し相手を見据えた

「三人なら負けないね！」

僕らは頷き合いアテナは少し後ずさった

『なら…俺も相手をしてやる』

壁が砕け新たなヤミーが…違う

「お前は…」

金色の体をし赤い目にユニコーン（デストロイ）みたいな顔に…武装された体…そして金色の武装された足

間違いないあの時のグリードだ

でもベルトが金色じゃない?どういうこと?

『久しぶりだな…仮面ライダーオーズ!』

あいつから凄まじい波動が放たれる

やれやれやるしかないようだね

僕はまだ知らなかった…瞳が一瞬だけ紫色に光っているのを

僕と暴走とグリード化中編（前書き）

遅くなりました。続きを更新します

このままじゃ今年中に終わらない…（^—^；）

僕と暴走とグリード化中編

「ぐああ！」

グリードの一撃を喰らい僕らは吹き飛ばされた

「く…」

『なんだ？もう終わりか？』

こいつ…昔より強い？それとも僕が弱いのか！？

「明久！俺達はヤミーを殺る」

「お前はグリードを頼んだ！」

二人はそう言ってからヤミーへ攻撃を仕掛けた

「オラア！」

繰り出された拳を喰らいアテナは引き下がる

「いくぜ！ボクシングパンチ！」

『ああっ！』

ディアスの放った高速パンチはアテナに命中した

『二年前の借りを返させてもらうぜ！』

「来い！」

神話のグリードカイは剣を取り出し構える

二刀流…剣を握る力を強めて相手を見据える

「ウオオ！」

ダッと走り出す。カイが片方の剣を振り上げてきたのをメダジャリバーで防ぎ、逆にウルフソードで切り裂こうとする

「甘いな！」

くっ…メダジャリバーが弾かれた…カイは片方でウルフソードを防ぎ後ろへと吹き飛ばした

「く…」

剣を地面に刺しガガガカと響く中、なんとか止まった

速い…バッタを生かしてもさっきのようにやられてしまう…

「なるほどな…」

「む…なんだよ」

カイは馬鹿にするように僕を笑った
正直こういうのはムカつくもんだ…特にあいつらには

「貴様…弱くなったな」

「な…！？」

反論しようとした時横から蹴りが放たれた。それをなんとかかわすもの素早く剣が振り上げられる

避けれない！

「ぐああ！」

火花を散らしながら後ずさる。カイは容赦なく切り裂く…ぐ、なんて速さだ

体中が痺れるように痛い…

「弱い！弱いぜオーズ！」

「がはあ！」

ズバッと切り裂かれ、勢いよく吹き飛ばされた

「ぐ…」

強い…折角巧からメダルを借りたのに…

「明久！ぐ…」

バースはアテナの攻撃を受けて壁に叩きつけられた

『邪魔しないで！』

アテナはバースの首を締め上げる…雄二！

「ぐ…がああ！」

いきなり体に痛みが走った…カイが僕を踏みつけている

「なんだ？仮面ライダーはこんなにも雑魚なのか！？」

「ぐああ！」

ガスガスと踏みつけるカイ…ぐ…踏まれるたびに体中が悲鳴をあげる

「オリャアア！」

「ぐ…ぬ」

ディアスが放ったパンチを喰らいアテナとカイは後ずさる

「明久…雄二…大丈夫か！？」

「ありがとう巧」

「はっ！全然余裕だ」

僕らはカバッと立ち上がった
こんな程度の攻撃いつものことだ。それにいつまでもやられている
僕らじゃない！

「いくよ二人共！！」

さあ！反撃だ！

呼んでる…仮面ライダーオーズが…紫のメダルが私を呼んでる…行
かなきゃ

オーズを倒さなきゃ

なのはｓｉｄｅ

私達は今、アキ君の所へ向かっています

理由はみんなを非難させた後、バッタのカンドロイドが来たことでわかったの

『もし…僕に何かあったら…その時は』

聞きたくない言葉でした…だから私達はそれを阻止する為にフェイトちゃんやほむらちゃん達と一緒に女湯前へ…アキ君の所へ向かってるの

「明久…大丈夫かな」

「大丈夫や！アキ君やで？きっと大丈夫やて」

不安になっているフェイトちゃんをはやてちゃんが元気づけます

「明久はメダルに飲まれはしないわ…きっと」

「明久君は仮面ライダーだもんね」

ほむらちゃんの言葉に青い髪に元気な魔法少女のさやかちゃんが頷きました

アキ君は仮面ライダー…だから自分にも勝てる…そうだよね？アキ君

「みんな！もっと急ぐよ！」

明久ｓｉｄｅ

「ぐ…はあはあ」

僕らは今、絶対絶命の状況に陥っていた

まさかグリードが他にいたなんて…完全に僕らはあいつらの罠にはまってしまった

カイとの激闘中…僕はコンボチェンジをしてシャウタに変身した

形成は逆転…いっきに僕らが有利になった

流石コンボだ…

けど…突然他のグリードが出現した

甲殻のスル…龍の鎧を身に付け顔は朱雀ように美しい外見にナイス
プロポーションのグリード…ワス…

一気にグリードが三体…

「こんなことが…」

「くそ…！」

『消えろ仮面ライダー』

『お前らの負けだ』

『コアメダルは頂きますよオーズ』

「諦めてたまるか…」

立ち上がった瞬間鳩尾に激痛が走ったワスに蹴られていた…ぐ…頭が痛い！

「ごめんなさいね…」

「がは…」

女のくせになんてパワーだ…メダルが……しまった

「はい。メズール回収です」

メダルを拾おうとするワス…させるか！

「きゃあ！」

バンと突き飛ばしシャチだけでも拾った

離す訳には行かないんだ！

『痛いです…酷いですよオーズ』

ワスはいきなり体育座りになり何故か落ち込み始めた

あ、あれれ？何このシチュエーション…

「あの…」

タトバに戻ってしまい防御は薄いけど何故か気になってしまいワス

に近づいた

『何ですか?』

うわ…泣いてる…まるで普通の女の子みたいだ

「えと…なんで泣いてるの?僕で良かったら相談にのるよ」

何を言ってるんだ僕は…でも何故かほっておけないんだよなあ

『本当…ですか?』

急に明るくなったワス…な、何なの本当に

「う…うん」

『この接し方…まさか…明君!?』

嬉しそうに僕に抱きついてきたワス…ぬええ!?何これ!?

『この反応…やっぱり明君だ…』

まさか僕グリードまで攻略しちゃったのか…って神のみぞ知るセカイじゃあるまいし！そんな訳あるかああ！

ほら！！みんな唖然となってるよ！！

というかさっきから胸が…鎧からでも感触が

『なんで僕の名前を…』

『そうだった…明君はわからないよね…初めまして！私はワス…本名はオルソナ！この姿は仮で本当は天使のグリードなんです』

え？オルソナ…？

『それでね…完全に復活する為にメダルを集めてたんだよ！だけど

今はどうでも良くなってきちゃった』

ワス…もといオルソナは勝手に言葉を続けて喋りだした

完全復活?でもオルソナは世界を修復させたって…

『そして私の本当の名前は鹿目まどか…二年前の鹿目まどかだよ』

にっこりと笑うオルソナ…それはまるでまどかそのものを見ているようだった

「まどか?」

『二年ぶりだね明君…やっぱり仮面ライダーになっていたんだね』

もうさっきまで見せたグリードという雰囲気が見られない

まどかと信じるしかない…

「本当にまどか？」

『うん…時間がないかな…今日の夜に会おうね！』

そう言った瞬間まどかは消えて…空間が歪みだした

え！？何？何？

「明久！」

凄くうるさい声がして…僕の意識が戻った

さっきのは幻？

今の状況…さっきと変わらない…でも…ワスは姿がガッチリしていて男だった

「嘘おおお!?」

最悪だ！本当はまどかじゃなくてなんかむさいグリードだなんて！認めない！認めないぞ！！

『ああ…俺もお前を認めない』

どこからか静かに声が聞こえた

「が…！？」

な、なんだ意識が…

紫のメダル？

駄目だ…

「ぐ…」

空中に浮かぶメダルを掴みそのままベルトに入れ読み込んだ

……体が…言うことをきかない

まさか……

そうなったら逃げて二人共…頼むから逃げてくれ

じゃなきゃ…

『プテラ！トリケラ！ティラノ！』

冷気をまといながらオーズは紫の姿へと変わった

『プ・ト・ティラーノザウルース！』

冷気をまといながらオーズは紫の姿へと変わった

『プ・ト・ティラーノザウルース！』

「ウオオオオ！」

プトティラコンボになった明久は砲口する

グリードだけでなくバース達までも凍らせ吹き飛ばした

『『がああ！』』

「「ぐあああ！」」

「ハアー…」

今ここにいる明久は見たものを虐殺する暴走コンボになってしまったのだ

『みんな嫌いだ…お前も嫌いだ…僕の気持ちを理解してくれないお前なんか大嫌いだ！お前も僕になれよ！！暴走しろ！』

「ウオオオオ！」

「明久？」

「なんだ…なにが」

プトティラは構えグリード達を標的にとらえた

僕と暴走とグリード化後編

俺は一人なんだ…

どんなに仲間がいようとそれは変わらない…

なあお前…お前もそうだろ？沢山の仲間がいて…戦う力を手に入れて…告白されて…

それでも俺達は一人なんだよ…満たされないんだよ…俺達は

なら壊すしかないだろ?終わらすしかないだろ?

だって俺達は満たされないだからな…寂しいんだよ

結局は俺達は一人だから…この世界は俺達を否定してるから

「ウオオオオオ!」

大きくプトティラコンボは叫ぶ

「…明久」

バースは呆然とそれを見ていた

『ガハアア！』

『ぐあ！』

『ぬあ！』

三体のグリードはプトティラに踏みつけられ首を締め上げられ顔面を何度も殴られている

その光景はただやられるしかないグリードと圧倒的すぎるプトティラコンボ

ただの拷問としかいいようのない状況だ

「…なんなんだよ」

ディアスは足に力が入らなかった

恐怖…それが彼を襲っているのだから

「ウオ！」

プトティラは甲殻のグリードスルの顔面を掴み地面に叩きつけた

『ぐ…あ』

スルは既にボロボロな体なのでさっきの一撃でメダルが落ちる

『くそがあ！』

カイはプトティラを切り裂くがプトティラは何もないようにカイを掴んだ

「ルアア！」

大きな音が響くくらいカイは壁に叩きつけられる

『が…』

カイからメダルが跳ぶ

グリード達の持っているコアメダルは５枚

三体のグリードはプトティラの攻撃を受け続け残り二枚になっていた

「ルアア！」

回し蹴りを放ちワスを蹴り飛ばした

『がああああ！』

ワスはなすすべなくされるがままに受けるしかなかった

まさにプトティラは化け物と言うのがふさわしいだろう

『ぐ…うわああ！』

プトティラはワスを鷲掴みギリギリと力を入れる

「ウオオオオオ！」

そのまま片手で振り回し叩きつけ踏みつけた

『ぐ…くそ！』

スルは素早く地面へ潜ろうとしたがプトティラは瞬時に尻尾を出しなぎはらった

『がああ！』

ワスとスルはプトティラに踏みつけられ逃げる力さえなくなっている

『うわああ！』

カイは怖くなり逃げ出そうとするがプトティラ…オーズがそれをさせなかった

「ルアア！」

オーズは足を掴み握りつぶす。カイは悲鳴をあげ足がセルメダルに変わってしまった

「……」

バースとディアスは鋭い恐怖を覚え立てなくなっていた

それほど今のオーズは残虐だったのだ

「フゥー…」

オーズはグリード達を踏みつけ荒く息をする

『くそ…が』

カイは立ち上がろうとするがすぐさまオーズに頭を捕まれ地面に叩きつけられる

「ウオオオオオ！」

再びオーズは大きく叫び三体のグリード達を殴りつける

『…』

完全に弱っているグリード達は声もでず苦しんでいる
オーズは目を光らせグリード達を地面に叩きつける

「ルア！」

オーズは地面に手を突っ込み何かを取り出した

「…あれは斧か！？」

プトティラの武器…メダガブリューにセルメダルを入れるレバーを下げていく

『ガブガブ…』

まるで恐竜がセルメダルを食べているかのようにメダガブリューから音声が流れる

『ゴックン！』

飲み込んだと同時にメダガブリューの持ち手を曲げ銃の形にした

そうこれはプトティラが留めさす動作だ

『プ・ト・ティラ ノヒッサーツ！』

銃の形になったメダガブリューに高密度のエネルギーが溜まる

「フゥー…」

カチッと押した直後大きな破壊砲がグリード達を飲み込み爆発させた

「…まじかよ」

バースはただ圧倒的な力を見ることしかできなかった

爆発した中からメダルが飛び散りグリード達はセルメダルとなった

「ハア…ハア……ウオオオオ！」

オーズは再び叫ぶその目は二人を捕らえていた

「明久！？ぐああ！」

「やめろ…がああ！」

ギリギリと首を締め上げられていくバースとディアス

その力は凄まじく二人の足がドンドン上と上がっていく

「ウオオオオオ！」

さらに力を入れ二人は叫ぶことすらできなくなっていく

『アキ君！！』

突然後方から叫び声が響いた

声の主…なのははハアハアと息をついてからオーズを見た

「…フゥー」

オーズは威嚇するように睨みつけるがなのは動じない

「明久…やめてよ…」

目の前から金髪の美女フェイトが歩いてくる

「フゥー…」

「お前ら何してんだ!?」

「早く逃げろ!!」

二人の言葉を聞かないかのようになのはは走り出した

同様にフェイトも走り出しオーズ…明久に抱きついた

「アキ君…私達アキ君の気持ち理解したなんて言わないよ」

「でも…私達があなたを助ける…必ず。」

「フゥー…」

なのはとフェイトは手に力を込めた

「全部…全部聞いたの…鴻上さん…ううんあなたのおじいさんから！」

オーズは手を緩め二人を離した…その目はじっとなのはとフェイトを見ている

「全部聞いたの…明久の過去や…今の状況…鴻上さん…ううん吉井さん本当は凄くあなたのこと心配してた」

「……」

二人は悲しい顔になりながらもじっと明久を見る

「「私達はあなたが好きだから！だから吉井さんの分まで…助けたいの！」」

二人の言葉が明久に響き渡る

「う…ぐううう」

頭を抑えながらプトティラは下がる

みるみる変身が解除されそこには悲しい顔した明久がいた

「明久！」

バースとディアスも変身を解き明久に近づこうとする

「みんな来ないで！」

明久の叫び声に全員が止まった…明久の本気の叫び声など聞いたことがなかったから

「僕は…駄目なんだ。いくら関わりを持っても…こいつを救えないんじゃ意味がない」

ぐっと自分の胸あたりを掴み…涙を流す

「明久…」

「二人共…ありがとう」

明久は礼をした後すぐに走り出した

なのはとフェイトはその場に泣き崩れるしかなかった

（彼の心は冷たく凍っている…どんなことがあっても満たされない
……アキ君…お願いだからグリードにならないで）

壊れた壁から風が吹き月が四人を照らした

「はあ…はあ」

明久は胸を抑え林の中を歩いていた

「ごめんね・君をずっと僕は苦しめてたんだね・」

激痛に耐えながらあてもない中をガサガサと歩いている

「う…！！」

不意に彼を激痛が襲う

目は紫色に光る

「がは…嫌だ…」

明久は何かから逃げるようにガサガサと走る回る

「嫌だ！嫌だ！嫌だあああああ！」

紫のメダルが体内で強く発光し明久をメダルで覆う

メダルに覆われ明久は恐竜のグリードへと姿を変えた

既に手遅れだったのだ

「ウオオオオオ！」

明久グリードは月に向かって砲口し辺りの物を凍らせた

祖父と再会とタトバコンボ（前書き）

急展開！明久に何かが起こる！

カウントザメダル

現在オーズの使えるメダルは

タカ
クワガタ
カマキリ
バッタ
ライオン
トラ
チーター
サイ
ゴリラ
ゾウ
シャチ
ウナギ
タコ

プテラ
トリケラ
ティラノ

サソリ３
カニ３
エビ３

ユニコーン３
ペガサス３
ケンタウロス３

スザク３
リュウ３
ビャッコ３

祖父と再会とタトバコンボ

俺達は今、女子風呂の前に居る

理由は簡単だ…高町達から聞いたことは犯人の狙い…

奴は俺達を犯人に仕立て上げ覗きを実行しようとしているらしい…

全くいい迷惑だ

そしてムッツリーニが掴んだ情報も仕組まれていたんだ

奴は男だ…そしてさっきのヤミーはそいつに騙されて哀れな女子生徒

犯人は最低で糞野郎ということが明らかになった

「八神の情報によれば相手はF、Eクラスの生徒を連れてやがる…

お前ら気を引き締めていくぞ！」

「「おう！」」

男子メンバーは

・俺
・巧
・菊池
・大吾朗
・ムッツリーニ
・秀吉
・須川
・新田

以上のメンバーだ

一応明久も入っているんだが…どこ行きやがったあいつ

「よし。菊池とムッツリーニは大島先生に秀吉と大吾朗は布施先生、新田と須川は俺達のサポートを頼む」

「「了解！」」

馬鹿が抜けて辛い部分もあるが今は名誉回復の為にやるしかねえな

修復された壁を見る…あいつはここから出て行きやがった

大丈夫なんだろうな明久！

☆

サワサワと揺れる林達…辺りが完全に暗くなっていると同時に体は覚醒していた

「う…ううん」

…さっきまで何があったのか忘れているぐらい体が重い。携帯を取り出し時刻を確認した。２１時…女子達が風呂に入っている時間帯だ

「……！？」

ようやくさっきのことを思い出し腕を素早く見る。良かった…元に戻っている

「さっきのコアメダル…」

黒、金、濃い赤…そうだった。暴走してその力で倒したんだっけ？あははアンクとの約束いきなり破ってしまったなあ

「もう僕はグリードなんだな」

辺りを見渡せば溶けて水になっていた氷があちこちに見られる。十中八九…僕がやったんだろう

「お爺ちゃん…」

すっと空を見上げる…鴻上さんが僕の祖父だったんだねずっと…黙ってたんだね…今ならお爺ちゃんの気持ちわかるよ

『明久。もしも何か自分に異変があった時は欲望をもつんだ！』

「お爺ちゃん…僕は今でも欲望を持つことができないよ」

膝に顔を埋め静かに泣く…だって男は泣くもんじゃないから

（明久…）

ごめんね…僕は自分すら大事に出来ていない

（俺は……）

月光に照らされながら僕は静かに静かに泣いた

☆

「明久…欲望を持つんだ。お前ならできる」

私はあの子を守ってやれなかった
鴻上と別の名字になってまで…守ろうと決めたのに

「ＨＡＰＰＹｂｉｒｔｈｄａｙ…オーズ」

もう私にできる事はない……後はあの子とみんなが突き進んで行くしかないのだよ

「だが…手助けくらいは…できる」

私はテーブルに置かれたオーズドライバーを手に取った

孫よどうか欲望を思い出してくれ

「…里中くーん！！このオーズドライバーを届けてくれたまえ！」

「了解でーす」

☆

頭が痛い…激痛が走る…誰かが呼んでいる

「まどか？」

林の奥から桃色の髪をした少女が歩いてくる。足が震えているのを

感じた

「明君…」

救うんだ…彼女を…必ず。だから僕は今から悪魔になる

「まどか…」

「明君…！」

まどかは走り出し抱きつこうと手を広げた。今だ…

「……まどか」

できなかった…気づけば彼女を抱きとめていた。

「会いたかった…明君」

嘘など混じっていない言葉だった。背中に手を回して強く抱く

「僕もだよ…まどか」

ずっと会いたかった…二年という歳月を経て僕らは再会したんだ

そうさ…彼女は二年前のまどかであり今のまどか。彼女もまた心の中に二年前の…本当の自分がいたんだ

(明久…ありがとうな)

いいんだ…君の心を溶かせれば僕の心は凍ってても構わない

ふっと…体が軽くなった…そう僕がいなくなったんだ。それはまどかも同じ

「明君…」

後はグリードとなった君を救うだけだ!

『明久君の欲望が無くなった原因って何？』

比奈ちゃんに言われたことを思い出した

『明久君が変身したのは本当に二年前だけ？』

「明君？」

『創造の力はまどかちゃんだけにあったのかな…』

「ううぅ…ぐううう」

『本当はもっと違う何かが隠されてたのかな？』

「ウオオオオオ！」

僕はグリードへと姿を変えた

「明君！？」

もしかしたら…何かが違ってたのかもしれない

オルソナ…創造…オーズ…グリード

「まどか…君のコアメダル…貰うよ」

「え…？」

『タカ！トラ！バッタ！』

『タ・ト・バ！タトバ！タットッバ！』

オーズへと変身して紫の目を光らす

「明君？どうしてグリードに…」

何かが違ってたんだ…だけど気づくのが遅かったのかもしれない

「ウオオオオ！」

彼女のコアメダルを奪う！！

「え…」

まどかは恐怖からか立ち上がれないでいた

『明久！いい加減にしやがれ！』

いきなり火球を飛ばされ後ろへ転がる

「…アンク」

そこにはまどかを庇うように翼を広げたいつものアンクがいた

「アンク！」

「まどか…あいつの目を覚まさせるぞ」

何を言っているんだ二人は…僕はちゃんと起きてるのに

「うん。明君…私が助ける番だよ変身…」

「！？」

『タカ！トラ！バッタ！』

『タ・ト・バ！タトバ！タットッバ！』

そんな馬鹿な…まどかがオーズに…！？

まどかが変身したオーズは可愛らしい姿だった

「明君…いくよ！」

「ウオオオオオ！」

繰り出した拳をよけられ逆に殴られた

「ぐ…」

「明君目を覚めして！私はグリード化なんてしていない！ほむらちゃんだって言ってたよね？」

「嘘だ…ほむらは君がグリード化したって言った。」

「え…？」

そうだ。まどかはきっとメダルに支配されてるんだ！アンクはそれを利用しようと…許さない

「ウオオオ！」

スキャナーが自動で読み込みコンボチェンジをする

『シャチ！ウナギ！タコ！』

『シャシャシャウター！シャシャシャウター！』

「紫目の…シャウタ？」

「コアメダルを砕く！！」

メダガブリューを取り出し静かに構えた

拳と本当の真実と明久と（前書き）

少し強引ですが急展開になります

拳と本当の真実と明久と

「ウルアアア！」

やっぱり明君強い…オーズに初めて変身した私に勝てるかな…ううん…あきらめちゃ駄目だよ！！必ず明君を救わなきゃ！

「やああ！」

まどかはシャウタのウィップをうまく避けてシャウタのお腹を殴る。シャウタは少し身じろき、そこにすぐさまを蹴りを放った

「ぐ…うう」

「チッ…やっぱり明久か…まどか！こいつに変えろ！」

アンクはヒュッとメダルをまどかへ投げた

「え…きゃっ」

これっ…ライオンのメダル？。よーし！

「……メダルチェンジか…させるか！」

シャウタはまどかに向かって水流を放ったがアンクが火玉を飛ばしそれを防ぐ

「アンク…お前！」

「今だまどか！」

まどかは素早くメダルをタカからライオンに変えて読み込んだ

『ライオン！トラ！バッタ！』

かわいらしいライオンの顔になりそこから高熱を帯びた光がシャウタを攻撃した

「ぐ…うう！」

シャウタは黄色いメダルには弱い。よってこのライオンメダルは効果抜群。アンクはフンと笑った

「はああ！」

まどかはチャンスとばかりにクローを展開させシャウタを切り裂いた。さらに蹴りを追加し徐々に追い詰めていく

「ふっ！はあ！」

「があ！！」

シャウタは素早くウィップで攻撃を仕掛けようとしたがまどかがすぐにライオンヘッドから再び光を発し目を潰され失敗に終わった

「やあああ！」

まどかは素早くクローで切り裂き吹き飛ばした

「よし…まどか！次はこいつだ！」

「わわっ！」

投げられたメダルを慌ててキャッチし確認する

「カマキリ？」

まどかは首を傾げながらカチャンとメダルをトラからカマキリへと変えてスキャナーで読み込んだ

『ライオン！カマキリ！バッタ！』

「剣だ！凄ーい！」

「ぐ…」

「はああ！」

まどかは素早く走りカマキリソードでシャウタを切り裂き殴り飛ばした。シャウタはフラフラになりながら立ち上がる

「明君…もうやめて」

「…！？」

明君はウィップを持つ手を緩めて私をじっと見た。もういいよ

「明君…私の今から言うこと信じてくれる？」

「……それは」

明君の目はいつの間にか黄色に戻っていた。少し息をついてからもう一度明君を見る。明君はううと唸っている

「大丈夫だよ。私は絶対明君を騙したり攻撃しないから」

「でも…」

うーん…なんとならないかなあ……

そうだ！こんな時は玲さんに教えてもらったあれを…

私は変身を解き明君の所へスッと歩いた後、じっと彼を見つめた

「ねえ…お願い…明君」

上目使いで涙目になりながらじっと彼を見つめていると…

「あう……わかったよ／／」

変身を解いて真っ赤になりながら頷いてくれた。成功だね！

明久ｓｉｄｅ

まどかの色気と可愛さに負けて変身を仕方なく解いた僕はアンクをじっと見た

「アンク…なんでお前がまどかと一緒にいるのさ」

「ハッ…誰の為だと思ってんだ。馬鹿が」

「あああ！馬鹿って言ったな！この野郎」

なんて奴だ！せっかく再会したのに嬉しくないのかよ…

「まあまあ…落ち着いて二人共」

くっ…命拾いしたなアンク

「それで…どういうことさまどか。グリード化していないって」

確かにほむらはちゃんと言った

「落ち着いて明君。今から本当の真実を話すから」

「本当の真実？」

「うん…明君。明君はずっと騙されてたんだよ？幻惑にね」

幻惑？騙されてた？何が何か全然わからない。どういうことなんだ

一体

「大丈夫だよ今から話すから…だからそんな難しい顔しないで明君」

まどかは苦笑しながら僕の頬を摘んだ。痛くも痒くもない…全く可愛いイタズラだ

「まず…ちゃんと私が見えてる？」

「何を言うかと思えば…当たり前じゃないか」

まどかはほっと一息ついた。何？見えなかったら何かあるの？

「良かった…これは凄く大事なことなの…」

「どうしてさ？」

まどかは少し息を吐いてから僕をじっと見た。う…理性が

「あのね…「お前は勘違いしてたんだよ」ちょっとアンク…！」

「勘違い？」

「ああ…お前がグリード化してたんだよ。まどかじゃなくてな」

え…？うそだろアンク…

「…もう。明君。明君はずっと私に関する記憶が操作されてたの」

「記憶の操作？」

「うん…誰かに明君は操られてたの。今までのことは本当だけどただ、私と明君自身のことだけ…」

何で？疑問に思うよりそんなことがふつふつと湧いてきた。じゃあ僕は…

「…明君。思い出して…明君は本当に二年前だけだったの？」

比奈ちゃんと同じ質問だ…。何かが引っかかって…一年前のことがわからない…

ずっと隠してた僕の一年前の過去

「明君。よく聞いてね…明君は今大変な状態に陥ってるの」

「まさかグリード化？」

「うん…もしかしたら…次は確実にグリードになるかもしれない」

「…グリードに…」

……みんなを守る為に使ってきた力は…みんなを殺す為の力に変わってしまう

仮面ライダーが…僕が怪物に…

静かに時が流れる中…月は優しく僕達を照らした

ドキドキとハプニングと平和な朝

…あの時メダルに覆われた感触がゾワリと蘇った…思い出したくない最悪な過去だよ

――完全なグリード化。自分の意志じゃ戻ることができないらしい

…そりゃそうか。だって僕の中には九枚の紫メダル

そしてもう一人の僕…これをどうにかしないと安らぎの日々なんか夢のまた夢。富士山に等しい

…まどかは力を使わないことが今できる最善策だと言っていた。アンクもコアメダルを取り上げようと僕に迫ってきたけど返り討ちにしてやった

――今は必要なんだ

「う…うん」

極度の疲れからかいつ眠ったのかわからない…ただかなり疲れてるのはわかる

「……／／」

そして…顎と背中に二つのたわわの実が押し付けられているのもわかった

「…ん」

この甘い声の主はなのはだ…気持ち良さそうに眠っているけど正直…無防備すぎるよ！

Ｙシャツ一枚って…露出がどんなに凄いのかわかってるはずだ！そのせいで凄く色っぽくて思わず唾を飲み込んじゃったよ

どこぞの変態だよ僕は…

「…んん」

そして理性をかき乱すもう一つの原因は…ふ…フェイトが僕に後ろから抱きついて可愛い寝息を立てていることだ

「…うう顔が熱い／／」

フェイトの金色が僕の肩に掛かり内心心臓がバクバクしている。片足がフェイトの綺麗な両足に挟まれもう片足はなのはのむっちりとしたふとももに挟まれている

僕はエロゲーの主人公か!?そんな訳あるか!僕は仮面ライダー…のはず

（逃げ場無し…もし二人が起きたら確実に童貞が危うい）

――このままだと確実に壊れそうだ。もう既に頭の中はぐちゃぐちゃで顔は火箸ってる！まずい…本当にまずい…後ろがフェイトならまだなんとかなったけど…Ｙシャツのなのはが僕の目の前は確実に理解を破壊していく…

だ、だって色っぽいし、可愛いし…た、たまにアキ君て寝言で聞こえるしもうてんわやんわだよ！

「明久…」

「！？／／」

なんだ…フェイトの寝言か…。凄く可愛い寝言だったなあ…

二人は本気で僕を好きになってくれている…勿論僕もそんな二人がまどかやほむらと同じくらい好きだ

（だからこそ苦しいんだ。誰か一人愛すことは必ず他のみんなを不幸にさせる。でも…複数で恋愛は日本の憲法上…難しい）

「ふぐ……んん！？」

結局…僕はヘタレだ…

「ぐ…んん！」

はあ…なんか申し訳ないよ。新田君や他の人だってなのはやフェイト、まどかやほむらが好きなのに

「――――！」

はあ…恋愛て複雑なんだねって改めて実感したよ

あっちで霧島さんやマミさんに寝取られそうになっている雄二を無視して朝5時…ドキドキの添い寝タイムは過ぎていった

「へ？…覗きと戦った？」

朝食の時間―なのはやまどかに挟まれながら茶碗を持ち雄二に尋ね

た。雄二は疲れたような顔で静かに頷く。まあ仕方ない…雄二はあんなことあったんだ。疲れて当然だろうけど周りからして見れば羨ましい限りだ

「狙いは何だろね…」

まどかはそう言いながらこっちへ箸を向けている。…まどかとほむら…二人が来る前までは僕に抱きつきながら寝ていたらしい（ムッツリーニメモより）

ああ…だから深夜に凄く柔らかい感触が顔にあったのか…どっちかはわからないけど

「大方…お前らだろうな」

雄二はきだるそうに箸を持ち上げながら不機嫌そうに言った

確かにそうだよね…これ程の美人揃いだもん。狙われてもおかしくない

あれ？何か少しイライラしているのは気のせいかな？

「……その中に犯人も混ざっているんだよね…」

なのは不安な顔をしながらこっちに箸を向けてくる

「と言うか…何故なのはとまどかはご飯を押し付けてくるんだ！そ、そういうのは夫婦がやるもので…」

「「夫婦…／／」」

「あかん…！二人が硬直しよった！」

はやてはそう言いながらムッツリーニへ卵焼きを押し付けている。

！ムッツリーニから赤い液体が！？

「……ちょっとトイレ」

ムッツリーニは素早く鼻を押さえながら食堂から出て行った。大丈

夫だろうか

はやてはその光景を小悪魔のようにニヤニヤと笑っていたのだった

「須川君…あーん」

「あ、あーん／／」

おお…あっちでは甘い展開が…

『諸君。ここはどこだ?』

『『『最後の審判を下す法廷だ!』』』

『異端者には?』

『『『死の鉄槌を！』』』

『男とは？』

『『『愛を捨て、哀に生きるもの！』』』

『宜しい。これより…異端審問会を開催する！』

向こうでは奴らがナイフを持って僕らを狙っていた。相変わらず…だね…

「「ダッシュ！！」」

『『奴らを生きて返すなあああ』』

『『ＹＥＳ！Ｉｄｏ！』』

畜生！最悪な朝だあああああ

決断と悲劇と最後の戦い（前書き）

いよいよラスボスが判明し物語がクライマックスに突入します！駄文ですみません

決断と悲劇と最後の戦い

最悪な朝を迎えた後、僕らには勉強が待っていた。AクラスとFクラスが合同で自習をするんだ。お陰様で甘い空間が何箇所もある

そんな中、僕は火野先生と泉先生に呼ばれてアンクと一緒に違う部屋で会話をしている…ちなみに火野先生と一緒にいるアンクさんはここには来ていない

「…先生もグリードに」

「ああ…俺の体内には5枚の紫メダルがあるからね…」

「僕には9枚…厳しい状況ですよね…」

力を使えば暴走しグリードになる…けどこの力が無いと完全体のグリードは厳しいだろう

火野先生も唸りながら今、所持しているコアメダルを見ている

「…オルソナか…」

アンクはぼそりと呟きながら窓を眺めていた。まどかから聞いたことによれば全ての原因…僕の記憶を操作していた…

最後のグリードにして神…オルソナは創造の力を持っていて…グリードを作り出すことができる

「けど…それには意志のコアメダル…これが必要なんです」

机にジャラリと今までのコアメダルを置く。かなりの数だ…上手くいけば

「そしてまどかちゃんの体内にあるコアメダルか」

「はい…それに関しては何とかやってみます」

先生はコクンと頷いて僕をじっと見た

「明久君。俺達は…あくまでも違う世界の人間だ…」

そうだ。先生達は別の世界から来た人達…だからこの戦いには関係ないし巻き込みたくない

でも

「やっぱり戦うんですよね？」

「ああ…俺は必ずみんなを救う」

先生は僕と同じことを考えている。僕がもし違う世界から来ていてもこの世界を救う為に戦う…

願いは一緒ってことだよね…

「はい…ですけど死なないでくださいね？」

先生は命をかえりみず戦ってきた…だから…生きて元の世界に帰ったら泉先生と…

「うん…明久君も…ね」

「はい！」

例えグリードになろうと僕は戦う…戦ってみんなをこの世界を守る

もう…ヤミーなんて存在はいないけど神という存在がいる

神に勝てるだろうか…苦しい戦いなんていつものことだ

「明久君…自分を大事にしてね？」

泉先生はそっと手をとりじっと僕を見つめてきた。…僕は緊張して

目を少し逸らしてしまったけどゆっくりコクンと頷いた

泉先生はニコッと笑うとゆっくりと離れていった

「ハッ…グリード化したら俺が倒してやるよ」

アンクのそんな言葉に僕はゆっくり苦笑した…頼りにしてるからね…

「決断は決まったことだ…後はゆっくりと楽しもうよ」

先生はニコッと笑いドアを開けた…

―例えこの命が無くなったとしても…僕は必ず最後まで戦う

戦って全部守り抜いてみせる…

―これは朝食前に起きたことだった

『だ、伊達先生』

保健の女神と言われているシャマルは保健体育担当のは伊達明の隣に座り頬を赤くしながら名前を呼んだ

『ん？おはようさんシャマル先生』

伊達はにこりといつもの笑顔でそれを返す

『おはようございます…あの…実はお弁当を作ってきたので良かったら食べてくださりませんか？』

『いいのか！？いやあちょうど腹が減ってて…朝食前に食べておきますか』

伊達は嬉しそうに笑いシャマルは満面の笑みを浮かべ弁当を差し出した

『味に自信はありませんが…』

『何言ってるんだ。手作りが不味いはずないでしょ？』

『伊達先生…／／』

完全にシャマルは虜になっていた。そんなことも知らず伊達は弁当を開ける

『おお！美味そうだ！いただきます！』

この後、伊達は正午まで気絶していたのは誰も知らない

――――――

「じゃあ…勉強再開だな」

先生は部屋を出て行き僕らもついて行く

みんながいる場所に先生が入ったのを見届け静かにトイレまで移動した

「明久…来たぞ」

「わかってる…わかってるよアンク」

手の震えを抑え表情を硬くする…行こう

オルソナが呼んでいる

――僕は戦わなきゃ…例えこの身がどうなろうと

だって…みんなには関係ないし、僕はオーズ…手を伸ばし続ける存在

結局…自分のことは後回しでいつも他人ばかり…わかってる。でも

自分のことなんて後でいい、少しでも多くの人に手を…

ごめんみんな…

『来たか…仮面ライダーオーズ…そして鳥の王アンク』

僕らは今、神の前にいる…オルソナ…全てのコアメダルの力を携えし究極のグリード

その姿は女神に近く…そして禍々しい…全くこれじゃ女神じゃなくてハデスだよ

「お前が…彼女達にコアメダルを…」

そして僕をグリードに…ウヴァやスル達を復活させた存在…

考えるだけで怒りが湧いてくる…こいつのせいで多くの人々が

『ほお…まさかグリードになっていなかったとは驚きだ…仮面ライダーオーズ…クガ王の子孫よ』

「あいにく…僕には君と違って愛があるのさ」

キッと睨みつけるとオルソナはケラケラと笑っていた。馬鹿にして

るな…

『愛？そんな者は不要だ！！貴様はグリードとなりオーズの力を失えば良いのだ』

「それは無理な話だね。僕とコアメダルは惹かれあっているのさ」

『愚問を…。所詮オーズごときがコアメダルの力を使うなど…』

「お前にはわからないだろうが…明久はグリード達ですら手懐けるほどの大物だ」

アンクは笑いとばしながら僕に指を指した

『ははは！たかが人間がグリードと共存しようなど…はなはだしい！』

だから…こいつは僕に紫メダルを埋め尽けコアメダルとの共存を無くした

本当に勝手すぎる…

でも

「それは無理だよ。だって僕は彼らと通じ合っているから…ほら…」

手の平を広げるとコアメダル達が光輝く

みんなありがとう…

『ほほ…面白い。ならばその絆を断ち切るまで』

「う…」

オルソナが降り立つと同時に衝撃波が起こった…ぐ…なんて威力だ

『では…最後の審判を下そうかオーズ…吉井明久』

「く…」

「明久！怯むな！！こいつでいけ！」

アンクは素早くメダルを投げ渡した

それを素早くキャッチしてベルトを着けコアメダルをセットする

「いくぞオルソナ！」

オースキャナーを手に取り素早くスキャンする

「変身！」

メダルが沢山現れ紋章を作っていく

『ライオン！トラ！チーター！』

黄色いサークルとなり胸に刻まれ黒い姿から色がつく

『ラッタッ！ラッタッ！ラトラ～タ～！』

「うおおおお！」

黄色いコンボのラトラーターに変身しライオンの頭から特大の光を放つ

『……ほう』

効いてない…か！

「いくぞお！」

高速でダッシュして素早く蹴りを放った

『……』

何…！？

「ぬおりゃああ」

ダッと飛び上がり連続で切り裂く…効いていな…

「ぐああ！」

拳を叩きつけられたのがわかったのは吹き飛ばされてからだ…早い！？ラトラーターでも見切れなかった

『…この程度かしら？仮面ライダー』

「言葉使いが変わった…！？オルソナの姿が超スレンダーの美人に！？」

『失礼…ね！！』

振り下ろされた蹴りを交わそうとしたが避けきれず肩に激突した

「ぐ…うわああ」

「明久！」

重い…肩が上手く上がらない…

『どうしたの？オーズ』

「ぐ…アンク！サゴーゾだ！」

アンクは素早くメダルを投げる…それをキャッチしあいつからなるべく遠ざかり素早くメダル入れてスキャンした

『サイ！ゴリラ！ゾウ！』

『サゴーゾ…サゴーゾォ！』

黄色い姿からがっちりとした体系のサゴーゾへとコンボチェンジした

「うおお！」

激しく胸を叩きドラミングをする…重力操作なら早く走れないはずだ！

『甘いわね…』

！？消えた…うぐ…ああ！腕が

「な…！？」

オルソナは重力を気にせず素早く腕を掴んできて締め付ける

効かない！？

「がああ！」

『オマケ！』

拳を叩きつけられ思わず跪いた…ぐ…なんてパワーだ

『そんなものなんだーつまんなーい』

！？また姿が変化した！

「明久！距離を取れ！」

アンクの言葉を無視してスキャナーで再び読み込む

『シャチ！ウナギ！タコ！』

『シャシャシャウター！シャシャシャウター！』

重力系から水のコンボへと変わり素早く液体化する

『あら？逃げようとしても無駄だからね！！』

「うわああ！」

そんな…液体化したのに攻撃を喰らった！？

『それそれ！』

「ぐ！がああ」

反撃も許されずオルソナの鞭に叩きつけられる

う…力が入らない…

『ハッ！』

「ぐあああ」

蹴り飛ばされ…身震いをする…また姿が…

まさか…

『気づいたようね…私はあなたに攻撃することによってコアメダルの力を吸収し本当の姿へと変わっていくの』

「ぐ…」

ウィップに電撃を流しオルソナに叩きつけられる…効いていな…い

コンボの力が効かないなんて

「明久！落ち着け！こいつを使ってみろ！」

ヒュンと投げられそれをキャッチ…これは黒いコアメダル

『ハア！』

「ぐ…」

片手で攻撃を防ぎメダルを入れ替える

今ならいける！

『サソリ！カニ！エビ！』

『サッカービ！サカビ～サカビ！』

黒い姿へと変化し大きく砲口する

今ならこの力も…

「はああ！」

『スキャニングチャージ！』

普通にやっていたら勝てない！なら

頭部の角を伸ばしオルソナに突き刺す

両手のクラブで腕を掴み角に回転を加える

『う…ふう』

身悶えるようにオルソナは叫ぶ。よし！後はコアメダルを砕けば！

『…うふ♪残念でしたー』

「な、うわあああ」

姿が変わったオルソナに剣で切り裂かれ吹き飛ばされた

そんな…

「明久！一旦引くぞ！」

「嫌だ！」

「！？」

メダルを変えて再び読み込む

体に力が入らない…でも気合いで乗り越えりる！

こいつを倒せば終わるんだ！

『ユニコーン！ペガサス！ケンタウロス！』

「はあ……はあ」

ぐっと体を起こしサークルは金色に変わり姿も金色になる

『ユ～ガロォ～ス！』

「うおあああ！」

素早くスキャンし剣を合体させ角の矢を構える

『スキャニングチャージ！』

体に輝きが集まり矢を力いっぱい引く

「くらえええええ！」

ヒュンと放った矢は巨大化しオルソナを貫く

今度こそ…

『残念…です』

…!?オルソナの体が金色の鎧に包まれと美しい女神のように桃色の髪…赤いミニスカートを身についた姿になった

これが…完全体?

『私は…どこかで間違ったのかもしれません。ですがもう仕方ないのです』

オルソナはスキャナーを手に取る…ってあれは…オーズドライバー!?

『変身…』

悲しそうな顔をしながら読み込む

「何…」

「嘘でしょ？」

『タカ！トラ！バッタ！』

タトバ…でもそれは金色で姿も女のように美しい

『タト・バ！タト・バ！』

「さあ参りましょう」

マントを身につけたタトバ…いやオルソナは近づいてくる

「！？うわあああああ」

「ぐ…明久――！」

オルソナから放たれた波動砲を受け体中の骨が砕けていった

「が…はあ」

強い…あんなのもう一回喰らったら

嫌だ！

「嫌だ！嫌だあああああ！」

体内から紫のメダルを取り出しまだ砕けていない足と手に力を入れて読み込む

『プテラ！トリケラ！ティラノ！』

『プ・トティラノーザウルース！』

最強の姿へ変わった僕は大声で叫ぶ…大気が凍りそれを吹き飛ばし威嚇が終わる

「それが今の姿…」

「ルオオオ！！」

メダガブリューを取り出しオルソナに斬りつける

『う…』

「ウオオオ！」

顔をガシリと捕まえメダガブリューで切り裂く

オルソナはたじろくが素早く切り裂き蹴り飛ばす

凄い…凄いよこの力

『う…くう…』

「ウオオオ！」

『ゴックン！』

メダルを入れてガブリと食べさせる。それを素早く銃に変えてオルソナへ向けた

「これで終わりだあああああああああ！」

『プ・ト！ティラノーヒッサーツ！』

メダガブリューから高密度の波動砲をオルソナに打ち込む

その場所は大爆発が起きた

終わった…

「やっ…ぐうう…」

「明久！」

振り向けばオルソナに切り裂かれていた…馬鹿な…

「これが最強の力なのですね」

オルソナは金色と紫の女のプトティラになっていた

そんな…

『では…これで終わりです。吉井明久…』

腹にはメダガブリューを突きつけられている…まさか！

『プトティ・ラノ―ヒッサーツ！』

『さようなら…明久君』

その言葉に何かを感じる暇もなく

僕は波動砲に飲み込まれ

大爆発を起こした

「明久――――！」

現在明久の使えるメダル

タカ
クワガタ
ライオン
サイ
シャチ
サソリ
ユニコーン
プテラ３
トリケラ３
ティラノ３

傷と負傷と迫る悪

「明君…明君！」

「明久…」

「アキ君！！！」

そんな彼女達の声が静かに医務室に響いた

「…あっ……西村先生」

仮面ライダーオーズである火野映司はすくっと立ち上がって鉄人こと西村に近づいた

教え子の様態を聞くためである

「火野先生…？」

いつもと違い西村は覇気が見られないようだ。映司はそれを不安に思いながら口を開く

「あの…吉井君の状態は…」

映司の言葉にピクリと眉が動いたがすぐに口を開いた

「いつものあいつじゃないです…馬鹿と明るさが取り得だった奴なのに」

西村は一度言葉を切って静かに映司を見つめた

その悲しげな表情を見て静かに汗が流れ落ちた

「…会いに行けばわかりますが…シャマル先生の話しだと全身の骨は愚か内蔵までえぐれてます」

「…な、内蔵まで…」

「何をしたらあんなことになるのか…今までの傷も一気に広がり…心臓が壊れていないだけ幸いでしたよ」

ゴクリと唾を飲み込み下を向く。高校生である明久は自分より体が強いはずがない…

（それなのに吉井君は……）

下を向いている映司の肩をそっと叩き西村は静かに廊下を歩いていった

その足音すら…覇気は見られない

静かに広がっている天井…明るいなあ

周りでは泣き声がひたすら響いている…それが彼女達だと言うことはすぐに理解できる

「……だから…泣かないでよ」

みんな鼻水や涙が全開だ…全く女子だというのにさ…

「だ…だって…あぎひざ…が」

「…からだじゅう…ぼろぼろなんでじょ？」

「ひぐ…」

「……」

はは…ぼろぼろなんかしょっちゅうだよ…

あれ？なんで涙が伝うんだろ

――僕は負けた…圧倒的すぎるオルソナ…

幸い顔や首は守れたけど…それ以外は骨は砕け…内蔵が酷いことになって…

痛いよりも苦しいが先に伝わる…

今の状態を簡単に言えば医務室で…全身に包帯を巻き寝込んでいる…

顔は動くけど体がいうことを聞かない…

守れなかった…

僕はこの世界の仮面ライダーオーズなのに…

手が届かなかった

全てのコンボを使い…死力を尽くしたのに勝てなかった

どうして…

なんでだよ…

「…ぐ…」

涙が出るのを必死にこらえ体に力を入れてベッドから抜け出した

「吉井君!?何やってるの!」

シャマル先生の怒鳴り声が聞こえる…

このままじゃ駄目なんだ!

「ぐ…うああ」

体中が悲鳴を上げ倒れてしまう…苦しい…

「吉井君!?」

シャマル先生が触れてくるのを手で払い必死に立とうとする

「やめて明久!」

フェイトの言葉を無視して立ち上がる…

うあ…足が

「う…ぐう!」

ガタンと倒れて体中を打つ…なんのこれしきいい!

「あ…が！」

今度は立ち上がれずすぐに体制を崩すが…なのはが支えてくれた

「アキ君…駄目だよ！今は休んで！」

「……」

黙っているとシャマル先生がしゃがみこんでこっちを覗き込む

その視線は凄く痛い…

「吉井君…あなたの体はもう限界なのよ」

「…限界？」

「今までたまっていた疲労や傷が広がって…もう普通のレベルじゃないのよ？」

「それでも…」

「それでもじゃないのよ！！！あなた今までどれだけ無茶したのかわかって言ってるの！？」

シャマル先生の声が静かに医務室に響き渡る

そんなのわかってる…だから戦うんだ

「僕は仮面ライダーですから…戦うしかないんです」

僕は戦うしかないんだ…

「……！！」

『パタン』

静かに倒れ意識が遠のいていった

――さあ世界を終わらせましょう

静かにコアメダルが大量のセルメダルへ落ちていく

そして…それは塊となり…

意志のない完全なグリードとなった

『ウヴァ…カザリ…ガメル…メズール』

「全ての始まりである…グリードよ…世界を終わらせましょう」

心配と完全体と癒やしを（前書き）

今回はちょっと甘いです…次回は巧が活躍します

心配と完全体と癒やしを

「…明久はまだ眠ってるのか…」

俺…都築巧は親友の吉井明久が眠っている病室前にいる…

シャマル先生によると無理をし、傷が開き気絶してしまったらしいんだ…そして病院に運ばれ入院することになった

「…全く。明久無理しすぎよ！」

幼なじみの文乃は腕を組みながらムッとしていた

そうなるのも無理ないか…俺だって心配だ

「にゃぁ…明久悲しい顔してた」

そう言って顔を歪めているのは猫耳のような髪に猫のような口癖をする俺の親友…希だ

「悲しい顔？」

「うん…合宿一日目なのに凄くやつれていたように見えた…」

「…そうか…。」

明久…お前どうして…一人で飛び込んで怪我して…また飛び込んで…どうして助けを求めないんだ…

「明日は…3日目ね」

「ああ…覗きの奴らは絶対こりてないだろうな…今日も忙しくなるな…」

そしてあいつが頑張った分は俺達が受け継ぐ…

「だから明久…お前は休んでてくれ」

そう言った後、後ろを向き彼女達と病院の廊下を静かに歩いて行った

『さあ…いきましょうグリード達』

「ふん…世界を喰らいつくしてやる」

「オーズもろとも終わらせてあげようよ」

「俺！全部壊すう！」

「ふふ…さあ……始まりね」

意志の無いコアにより復活したグリード…

ウヴァ

カザリ

ガメル

メズール

奴らの目的はただ一つ

世界を喰らいつくすことだ…完全体の奴らにとって喰らいつくすのは時間の問題だろう

この日、カザリにより街に大竜巻が発生した

その竜巻はアジア周辺を飲み込み始め…多くの命が消えていった

彼らは完全な殺戮兵器以上の力を持っている

なのはｓｉｄｅ

『ニュースです…アジア周辺で大きな竜巻が発生し…』

リモコンを手に取りテレビを切る…

部屋は凄く静かで私の傍らには寝息も立てず眠っている幼なじみがいます

「アキ君…」

すっ…と時計を見ると１６時でした…外はまだ明るく青空が満点です

「…アジアでは…こんな青空見えないよね…」

アキ君の近くに置いてあるメダルを見つめながら軽くため息をつきました

「なんで無茶したのかな…」

私達の為ってことは十分にわかってます…でも…

「鴻上さんに心配かけたら駄目だよ…？」

そっと額に触れてじっとアキ君を見つめました…悲しい顔…仮面ライダーは…常に笑顔…

でも…本当は傷ついている…悲しい思いを沢山している…

「アキ君…私達にできることってないのかな？」

何やってるんだろう私…そんなこと言っても返ってこないことなんてわかっているのに

「……アキ…くん…わからない…わからないよお…」

涙が溢れ出て必死に手の甲で拭うけれど…涙は一向に流れ落ちます…

「私…何も力になれていない…アキくん…を助けるっていっただのに…ひぐ…」

「……なのは？」

ハッと顔を上げると首をこっちに傾けながら悲しい顔をしているアキ君がいました…

包帯やギプスがつけられ…それでも脇からは血がにじんでいます…

なのに彼は…アキ君は

「大丈夫。大丈夫だよなのは…」

すっと抱き寄せ温もりがこもった言葉で私を励ましてくれたのです…

「わかってる…無茶してるのもなのはが僕を助けてくれているのも…わかってるから」

「……アキく…ん……」

静かに唇に柔らかい感触が伝わり

涙がこぼれ落ち…頬が蒸気したのでした

それは…長くてとても優しい口付けでした

「……僕は強がってたんだね…」

すっと唇を離しアキ君は悲しい顔を浮かべながら…

「あっ……」

ゆっくりと押し倒されアキ君は再び唇を重ねてきました…

（仮面ライダーには癒やしの一時が必要なんだね…）

すっと首の後ろへ手を回しゆっくりと何度も口付けをしたのでした

出発と急展開と明久の欲望（前書き）

急展開すぎるかも…巧は次回で活躍します！

果たして明久は

出発と急展開と明久の欲望

「やっぱり……行くのね？」

シャマル先生や他のみんなも心配そうに俺らを見る

俺達は今からグリード達と最後の戦いに行くんだ。相手は完全体で…今までとケタ違い…勝てるかなんて誰もわからない

「……私も行く」

「翔子！？お前…残ってろと言っただろ？」

雄二は隣にいつの間にかいた霧島に驚いている。まあいつもなんだかんだ言っても…霧島が好きなんだよな

「……私は雄二のパートナーだから。バースをサポートするのは私の役目」

霧島はバトルスーツにバースバスターとトランクケースを持っている…さあ雄二はどうするんだ?

「……はあ…後悔すんなよ」

「…私は後悔なんてしたことない」

雄二を真剣に見つめている霧島はとても凛々しく見えた…雄二は折れたようで薄く笑った

「映司君…」

「大丈夫だよ比奈ちゃん。アンクも残させるから」

「チッ…絶対メダル奪われんなよ？」

アンクさんの言葉に先生は深く頷いた…きっとあの二人は黙ってても意志が通じ合ってるんだろうな

「映司君…無理はしないでね？」

「……うん」

「火野…生きて帰れよ？」

伊達先生にバンと肩を叩かれ…火野先生は強く頷いた

みんな決心している…なのに俺は不安な気持ちがあって判断が鈍ってるんだ…情けないぜ

「「「……――――巧！！」」」

…！？みんなの声？

「…みんな」

振り返ってみると迷い猫同好会のメンバーが立っていた。千世もち

ゃんといた

「…別に巧が帰ってきても嬉しくないんだから」

「にゃぁ…巧頑張って」

「無事に帰ってきたらあなたを称えてあげるわ！」

「巧！生きて帰ってきたら修行の続きだからな！」

「お前ならできると信じてる！」

「……サンキューな」

フッと笑い再び前を向く…必ず勝って帰るからな！

俺には大事な絆があるんだ！不安なんてしなくていい

帰るべき所はちゃんとあるから！

「じゃあ…行こうかみんな」

火野先生の言葉に俺達はコクンと頷き合宿所から出て行った

今はこうして一緒にいるけど…グリードを倒す為に別れ一人になる

けど…俺達は一人じゃない！

明久ｓｉｄｅ

「……」

みんなを窓から静かに見送った…今僕が行った所で何も変わらない…足手まといになるだけだ

「戦える力もこれしか」

コアメダル達に視線を移す…意志のあるコアメダル達しかいない…

今の僕じゃあの姿にしかなれない

だけどなった所で何か変わるのか？いや…また倒されてしまう…

「僕は…何をすれば」

『明久の坊や…』

『泣いてるぅ…』

『チッ…』

『僕らじゃ明久を助けることはできないね…』

「くそ…なんでだ…どうしてだ！！僕は…」

「やめて！」

近くにある花瓶を持ち投げようとした時声が響いた。スル…？君は…女だったのか

『旦那様…落ち着いて。あなたはいつも迷いなく突っ切ってたじゃない』

「……今は突っ込む気力もないよ」

ツッコミをする気力もね…

「…なのはちゃんに口付けする力はあったのにですか？」

「！？…カイ！何を言うんだ！／／」

金色のコアメダルのメイドのような性格のカイは浮き上がりながら僕の近くへ来た。いや…本当の名前はテナだ

「ご主人様は…ヘタレだと思っていましたが…」

「それ酷くない！？」

「いえ…私が言いたいのは…そんなご主人様でもやる時にはやるだなあと」

「どういう……あ…」

そうだ。僕は確かにヘタレだ…でもなのはに口付けをした…テナ…君が言いたいのってまさか

「お分かり頂けましたね。そうです…ご主人様がこもっていても何もないのです。世界を救うには…ご主人様の本当の力が必要なので

す。今のご主人様からば欲望を思い出せると思いますよ」

僕の欲望…力…いや違う…

愛…だ

みんなが大好きだから僕はその欲望でオーズになれた

でも記憶が無くなった僕は今までみんなを避けてた…いつも何かが足りない…寂しかったんだ…

力はある…でも守りたいものがなんなのか全然わからなかった…

そうだ…一年前

僕はみんなの為に変身した…オーズに仮面ライダーに

でも何かが消えていた…そして力も再び失ったんだ

「アンク……君が僕に再び力を与えてくれた」

欲しかった…力がオーズが。でもそれ以上に欲しかったのはみんなから愛してもらいたいことだったんだ

「もう叶ってた。なのはに…口付けされたあの時から」

満たされない僕の欲望…大きな愛。世界を愛したい欲望

「どうやら思い出したようですね…ご主人様」

顔を上げると沢山の人が目に映った…いや違う…

「なんでみんなが」

「それは旦那様の欲望からよ」

露出が多い服を着て黒いポニーテールをひゅんとなびかせながら赤い瞳でこちらを見ているのは…

「スル…」

人間態とは違い凄くなんというか…綺麗だ

「「「明久…！」」」

ということは他のみんなも…

んんんん！？

「えええええええ

「い、いやだって…」

うぐ鼻が熱い…熱いいい！

なんでグリードがみんな女性なんだよ！！

「別に気にすることじゃないだろ」

ウヴァ―緑色の長いストレートに垂れ目な緑色の瞳…服はジーンズにTシャツだ

「どうしたの明久？」

カザリ―白い肩までである綺麗な髪に黄色い瞳…服はスルと同じで露出が激しい

「へんだぞお…？」

ガメル―お団子の銀髪に黒い瞳…服はワンピースだ

「…まあ仕方ないわ」

メズール―黒いストレートに青い瞳…服は何故かセーラー服

「…素敵な欲望ですご主人様♪（ご主人様をハーレムにするチャンスです！）」

テナ―腰まである金髪に綺麗な茶色い瞳…服はやっぱりメイドだ

「ちょっと待ってよ！僕はこんな欲望を願ったはず」

抗議する前にテナがずいっと近づいた…あの…近いんですが

「ご主人様…ご主人様の欲望は何でしたか？」

「え…愛される…愛したい」

「そういうことです。明久様は私達を愛したい…しかし男では抵抗がある…なので私達は女としての意志になったんですよ」

「嘘おおお！？」

これじゃあ変態だあああああ！最悪な欲望を思い出してしまったあああ！

「でも…ご主人様はこれで戦えますよ」

「え…？」

絶望しなくてもいいの？だって…ううう。また悲しくなってきた

「その守りたいという欲望…私は素敵だと思います。ご主人様は胸を張っていいんですよ？」

「テナ…ぐ…ひぐ」

「どうした明久？」

「あり…」

「あり？」

「ありがとぉおテナぁあああ！！」

「ひゃ！」

「「！？」」

僕は嬉しくて…テナに抱きついた。だって僕の欲望腐っていなかったんだよ！？

もし気持ち悪いとか言われたら…どうしようと思ってたんだよ！？

「…よしよしご主人様／／」

『『（テナ…羨ましい…）』』

テナｓｉｄｅ

ご主人様は私を離した後（残念です…）…すぐに私達…と言っても、もう意志のないメダル（意志が実体化したから）を持って準備を始めていました

「行くんですね？」

ベリッと注射を外し更には頭の包帯やギプスも外し始めました

「うん。だって世界には沢山の愛があるから…失う訳には行かないんだよね」

ご主人様は笑いながらギプスを外し投げ捨てました。これが本当のご主人様

「僕はもっと沢山の人と出会いたい…だから今までどうでもいいと思ってたこの命…凄く惜しくなってきたよ」

ハハと笑いながらベッドからストンと降りて私達を優しい目で見つめてきました…はう…ご主人様素敵です／／

「「「／／／」」」

皆様もうっとりしていました。流石ご主人様です……

「それにまだこの娘と会っていないしね」

ご主人様はお腹に触れながら紫のメダルのことを言っていました

「旦那様…一つわかったことがあるんだけど…」

「何？」

「オルソナの使っているタトバは旦那様が失った最初の三枚だったの」

「…そうなんだ」

ご主人様は一度窓を見つめてからすぐにこちらを見ました

その表情はとても穏やかで優しい雰囲気です

「じゃあオルソナから取り返さないとね」

やっぱりご主人様は素敵です…優しいです

だからこそ皆様はご主人様が大好きで…ご主人様も素敵な欲望が芽生えたのですね

「じゃあ行ってくるよ…アンク！」

「ようやくか！」

窓からアンクが現れ溜め息をついていました。アンクは明久様の持つコアメダルの意志でたった一人の男

だからご主人様と仲良くできて安心してるんですねアンク

「無理はするなよ明久」

「帰ってきたご褒美あげるね」

「旦那様しっかりね」

「明久の坊や…帰ってきてね」

「頑張れぇ」

「行ってらっしゃいませご主人様♪」

「うん！！行ってきます！」

ご主人様はバッと窓から飛び降りて行きました

―手紙？

差出人はなのは様、フェイト様、まどか様、ほむら様です

ご主人様は…きっとこれを読んで決心がついたんですね

―明久君へ

頑張ってね。大好きな私達の仮面ライダー

『変身！』

巧とカザリと融合ライダー（前書き）

強引な部分もありますがカザリ決着編です

巧とカザリと融合ライダー

「カザリ…」

俺はグリードが暴れている林の奥へと入った

そこには宿敵…カザリがいた…姿からして完全体か

『へえ…やっぱり君が来ると思ったよ』

「俺もお前と決着がつけたかったし…都合がいい」

黒い瞳でカザリをキッと睨みつける…半端な戦いじゃ命取りだ…覚悟を決めて挑まないとな！

『…ふん。君のメダル貰うよ』

すっとディアスドライバーを取り出し腰に巻く。ポケットから狼コアを取り出し中央に入れた

「お前は俺が絶対に倒す！」

（乙女姉さん…知ってたんだな…俺の正体…仮面ライダーだって）

静かに別のポケットからメダルを取り出す…乙女姉さんが前にくれたコアだ

どうやって手に入れたのかはわからないけど…乙女姉さんはにこにこと変わらない笑顔で俺を見つめたんだ

けど…わかってた。乙女姉さんは震えていた…あの姉さんが震えて

いたなんて見たことがなかった

そして文乃達と一緒にいる時こう言ってたらしい

『巧…帰ってきて。生きて…絶対よ』

姉さん…俺は必ず生きて帰るから

そしたら下手くそだけど美味しいあのケーキ作ってくれよ

「変身」

静かに剣を刺し…メダルとセルメダルが俺を覆った

『ウルフアップ』

銀色の鎧に赤い瞳…仮面ライダーディアスウルフスタイルへと変身
完了し静かにディアスセイバーを召喚させた

「……いくぞ」

ディアスセイバーを構え腰を落とす

そして静かにカザリを見据え走り出す！

「ハアアアア！」

ブオンと下から切り裂くようにしてセイバーを振るう

『フン！』

カザリは腕のクローで払いのけ攻撃を繰り出してきた

俺は交わせきれず顔に打撃を受けた

「ぐ…あ！！」

重い…完全体になるとこうまで力が違うのかよ

『ハア！』

「ぐ！」

振り下ろされたクローをセイバーで防ぎ素早く蹴り飛ばす

『フフッ！』

カザリは効いていないのかすぐに着地をする…

「おりゃあ！」

セイバーですかさずカザリを切り裂く…

手応えがない！？

『どうしたの？痛くもないよ？』

「くそ！」

ブオンと切り裂きにいくがかわされる

『じゃあ…そろそろ消えようか』

「何！？ぐああ！」

これはカザリ…の髪か！？こいつそんな能力が

「ぐ…動け」

『フン！』

カザリが放った砂嵐は巨大な渦となり俺を吸い込んでいった

「がああ！」

雄二ｓｉｄｅ

「…面倒くさい奴と当たってしまったか」

ガメル…勿論完全体か…噂には聞いていたが本当に物体をセルメダルにできんのか

「……雄二」

「翔子…絶対あいつに近づくな。遠距離から狙えよ?」

「わかった」

静かにバスターを構える翔子…結構様になってんな

『……ん？お前達もセルメダルになりたいのかあ？』

ガメルは頭をかきながら俺達を見てくる…

「はあ？お前みたいなデカブツなんかにセルメダルにされてたまるかよ」

『…なんだとー！』

ほお…こいつは叩きがいがありそうだ…色々とストレスが溜まってんだ

「ストレス解消させて貰うぜ！」

『ふざけるなああ！お前嫌いだ！』

バースドライバーを取り出して静かにセルメダルを取り出す

さあて…死なないようにしないとな！

「変身！」

セルメダル投げ入れて片手で回すように手を滑らす

高速で回され中央のカプセルが開いた

『カポン』

装甲に覆われて赤い目が光る…仮面ライダーバースに変身完了だ

「いくぜデカブツ野郎が！」

俺はダッと走り出しガメルへと突撃していった

巧ｓｉｄｅ

「ぐああ！」

渦から解放されベシャリと地面に叩きつけられた

体中の鎧はボロボロで剣も折れてしまった

強すぎる…これが完全体グリード

『弱いなぁ！！』

「がふ！」

蹴り飛ばされて横へ転がる

う…がは…

『ほらほら！！』

「ぐあああああ！」

立ち上がってもすぐにカザリに切り裂かれダウンする

このまま勝てないのか？

『そろそろ終わらせてあげるよ！！』

「がはあ！」

連続で切り裂かれ吹き飛ばされ木に衝突した。頭痛が激しいし苦しい

「はあ…はあ。！！そうだ」

さっきのメダルを取り出して同時に二つの小型バックルも取り出した

「もしかしたら…これで」

姉さん…文乃…希…みんな！

力を貸してくれ！

「うう！」

体をガバリと起こしバックルの片方に姉さんから貰った銀色のコアを入れ、もう片方にはセルメダルを入れる

『何をしようと無駄だよ』

カザリ…今楽にしてやるからな！

「うおおお！」

カチャリとバックルをディアスドライバーの両端に付けて再び剣を突き刺した

『ウルフフュージョンセルメダル！』

「はあああああ」

バックルが連動し中央にあるウルフコアを進化させる

ウルフコアはセルメダルと合体し半分がコア、半分がセルとなった

勿論…それは俺に力を与えてくれる！

鎧が壊れ赤い鎧が新たに現れた

「ハアアアア！」

そしてスーツが銀色になり顔が開き黄色い瞳が現れた

これがディアスの究極体…フュージョンスタイルだ！

『何だ…あの姿は！？』

折れたディアスセイバーを拾い大剣から銀色の刃の長剣へと変わる

「行くぞカザリ！」

この姿はオーズのコンボ同様…体力を消費する

決めるなら一瞬だ！

「ハアアアア！」

『「ドウッ！」』

『ぐあああっ！』

フュージョンブレードから巨大な破壊包を放ちカザリを吹き飛ばした

「ぐあ…ぐ」

体中が痛い…これが明久が味わった痛み…でも

素早くブレードに二枚のセルメダルを入れて構える

『メダルブレイク！』

長剣が金色に光り眩しい輝きを放った

『ぐ…ううう！』

カザリは光りを浴びてしまい鎧が壊れていく

「ハアアアア！」

輝きは巨大な剣となりディアスに身にまとった

ディアスはダッシュし空高く飛び上がった

「これで最後だああ！」

ズオンと振り下ろされた刃がカザリを切り裂いていく

『ビキビキ…』

カザリの体内にあるコアメダルが砕けていきカザリは悲鳴を上げた

『そん…な…僕が…うわあああああ！』

「ぐ…うわああ」

大爆発が起こりディアスは爆風に巻き込まれ吹き飛ばされた

「…ぐ…はあ…はあ」

ゆっくり立ち上がって爆発した場所を見る…カザリは…完全に消滅したようだ

「…やった…」

巧はフッと笑った後静かに倒れるのであった

怪力とWバースと全部乗せ×2（前書き）

今回はいよいよWバースです！プロトタイプにだいぶ変化を加えてますが気にしないでいただけるとありがたいです

怪力とWバースと全部乗せ×2

「どわああ！」

柱にぶつかり砕ける…ぐ…力強いなこいつ

『ふんがあ！』

「うおっ！」

すぐさま横に飛び奴の攻撃を交わした。奴の攻撃は柱に当たり粉々に砕けていった

「チッ…面倒な奴だ」

バスターを取り出し連続で打つ

「はっ！」

翔子もそれに続き挟み撃ちにして打ち込む

『ぐ…』

くそ！やっぱり効かねえ！…！？しかも玉切れかよ！！

『うるああ！』

「ぐほ！」

鳩尾に叩きつけられてダウンする…ぐ

「雄二！」

『ガガガ！』

翔子は叫びながらバスターを連射するがガメルに効いた様子が見られない

『るあああ！』

「がああ！」

ガメルのアッパーを喰らい吹き飛ばされ柱に激突した

「がは…」

このままじゃやべえ…なんとかしねえと！！

『セルバースト！』

メダルポットを先端に取り付けて準備完了…いくぜ！！

『うがああ！』

「喰らえやあ！」

ガメルに向かってバスターから破壊砲を放つ

『！』

ガメルは体中が爆発するがすぐに体制を整えた

ぐ！効かねえ！

『お前嫌いだ！！』

「知るか！俺だってお前なんか屑だ！！」

バスターを投げ捨て攻撃するが効かねえ…装甲に傷一つないぞ！

『俺の邪魔ばかりするなああ！』

「があ！」

顔を殴られ跪く…そこへガメルは頭突きをかまし俺は吹き飛ばされる

「ぐあああ！」

「雄二！！」

ぐ…話にならねえ…今のままだと確実にメンテナンス行き…もしくは死だ

俺が死んだら翔子はどうなるんだ？

俺なんかの為に命がけで来てくれたこいつを俺は殺してしまう

「ハッ…ふざけんな」

こいつは何も悪くねえ！だから俺は翔子を必ず死なせねえ！

だったらこんなとこで倒れてないでさっさと起きやがれ！

セルメダルを取り出して見つめる

「こいつでブレストキャノンを出し…至近距離だ喰らわす」

下手すりゃ相打ち…上手くいけば……

『隠れても無駄だぞ…！！』

「ぐ……迷うな！俺は翔子を助ける！」

横へ転がりガメルの前に現れる

「雄二！」

翔子の前に立ち素早くセルメダルを入れようとした時

『スバアアン！』

『ううう！』

弾丸を受けてガメルは倒れた

翔子!?いやあいつは俺の後ろに…

しかもこの弾丸は…横から…

「坂本ちゃん!!」

「!?」

まさか…

「そんな捨て身の戦法…教えた覚えないけど？」

俺の真横には帽子をかぶりバスターを持ちながら笑っているあの人がいた

「伊達さん！？」

そう…俺の師匠だ

伊達さん…いや先生はベルトを取り出して腰に巻いた

「バースドライバーか！？」

「ドクターが緊急で作ってくれたのさ……伊達明…リターン！」

ピーンとメダルを弾きキャッチする

「変身」

キリキリと回し中央のカプセルが開いた

『カポン』

装甲が先生を覆い仮面ライダーバースへと変身した

だが目は緑に光り…体のあちこちに赤いマーカーがある

「伊達明…仮面ライダーバースプロトタイプ！さあ！やりますかぁ！」

パンと手を叩き翔子に離れるように指示をした

バース…プロトタイプか…あの博士も面白いもん作るじゃねえか

『バースが二人居る？』

「よっし」

先生はグルンと手を回し走り出した

「いくよ坂本ちゃん！！」

俺も続いて走り出す

「無茶すんなよ師匠！」

さあ…改めていくぜガメル！！

映司ｓｉｄｅ

「メズール…」

『あら？もう一人のオーズが来たのね…』

俺の周りには沢山の卵があり…その中には親子が閉じ込められていた

「……みんなをよくも」

キッと目を紫に光らせ睨みつける…倒す！

『……ふふ。私の欲望の邪魔しないで』

「そうはいかない！」

ドライバーをつけて素早くメダルを入れる

「メズールか…完全体ならあれでいくしかないかもな」

「わかってるアンク。……ぐっ！」

体内から三つの紫コアを出し掴む
…俺に力を貸してくれ！

「ぐ…」

メダルを入れてスキャナーを持つ。この力……でも今はやるしかない！

「変身！」

『プテラ！トリケラ！ティラノ！』

スキャナーで読み込み…三つのメダルが目の前に現れサークルとなり刻まれた

『プ・ト・！ティラノザウルースゥ！』

「ウオオ！」

冷気を振り払い雄叫びを上げる…紫コンボの力

それが奴らを倒せる！

「ハアア！」

『ハッ！』

口から冷凍ガスを出すがメズールも水流を出し相殺された

「ハッ！ウオオ！」

バッと構えメズールに突撃していく

親子のみんなは必ず守ってみせる！！

雄二ｓｉｄｅ

「「どああ！」」

柱にぶつかり俺達は吹き飛ばされた

やっぱり強え…

「はあ！」

『るあ！』

「ぐふ！」

師匠が繰り出した拳を避けガメルが逆に殴り師匠は吹き飛んだ

「くそ！」

『があ！』

「ぬあ！」

俺は蹴りを放つが効いたようすもなくガメルに頭突きをされ吹き飛んだ

「おらあ！うお…かてっ！」

『がるああ！』

「うあ！」

師匠は殴るが装甲の硬さに手を振っていた。そこへガメルの攻撃を喰らいまた吹き飛ばされた

「この野郎！」

『ぐぬあ！』

「がはっ！」

ぐ…やっぱり肉弾戦じゃ勝てねえ…

『るあああ！』

「「がああ！」」

ガメルの頭突きを喰らい俺達は建物に叩きつけられた

ぐ…まじでやばい

「坂本ちゃん坂本ちゃん！」

師匠がバシバシと肩を叩いてくるので体を起こした

「恐らくこの硬さじゃ…ブレストキャノンは効かない。ならとっておきを使いましょうか」

ふざけた口調だが…なる程。確かにその手があったな！

「ああ…いくぜ師匠」

「ＯＫ！」

ガバッと立ち上がりガメルから距離を取る

待ってろ翔子…すぐに終わらせるからな

「ヒュー坂本ちゃんもやるねえ！」

師匠はきっとニヤニヤしているのか…いやしてんな。笑いながらセルメダルを入れた

「ちっ…ペースが狂うぜ」

俺もセルメダルを連続でいれキリキリと回す

『キャタピラレッグ』

『カッターウィング』

『クレーンアーム』

『ブレストキャノン』

『ドリルアーム』

『ショベルアーム』

全ての武装を装備し俺はバースの強化形態にあたるバース・デイに

なった

『シールドレッグ』

『ブレストキャノン』

『ダブルソードアーム』

『スピアウィング』

「よっしゃ！いくぜ坂本ちゃん！」

プロトタイプは俺と違い赤い武装を装備したプロトバース・デイになった

ほお…あの博士案外抜け目ねえな

「いくぜ！」

クレーンドリルアームを構えてガメルを見据える

「おらあああ！」

キャタピラレッグで突撃しそのままクレーンドリルアームをお見舞いした

『うわあああ』

ガメルは吹き飛ばされダメージを受けているのか体を押さえていた

「うおりゃあ！」

師匠は足のシールドを閉じて走り出し出す

キャタピラレッグとは違って普通に走れるな…

『うう…ぐわああ』

師匠はそのまま両手のブレードで切り裂く

「まだまだ！」

素早く回転し再び切り裂く

『ぐ…ああ』

ガメルは負けじと攻撃を放ってきたが

「甘いぜガメルちゃん！」

足のシールドが展開し巨大な盾になりガメルの攻撃を防いだ

「今だ坂本ちゃん！」

「わかってるぜ！」

カッターウィングで舞い上がりすかさず跳び蹴りを放った

「おらああ！」

ガキャアと激しい音が響き渡りガメルが吹き飛ばされた

『ぐ…うう』

「よし：決めるよ坂本ちゃん！」

「ハッ！わかってるぜ！」

俺達は並び立ち全てのエネルギーをブレストキャノンへ集中させる…

「「ハアアアアア！」」

これで終わりだぜガメル！

「「ブレストキャノンシュ――――――――――――――――ト――――！」」

『『セルバースト！！』』

ブレストキャノンからは比べものにならない波動砲が発射された

それはガメルを飲み込み当たりを破壊したってやべ！！

『――――――

「……最後のあれは…なんだ」

Wバースの戦いは複雑な結果として幕を閉じた

愛と虫頭と二人のバーサーカー（前書き）

ようやく…ここまで来た…。

皆さんの感想を参考に書き方を少し変化させました

「なんとか倒したな…」
「ああ…だが…何故か納得ができない…」
なんだあの絵文字は…巧はちゃんとされてんのに俺達だけいい加減だろうが！！くそ…本当に納得いかねえ
「まあまあ…どのみち倒したんだから結果オーライでしょ」
伊達師匠はニカッと笑いながらガメルが爆発した場所を見る……ん？なんだあのメカ…ああプテラカンドロイドか…メダルを回収してやがるな…あ？
「って！何やってんだテメエ！」
メダルを回収するプテラカンドロイドに突撃しようとしたがプテラカンドロイドはすぐに飛び立って行きやがった…しかも色があの博士が作った奴と違うのはどういうことだ…
「……雄二！！」
「翔……！？」
「ヒュー♪」
く、唇に柔らかい感触が！？な、なんだ…俺は一体…翔子に何をされ…
「……雄二…ありがとう」

「…！！。れ、礼なら師匠に言ってくれ…俺はやっぱり無力だった」

すぐに表情を切り替える

…理由は単純にこいつを守れなかった…俺一人じゃ手も足も出なかったんだ…っ。

「雄二は無力じゃない！！」

「！？」

「…雄二は強い。それは私が一番知ってる」

「翔子…」

「…雄二は諦めなかった…最後まで諦めなかった…。それだけで十分に強いよ」

「翔子……」

俺なんかの為に必死になってくれる奴がいる…俺を格好いいと言ってくれる奴がいる…だから俺は…

「…ああ。ありがとな翔子」

「…うん」

だから俺は何度も立ち上がることができるんだ…

『ギュッ』

そっとあいつを抱き寄せる……すぐに首の後ろにあいつの腕が回っ

てくる

暖けえ…そして優しい…

『俺が教えることは何もないか…。格好良くなったな雄二……俺もいつか誰かと添い遂げられるかな～？』

そう呟き伊達明は微笑みながら二人がいる場所からそっと離れて映司がいるであろう場所へと向かって行った

映司ｓｉｄｅ

「ハアア！」

『遅いわ！』

俺が放ったメダガブリューを完全体のメズールは簡単に交わして蹴りを放ってきた。それを上手く交わし逆に殴りつける

「せあ！」

『…きゃ！！』

メズールはその拳をまともに受けて軽く後ずさる…俺は更に蹴りを放ちメズールを蹴り飛ばした

――いける…完全体だからと言って強いと言う訳じゃない…いや…この力が完全体と互角に渡り合えているんだ。

「はあ！」
『く…！』

放った攻撃がメズールの腹に当たり後ずさる…よし

『見くびらないで！』
「く！う！ぐ…」

連続の蹴りが容赦なく襲い逆に後ずさってしまう。く…やっぱり一発一発きついな…

「ウオ！」

ブオンとメダガブリューを振り下ろすがすぐによけられ回し蹴りが放たれる

「ぐ…！」

片手で弾いてメダガブリューを真横に振るう…く！やっぱり素早い…メダガブリューのような一発が重い一撃は簡単に避けられる…

「映司！！やみくもに攻撃するな！奴の動きを見ろ！！」
「アンク！？」

動きを…見るか…

『はああ！』
「ぐあ！」
『はっ！』
「うあ！」

メズールは勢いにのり跳び蹴りを放って……今だ！！

「セイヤ！」
『きゃあ！』

飛び上がりメズールの足にめがけメダガブリューを振り下ろす。メズールは足に直撃して地面に落下した

「やった！」
「は…上出来」

『く…やるわね…なら』

メズールは立ち上がると同時に体を液体化させていく…やっぱり液体化能力があるか

「…くあ！」

！！液体化となってメズールは突撃を仕掛けてくる…く！打撃技じゃ当たらない！

『アハハハ！』

「うわあ！」

攻撃が直撃し火花が飛び散る…く…一撃でこれ程って…冗談じゃないよ

『どうしたのかしら？』

「うわ！」

く…攻撃が当たらないんじゃ手も足もでないぞ…！

『ハアア！』

「！？」

バキャッと音が響きメズールに突撃される…ぐあ！体が…

『アハハ！』

「うわああ！」

再び直撃し建物から吹き飛ばされた…ぐ…強い

「ぐう…！！」

な、なんだ体が…苦しい…

「があ！」

そうか…紫の力が…俺の体を支配しようとしている…んだ

「ぐ…」

く…絶対暴走なんかしない…俺はみんなを守るんだ！その為に今は…支配されている暇はない！

明久ｓｉｄｅ

「…覚悟するんだウヴァ…」

「ハッ…今までは散々だったが…今の俺は違う！」

虫頭のウヴァは自分の胸を叩きながら自信満々に言い放つ。確かにあいつは完全体だ…だけど…

「諦めるんだ！君はグリードで一番ネタキャラだったじゃないかあ！」

「んだとテメエ！」

ウヴァは凄く怒りを絽にしながら睨みつけてくる…でも実際にウヴァさんと言われてるくらいこいつはネタキャラグリードだ…う、なんか悲しいな

「貴様！馬鹿にしてるのか！？」

「だって…あまりにも扱いが酷くて…」

「何い！？」

はあ……凄く疲れた気分がする…でも一応グリードだし…世界喰らうんだし倒した方がいいよね？

「…まあいい！今から貴様を倒すんだからな！」

「じゃあ…僕も本気で行かなきゃね」

ウヴァはネタキャラだけど実力は本物だ…正直メダルを砕けるかわからないけど今はやるしか…ない！！

「明久！ウヴァの皮膚は固い…が弱点はある」

「弱点？」

アンクはビルの柱に座り指を指した……え？脇腹？

「消えろオーズ！」
「って来た！」

ウヴァは体中から大量の電撃を放ってきた…うわ！これはまずいな！！

「ウオオオオ！」

体中から大量の冷気を発して電撃を固めた…え？氷は雷を固めれないだろって？

気にしないでほしい

「チッ！」
「ウオオオオ！」

地面に腕を突っ込んでメダガブリューを取り出す…打撃が効かないならありったけのビームを打ち込むだけだ！

「フゥ…」
「ウオオ！」

ウヴァは突っ込みながらクローを突き立ててくる。メダガブリューでクローを叩き逆に顔面に蹴りを叩きこんだ

「ぬあ！！」
「おりゃあ！」

メダガブリューでウヴァの腕を攻撃し、蹴りを喰らう…く…だけど…

「勝てる！」

欲望を思い出した僕ならこの力を…。いける！完全体なんか恐れるもんか！

「ウオオオオ！」

「明久！？」

目を紫に光らせ翼と尻尾を出現させる…いわゆるバーサーカーモードとか言う奴だ！実際体から凄くパワーが沸き起こってるしね

「ウオオオオ！」

「ぐああ！」

メダガブリューでウヴァの体を切り裂く。火花が飛び散りウヴァは吹き飛ばされた

……。凄いなバーサーカーモード…チート並の強さだ

「貴様…」

「ルアアア！」

「ごぶん！」

尻尾でウヴァの顔を殴って黙らす。虫頭はネタキャラでしょ！！

「ハアアア！」

よし…あれをやってみるか

「…フゥ」

ウヴァから出た大量のセルメダルをメダガブリューに飲ませる…

『ガブガブ…ゴックン』
「まだまだ！」
『ガブガブ…ゴックン』
「（明久…まさか）」
『ガブガブ…ゴックン』
「ぐ…うう」
『ガブガブ…ゴックン』
「よし！ラスト！」
『ガブガブ…ゴックン！』

約二十枚のセルメダルを飲ませてバズーカーモードに変形させる…
羽を大きく震わせ思い切りウヴァにめがけて振るう

「ぬ…ああ！」

ウヴァはカチコチに凍りついて動かなくなった…今だ！

『プ・ト！ティラノヒッサァーツ！』

今までとはケタ違いのエネルギーがたまりメダガブリューの先端に巨大な塊がたまっていく

「喰らえ！」

カチリと押しメダガブリューがなのはのスターライトブレイカーとは比べものにならない超巨大な波動砲が打ち出された

「ダッシャアアアアアアア！」

あまりにも巨大すぎて…こっちが持っていかれそうだ！

「ぐあああああああああああ！」

「うわあああああああああああ！」

ウヴァを飲み込みそのまま周りまで破壊し…僕は衝動により後ろへ吹き飛ばされる

『ズドオオオオ！』

ば、爆発がでかすぎ…た…

「はあ……はあ」

やっぱりバーサーカーモードは危険すぎるね…はは体中痛いや

ただ…これだけは言いたい…

――ウヴァさん。折角完全体になったのにごめんね？☆

映司ｓｉｄｅ

『アハハ！』

「うわ！」

突撃を交わして横へ転がった…く…このままだと…

『この状態の私に攻撃を当てることができるかしら？』

「状態…？そうか！」

メズールは今…液体化…なら

「ハアア！」
『きゃああ！』

メズールが突撃してくると同時に冷凍ブレスを放った

今のメズールは水だ…ならこの力で固めてしまえばいいんだ！

『く…動けない』

足場を固められたメズールは必死にもがくが当然動けない…

『ガブ！ゴックン』

「ハアアア！」

メダガブリューにセルメダルを飲み込ませそのまま構える

『く…うう！』

そしてメズールの腹にメダガブリューを突き立てた

「セイヤアアアア！」

力一杯メダガブリューを前に押してメズールを切り裂く…さらに紫の刃がメズールをもう一度切り裂いた

『く…うう。きゃあああああ！』

メズールはメダルが砕けて崩壊していった…やった…

「ふう……なんとかなったね」

少し息をついてから変身を解除した。みんなは無事倒せたかな

集合と真実と最終決戦（前書き）

バカとメダルライダーと召喚獣！これまでの三つの出来事は

一つ：カザリと最終決戦をした巧が新たな力を手に入れ勝利

二つ：Wバースの全部乗せがガメルを撃破

三つ：Wプトティラによってメズールとウヴァが倒された

カウントザメダル

現在オーズが使えるメダルは…

タカ
クワガタ
ライオン
サイ
シャチ
サソリ
ユニコーン
プテラ３
トリケラ３
ティラノ３

集合と真実と最終決戦

「…さあて…いよいよ最後だな」
「気を抜くなよ師匠」

二人はお互いに軽く笑い目の前へと視線を移す。そこに女神のような女が玉座に座っていた…彼女こそ全ての原因…最強のグリードオルソナだ

『…私は人間を見くびっていました。まさか…本当にグリード達を倒すとは』

オルソナは真っ直ぐな目で仮面ライダーバース…坂本雄二とプロトバース…伊達明を見つめていた

『ですが…あなた達はここで消滅するのです…直に世界は終わります』

「そんなことさせる訳ないだろ」
「ああ…世界を守る。それが仮面ライダーだ！」

二人は強い眼差しでオルソナを見る。が、オルソナは動じることなく二人を見つめている

『世界ですか…』

ゆっくりとオルソナは玉座から立ち上がり地上へと伸びた階段を降りていく

『あなた達は何も知らないのですね…』
「何？」
『…いえ。知る必要もありません』

オルソナは階段を降りて二人をじっと見つめながらゆっくりとオーズドライバーを取り出した

「何！？」
「オーズドライバー…だと」

その様子に二人は僅かに足を後ろへ下げた。オーズドライバーは仮面ライダーオーズに変身する為のベルトであり…所持者は吉井明久、火野映司だけのはずだ

『全てはこれが原因だったのです』

オルソナは何かを呟きドライバーを腰に巻いた。そして三つのメダルを取り出しゆっくりと入れていく

「来るよ坂本ちゃん！」
「ああ。オーズに変身できるのは驚いたが…やるしかねえな！」

二人もバースドライバーを腰に巻いてセルメダルを取り出す。
雄二はセルメダルを投げ入れて平手で回し、明はセルメダルを弾いてキャッチして入れ、キリキリと回す

「「変身！」」
『変身』

オルソナはスキャナーで読み込み歌が流れないまま仮面ライダーオーズタトバへと変身した

『『カポン』』

中央のカプセルが開き装甲が二人を覆いＷバースへ変身したバースは目を赤く光らせ、プロトは緑に発光させた

『では…始めましょう』
「…いくよ坂本ちゃん！」
「ああ！」

タトバが歩き出し、二人はタトバに向かって走り出した

仮面ライダーとグリードとの最後の戦いが始まったのだった

明久ｓｉｄｅ

――あれ…ここは何処だろう？周りが氷河だらけなのに寒くない…
…というか僕はさっきまでグリードと戦ってたはずじゃあ

ザクザクと歩きながらとりあえず進んでみる。じっとしてても何か起こる訳ないしね…

「ん？あれは何かな」

進んでから少し…目の前に大きな建物があった。城？いや…こんな氷河だらけな場所に城があるはずない

「まさか…僕は死んでしまったの！？」

そ、そんな！！まだやり残したことが沢山あるのに！世界を救ってすら…まだなのは達と…うわああ！

「嘘だ…神様がこんな意地悪するはず…」

頭を抱え込みながら唸っていた時だ…氷河にある城らしい物がどんどん壊れていった

「なんですと！？」

氷のような城はあら不思議…綺麗な桃色の城になりました

『バタバタ』

呆然としているといつの間にか国旗的なものが城に刺さっていた…い、いつの間に

「あ……」

国旗をじっと見てみるとそこに書かれていたことに思わず凝視してしまった

『ダーリンｌｏｖｅ』

何だろう…この見ただけで弱愛しているのがわかるような物は…ダーリンｌｏｖｅって…

「早く去ろう！」

くるりと回れ右をした瞬間…

『ダーリーン！！』

「は！？」

可愛らしい女性の声が響きギチリと首を回す…そこには城の窓から手を振っているクリアパープルの瞳に桃色の長い髪をした娘がいた…

まさかだとは思うんだけど…

「あれが恐竜グリード…？」

『本当にダーリンだ！』

恐竜グリードであろう娘はこっちに向かって走ってくる…まさか恐竜グリードまで女だなんて…

「初めまして！私恐竜グリードのアイって言います！」
「僕は吉井明久です」

とりあえずお互いに礼をするとアイはじっと見つめてきた…垂れた瞳がきゅんとしていて…だああ！僕は何を考えてるんだ！

「…失敗しちゃった。流石ダーリンだね」
「失敗？まさか僕に暗示をかけようとしたの！？」
「うん。正解！」

なんて恐ろしい娘なんだ…待てよ…ということは今までのは

「うん。私がダーリンを操ってたんだぁ。だってダーリンたらちっとも私に見向きしてくれなかったんだもん」
「……どういうこと？」

だってアイはいきなり僕の体内に侵入して操ってたじゃないか…

「ずっと…ずっと見てたよ？ダー…明久君のこと…」
「え？」
「だって…私だって鹿目まどかだから」
「は？」

……どういうことだ？まどかは現に合宿にいるじゃないか…

「ずっと会えるのを待ってたよ…明久君。こんな姿や性格も変わったけど…二年…ううん十七年間ずっと見てたよ」
「え？それってまさか…」

この響き…そしてこの暖かさ…まさか…本当に

「うん。私が二年前のまどかだよ…」

「……まどか」

そうか…だから九枚のコアメダルが僕の中に…ずっとずっと見守っててくれてたんだ

「ごめん……」

「…いいよ。ようやく会えたんだから」

まどかはそう言って静かに抱きついた…あらがわず…優しく抱きとめる…会いたかった…

「暴走した原因は私の思いが強すぎて…紫の力が明久君を飲み込んだから…」

「いいよ…何も言わないでいい。僕が弱いのが原因なんだ」

今までのはオルソナが見せた幻影…でも今は本当の彼女だ

「やっぱり明久君暖かい」

「うん。ようやく欲望を思い出したんだ」

静かに呟きあい…僕らはお互いの温もりを感じた

雄二ｓｉｄｅ

「ぐああ！」

「ぐう！」

壁に叩きつけられ…体中が震えた…くそ！なんだあのオーズ

『もう終わりですか？』

俺は立ち上がってキリキリと回す…カプセルの中央が開き発光する

『ドリルアーム』

右腕のカプセルから大量の機械が武装になり装備された

「…は！俺がお前のそんな攻撃でやられると思ってんのか？」

『……』

「オラア！」

バッと動きドリルアームをオーズに突き立てる

『そんな当てただけの攻撃…くう！』

「回転ならどうだ？」

ギュルルとドリルが回転しオーズの体を削っていく…セルメダルが少しこぼれすぐさまオーズに殴らた

「チッ…」

『く。ドリルとは驚きましたわ…』

体を起こすと師匠がバンと肩を叩いた…

「ナイス坂本ちゃん！お前は少し休んでろ」

『ダブルソード』

プロトタイプの両腕のカプセルが開き…セイバー状の剣が武装された

『次は剣ですか』

「…いくぜ偽物ちゃん！」

ダッとプロトタイプは走り素早く片方で斬りつけるがジャリバーで防がれ相殺…素早く師匠はもう片方で斬りつけオーズのトラアームに直撃した

『……』

「実はこれ持てるんだよね」

プロトタイプは剣を腕から取り外し手に持つ。セイバー状の剣は細くなりジャリバーのようになった

「いくぜ！」

『…ハア！』

プロトタイプは蹴りを放ちオーズは素早く剣で防ぐ…そして次はオーズが素早く蹴りを放ってくる

「おっと…」

『ハア！』

「オラア！」

オーズの拳をよけて素早くプロトタイプが体を切り裂く…

『く！』
「まだまだ！」
プロトタイプはトラアームにも剣を振るい直撃させた
『ああ！』
斬りつけた剣がトラアームとボディを溶かし始めた…すげぇな
「ウオリャ！」
『きゃああ！』
プロトタイプはそのまま剣を投げ捨てオーズを掴み投げ飛ばした
「よっし！どうよ坂本ちゃん！」
「たくっ無茶しすぎだぜ…」
プロトタイプは剣を再び持ち、俺はショベルアームを武装する
さて…奴はどう動く…
『サイ！ゴリラ！ゾウ！』
「何…」
煙の中からサゴーゾに変身したオルソナが現れた…まさかコンボまで持ってやがったか
『……ハアハア』
「…あ？息上がってないかあいつ？」

「坂本ちゃん…火野を見てきてわかったんだが…大方あのメダルとは適応していないらしいな」

なら叩きつぶすチャンスと言った所か…

『くう！』

「うあ！」

「危っ！」

サゴーゾがガントレットを飛ばしてきたのをなんとか避けガントレットが建物へ直撃し爆発する

「…何？」

「…やっぱりコンボは侮れないか」

『隙ありです！』

爆発した方を見ていて完全に油断した！くっ交わせねぇ！

『変身！』

「「！？」」

『ハア！』

『あ！』

突如…オーズが蹴り飛ばされる……さっきの変身音は…

「雄二、先生油断するなよ」

「巧！」

新しい力を手に入れたのか赤い姿に銀のボディのディアスが現れた

『ディアスですか…カザリとの戦いの果て…融合からついにコアメダルでの変身にたどり着いたのですね』

「ああ…だけど一枚しか無理だけど」

『なるほど…ならば私の敵ではないですね』

「いや…お前はコアメダルに適応していない。だから勝てる！」

ディアスはすっと赤い長剣を抜き構える

「たくっお前一人でやらせるかよ」

「ああ…教え子達は先生が守らないとな」

俺達も武器を構えて静かにサゴーゾを見据える

『…そうはいかないのです！』

サゴーゾが地面を叩くと衝動波が起きた…何をする気だこいつ

『仮面ライダーを倒す！』

『仮面ライダーを倒す！』

『キシャアア！』

「何！？こいつらはヤミーか！」

こいつ…今までのヤミーを復活させたあげく新しいヤミーまで…

『戦いは常に平等なのです』
「何が平等だ！」
「…しょうがねえ。坂本ちゃん！巧！ヤミーは任せろ！」
師匠はぐっとサムズアップをして俺達が何か言う前にヤミー達に立ち向かって行った
「先生！？」
「チッ…！」
死ぬなよ先生…
『一人じゃないさ！』
「この声！火野先生か！？」
突如空から赤いコンボのオーズが舞い降りた…そして片方だけ翼のあるアンクさんも
『別世界のオーズ！？』
「火野！」
「大丈夫ですか伊達さん！ハアア！」
火野先生は伊達先生の元へ行き…ヤミー達と戦い始めた。任せたぜ先生方

「じゃあ…俺達は」
「こいつを倒すぞ！」

俺と巧は再び見据える…いくぜ！オルソナ！

『…まさかオーズまでとは…いいでしょう。まとめて葬ってあげましょう』

『プテラ！トリケラ！ティラノ！』

「プトティラか…」
「やっぱり簡単には行かないよな」
「だが…な」
「ああ…」

『クレーンアーム』
『キャタピラレッグ』
『カッターウィング』
『ブレストキャノン』

「「俺達も最強で行かせてもらうぞ！」」

『まさか僕だけ仲間外れはないよね？』

「「！？」」

そんなはずは…あいつは…今頃病院に…

『変身』

『プテラ！トリケラ！ティラノ！』

『プ・ト！ティラーノザウルース！！』

「「明久！？」」

『オーズだけだと思うなよ』

この声は…まさかあいつも！？

『『ウオオオオ！』』

オルソナの後ろに…プトティラに変身した馬鹿と…完全体の鳥野郎

がいた…

最終話：バカとメダルライダーと召喚獣―愛と奇跡と未来へ―なのはエンド―

遂に完結を迎えることができました！！皆様の協力と応援のおかげです

最後ですがもしかしたら納得がいかない部分もあると思いますが…目をつぶっていただけたら幸いです

質問を伺った所ハーレムとまどかに別れてしまいました…しかしハーレムはさすがに難しいと思いヒロイン達の四人エンドにさせてもらいました
内容は最後の部分だけが変わっていますので…ほむらまで行ったらそれで最後の更新しようと思います

本当にいい加減な部分もありますが…頑張って書きましたので是非とも見ていってください！

「ウオオオオ！」
『く…うう！』

地面を飛び上がりオルソナにメダガブリューで切り裂く…オルソナの体から火花が散りオルソナは僕をプテラの翼ではたき落とした

「ぐ…」
「ハアア！」

アンクが隣に立ち巨大な火球を放った…ゴウッと音を立てオルソナに直撃する

『あああ！』

うわあ…痛そうだなあ…っと集中集中！狙うは僕のメダルだ…

「オラアア！」
「てりゃあ！」

バース・デイはキャタピラレッグでオルソナに回し蹴りを決め、新しい姿のディアスは見えない速さでオルソナを切り裂いた

『く…はあ…』

オルソナは後ずさりながら…じっと僕を睨む

『何故です。終わりは近いと言うのに』

「違うよオルソナ。僕らは終わりを望んでなんかいない」

『嘘です…私は…あなたの為に』

オルソナの言葉にバースもディアスも攻撃を辞めて僕を見る

「明久…まさかお前…またか」

「……はあ」

「何!?その呆れるような目は!?確かに僕が悪いけど…」

はあ…簡単に言えばオルソナの正体は僕…なんというか…裏の僕と言うか…まあ女だけど

『あなたはあの二年…全てを失い…そして新たな人生を歩みだした』

「うん…だけど…君の寂しい心が強くてそれが原因でグリード達が復活した…」

『はい…そして私はグリードとなり…全てを終わらそうと思ったのです』

「僕に拒絶されたと思ったから?」

『…あなたは私の心を理解してくれなかった…だからわかって欲しかったんです』

ごめんね…僕が馬鹿だったから君まで…でもね…そんなの間違ってる

「……だから僕が君を返してあげるんだ…こんな争いはもうやめよう」

『…わかってます。全てを終わらせあなたを倒し』

「違うよ。君を倒して…僕は現代で生きる」

まどかとも約束したから…もう過去は振り向かない…未来を見て生きていくんだ

「だから…君を倒して…全てをゼロにする！」

メダガブリューを構え低い姿勢をとる

「やれやれ…王様は大変だな…」

「雄二…」

「ああ…明久らしいな」

「巧…」

「俺も現代を生きてみたくなったなぁ…明久」「アンク…」

そうだ…僕は…未来を見て生きる！どんなに恨まれてもどんなに悲しい過去でも

『そうですか…なら…あなたとは一生…』
「うん…君は僕だから…自分を愛さないとね。だから君とは一生分かち合っていかなくちゃ」
『……!?あなたはどこまでも…鈍感なんですか!!』
「へ？」

オルソナは溜め息をついてからメダガブリューを構えた

「…えっと…」
「行くぜ！」
「あっ！ちょっと！」

バース・デイはこっちに向けて突進してくる…

「う〝ぇえええ!?」

「オラアア！」
「ハアア！」
「フン！」

って！まとめて攻撃きたんだけどって何でえええ!?

「ぐわああ！」

トリプル攻撃を喰らいオルソナの所へ吹き飛ばされた

というかあの三人…本気だったよね？

（あいつとちゃんと話せ！）

「う！？」

三人の目はいかにもそう言いたいようだった…話して解決って…

『……』

「えっと…」

とりあえずオルソナの方を向き頭をかきながらじっと見る

「あのさ……」

『…ごめんなさい』

「へ？」

『私は間違っていました。明久が…冷たい人間じゃないと分かっていたのに…』

「……あのー」

『明久！』

「はいい！？」

『……こんな私をあなたは受け入れてくれますか？』

「……え？だってその為に来たんだよ？」

『……！？』

オルソナは何を言ってるんだ。確かに君がしたことは悪い…でも…
言ったじゃないか僕は過去を捨て未来を見つめるって

「オルソナ…いや明美…」

すっと彼女の手を優しく包み込む…

「一緒に生きよう?」
『……はい』

明美はすっと僕の肩にもたれかかり優しく包み込む

戦わないで解決することなんて何もない…でも…それでも僕は彼女
を殺したくなかった…だって彼女だって僕にとって大切だから

「お帰り明美…」
『うん…』

「火野…あのオーズ戦わないでボスを倒したな?…オラア!」
「…何で俺を見るんですか…ハアア!」
「あれがこの世界の王の器か」

「…巧。終わったのか?」
「ど、どうやらそうらしい…」

バカとメダルライダーと召喚獣―完―

ってまてええ!!まだ終わるわけないだろ!?

『…グガアアア!』

「何!?」
「はあ!?」

皆さんは…最後は戦いを見たいはず…オルソナから出た憎しみと怒

り、悲しみは…巨大なドラゴンとなった…

「…みんな…これが本当の最後だ…！！」

メダガブリューを構えて静かに見据える

「はあ…お前はどこまで馬鹿なんだ」
「でも…凄いぜ明久」

二人も武器を構える、アンクはふんと笑い翼を展開した

「先生方！ヤミー引き続き頼みますね！」

「ちょっ明久！俺達の戦いはこれでラスト？」
「伊達さん前前！」
「うお！」

『グガアアア！』

「「「うわああ！」」」

ドラゴンが吐いた火球が直撃し僕らは一斉に吹き飛ばされた…

痛たた…全く酷いなあ…

『ガアアア！』

「「「グワアア！」」」

休む暇なく強烈なタックルが当たり僕らは建物に衝突した

「がは…」
「くそ…」
「ぐ…」

強い…奴の体内には…全てのコアメダルが一枚ずつ入っている…プトティラなんかじゃ太刀打ちできない…

『グガアアアガアアア！』

「「「があぁ！」」」

火球を連発で打たれ僕らは吹き飛ばされ叩きつけられた

「ぐ…」
「明久大丈夫!?」
素早く明美が駆け寄りサゴーゾになり重力で僕を引き寄せた
「明美こそメダルに…」
「大丈夫。私は明久だから適応してるよ」
「そう…」
『ガアアア!』
「喜んでる場合か明久!攻撃がくるぞ!」
「「うう!」」
ドラゴングリードと言うべきか…パワーが強すぎる
『軟弱な戦士達め!消え去るがいい!』
「ぐわあ!」
!?さっきの攻撃はドラゴングリードじゃない…!?

『ガルアア！』

『キィアア！』

『グボオオ！』

…これは白虎に朱雀…玄武じゃないか…！？

『さあ！破滅の時だ！』

「あいつは！？」

顔が朱雀…体が青龍…足が白虎に玄武の形をした剣を持ったグリードそうだ！襲撃してきた時にいたあいつだ…名前はホクセイ！！

「まさか…こいつが真のラスボスだったのか！」

雄二が言っていることはよくゲームである…ボスを倒した後にまだ終わってないとかあって本当のボスとかがいるっていうあれだ

『全てのコアメダルを宿した俺に貴様らが勝てるか？』

ホクセイだけじゃない…あの化け物全員にも…

「だけど…勝つさ！」

バッと腕に装着しそれを突き出す

「明久！？」

「それって腕輪だよな？」

『アウェイクン！』

黒金の腕輪を天に掲げてキーワードを叫ぶ。すると周りは召喚フィールドとなる…

「よし…久しぶりに…サモン！！」

さらに変身ポーズを取りキーワードを口にするとオーズの召喚獣が現れた

『な、何だそれは！？』

「馬鹿が使える特権だよ！『ダブル！』」

白金の腕輪を掲げてキーワードを叫ぶ…すると召喚獣は二人に分裂する

吉井明久　Ｆクラス
世界史　３２１

吉井明久　Ｆクラス

世界史　３２１

召喚獣は僕と同じ大きさで同じ動きをする…そして今こそ！秘密兵器の出番だ！

「明美！さっき渡したコアメダルを」

「うん！」

明美は素早くメダルを入れ替えてスキャナーで読み込んだ

『スミレ！コスモス！ユリ！』

『スコユリー！ス・コ・ユ♪』

…比奈ちゃん。大事に使わせてもらうね！

明美の体にサークルが刻まれ桃色の姿に杖を持ち何故かネコミミにスカートのようなフリルが装備されいかにも可愛いオーズへと変身した

「にゃん♪」

「ブシャアア！」

いかん！不覚にも…鼻血が…

『ユニコーン！ペガサス！ケンタウルス！』

『サソリ！カニ！エビ！』

召喚獣達もコンボチェンジをして姿を変える。よし！僕も明美から渡されたこのメダル達で

『クワガタ！カマキリ！バッタ！』

「「「さあ…行くぞ！」」」

僕は分裂し、召喚獣達は攻撃を仕掛けにいく

『セルバースト！』
『メダルブレイク！』

「はあ…結局明久に持ってかれんのかよ」
「仕方ないさ雄二。だってあいつは主役だからな」

「「ハアアア！」」

雄二と巧は破壊砲を放ち玄武に攻撃する

『グボオオ！』

「「「「ダッシャアア！」」」」

分裂した僕らは飛び回る朱雀を攻撃する…この野郎！

「ハアアア！」
『こしゃくな！』

そして僕はホクセイにソードで攻撃する…ホクセイは剣で防ぎ火花が飛び散った

『貴様を倒しこの世界に終焉を打つ！』
「やらせるかあ！」『ムウアア！』

ホクセイは剣に力を集中させ攻撃をする…とっさに防御に出たがソードを破壊され吹き飛ばされた

「が…は！」

一撃でこれって強すぎるよ…く…

「明久！攻撃には防御だ！」

朱雀と戦っていたアンクがヒュンとメダルを投げる

「アンク…お前」

手の中には赤いコアメダルが三つ…ずっと渡さなかったコアメダル…

『ヌアア！』

「ぐわあ！」

後ろから切り裂かれ地面を転げ回る…その拍子にメダルを入れ替えた

「アンク！馬鹿の力見せてやろう！」

素早く立ち上がってスキャナーで読み込む

『タカ！クジャク！コンドル！』

『タ～ジャ～ドルゥ～！』

真っ赤な炎に包まれ赤い友情コンボ…タジャドルへと変身した

「ハアアア！」

『何…』

体中から炎が湧き上がる…これがアンクの力！

「いくぞ！」

ダッと走り炎をまとった蹴りをホクセイに喰らわせる

『ぐあ！』

次は…炎をまとった拳をホクセイにぶつける！

「りゃああ！」

『ぬあ！』

ホクセイがたじろき素早くそこへ蹴りを連発する

「は…！てりゃ！」

『ぐ！ぬう！があ！』

空中へ舞い上がり上空から炎をまとった蹴りをお見舞いした

『があ！』

ホクセイは吹き飛ばされ建物に衝突する…いくぞ！

『グガアアア！』
「っと！」

くっそういえば青龍がいたなあ…これじゃホクセイに近づけない

『アキ君！！』
「！」

この声は…まさか…

「なのはあ！？」

上空からなのは、フェイト、まどか、ほむらが降りたった…な、なんで

「アキ君！私達も戦うよ！」
「…え？」
「うん。明美に負けてられないしね」
「え？」
「明君！また一緒に戦う時が来たね♪」
「え？」
「明久…Wスピナー…いくわよ？」
「えええ！？」

ちょっ…みんな何考えて…しかも明美のこと知ってたの!?なずえ!?

『それは俺が教えたんだ』

「誰!?」

目の前にはいかにも不良の姿をした生徒がいた…みるからにして文月学園じゃない

それにハンバーガー持ってるし…

「俺の名前は如月弦太郎だ。よろしくなダチよ!」

「へ?ダチ?」

如月君はそう言ってから白虎の前に立った

「こいつは俺に任せな」

そう言って如月君は腰にベルトをつけた…!?ってまさか!

「怪人退治と行くぜ!」

ベルトにあるスイッチを四つ押してからレバーを持ちぐっと腕を握る

『スリー！』

「え！？何？」

『ツー！』

『ワン！』

カウントが終わった……何が起きるんだ？

「変身！」

レバーを倒し腕を掲げる如月君を白いオーラと煙が包み込んだ

「っだああ！」

「！？」

煙を払い如月君は仮面ライダーへと変身していた…

「仮面ライダーフォーゼ！怠慢張らせてもらうぜ！」

『グガアアア！』

「よっと！」

仮面ライダーフォーゼ……凄いや…青龍の攻撃を交わしてる

『ギイアア！』
「行くぜ！」
フォーゼは走り出し白虎に攻撃を仕掛ける…うん？何かスイッチを押したよね？
『スパイクＯＮ！』
「え！？武装された！？」
「おりゃあ！」
『ガアアア！』
スパイクってイガイガだよね？うわっ痛そうだなあ…
『グガアアア！』
「お前は大人しくしてろ！」
『チェーンアレイＯＮ』
再びスイッチを押してフォーゼにチェーンのついた鉄球が装備された
「うおら！」

チェーンアレイは青龍に激突し…更に首を縛った…

「強い…」

『ガルアア！』

「…へっこいつで決まりだぜ」

フォーゼはそう言うと黄色いスイッチを押した

『エ・レ・キＯＮ』

電撃がフォーゼの姿を変えさせフォーゼは金色となった…パワーアップかな

「へへっフォーゼエレキステイツだ」

スイッチを取り出し手に持っているロッドへ差し込んだ…

『リミットブレイク』

ロッドは剣のようになり…エレキステイツは低く構えた…

「喰らえ！ライダー１００億ボルトブレイク！」

『ギアアア！』

一閃…白虎はたちまち雷に包まれて爆発した…

「本当に凄いなあ…」

「わるい！俺帰らないといけないから！」

「え！？ちょっいきなり何言い出すんだ「じゃあな！」」

無視するかのようにフォーゼはスイッチを押す

『ロケットＯＮ』

「頑張れよダチ！！」

そう言ってフォーゼは上空へと姿を消した…なんだったろ一体

『グガアアア！』

「いっ！？」

やばっ！青龍が起き上がった…

「明君！いくよ！」

「え？あ！うん！」

完全に場の空気に流れて僕はメダルを入れ替えた

『クワガタ！カマキリ！バッタ！』

『ガ「ガタキリバだあ！」』

歌は省略された…ってフェイト！？

「はう…」

「え？」

フェイトはじっと僕を見上げてくる…な、撫でて欲しいのかな？

「はにゅう／／」

撫でてあげるとフェイトは可愛い声を出しながら真っ赤になっていた…

やっぱり可愛いなあフェイトは…いつも美しいとか思ってたけどやっぱりこういうことで…「ぬあああああああ！」

痛いいい！？え？何！？何この痛いいい

世界史　０と０

「しまったあああ！」

『グガアアア！』

「ぐわああ！」

僕に狙いを定めたのか青龍が空から火球を落としてきた
ぐ…今は…痛みに苦しんでる場合じゃない！

「よーし…スペシャルを」

「「「「見せてやる！！」」」」

ガタキリバの能力を使い複数に分裂した…ちなみにフェイトが倒れそうになったのは気にしないでおこう

「「「「さあ…エンディングだあ！！」」」」

明美も隣立ち…僕はメダルを読み込む…それに合わせて他の僕もメダルを読み込んだ

『タカ！トラ！バッタ！』
『タットッバ！タトバ！タ・ト・バ！』

「はああ！」

『クワガタ！カマキリ！バッタ！』
『ガータガタガタキリバ！ガタキリバ！』

「ハア！」

『ライオン！トラ！チーター！』
『ラッタッ！ラッタッ！ラトラーター！』

「ふっ！」

『サイ！ゴリラ！ゾウ！』
『サゴーゾ…サゴーゾォ！』

「ぬん！」

『シャチ！ウナギ！タコ！』

『シャシャシャウター！シャシャシャウター！』

「はああ～」

『プテラ！トリケラ！ティラノ！』

『プ・ト！ティラーノザウルース！』

「ウオオ！」

『コブラ！カメ！ワニ！』

『ブラカァ～ワニィ！』

「へっ！」

『サソリ！カニ！エビ！』

『サッカッビー！サカビ！サ・カビ！』

「…ふっ」

『ユニコーン！ペガサス！ケンタウルス！』

『ユ～ガロォ～ス！』

「は！」

『タカ！クジャク！コンドル！』

『タ～ジャ～ドルゥ！』

「ハアアア！」

ＯＯＯ――それは無限の力…

一気に決める！！

『『スキャニングチャージ！』』

「「ウオリャアア！」」

サカビとシャウタがドリルキックで穴を開け…

「ウオオ！」
「ハアアア！」

サゴーゾが重力で落とし…ブラカワニが羽を噛み砕き…あっ青龍と言っても姿はドラゴンだから…あれ？それじゃ青龍じゃないような

「ハアアア！」

ラトラーターで目を潰してもう片方を切り裂く

『グガア！』

「明美！行くよ！」
「うん！」

『『トリプルスキャニングチャージ！』』

「「オーズ！ダブルバッシュ！」」

タトバでメダジャリバーから技を放ち明美も杖からビームを発射した

『ガアアア！』

「次は…僕だね。行こうフェイト？」

「うん！」

バリバリと電撃をまとい頭に雷撃を集中させる…フェイトはバルディッシュに雷撃を溜める

いくぞ！！

「光速を行く雷撃となり凪ぎ払え！ライトニングブレイカー」

「セイヤアア！」

「「オーズ！フェイトサンダークラッシュ！」」

超巨大な雷撃に変わりその攻撃は青龍の背中へと直撃した

『ガアア！』

「まだまだ！まどか！」

「ほむら！」

ユーガロスとタジャドルは二人と一緒に上空に舞い上がった

「いくよ明君！」

「了解！」

お互いに矢を後ろへと引く…喰らえ！

「「シャインレイン！」」

発射した矢が無数の雨のように青龍へと降り注ぐ…

「明久！」

「うん！」

タジャスピナーとほむらのスピナーにエネルギーが溜まり同時に発射した

「「マグナミスト！」」

『グギャア！』

炎の鳥となり青龍に衝突し爆発する…同時に奴の顔に赤い霧を作った

「よし…ラストは僕らだ！なのは！」

「うん！」

僕はメダガブリューをなのはレイジングハートを構えて青龍に狙いを定めた

「「全力全開！！！」」

「「セイントブレイカー！」」

僕となのはが放った攻撃が混じり合い巨大な破壊砲になって青龍だけでなく朱雀まで貫いた

『ガアアア！』

『キィアア！』

ニ匹の怪物は爆発して大量のセルメダルが降り注いだ…

「まだだ！」

『ぐう…！！』

ホクセイの前に降り立ちスピナーにメダルを入れた…そしてスキャナーで読み込む

最後はタジャドルで決める！

「「「いけええ僕！！」」」

『クワガタ！ライオン！サイ！シャチ！プテラ！コブラ！ユニコーン！ギカスキャン！』

『スキャニングチャージ！』

「ハアアアアア！」

体中のエネルギーをスピナーに集中させる…これで

これで最後だああ！

『セイヤアアアアアアアアアアア！』

スピナーから金色の攻撃が放たれホクセイに穴を開けた

『ぐ…うわあああ！』

眩い光に包まれホクセイは爆発した…同時に…

「ようやく終わったな火野…ってうおお」

「伊達さん！アンク！うわああ！」

「「うわああ！」」

「「「きゃあああ！」」」

衝撃波が起こり…僕らを包み込んだ…そして静かに止むと雄二が立ち上がった

「……凄い衝撃だったな…」

僕もゆっくりと立ち上がって頷いた…うん。みんな大丈夫そうだ…何はともあれようやく終わったんだね…

「……」

あれ？視界がぼやけてるな…それに体も重い…何でだろう

「う……」

そして何かが切れたように意識が動転する…あれ？みんなが見えないや

『ドタンッ！』

そのままゆっくり倒れる。視界は何もない…真っ暗だなのに…

（なんで周りは騒がしいんだろ）

ゆっくりと意識が遠のいていく…まるでもう起きないように……

そして僕から紫のメダルが放出されたのを合図に戦いは終わりを告げたのだった

――そして五年後……

僕らはあの戦いから多くのことを学び…多くのことを知った

火野先生達は元の世界に帰って行った
。先生達の戦いはこれからなんだ
まあ…もう終わってるけどね

僕に力を与えてくれたメダル達は…今も僕の元にある…だって…大切な仲間達だからね

アンクは…きっと今頃幸せな家庭をきづいてるんだろうな‥
相手は優子さんかな?ティアナ?それとも杏子さんだったりして

雄二は霧島財閥の力により…三人と結婚…霧島さんとりあえず良かったね…雄二は…頑張れよ
ムッツリーニや秀吉も卒業してからすぐに職についた

ムッツリーニはプロのカメラマン…まあグラビア系かな
秀吉は勿論役者だ…今日なんかでもテレビに出ている
二人も愛しい人と結ばれている…

瑞希と美波は…瑞希は看護士として美波は中華料理店のオーナーとして働いている…美波は警察官になった後藤君と結婚して、瑞希は彼氏ができたらしい
はは…二人共幸せにね

巧は…まあ千世によって雄二同様…あれだよ。今頃喫茶店店長で頑張ってるだろうな…

「みんな…それぞれの道を歩んでる…僕も頑張らなきゃ」

そっと卒業写真に触れながら顔をほころばせる…

『明久…何だか幸せそうだな…』
『雄二こそ…顔が笑ってるよ』
『ハッ。馬鹿言うな』

雄二は政治家として働いている…本人も意外と楽しそうでなによりだ

「で、何の用？」
「ああ…ババアに用があってな」
「へえ…馬鹿の雄二が珍し…うわ！」
「良くかわしたな明久…っうお！」
「雄二こそ良く僕の蹴りを交わしたね」

「「……！！」」

僕らはお互いにメンチの切り合いをする…全く！五年間何も変わってないなこいつ！

『貴様ら！！何をやってる！』

『『鉄人！？』』

頭上には更に肉体ががっちりして…年を取ったように見えない覇気を出す鉄人…がいましたとさ

――鉄人の拳骨を喰らってから雄二と別れて廊下を歩く…そして静かにドアを開けてる

…一瞬２年Ｆクラスと書かれたプレートが目に入った…そしていつものように笑顔で豪華な教室の中へと入る

「…おはようみんな！」

「「おはようございます吉井先生」」

……変わらない…ＦＦＦ団も、神童も馬鹿も美少女も性別秀吉もいる

…まるで昔のFクラス…僕らを見ているようだ…

「今日はもうすぐ始まる清涼祭についてなんだけど…その前にみんなAクラスに勝って満足は駄目だ！試験召喚戦争でGクラスに勝つんだ！勝ってみんなが落ちこぼれじゃないのを見せてやれ！！俺達のクラスは最強だ！！」

「「ウオオオオ！」」

試験召喚戦争は今でも続いている…僕が持ち出してみると案の定元神童の河上君は賛成してきて…Fクラスの戦いが再び始まったんだ。僕らが卒業して以来の革命だ

「Fクラスはやっぱりこうじゃないとね…」

ありがとう…雄二…僕に学力だけじゃないって教えてくれて

☆

相変わらず豪華な家だなあ…まあこうじゃなきゃ…住めないし

ゆっくりベルを押す…するとモニターに女の子の顔が映った

『あ！パパ！』
「はは。ただいま時雨…」
『ちょっと待ってて！ママー！パパが帰ってきたよ～』

モニター越しから可愛い我が娘の声…いつも癒やされるなあ

「あ…開いた開いた」

ドアが静かに開く…いつみても凄いなあ…

「ただいま…」
『パパー！』
『お帰りなさいお父さん！』
「ぐふ…ただいま…ヴィヴィオ…時雨」

鳩尾とはきついね…痛たた…

「こらっ！お父さんが困ってるでしょ二人共」

綺麗な茶髪サイドポニーテールの妻が二人を掴んだ…

「助かったよなのは…」
「お疲れ様あなた」

ふうと息をついてから玄関を上がる…

「夕ご飯にする？お風呂にする？……そるとも…わ、私？」

「……じゃ、じゃあなのはでって…しまった！僕は何を言ってるんだ！！」

「ふぇえ！？／／」

そう言いながらもゆっくりと彼女の唇に己の唇を触れる…全く…誰に吹き込まれたのやら

『相変わらず甘いねパパとママ』

『あっ！時雨は見たら駄目！』

すっと唇を離す…妻は真っ赤になりながらも微笑んでくれた…おっと！こうしちゃられない

「なのは…お客さん待たせちゃ悪いし…僕も手伝うね？」

「うん。いつもありがとうあなた」

「いいってことさ。さあヴィヴィオに時雨！ママやパパと一緒に一汗かこうじゃないか」

「「うん！！」」

にっこりと微笑んでから二階へ上がる…僕の家は…ちょっと豪華な喫茶店…なのは人付き合いが良く毎日お客さんが来るから忙しくなる。僕にとっては楽しみでもあるんだけどね…夕食はカレーにするかな？その辺りはなのはに聞いてみなきゃ

妻と自分の部屋に入り教師が着るようなスーツからここの喫茶店の作業服に着替える…そんな時…置物入れに入ってあるものへ視線が移った

「ありがとう…」

静かに微笑みながらコアメダル達を見る…君達のおかげで今の自分は存在するんだ

「でも…また何かあった時は…力を貸してね？」

それに応えるかのように夕焼けの光がメダルを照らす…

「……」

ゆっくりと口の端を上げてから喫茶の方へ向かった

今日も夕焼けは真っ赤で…そして綺麗であった

バカとメダルライダーと召喚獣―完―

沢山の応援ありがとうございました！！

最終話：バカとメダルライダーと召喚獣―愛と奇跡と未来へ―なのはエンド―

皆様本当にありがとうございました！無事１２月までに終えることができました。
また、アイデアをくださったのに出すことができなかった方については大変申し訳ありません

この小説を読んでいただき仮面ライダーオーズに興味を持ってくださった方がいましたらとても嬉しい限りです

最後にしつこいようですが本当にありがとうございました！

カウントザメダル

タカ３
クジャク３
コンドル３
（アンクはオルソナの力で人間になりました。）

クワガタ３
カマキリ３
バッタ３
ライオン３
トラ３
チーター３

サイ3
ゴリラ3
ゾウ3
シャチ3
ウナギ3
タコ3
プテラ3
トリケラ3
ティラノ3
サソリ3
カニ3
エビ3
ユニコーン3
ペガサス3
ケンタウロス3

「ウオオオオ！」
『く…うう！』

地面を飛び上がりオルソナにメダガブリューで切り裂く…オルソナの体から火花が散りオルソナは僕をプテラの翼ではたき落とした

「ぐ…」
「ハアア！」

アンクが隣に立ち巨大な火球を放った…ゴウッと音を立てオルソナに直撃する

『あああ！』

うわあ…痛そうだなあ…っと集中集中！狙うは僕のメダルだ…

「オラアア！」
「てりゃあ！」

バース・デイはキャタピラレッグでオルソナに回し蹴りを決め、新しい姿のディアスは見えない速さでオルソナを切り裂いた

『く…はあ…』

オルソナは後ずさりながら…じっと僕を睨む

『何故です。終わりは近いと言うのに』

「違うよオルソナ。僕らは終わりを望んでなんかいない」

『嘘です…私は…あなたの為に』

オルソナの言葉にバースもディアスも攻撃を辞めて僕を見る

「明久…まさかお前…またか」

「……はあ」

「何!?その呆れるような目は!?確かに僕が悪いけど…」

はあ…簡単に言えばオルソナの正体は僕…なんというか…裏の僕と言うか…まあ女だけど

『あなたはあの二年…全てを失い…そして新たな人生を歩みだした』

「うん…だけど…君の寂しい心が強くてそれが原因でグリード達が復活した…」

『はい…そして私はグリードとなり…全てを終わらそうと思ったのです』

「僕に拒絶されたと思ったから?」

『…あなたは私の心を理解してくれなかった…だからわかって欲しかったんです』

ごめんね…僕が馬鹿だったから君まで…でもね…そんなの間違ってる

「……だから僕が君を返してあげるんだ…こんな争いはもうやめよう」

『…わかってます。全てを終わらせあなたを倒し』

「違うよ。君を倒して…僕は現代で生きる」

まどかとも約束したから…もう過去は振り向かない…未来を見て生きていくんだ

「だから…君を倒して…全てをゼロにする！」

メダガブリューを構え低い姿勢をとる

「やれやれ…王様は大変だな…」

「雄二…」

「ああ…明久らしいな」

「巧…」

「俺も現代を生きてみたくなったなぁ…明久」「アンク…」

そうだ…僕は…未来を見て生きる！どんなに恨まれてもどんなに悲しい過去でも

『そうですか…なら…あなたとは一生…』
「うん…君は僕だから…自分を愛さないとね。だから君とは一生分かち合っていかなくちゃ」
『……!?あなたはどこまでも…鈍感なんですか!!』
「へ？」

オルソナは溜め息をついてからメダガブリューを構えた

「…えっと…」
「行くぜ！」
「あっ！ちょっと！」

バース・デイはこっちに向けて突進してくる…

「う〝ぇえええ!?」

「オラアア！」
「ハアア！」
「フン！」

って！まとめて攻撃きたんだけどって何でえええ!?

「ぐわああ！」

トリプル攻撃を喰らいオルソナの所へ吹き飛ばされた

というかあの三人…本気だったよね？

（あいつとちゃんと話せ！）

「う！？」

三人の目はいかにもそう言いたいようだった…話して解決って…

『……』

「えっと…」

とりあえずオルソナの方を向き頭をかきながらじっと見る

「あのさ……」

『…ごめんなさい』

「へ？」

『私は間違っていました。明久が…冷たい人間じゃないと分かっていたのに…』

「……あのー」

『明久！』

「はいい！？」

『……こんな私をあなたは受け入れてくれますか？』

「……え？だってその為に来たんだよ？」

『……！？』

オルソナは何を言ってるんだ。確かに君がしたことは悪い…でも…
言ったじゃないか僕は過去を捨て未来を見つめるって

「オルソナ…いや明美…」

すっと彼女の手を優しく包み込む…

「一緒に生きよう?」
『……はい』

明美はすっと僕の肩にもたれかかり優しく包み込む

戦わないで解決することなんて何もない…でも…それでも僕は彼女
を殺したくなかった…だって彼女だって僕にとって大切だから

「お帰り明美…」
『うん…』

「火野…あのオーズ戦わないでボスを倒したな?…オラア！」
「…何で俺を見るんですか…ハアア！」
「あれがこの世界の王の器か」

「…巧。終わったのか?」
「ど、どうやらそうらしい…」

バカとメダルライダーと召喚獣―完―

ってまてええ!!まだ終わるわけないだろ!?

『…グガアアア！』

「何!?」
「はあ!?」

皆さんは…最後は戦いを見たいはず…オルソナから出た憎しみと怒

り、悲しみは…巨大なドラゴンとなった…

「…みんな…これが本当の最後だ…！！」

メダガブリューを構えて静かに見据える

「はあ…お前はどこまで馬鹿なんだ」
「でも…凄いぜ明久」

二人も武器を構える、アンクはふんと笑い翼を展開した

「先生方！ヤミー引き続き頼みますね！」

「ちょっ明久！俺達の戦いはこれでラスト？」
「伊達さん前前！」
「うお！」

『グガアアア！』

「「「うわああ！」」」

ドラゴンが吐いた火球が直撃し僕らは一斉に吹き飛ばされた…

痛たた…全く酷いなあ…

『ガアアア！』

「「「グワアア！」」」

休む暇なく強烈なタックルが当たり僕らは建物に衝突した

「がは…」
「くそ…」
「ぐ…」

強い…奴の体内には…全てのコアメダルが一枚ずつ入っている…プトティラなんかじゃ太刀打ちできない…

『グガアアアガアアア！』

「「「があぁ！」」」

火球を連発で打たれ僕らは吹き飛ばされ叩きつけられた

「ぐ…」
「明久大丈夫!?」
素早く明美が駆け寄りサゴーゾになり重力で僕を引き寄せた
「明美こそメダルに…」
「大丈夫。私は明久だから適応してるよ」
「そう…」
『ガアアア!』
「喜んでる場合か明久!攻撃がくるぞ!」
「「うう!」」
ドラゴングリードと言うべきか…パワーが強すぎる
『軟弱な戦士達め!消え去るがいい!』
「ぐわあ!」
!?さっきの攻撃はドラゴングリードじゃない…!?

『ガルアア！』

『キィアア！』

『グボオオ！』

…これは白虎に朱雀…玄武じゃないか…！？

『さあ！破滅の時だ！』

「あいつは！？」

顔が朱雀…体が青龍…足が白虎に玄武の形をした剣を持ったグリードそうだ！襲撃してきた時にいたあいつだ…名前はホクセイ！！

「まさか…こいつが真のラスボスだったのか！」

雄二が言っていることはよくゲームである…ボスを倒した後にまだ終わってないとかあって本当のボスとかがいるっていうあれだ

『全てのコアメダルを宿した俺に貴様らが勝てるか？』

ホクセイだけじゃない…あの化け物全員にも…

「だけど…勝つさ！」

バッと腕に装着しそれを突き出す

「明久！？」

「それって腕輪だよな？」

『アウェイクン！』

黒金の腕輪を天に掲げてキーワードを叫ぶ。すると周りは召喚フィールドとなる…

「よし…久しぶりに…サモン！！」

さらに変身ポーズを取りキーワードを口にするとオーズの召喚獣が現れた

『な、何だそれは！？』

「馬鹿が使える特権だよ！『ダブル！』」

白金の腕輪を掲げてキーワードを叫ぶ…すると召喚獣は二人に分裂する

吉井明久　Ｆクラス
世界史　３２１

吉井明久　Ｆクラス

世界史　３２１

召喚獣は僕と同じ大きさで同じ動きをする…そして今こそ！秘密兵器の出番だ！

「明美！さっき渡したコアメダルを」

「うん！」

明美は素早くメダルを入れ替えてスキャナーで読み込んだ

『スミレ！コスモス！ユリ！』

『スコユリー！ス・コ・ユ♪』

…比奈ちゃん。大事に使わせてもらうね！

明美の体にサークルが刻まれ桃色の姿に杖を持ち何故かネコミミにスカートのようなフリルが装備されいかにも可愛いオーズへと変身した

「にゃん♪」

「ブシャアア！」

いかん！不覚にも…鼻血が…

『ユニコーン！ペガサス！ケンタウルス！』

『サソリ！カニ！エビ！』

召喚獣達もコンボチェンジをして姿を変える。よし！僕も明美から渡されたこのメダル達で

『クワガタ！カマキリ！バッタ！』

「「「さあ…行くぞ！」」」

僕は分裂し、召喚獣達は攻撃を仕掛けにいく

『セルバースト！』
『メダルブレイク！』

「はあ…結局明久に持ってかれんのかよ」
「仕方ないさ雄二。だってあいつは主役だからな」

「「ハアアア！」」

雄二と巧は破壊砲を放ち玄武に攻撃する

『グボオオ！』

「「「「ダッシャアア！」」」」

分裂した僕らは飛び回る朱雀を攻撃する…この野郎！

「ハアアア！」
『こしゃくな！』

そして僕はホクセイにソードで攻撃する…ホクセイは剣で防ぎ火花が飛び散った

『貴様を倒しこの世界に終焉を打つ！』
「やらせるかあ！」『ムウアア！』

ホクセイは剣に力を集中させ攻撃をする…とっさに防御に出たがソードを破壊され吹き飛ばされた

「が…は！」

一撃でこれって強すぎるよ…く…

「明久！攻撃には防御だ！」

朱雀と戦っていたアンクがヒュンとメダルを投げる

「アンク…お前」

手の中には赤いコアメダルが三つ…ずっと渡さなかったコアメダル…

『ヌアア！』

「ぐわあ！」

後ろから切り裂かれ地面を転げ回る…その拍子にメダルを入れ替えた

「アンク！馬鹿の力見せてやろう！」

素早く立ち上がってスキャナーで読み込む

『タカ！クジャク！コンドル！』

『タ～ジャ～ドルゥ～！』

真っ赤な炎に包まれ赤い友情コンボ…タジャドルへと変身した

「ハアアア！」

『何…』

体中から炎が湧き上がる…これがアンクの力！

「いくぞ！」

ダッと走り炎をまとった蹴りをホクセイに喰らわせる

『ぐあ！』

次は…炎をまとった拳をホクセイにぶつける！

「りゃああ！」

『ぬあ！』

ホクセイがたじろき素早くそこへ蹴りを連発する

「は…！てりゃ！」

『ぐ！ぬう！があ！』

空中へ舞い上がり上空から炎をまとった蹴りをお見舞いした

『があ！』

ホクセイは吹き飛ばされ建物に衝突する…いくぞ！

『グガアアア！』
「っと！」

くっそういえば青龍がいたなあ…これじゃホクセイに近づけない

『アキ君！！』
「！」

この声は…まさか…

「なのはあ！？」

上空からなのは、フェイト、まどか、ほむらが降りたった…な、なんで

「アキ君！私達も戦うよ！」
「…え？」
「うん。明美に負けてられないしね」
「え？」
「明君！また一緒に戦う時が来たね♪」
「え？」
「明久…Wスピナー…いくわよ？」
「えええ！？」

ちょっ…みんな何考えて…しかも明美のこと知ってたの！？なずえ！？

『それは俺が教えたんだ』

「誰！？」

目の前にはいかにも不良の姿をした生徒がいた…みるからにして文月学園じゃない

それにハンバーガー持ってるし…

「俺の名前は如月弦太郎だ。よろしくなダチよ！」

「へ？ダチ？」

如月君はそう言ってから白虎の前に立った

「こいつは俺に任せな」

そう言って如月君は腰にベルトをつけた…！？ってまさか！

「怪人退治と行くぜ！」

ベルトにあるスイッチを四つ押してからレバーを持ちぐっと腕を握る

『スリー！』

「え！？何？」

『ツー！』

『ワン！』

カウントが終わった……何が起きるんだ？

「変身！」

レバーを倒し腕を掲げる如月君を白いオーラと煙が包み込んだ

「っだああ！」

「！？」

煙を払い如月君は仮面ライダーへと変身していた…

「仮面ライダーフォーゼ！怠慢張らせてもらうぜ！」

『グガアアア！』

「よっと！」

仮面ライダーフォーゼ……凄いや…青龍の攻撃を交わしてる

『ギイアア！』
「行くぜ！」
フォーゼは走り出し白虎に攻撃を仕掛ける…うん？何かスイッチを押したよね？
『スパイクＯＮ！』
「え！？武装された！？」
「おりゃあ！」
『ガアアア！』
スパイクってイガイガだよね？うわっ痛そうだなあ…
『グガアアア！』
「お前は大人しくしてろ！」
『チェーンアレイＯＮ』
再びスイッチを押してフォーゼにチェーンのついた鉄球が装備された
「うおら！」

チェーンアレイは青龍に激突し…更に首を縛った…

「強い…」

『ガルアア！』

「…へっこいつで決まりだぜ」

フォーゼはそう言うと黄色いスイッチを押した

『エ・レ・キＯＮ』

電撃がフォーゼの姿を変えさせフォーゼは金色となった…パワーアップかな

「へへっフォーゼエレキステイツだ」

スイッチを取り出し手に持っているロッドへ差し込んだ…

『リミットブレイク』

ロッドは剣のようになり…エレキステイツは低く構えた…

「喰らえ！ライダー１００億ボルトブレイク！」

『ギアアア！』

一閃…白虎はたちまち雷に包まれて爆発した…

「本当に凄いなあ…」

「わるい！俺帰らないといけないから！」

「え！？ちょっいきなり何言い出すんだ「じゃあな！」」

無視するかのようにフォーゼはスイッチを押す

『ロケットＯＮ』

「頑張れよダチ！！」

そう言ってフォーゼは上空へと姿を消した…なんだったろ一体

『グガアアア！』

「いっ！？」

やばっ！青龍が起き上がった…

「明君！いくよ！」

「え？あ！うん！」

完全に場の空気に流れて僕はメダルを入れ替えた

『クワガタ！カマキリ！バッタ！』

『ガ「ガタキリバだあ！」』

歌は省略された…ってフェイト！？

「はう…」

「え？」

フェイトはじっと僕を見上げてくる…な、撫でて欲しいのかな？

「はにゅう／／」

撫でてあげるとフェイトは可愛い声を出しながら真っ赤になっていた…

やっぱり可愛いなあフェイトは…いつも美しいとか思ってたけどやっぱりこういうことで…「ぬあああああ！」

痛いいい！？え？何！？何この痛いいい

世界史　０と０

「しまったあああ！」

『グガアアア！』

「ぐわああ！」

僕に狙いを定めたのか青龍が空から火球を落としてきた
ぐ…今は…痛みに苦しんでる場合じゃない！

「よーし…スペシャルを」

「「「「見せてやる！！」」」」

ガタキリバの能力を使い複数に分裂した…ちなみにフェイトが倒れそうになったのは気にしないでおこう

「「「「さあ…エンディングだあ！！」」」」

明美も隣立ち…僕はメダルを読み込む…それに合わせて他の僕もメダルを読み込んだ

『タカ！トラ！バッタ！』
『タットッバ！タトバ！タ・ト・バ！』

「はああ！」

『クワガタ！カマキリ！バッタ！』

『ガータガタガタキリバ！ガタキリバ！』

「ハア！」

『ライオン！トラ！チーター！』

『ラッタッ！ラッタッ！ラトラーター！』

「ふっ！」

『サイ！ゴリラ！ゾウ！』

『サゴーゾ…サゴーゾォ！』

「ぬん！」

『シャチ！ウナギ！タコ！』

『シャシャシャウター！シャシャシャシャウター！』

「はああ～」

『プテラ！トリケラ！ティラノ！』

『プ・ト！ティラーノザウルース！』

「ウオオ！」

『コブラ！カメ！ワニ！』

『ブラカァ～ワニィ！』

「へっ！」

『サソリ！カニ！エビ！』

『サッカッビー！サカビ！サ・カビ！』

「…ふっ」

『ユニコーン！ペガサス！ケンタウルス！』

『ユ～ガロォ～ス！』

「は！」

『タカ！クジャク！コンドル！』

『タ～ジャ～ドルゥ！』

「ハアアア！」

ＯＯＯ――それは無限の力…

一気に決める！！

『『スキャニングチャージ！』』

「「ウオリャアア！」」

サカビとシャウタがドリルキックで穴を開け…

「ウオオ！」
「ハアアア！」

サゴーゾが重力で落とし…ブラカワニが羽を噛み砕き…あっ青龍と言っても姿はドラゴンだから…あれ？それじゃ青龍じゃないような

「ハアアア！」

ラトラーターで目を潰してもう片方を切り裂く

『グガア！』

「明美！行くよ！」
「うん！」

『『トリプルスキャニングチャージ！』』

「「オーズ！ダブルバッシュ！」」

タトバでメダジャリバーから技を放ち明美も杖からビームを発射した

『ガアアア！』

「次は…僕だね。行こうフェイト？」

「うん！」

バリバリと電撃をまとい頭に雷撃を集中させる…フェイトはバルディッシュに雷撃を溜める

いくぞ！！

「光速を行く雷撃となり凪ぎ払え！ライトニングブレイカー」

「セイヤアア！」

「「オーズ！フェイトサンダークラッシュ！」」

超巨大な雷撃に変わりその攻撃は青龍の背中へと直撃した

『ガアア！』

「まだまだ！まどか！」

「ほむら！」

ユーガロスとタジャドルは二人と一緒に上空に舞い上がった

「いくよ明君！」

「了解！」

お互いに矢を後ろへと引く…喰らえ！

「「シャインレイン！」」

発射した矢が無数の雨のように青龍へと降り注ぐ…

「明久！」

「うん！」

タジャスピナーとほむらのスピナーにエネルギーが溜まり同時に発射した

「「マグナミスト！」」

『グギャア！』

炎の鳥となり青龍に衝突し爆発する…同時に奴の顔に赤い霧を作った

「よし…ラストは僕らだ！なのは！」

「うん！」

僕はメダガブリューをなのはレイジングハートを構えて青龍に狙いを定めた

「「全力全開！！！」」

「「セイントブレイカー！」」

僕となのはが放った攻撃が混じり合い巨大な破壊砲になって青龍だけでなく朱雀まで貫いた

『ガアアア！』

『キィアア！』

ニ匹の怪物は爆発して大量のセルメダルが降り注いだ…

「まだだ！」

『ぐう…！！』

ホクセイの前に降り立ちスピナーにメダルを入れた…そしてスキャナーで読み込む

最後はタジャドルで決める！

「「「いけええ僕！！」」」

『クワガタ！ライオン！サイ！シャチ！プテラ！コブラ！ユニコーン！ギカスキャン！』

『スキャニングチャージ！』

「ハアアアアア！」

体中のエネルギーをスピナーに集中させる…これで

これで最後だああ！

『セイヤアアアアアアアアアアア！』

スピナーから金色の攻撃が放たれホクセイに穴を開けた

『ぐ…うわあああ！』

眩い光に包まれホクセイは爆発した…同時に…

「ようやく終わったな火野…ってうおお」

「伊達さん！アンク！うわああ！」

「「うわああ！」」

「「「きゃあああ！」」」

衝撃波が起こり…僕らを包み込んだ…そして静かに止むと雄二が立ち上がった

「……凄い衝撃だったな…」

僕もゆっくりと立ち上がって頷いた…うん。みんな大丈夫そうだ…何はともあれようやく終わったんだね…

「……」

あれ？視界がぼやけてるな…それに体も重い…何でだろう

「う……」

そして何かが切れたように意識が動転する…あれ？みんなが見えないや

『ドタンッ！』

そのままゆっくり倒れる。視界は何もない…真っ暗だなのに…

（なんで周りは騒がしいんだろ）

ゆっくりと意識が遠のいていく…まるでもう起きないように……

そして僕から紫のメダルが放出されたのを合図に戦いは終わりを告げたのだった

――そして五年後……

僕らはあの戦いから多くのことを学び…多くのことを知った

火野先生達は元の世界に帰って行った
。先生達の戦いはこれからなんだ
まあ…もう終わってるけどね

僕に力を与えてくれたメダル達は…今も僕の元にある…だって…大切な仲間達だからね

アンクは…きっと今頃幸せな家庭をきづいてるんだろうな‥
相手は優子さんかな?ティアナ?それとも杏子さんだったりして

雄二は霧島財閥の力により…三人と結婚…霧島さんとりあえず良かったね…雄二は…頑張れよ
ムッツリーニや秀吉も卒業してからすぐに職についた

ムッツリーニはプロのカメラマン…まあグラビア系かな
秀吉は勿論役者だ…今日なんかでもテレビに出ている
二人も愛しい人と結ばれている…

瑞希と美波は…瑞希は看護士として美波は中華料理店のオーナーとして働いている…美波は警察官になった後藤君と結婚して、瑞希は彼氏ができたらしい
はは…二人共幸せにね

巧は…まあ千世によって雄二同様…あれだよ。今頃喫茶店店長で頑張ってるだろうな…

「みんな…それぞれの道を歩んでる…僕も頑張らなきゃ」

そっと卒業写真に触れながら顔をほころばせる…

『明久…何だか幸せそうだな…』
『雄二こそ…顔が笑ってるよ』
『ハッ。馬鹿言うな』

雄二は政治家として働いている…本人も意外と楽しそうでなによりだ

「で、何の用？」
「ああ…ババアに用があってな」
「へえ…馬鹿の雄二が珍し…うわ！」
「良くかわしたな明久…っうお！」
「雄二こそ良く僕の蹴りを交わしたね」

「「……！！」」

僕らはお互いにメンチの切り合いをする…全く！五年間何も変わってないなこいつ！

『貴様ら！！何をやってる！』

『『鉄人！？』』

頭上には更に肉体ががっちりして…年を取ったように見えない覇気を出す鉄人…がいましたとさ

――鉄人の拳骨を喰らってから雄二と別れて廊下を歩く…そして静かにドアを開けてる

…一瞬２年Ｆクラスと書かれたプレートが目に入った…そしていつものように笑顔で豪華な教室の中へと入る

「…おはようみんな！」

「「おはようございます吉井先生」」

……変わらない…ＦＦＦ団も、神童も馬鹿も美少女も性別秀吉もいる

…まるで昔のFクラス…僕らを見ているようだ…

「今日はもうすぐ始まる清涼祭についてなんだけど…その前にみんなAクラスに勝って満足は駄目だ！試験召喚戦争でGクラスに勝つんだ！勝ってみんなが落ちこぼれじゃないのを見せてやれ！！俺達のクラスは最強だ！！」

「「ウオオオオ！」」

試験召喚戦争は今でも続いている…僕が持ち出してみると案の定元神童の河上君は賛成してきて…Fクラスの戦いが再び始まったんだ。僕らが卒業して以来の革命だ

「Fクラスはやっぱりこうじゃないとね…」

ありがとう…雄二…僕に学力だけじゃないって教えてくれて

☆

相変わらず綺麗な家だなあ…流石と思ってしまうよ

ゆっくりベルを押す…するとモニターに女の子の顔が映った

『あ！パパ！』
「はは。ただいまレンナ…」
『ちょっと待ってて！ママー！パパが帰ってきたよ～』

モニター越しから可愛い我が娘の声…いつも癒やされるなあ

「あ…開いた開いた」

ドアが静かに開く…いつみても凄いなあ…

「ただいま…」
『パパー！』
『お帰りパパー！』
「ぐふ…ただいま…レンナ…ヤマト」

鳩尾とはきついね…痛たた…

「こらっ！お父さんが困ってるでしょ二人共」

我が娘と子をガシリと捕まえたのは最愛の妻であるフェイトだ

うん…いつも見慣れてるけど流石だね

「お帰りあなた♪」
「うん。只今フェイト」
この微笑み…昔から変わらないこの微笑みが大好きだ…フェイトは金髪を後ろでまとめている
「パパー！お仕事おつかれ様！」
「ありがとうレンナ」
ヤマトも抱き寄せて顔にうずめてあげると二人は嬉しそうに抱きしめる力を強めた
――教師になった僕だけど…今もあの力は使える…平和が一番なのはわかってるけど…ちょっとだけ敵をやっつけて自慢したいなあ…
パパは仮面ライダーだってね…よくあるパパは昔ヒーローだったんだよとかのあれだ
「…荷物持つね？疲れてるでしょう？」
「悪いね…お言葉に甘えさせてもらうよ」
フェイトに鞄を渡して靴を脱ぐ…こんな日常今まで想像もしなかった…こうやって愛しい人と結ばれ子供が居る…これ以上の幸せはないくらいだ
「今日は朝まで寝かさないからね？」
「…その話は…今じゃなくても」
フェイトも今まで溜めてきたものが爆発したのかな？でも赤くなり

ながら微笑むフェイトも美しいなあ…

「……！！ほ、ほらみんな。ご飯出来てるから…」

「「ご飯だ―！！」」

「ちょっと！…くす」

「…はは。相変わらず元気いっぱいだね」

フェイトは赤い瞳でじっと見つめてくる…思わず目を逸らしてしまうほどに…

「まるであなたみたい。きっとヤマトなんてあなたみたいに優しくて鈍感な子になるかも…」

「おいおい。僕はそんなに鈍感じゃあ…」

「くす…それはどうかしら？」

フェイトはからかいながらリビングへ向かって行く…全く可愛いいたずらだよ

「……いつか…あの子達も仮面ライダーになるのかな…それとも試験召喚戦争を…起こすだろうか」

妻の後ろ姿を眺めながら軽く微笑む…

その時は…二人で見守っていこう…バカだけどみんなの為に頑張れるヒーローになって欲しい

―そう…僕のようなバカとメダルライダーと召喚獣みたいな奴にね…

バカとメダルライダーと召喚獣―完―

「ウオオオオ！」
『く…うう！』

地面を飛び上がりオルソナにメダガブリューで切り裂く…オルソナの体から火花が散りオルソナは僕をプテラの翼ではたき落とした

「ぐ…」
「ハアア！」

アンクが隣に立ち巨大な火球を放った…ゴウッと音を立てオルソナに直撃する

『あああ！』

うわあ…痛そうだなあ…っと集中集中！狙うは僕のメダルだ…

「オラアア！」
「てりゃあ！」

バース・デイはキャタピラレッグでオルソナに回し蹴りを決め、新しい姿のディアスは見えない速さでオルソナを切り裂いた

『く…はあ…』

オルソナは後ずさりながら…じっと僕を睨む

『何故です。終わりは近いと言うのに』

「違うよオルソナ。僕らは終わりを望んでなんかいない」

『嘘です…私は…あなたの為に』

オルソナの言葉にバースもディアスも攻撃を辞めて僕を見る

「明久…まさかお前…またか」

「……はあ」

「何!?その呆れるような目は!?確かに僕が悪いけど…」

はあ…簡単に言えばオルソナの正体は僕…なんというか…裏の僕と言うか…まあ女だけど

『あなたはあの二年…全てを失い…そして新たな人生を歩みだした』

「うん…だけど…君の寂しい心が強くてそれが原因でグリード達が復活した…」

『はい…そして私はグリードとなり…全てを終わらそうと思ったのです』

「僕に拒絶されたと思ったから?」

『…あなたは私の心を理解してくれなかった…だからわかって欲しかったんです』

ごめんね…僕が馬鹿だったから君まで…でもね…そんなの間違ってる

「……だから僕が君を返してあげるんだ…こんな争いはもうやめよう」

『…わかってます。全てを終わらせあなたを倒し』

「違うよ。君を倒して…僕は現代で生きる」

まどかとも約束したから…もう過去は振り向かない…未来を見て生きていくんだ

「だから…君を倒して…全てをゼロにする！」

メダガブリューを構え低い姿勢をとる

「やれやれ…王様は大変だな…」

「雄二…」

「ああ…明久らしいな」

「巧…」

「俺も現代を生きてみたくなったなぁ…明久」「アンク…」

そうだ…僕は…未来を見て生きる！どんなに恨まれてもどんなに悲しい過去でも

『そうですか…なら…あなたとは一生…』
「うん…君は僕だから…自分を愛さないとね。だから君とは一生分かち合っていかなくちゃ」
『……!?あなたはどこまでも…鈍感なんですか!!』
「へ？」

オルソナは溜め息をついてからメダガブリューを構えた

「…えっと…」
「行くぜ！」
「あっ！ちょっと！」

バース・デイはこっちに向けて突進してくる…

「う〝ぇえええ!?」

「オラアア！」
「ハアア！」
「フン！」

って！まとめて攻撃きたんだけどって何でえええ!?

「ぐわああ！」

トリプル攻撃を喰らいオルソナの所へ吹き飛ばされた

というかあの三人…本気だったよね？

（あいつとちゃんと話せ！）

「う！？」

三人の目はいかにもそう言いたいようだった…話して解決って…

『……』

「えっと…」

とりあえずオルソナの方を向き頭をかきながらじっと見る

「あのさ……」

『…ごめんなさい』

「へ？」

『私は間違っていました。明久が…冷たい人間じゃないと分かっていたのに…』

「……あのー」

『明久！』

「はいい！？」

『……こんな私をあなたは受け入れてくれますか？』

「……え？だってその為に来たんだよ？」

『……！？』

オルソナは何を言ってるんだ。確かに君がしたことは悪い…でも…
言ったじゃないか僕は過去を捨て未来を見つめるって

「オルソナ…いや明美…」

すっと彼女の手を優しく包み込む…

「一緒に生きよう?」
『……はい』

明美はすっと僕の肩にもたれかかり優しく包み込む

戦わないで解決することなんて何もない…でも…それでも僕は彼女
を殺したくなかった…だって彼女だって僕にとって大切だから

「お帰り明美…」
『うん…』

「火野…あのオーズ戦わないでボスを倒したな?…オラア！」
「…何で俺を見るんですか…ハアア！」
「あれがこの世界の王の器か」

「…巧。終わったのか?」
「ど、どうやらそうらしい…」

バカとメダルライダーと召喚獣―完―

ってまてええ!!まだ終わるわけないだろ!?

『…グガアアア！』

「何!?」
「はあ!?」

皆さんは…最後は戦いを見たいはず…オルソナから出た憎しみと怒

り、悲しみは…巨大なドラゴンとなった…

「…みんな…これが本当の最後だ…！！」

メダガブリューを構えて静かに見据える

「はあ…お前はどこまで馬鹿なんだ」
「でも…凄いぜ明久」

二人も武器を構える、アンクはふんと笑い翼を展開した

「先生方！ヤミー引き続き頼みますね！」

「ちょっ明久！俺達の戦いはこれでラスト？」
「伊達さん前前！」
「うお！」

『グガアアア！』

「「「うわああ！」」」

ドラゴンが吐いた火球が直撃し僕らは一斉に吹き飛ばされた…

痛たた…全く酷いなあ…

『ガアアア！』

「「「グワアア！」」」

休む暇なく強烈なタックルが当たり僕らは建物に衝突した

「がは…」
「くそ…」
「ぐ…」

強い…奴の体内には…全てのコアメダルが一枚ずつ入っている…プトティラなんかじゃ太刀打ちできない…

『グガアアアガアアア！』

「「「があぁ！」」」

火球を連発で打たれ僕らは吹き飛ばされ叩きつけられた

「ぐ…」
「明久大丈夫!?」
素早く明美が駆け寄りサゴーゾになり重力で僕を引き寄せた
「明美こそメダルに…」
「大丈夫。私は明久だから適応してるよ」
「そう…」
『ガアアア!』
「喜んでる場合か明久!攻撃がくるぞ!」
「「うう!」」
ドラゴングリードと言うべきか…パワーが強すぎる
『軟弱な戦士達め!消え去るがいい!』
「ぐわあ!」
!?さっきの攻撃はドラゴングリードじゃない…!?

『ガルアア！』

『キィアア！』

『グボオオ！』

…これは白虎に朱雀…玄武じゃないか…！？

『さあ！破滅の時だ！』

「あいつは！？」

顔が朱雀…体が青龍…足が白虎に玄武の形をした剣を持ったグリードそうだ！襲撃してきた時にいたあいつだ…名前はホクセイ！！

「まさか…こいつが真のラスボスだったのか！」

雄二が言っていることはよくゲームである…ボスを倒した後にまだ終わってないとかあって本当のボスとかがいるっていうあれだ

『全てのコアメダルを宿した俺に貴様らが勝てるか？』

ホクセイだけじゃない…あの化け物全員にも…

「だけど…勝つさ！」

バッと腕に装着しそれを突き出す

「明久！？」

「それって腕輪だよな？」

『アウェイクン！』

黒金の腕輪を天に掲げてキーワードを叫ぶ。すると周りは召喚フィールドとなる…

「よし…久しぶりに…サモン！！」

さらに変身ポーズを取りキーワードを口にするとオーズの召喚獣が現れた

『な、何だそれは！？』

「馬鹿が使える特権だよ！『ダブル！』」

白金の腕輪を掲げてキーワードを叫ぶ…すると召喚獣は二人に分裂する

吉井明久　Ｆクラス
世界史　３２１

吉井明久　Ｆクラス

世界史　３２１

召喚獣は僕と同じ大きさで同じ動きをする…そして今こそ！秘密兵器の出番だ！

「明美！さっき渡したコアメダルを」

「うん！」

明美は素早くメダルを入れ替えてスキャナーで読み込んだ

『スミレ！コスモス！ユリ！』

『スコユリー！ス・コ・ユ♪』

…比奈ちゃん。大事に使わせてもらうね！

明美の体にサークルが刻まれ桃色の姿に杖を持ち何故かネコミミにスカートのようなフリルが装備されいかにも可愛いオーズへと変身した

「にゃん♪」

「ブシャアア！」

いかん！不覚にも…鼻血が…

『ユニコーン！ペガサス！ケンタウルス！』

『サソリ！カニ！エビ！』

召喚獣達もコンボチェンジをして姿を変える。よし！僕も明美から渡されたこのメダル達で

『クワガタ！カマキリ！バッタ！』

「「「さあ…行くぞ！」」」

僕は分裂し、召喚獣達は攻撃を仕掛けにいく

『セルバースト！』
『メダルブレイク！』

「はあ…結局明久に持ってかれんのかよ」
「仕方ないさ雄二。だってあいつは主役だからな」

「「ハアアア！」」

雄二と巧は破壊砲を放ち玄武に攻撃する

『グボオオ！』

「「「「ダッシャアア！」」」」

分裂した僕らは飛び回る朱雀を攻撃する…この野郎！

「ハアアア！」
『こしゃくな！』

そして僕はホクセイにソードで攻撃する…ホクセイは剣で防ぎ火花が飛び散った

『貴様を倒しこの世界に終焉を打つ！』
「やらせるかあ！」『ムウアア！』

ホクセイは剣に力を集中させ攻撃をする…とっさに防御に出たがソードを破壊され吹き飛ばされた

「が…は！」

一撃でこれって強すぎるよ…く…

「明久！攻撃には防御だ！」

朱雀と戦っていたアンクがヒュンとメダルを投げる

「アンク…お前」

手の中には赤いコアメダルが三つ…ずっと渡さなかったコアメダル…

『ヌアア！』

「ぐわあ！」

後ろから切り裂かれ地面を転げ回る…その拍子にメダルを入れ替えた

「アンク！馬鹿の力見せてやろう！」

素早く立ち上がってスキャナーで読み込む

『タカ！クジャク！コンドル！』

『タ～ジャ～ドルゥ～！』

真っ赤な炎に包まれ赤い友情コンボ…タジャドルへと変身した

「ハアアア！」

『何…』

体中から炎が湧き上がる…これがアンクの力！

「いくぞ！」

ダッと走り炎をまとった蹴りをホクセイに喰らわせる

『ぐあ！』

次は…炎をまとった拳をホクセイにぶつける！

「りゃああ！」

『ぬあ！』

ホクセイがたじろき素早くそこへ蹴りを連発する

「は…！てりゃ！」

『ぐ！ぬう！があ！』

空中へ舞い上がり上空から炎をまとった蹴りをお見舞いした

『があ！』

ホクセイは吹き飛ばされ建物に衝突する…いくぞ！

『グガアアア！』
「っと！」

くっそういえば青龍がいたなあ…これじゃホクセイに近づけない

『アキ君！！』
「！」

この声は…まさか…

「なのはあ！？」

上空からなのは、フェイト、まどか、ほむらが降りたった…な、なんで

「アキ君！私達も戦うよ！」
「…え？」
「うん。明美に負けてられないしね」
「え？」
「明君！また一緒に戦う時が来たね♪」
「え？」
「明久…Wスピナー…いくわよ？」
「えええ！？」

ちょっ…みんな何考えて…しかも明美のこと知ってたの!?なずえ!?

『それは俺が教えたんだ』

「誰!?」

目の前にはいかにも不良の姿をした生徒がいた…みるからにして文月学園じゃない

それにハンバーガー持ってるし…

「俺の名前は如月弦太郎だ。よろしくなダチよ!」

「へ?ダチ?」

如月君はそう言ってから白虎の前に立った

「こいつは俺に任せな」

そう言って如月君は腰にベルトをつけた…!?ってまさか!

「怪人退治と行くぜ!」

ベルトにあるスイッチを四つ押してからレバーを持ちぐっと腕を握る

『スリー！』

「え！？何？」

『ツー！』

『ワン！』

カウントが終わった……何が起きるんだ？

「変身！」

レバーを倒し腕を掲げる如月君を白いオーラと煙が包み込んだ

「っだああ！」

「！？」

煙を払い如月君は仮面ライダーへと変身していた…

「仮面ライダーフォーゼ！怠慢張らせてもらうぜ！」

『グガアアア！』

「よっと！」

仮面ライダーフォーゼ……凄いや…青龍の攻撃を交わしてる

『ギイアア！』
「行くぜ！」
フォーゼは走り出し白虎に攻撃を仕掛ける…うん？何かスイッチを押したよね？
『スパイクＯＮ！』
「え！？武装された！？」
「おりゃあ！」
『ガアアア！』
スパイクってイガイガだよね？うわっ痛そうだなあ…
『グガアアア！』
「お前は大人しくしてろ！」
『チェーンアレイＯＮ』
再びスイッチを押してフォーゼにチェーンのついた鉄球が装備された
「うおら！」

チェーンアレイは青龍に激突し…更に首を縛った…

「強い…」

『ガルアア！』

「…へっこいつで決まりだぜ」

フォーゼはそう言うと黄色いスイッチを押した

『エ・レ・キＯＮ』

電撃がフォーゼの姿を変えさせフォーゼは金色となった…パワーアップかな

「へへっフォーゼエレキステイツだ」

スイッチを取り出し手に持っているロッドへ差し込んだ…

『リミットブレイク』

ロッドは剣のようになり…エレキステイツは低く構えた…

「喰らえ！ライダー１００億ボルトブレイク！」

『ギアアア！』

一閃…白虎はたちまち雷に包まれて爆発した…

「本当に凄いなあ…」

「わるい！俺帰らないといけないから！」

「え！？ちょっいきなり何言い出すんだ「じゃあな！」」

無視するかのようにフォーゼはスイッチを押す

『ロケットＯＮ』

「頑張れよダチ！！」

そう言ってフォーゼは上空へと姿を消した…なんだったろ一体

『グガアアア！』

「いっ！？」

やばっ！青龍が起き上がった…

「明君！いくよ！」

「え？あ！うん！」

完全に場の空気に流れて僕はメダルを入れ替えた

『クワガタ！カマキリ！バッタ！』

『ガ「ガタキリバだあ！」』

歌は省略された…ってフェイト！？

「はう…」

「え？」

フェイトはじっと僕を見上げてくる…な、撫でて欲しいのかな？

「はにゅう／／」

撫でてあげるとフェイトは可愛い声を出しながら真っ赤になっていた…

やっぱり可愛いなあフェイトは…いつも美しいとか思ってたけどやっぱりこういうことで…「ぬあああああああ！」

痛いいい！？え？何！？何この痛いいい

世界史　０と０

「しまったあああ！」

『グガアアア！』

「ぐわああ！」

僕に狙いを定めたのか青龍が空から火球を落としてきた
ぐ…今は…痛みに苦しんでる場合じゃない！

「よーし…スペシャルを」

「「「「見せてやる！！」」」」

ガタキリバの能力を使い複数に分裂した…ちなみにフェイトが倒れそうになったのは気にしないでおこう

「「「「さあ…エンディングだあ！！」」」」

明美も隣立ち…僕はメダルを読み込む…それに合わせて他の僕もメダルを読み込んだ

『タカ！トラ！バッタ！』
『タットッバ！タトバ！タ・ト・バ！』

「はああ！」

『クワガタ！カマキリ！バッタ！』

『ガータガタガタキリバ！ガタキリバ！』

「ハア！」

『ライオン！トラ！チーター！』

『ラッタッ！ラッタッ！ラトラーター！』

「ふっ！」

『サイ！ゴリラ！ゾウ！』

『サゴーゾ…サゴーゾォ！』

「ぬん！」

『シャチ！ウナギ！タコ！』

『シャシャシャウター！シャシャシャシャウター！』

「はああ～」

『プテラ！トリケラ！ティラノ！』

『プ・ト！ティラーノザウルース！』

「ウオオ！」

『コブラ！カメ！ワニ！』

『ブラカァ～ワニィ！』

「へっ！」

『サソリ！カニ！エビ！』

『サッカッビー！サカビ！サ・カビ！』

「…ふっ」

『ユニコーン！ペガサス！ケンタウルス！』

『ユ～ガロォ～ス！』

「は！」

『タカ！クジャク！コンドル！』

『タ～ジャ～ドルゥ！』

「ハアアア！」

ＯＯＯ――それは無限の力…

一気に決める！！

『『スキャニングチャージ！』』

「「ウオリャアア！」」

サカビとシャウタがドリルキックで穴を開け…

「ウオオ！」
「ハアアア！」

サゴーゾが重力で落とし…ブラカワニが羽を噛み砕き…あっ青龍と言っても姿はドラゴンだから…あれ？それじゃ青龍じゃないような

「ハアアア！」

ラトラーターで目を潰してもう片方を切り裂く

『グガア！』

「明美！行くよ！」
「うん！」

『『トリプルスキャニングチャージ！』』

「「オーズ！ダブルバッシュ！」」

タトバでメダジャリバーから技を放ち明美も杖からビームを発射した

『ガアアア！』

「次は…僕だね。行こうフェイト？」

「うん！」

バリバリと電撃をまとい頭に雷撃を集中させる…フェイトはバルディッシュに雷撃を溜める

いくぞ！！

「光速を行く雷撃となり凪ぎ払え！ライトニングブレイカー」

「セイヤアア！」

「「オーズ！フェイトサンダークラッシュ！」」

超巨大な雷撃に変わりその攻撃は青龍の背中へと直撃した

『ガアア！』

「まだまだ！まどか！」

「ほむら！」

ユーガロスとタジャドルは二人と一緒に上空に舞い上がった

「いくよ明君！」

「了解！」

お互いに矢を後ろへと引く…喰らえ！

「「シャインレイン！」」

発射した矢が無数の雨のように青龍へと降り注ぐ…

「明久！」

「うん！」

タジャスピナーとほむらのスピナーにエネルギーが溜まり同時に発射した

「「マグナミスト！」」

『グギャア！』

炎の鳥となり青龍に衝突し爆発する…同時に奴の顔に赤い霧を作った

「よし…ラストは僕らだ！なのは！」

「うん！」

僕はメダガブリューをなのはレイジングハートを構えて青龍に狙いを定めた

「「全力全開！！！」」

「「セイントブレイカー！」」

僕となのはが放った攻撃が混じり合い巨大な破壊砲になって青龍だけでなく朱雀まで貫いた

『ガアアア！』

『キィアア！』

ニ匹の怪物は爆発して大量のセルメダルが降り注いだ…

「まだだ！」

『ぐう…！！』

ホクセイの前に降り立ちスピナーにメダルを入れた…そしてスキャナーで読み込む

最後はタジャドルで決める！

「「「いけええ僕！！」」」

『クワガタ！ライオン！サイ！シャチ！プテラ！コブラ！ユニコーン！ギカスキャン！』

『スキャニングチャージ！』

「ハアアアアア！」

体中のエネルギーをスピナーに集中させる…これで

これで最後だああ！

『セイヤアアアアアアアアアアア！』

スピナーから金色の攻撃が放たれホクセイに穴を開けた

『ぐ…うわあああ！』

眩い光に包まれホクセイは爆発した…同時に…

「ようやく終わったな火野…ってうおお」

「伊達さん！アンク！うわああ！」

「「うわああ！」」

「「「きゃあああ！」」」

衝撃波が起こり…僕らを包み込んだ…そして静かに止むと雄二が立ち上がった

「……凄い衝撃だったな…」

僕もゆっくりと立ち上がって頷いた…うん。みんな大丈夫そうだ…何はともあれようやく終わったんだね…

「……」

あれ？視界がぼやけてるな…それに体も重い…何でだろう

「う……」

そして何かが切れたように意識が動転する…あれ？みんなが見えないや

『ドタンッ！』

そのままゆっくり倒れる。視界は何もない…真っ暗だなのに…

（なんで周りは騒がしいんだろ）

ゆっくりと意識が遠のいていく…まるでもう起きないように……

そして僕から紫のメダルが放出されたのを合図に戦いは終わりを告げたのだった

――そして五年後……

僕らはあの戦いから多くのことを学び…多くのことを知った

火野先生達は元の世界に帰って行った
。先生達の戦いはこれからなんだ
まあ…もう終わってるけどね

僕に力を与えてくれたメダル達は…今も僕の元にある…だって…大切な仲間達だからね

アンクは…きっと今頃幸せな家庭をきづいてるんだろうな‥
相手は優子さんかな?ティアナ?それとも杏子さんだったりして

雄二は霧島財閥の力により…三人と結婚…霧島さんとりあえず良かったね…雄二は…頑張れよ
ムッツリーニや秀吉も卒業してからすぐに職についた

ムッツリーニはプロのカメラマン…まあグラビア系かな
秀吉は勿論役者だ…今日なんかでもテレビに出ている
二人も愛しい人と結ばれている…

瑞希と美波は…瑞希は看護士として美波は中華料理店のオーナーとして働いている…美波は警察官になった後藤君と結婚して、瑞希は彼氏ができたらしい
はは…二人共幸せにね

巧は…まあ千世によって雄二同様…あれだよ。今頃喫茶店店長で頑張ってるだろうな…

「みんな…それぞれの道を歩んでる…僕も頑張らなきゃ」

そっと卒業写真に触れながら顔をほころばせる…

『明久…何だか幸せそうだな…』
『雄二こそ…顔が笑ってるよ』
『ハッ。馬鹿言うな』

雄二は政治家として働いている…本人も意外と楽しそうでなによりだ

「で、何の用？」
「ああ…ババアに用があってな」
「へえ…馬鹿の雄二が珍し…うわ！」
「良くかわしたな明久…っうお！」
「雄二こそ良く僕の蹴りを交わしたね」

「「……！！」」

僕らはお互いにメンチの切り合いをする…全く！五年間何も変わってないなこいつ！

『貴様ら！！何をやってる！』

『『鉄人！？』』

頭上には更に肉体ががっちりして…年を取ったように見えない覇気を出す鉄人…がいましたとさ

――鉄人の拳骨を喰らってから雄二と別れて廊下を歩く…そして静かにドアを開けてる

…一瞬２年Ｆクラスと書かれたプレートが目に入った…そしていつものように笑顔で豪華な教室の中へと入る

「…おはようみんな！」

「「おはようございます吉井先生」」

……変わらない…ＦＦＦ団も、神童も馬鹿も美少女も性別秀吉もいる

…まるで昔のFクラス…僕らを見ているようだ…

「今日はもうすぐ始まる清涼祭についてなんだけど…その前にみんなAクラスに勝って満足は駄目だ！試験召喚戦争でGクラスに勝つんだ！勝ってみんなが落ちこぼれじゃないのを見せてやれ！！俺達のクラスは最強だ！！」

「「ウオオオオ！」」

試験召喚戦争は今でも続いている…僕が持ち出してみると案の定元神童の河上君は賛成してきて…Fクラスの戦いが再び始まったんだ。僕らが卒業して以来の革命だ

「Fクラスはやっぱりこうじゃないとね…」

ありがとう…雄二…僕に学力だけじゃないって教えてくれて

☆

「でね！今日は坂本君と仲良くなったんだよ？」

「へえ…良かったじゃないか弥生♪」

娘の頭を撫でながらニコッと微笑む。弥生は笑顔一杯でうん！と頷

いた

「ねえパパ…」
「うん？」
「パパはママにどうやって告白したの？」
「…ぶっ！！」

突然の爆弾にコーヒーを吹き出してしまった…な…！いつの間に告白なんて言葉を…

「ねえパパー」
「…わ、わかった…話すから。揺すらないで」
「やったあ！」

うう…危うく残りもこぼれる所だったよ

「そうだね…」

こぼれたコーヒーを拭き取りながら微笑む。彼女に告白か…

「弥生。パパをからかわないの」
「ほむら…」
「くす…お帰りなさい」

ほむらは軽く微笑むと弥生の隣ではなく…

「え？」

拭き取りが終わってソファーに座っていた僕の膝に座った

「ほ、ほむら！？／／」
「弥生。パパはね…こんな感じでママに告白したの」
「違う！あ！弥生真っ赤にならないで！違うから！」
「…え？。でもあなた…私を押し「ほむらああ？夕ご飯作ろうか！／／」
「ちょっ…」

妻を抱き上げてキッチンへと向かう…全く…こういう話しは気を配らないと危ないな

「あの時はありがとう……」
「え？」

ほむらはニコッと微笑み材料を取り出す。こんな笑顔…昔はあまり見なかった…

「あなたがそばにずっといてくれたから私はこうして変われたの」
「…ほむら」
「だから…これからも私と弥生のヒーローでいてね…パパ」

彼女の言葉に赤面しつつ材料を取り出す…そうだ…僕はみんなのおかげで…オーズのおかげで沢山のことを手に入れた

アンクに会えたから…グリードと戦ったから

だから今の自分はいる…ありがとう…オーズ。僕は…仮面ライダーとして吉井明久としてヒーローになりつづける

「ありがとう…」

すっと窓を眺める…空は満点の夜空だった

バカとメダルライダーと召喚獣―完―

「ウオオオオ！」
『く…うう！』

地面を飛び上がりオルソナにメダガブリューで切り裂く…オルソナの体から火花が散りオルソナは僕をプテラの翼ではたき落とした

「ぐ…」
「ハアア！」

アンクが隣に立ち巨大な火球を放った…ゴウッと音を立てオルソナに直撃する

『あああ！』

うわあ…痛そうだなあ…っと集中集中！狙うは僕のメダルだ…

「オラアア！」
「てりゃあ！」

バース・デイはキャタピラレッグでオルソナに回し蹴りを決め、新しい姿のディアスは見えない速さでオルソナを切り裂いた

『く…はあ…』

オルソナは後ずさりながら…じっと僕を睨む

『何故です。終わりは近いと言うのに』

「違うよオルソナ。僕らは終わりを望んでなんかいない」

『嘘です…私は…あなたの為に』

オルソナの言葉にバースもディアスも攻撃を辞めて僕を見る

「明久…まさかお前…またか」

「……はあ」

「何!?その呆れるような目は!?確かに僕が悪いけど…」

はあ…簡単に言えばオルソナの正体は僕…なんというか…裏の僕と言うか…まあ女だけど

『あなたはあの二年…全てを失い…そして新たな人生を歩みだした』

「うん…だけど…君の寂しい心が強くてそれが原因でグリード達が復活した…」

『はい…そして私はグリードとなり…全てを終わらそうと思ったのです』

「僕に拒絶されたと思ったから?」

『…あなたは私の心を理解してくれなかった…だからわかって欲しかったんです』

ごめんね…僕が馬鹿だったから君まで…でもね…そんなの間違ってる

「……だから僕が君を返してあげるんだ…こんな争いはもうやめよう」

『…わかってます。全てを終わらせあなたを倒し』

「違うよ。君を倒して…僕は現代で生きる」

まどかとも約束したから…もう過去は振り向かない…未来を見て生きていくんだ

「だから…君を倒して…全てをゼロにする！」

メダガブリューを構え低い姿勢をとる

「やれやれ…王様は大変だな…」

「雄二…」

「ああ…明久らしいな」

「巧…」

「俺も現代を生きてみたくなったなぁ…明久」「アンク…」

そうだ…僕は…未来を見て生きる！どんなに恨まれてもどんなに悲しい過去でも

『そうですか…なら…あなたとは一生…』
「うん…君は僕だから…自分を愛さないとね。だから君とは一生分かち合っていかなくちゃ」
『……!?あなたはどこまでも…鈍感なんですか!!』
「へ？」

オルソナは溜め息をついてからメダガブリューを構えた

「…えっと…」
「行くぜ！」
「あっ！ちょっと！」

バース・デイはこっちに向けて突進してくる…

「う〝ぇえええ!?」

「オラアア！」
「ハアア！」
「フン！」

って！まとめて攻撃きたんだけどって何でえええ!?

「ぐわああ！」

トリプル攻撃を喰らいオルソナの所へ吹き飛ばされた

というかあの三人…本気だったよね？

（あいつとちゃんと話せ！）

「う！？」

三人の目はいかにもそう言いたいようだった…話して解決って…

『……』

「えっと…」

とりあえずオルソナの方を向き頭をかきながらじっと見る

「あのさ……」

『…ごめんなさい』

「へ？」

『私は間違っていました。明久が…冷たい人間じゃないと分かっていたのに…』

「……あのー」

『明久！』

「はいい！？」

『……こんな私をあなたは受け入れてくれますか？』

「……え？だってその為に来たんだよ？」

『……！？』

オルソナは何を言ってるんだ。確かに君がしたことは悪い…でも…
言ったじゃないか僕は過去を捨て未来を見つめるって

「オルソナ…いや明美…」

すっと彼女の手を優しく包み込む…

「一緒に生きよう？」
『……はい』

明美はすっと僕の肩にもたれかかり優しく包み込む

戦わないで解決することなんて何もない…でも…それでも僕は彼女
を殺したくなかった…だって彼女だって僕にとって大切だから

「お帰り明美…」
『うん…』

「火野…あのオーズ戦わないでボスを倒したな?…オラア!」
「…何で俺を見るんですか…ハアア!」
「あれがこの世界の王の器か」

「…巧。終わったのか?」
「ど、どうやらそうらしい…」

バカとメダルライダーと召喚獣―完―

ってまてええ!!まだ終わるわけないだろ!?

『…グガアアア!』

「何!?」
「はあ!?」

皆さんは…最後は戦いを見たいはず…オルソナから出た憎しみと怒

り、悲しみは…巨大なドラゴンとなった…

「…みんな…これが本当の最後だ…！！」

メダガブリューを構えて静かに見据える

「はあ…お前はどこまで馬鹿なんだ」
「でも…凄いぜ明久」

二人も武器を構える、アンクはふんと笑い翼を展開した

「先生方！ヤミー引き続き頼みますね！」

「ちょっ明久！俺達の戦いはこれでラスト？」
「伊達さん前前！」
「うお！」

『グガアアア！』

「「「うわああ！」」」

ドラゴンが吐いた火球が直撃し僕らは一斉に吹き飛ばされた…

痛たた…全く酷いなあ…

『ガアアア！』

「「「グワアア！」」」

休む暇なく強烈なタックルが当たり僕らは建物に衝突した

「がは…」
「くそ…」
「ぐ…」

強い…奴の体内には…全てのコアメダルが一枚ずつ入っている…プトティラなんかじゃ太刀打ちできない…

『グガアアアガアアア！』

「「「があぁ！」」」

火球を連発で打たれ僕らは吹き飛ばされ叩きつけられた

「ぐ…」
「明久大丈夫!?」
素早く明美が駆け寄りサゴーゾになり重力で僕を引き寄せた
「明美こそメダルに…」
「大丈夫。私は明久だから適応してるよ」
「そう…」
『ガアアア!』
「喜んでる場合か明久!攻撃がくるぞ!」
「「うう!」」
ドラゴングリードと言うべきか…パワーが強すぎる
『軟弱な戦士達め!消え去るがいい!』
「ぐわあ!」
!?さっきの攻撃はドラゴングリードじゃない…!?

『ガルアア！』

『キィアア！』

『グボオオ！』

…これは白虎に朱雀…玄武じゃないか…！？

『さあ！破滅の時だ！』

「あいつは！？」

顔が朱雀…体が青龍…足が白虎に玄武の形をした剣を持ったグリードそうだ！襲撃してきた時にいたあいつだ…名前はホクセイ！！

「まさか…こいつが真のラスボスだったのか！」

雄二が言っていることはよくゲームである…ボスを倒した後にまだ終わってないとかあって本当のボスとかがいるっていうあれだ

『全てのコアメダルを宿した俺に貴様らが勝てるか？』

ホクセイだけじゃない…あの化け物全員にも…

「だけど…勝つさ！」

バッと腕に装着しそれを突き出す

「明久！？」

「それって腕輪だよな？」

『アウェイクン！』

黒金の腕輪を天に掲げてキーワードを叫ぶ。すると周りは召喚フィールドとなる…

「よし…久しぶりに…サモン！！」

さらに変身ポーズを取りキーワードを口にするとオーズの召喚獣が現れた

『な、何だそれは！？』

「馬鹿が使える特権だよ！『ダブル！』」

白金の腕輪を掲げてキーワードを叫ぶ…すると召喚獣は二人に分裂する

吉井明久　Ｆクラス
世界史　３２１

吉井明久　Ｆクラス

世界史　３２１

召喚獣は僕と同じ大きさで同じ動きをする…そして今こそ！秘密兵器の出番だ！

「明美！さっき渡したコアメダルを」

「うん！」

明美は素早くメダルを入れ替えてスキャナーで読み込んだ

『スミレ！コスモス！ユリ！』

『スコユリー！ス・コ・ユ♪』

…比奈ちゃん。大事に使わせてもらうね！

明美の体にサークルが刻まれ桃色の姿に杖を持ち何故かネコミミにスカートのようなフリルが装備されいかにも可愛いオーズへと変身した

「にゃん♪」

「ブシャアア！」

いかん！不覚にも…鼻血が…

『ユニコーン！ペガサス！ケンタウルス！』

『サソリ！カニ！エビ！』

召喚獣達もコンボチェンジをして姿を変える。よし！僕も明美から渡されたこのメダル達で

『クワガタ！カマキリ！バッタ！』

「「「さあ…行くぞ！」」」

僕は分裂し、召喚獣達は攻撃を仕掛けにいく

『セルバースト！』
『メダルブレイク！』

「はあ…結局明久に持ってかれんのかよ」
「仕方ないさ雄二。だってあいつは主役だからな」

「「ハアアア！」」

雄二と巧は破壊砲を放ち玄武に攻撃する

『グボオオ！』

「「「「ダッシャアア！」」」」

分裂した僕らは飛び回る朱雀を攻撃する…この野郎！

「ハアアア！」
『こしゃくな！』

そして僕はホクセイにソードで攻撃する…ホクセイは剣で防ぎ火花が飛び散った

『貴様を倒しこの世界に終焉を打つ！』
「やらせるかあ！」『ムウアア！』

ホクセイは剣に力を集中させ攻撃をする…とっさに防御に出たがソードを破壊され吹き飛ばされた

「が…は！」

一撃でこれって強すぎるよ…く…

「明久！攻撃には防御だ！」

朱雀と戦っていたアンクがヒュンとメダルを投げる

「アンク…お前」

手の中には赤いコアメダルが三つ…ずっと渡さなかったコアメダル…

『ヌアア！』

「ぐわあ！」

後ろから切り裂かれ地面を転げ回る…その拍子にメダルを入れ替えた

「アンク！馬鹿の力見せてやろう！」

素早く立ち上がってスキャナーで読み込む

『タカ！クジャク！コンドル！』

『タ～ジャ～ドルゥ～！』

真っ赤な炎に包まれ赤い友情コンボ…タジャドルへと変身した

「ハアアア！」

『何…』

体中から炎が湧き上がる…これがアンクの力！

「いくぞ！」

ダッと走り炎をまとった蹴りをホクセイに喰らわせる

『ぐあ！』

次は…炎をまとった拳をホクセイにぶつける！

「りゃああ！」

『ぬあ！』

ホクセイがたじろき素早くそこへ蹴りを連発する

「は…！てりゃ！」

『ぐ！ぬう！があ！』

空中へ舞い上がり上空から炎をまとった蹴りをお見舞いした

『があ！』

ホクセイは吹き飛ばされ建物に衝突する…いくぞ！

『グガアアア！』
「っと！」

くっそういえば青龍がいたなあ…これじゃホクセイに近づけない

『アキ君！！』
「！」

この声は…まさか…

「なのはあ！？」

上空からなのは、フェイト、まどか、ほむらが降りたった…な、なんで

「アキ君！私達も戦うよ！」
「…え？」
「うん。明美に負けてられないしね」
「え？」
「明君！また一緒に戦う時が来たね♪」
「え？」
「明久…Wスピナー…いくわよ？」
「えええ！？」

ちょっ…みんな何考えて…しかも明美のこと知ってたの!?なずえ!?

『それは俺が教えたんだ』

「誰!?」

目の前にはいかにも不良の姿をした生徒がいた…みるからにして文月学園じゃない

それにハンバーガー持ってるし…

「俺の名前は如月弦太郎だ。よろしくなダチよ!」

「へ?ダチ?」

如月君はそう言ってから白虎の前に立った

「こいつは俺に任せな」

そう言って如月君は腰にベルトをつけた…!?ってまさか!

「怪人退治と行くぜ!」

ベルトにあるスイッチを四つ押してからレバーを持ちぐっと腕を握る

『スリー！』

「え！？何？」

『ツー！』

『ワン！』

カウントが終わった……何が起きるんだ？

「変身！」

レバーを倒し腕を掲げる如月君を白いオーラと煙が包み込んだ

「っだああ！」

「！？」

煙を払い如月君は仮面ライダーへと変身していた…

「仮面ライダーフォーゼ！怠慢張らせてもらうぜ！」

『グガアアア！』

「よっと！」

仮面ライダーフォーゼ……凄いや…青龍の攻撃を交わしてる

『ギイアア！』
「行くぜ！」
フォーゼは走り出し白虎に攻撃を仕掛ける…うん？何かスイッチを押したよね？
『スパイクＯＮ！』
「え！？武装された！？」
「おりゃあ！」
『ガアアア！』
スパイクってイガイガだよね？うわっ痛そうだなあ…
『グガアアア！』
「お前は大人しくしてろ！」
『チェーンアレイＯＮ』
再びスイッチを押してフォーゼにチェーンのついた鉄球が装備された
「うおら！」

チェーンアレイは青龍に激突し…更に首を縛った…

「強い…」

『ガルアア！』

「…へっこいつで決まりだぜ」

フォーゼはそう言うと黄色いスイッチを押した

『エ・レ・キＯＮ』

電撃がフォーゼの姿を変えさせフォーゼは金色となった…パワーアップかな

「へへっフォーゼエレキステイツだ」

スイッチを取り出し手に持っているロッドへ差し込んだ…

『リミットブレイク』

ロッドは剣のようになり…エレキステイツは低く構えた…

「喰らえ！ライダー１００億ボルトブレイク！」

『ギアアア！』

一閃…白虎はたちまち雷に包まれて爆発した…

「本当に凄いなあ…」

「わるい！俺帰らないといけないから！」

「え！？ちょっいきなり何言い出すんだ「じゃあな！」」

無視するかのようにフォーゼはスイッチを押す

『ロケットＯＮ』

「頑張れよダチ！！」

そう言ってフォーゼは上空へと姿を消した…なんだったろ一体

『グガアアア！』

「いっ！？」

やばっ！青龍が起き上がった…

「明君！いくよ！」

「え？あ！うん！」

完全に場の空気に流れて僕はメダルを入れ替えた

『クワガタ！カマキリ！バッタ！』

『ガ「ガタキリバだあ！」』

歌は省略された…ってフェイト！？

「はう…」

「え？」

フェイトはじっと僕を見上げてくる…な、撫でて欲しいのかな？

「はにゅう／／」

撫でてあげるとフェイトは可愛い声を出しながら真っ赤になっていた…

やっぱり可愛いなあフェイトは…いつも美しいとか思ってたけどやっぱりこういうことで…「ぬあああああああ！」

痛いいい！？え？何！？何この痛いいい

世界史　０と０

「しまったあああ！」

『グガアアア！』

「ぐわああ！」

僕に狙いを定めたのか青龍が空から火球を落としてきた
ぐ…今は…痛みに苦しんでる場合じゃない！

「よーし…スペシャルを」

「「「「見せてやる！！」」」」

ガタキリバの能力を使い複数に分裂した…ちなみにフェイトが倒れそうになったのは気にしないでおこう

「「「「さあ…エンディングだあ！！」」」」

明美も隣立ち…僕はメダルを読み込む…それに合わせて他の僕もメダルを読み込んだ

『タカ！トラ！バッタ！』
『タットッバ！タトバ！タ・ト・バ！』

「はああ！」

『クワガタ！カマキリ！バッタ！』

『ガータガタガタキリバ！ガタキリバ！』

「ハア！」

『ライオン！トラ！チーター！』

『ラッタッ！ラッタッ！ラトラーター！』

「ふっ！」

『サイ！ゴリラ！ゾウ！』

『サゴーゾ…サゴーゾォ！』

「ぬん！」

『シャチ！ウナギ！タコ！』

『シャシャシャウター！シャシャシャシャウター！』

「はああ～」

『プテラ！トリケラ！ティラノ！』

『プ・ト！ティラーノザウルース！』

「ウオオ！」

『コブラ！カメ！ワニ！』

『ブラカァ～ワニィ！』

「へっ！」

『サソリ！カニ！エビ！』

『サッカッビー！サカビ！サ・カビ！』

「…ふっ」

『ユニコーン！ペガサス！ケンタウルス！』

『ユ～ガロォ～ス！』

「は！」

『タカ！クジャク！コンドル！』

『タ～ジャ～ドルゥ！』

「ハアアア！」

ＯＯＯ――それは無限の力…

一気に決める！！

『『スキャニングチャージ！』』

「「ウオリャアア！」」

サカビとシャウタがドリルキックで穴を開け…

「ウオオ！」
「ハアアア！」

サゴーゾが重力で落とし…ブラカワニが羽を噛み砕き…あっ青龍と言っても姿はドラゴンだから…あれ？それじゃ青龍じゃないような

「ハアアア！」

ラトラーターで目を潰してもう片方を切り裂く

『グガア！』

「明美！行くよ！」
「うん！」

『『トリプルスキャニングチャージ！』』

「「オーズ！ダブルバッシュ！」」

タトバでメダジャリバーから技を放ち明美も杖からビームを発射した

『ガアアア！』

「次は…僕だね。行こうフェイト？」

「うん！」

バリバリと電撃をまとい頭に雷撃を集中させる…フェイトはバルディッシュに雷撃を溜める

いくぞ！！

「光速を行く雷撃となり凪ぎ払え！ライトニングブレイカー」

「セイヤアア！」

「「オーズ！フェイトサンダークラッシュ！」」

超巨大な雷撃に変わりその攻撃は青龍の背中へと直撃した

『ガアア！』

「まだまだ！まどか！」

「ほむら！」

ユーガロスとタジャドルは二人と一緒に上空に舞い上がった

「いくよ明君！」

「了解！」

お互いに矢を後ろへと引く…喰らえ！

「「シャインレイン！」」

発射した矢が無数の雨のように青龍へと降り注ぐ…

「明久！」

「うん！」

タジャスピナーとほむらのスピナーにエネルギーが溜まり同時に発射した

「「マグナミスト！」」

『グギャア！』

炎の鳥となり青龍に衝突し爆発する…同時に奴の顔に赤い霧を作った

「よし…ラストは僕らだ！なのは！」

「うん！」

僕はメダガブリューをなのはレイジングハートを構えて青龍に狙いを定めた

「「全力全開！！！」」

「「セイントブレイカー！」」

僕となのはが放った攻撃が混じり合い巨大な破壊砲になって青龍だけでなく朱雀まで貫いた

『ガアアア！』

『キィアア！』

ニ匹の怪物は爆発して大量のセルメダルが降り注いだ…

「まだだ！」

『ぐう…！！』

ホクセイの前に降り立ちスピナーにメダルを入れた…そしてスキャナーで読み込む

最後はタジャドルで決める！

「「「いけええ僕！！」」」

『クワガタ！ライオン！サイ！シャチ！プテラ！コブラ！ユニコーン！ギカスキャン！』

『スキャニングチャージ！』

「ハアアアアア！」

体中のエネルギーをスピナーに集中させる…これで

これで最後だああ！

『セイヤアアアアアアアアアアア！』

スピナーから金色の攻撃が放たれホクセイに穴を開けた

『ぐ…うわあああ！』

眩い光に包まれホクセイは爆発した…同時に…

「ようやく終わったな火野…ってうおお」

「伊達さん！アンク！うわああ！」

「「うわああ！」」

「「「きゃあああ！」」」

衝撃波が起こり…僕らを包み込んだ…そして静かに止むと雄二が立ち上がった

「……凄い衝撃だったな…」

僕もゆっくりと立ち上がって頷いた…うん。みんな大丈夫そうだ…何はともあれようやく終わったんだね…

「……」

あれ？視界がぼやけてるな…それに体も重い…何でだろう

「う……」

そして何かが切れたように意識が動転する…あれ？みんなが見えないや

『ドタンッ！』

そのままゆっくり倒れる。視界は何もない…真っ暗だなのに…

（なんで周りは騒がしいんだろ）

ゆっくりと意識が遠のいていく…まるでもう起きないように……

そして僕から紫のメダルが放出されたのを合図に戦いは終わりを告げたのだった

――そして五年後……

僕らはあの戦いから多くのことを学び…多くのことを知った

火野先生達は元の世界に帰って行った
。先生達の戦いはこれからなんだ
まあ…もう終わってるけどね

僕に力を与えてくれたメダル達は…今も僕の元にある…だって…大切な仲間達だからね

アンクは…きっと今頃幸せな家庭をきづいてるんだろうな‥
相手は優子さんかな?ティアナ?それとも杏子さんだったりして

雄二は霧島財閥の力により…三人と結婚…霧島さんとりあえず良かったね…雄二は…頑張れよ
ムッツリーニや秀吉も卒業してからすぐに職についた

ムッツリーニはプロのカメラマン…まあグラビア系かな
秀吉は勿論役者だ…今日なんかでもテレビに出ている
二人も愛しい人と結ばれている…

瑞希と美波は…瑞希は看護士として美波は中華料理店のオーナーとして働いている…美波は警察官になった後藤君と結婚して、瑞希は彼氏ができたらしい
はは…二人共幸せにね

巧は…まあ千世によって雄二同様…あれだよ。今頃喫茶店店長で頑張ってるだろうな…

「みんな…それぞれの道を歩んでる…僕も頑張らなきゃ」

そっと卒業写真に触れながら顔をほころばせる…

『明久…何だか幸せそうだな…』
『雄二こそ…顔が笑ってるよ』
『ハッ。馬鹿言うな』

雄二は政治家として働いている…本人も意外と楽しそうでなによりだ

「で、何の用？」
「ああ…ババアに用があってな」
「へえ…馬鹿の雄二が珍し…うわ！」
「良くかわしたな明久…っうお！」
「雄二こそ良く僕の蹴りを交わしたね」

「「……！！」」

僕らはお互いにメンチの切り合いをする…全く！五年間何も変わってないなこいつ！

『貴様ら！！何をやってる！』

『『鉄人！？』』

頭上には更に肉体ががっちりして…年を取ったように見えない覇気を出す鉄人…がいましたとさ

――鉄人の拳骨を喰らってから雄二と別れて廊下を歩く…そして静かにドアを開けてる

…一瞬２年Ｆクラスと書かれたプレートが目に入った…そしていつものように笑顔で豪華な教室の中へと入る

「…おはようみんな！」

「「おはようございます吉井先生」」

……変わらない…ＦＦＦ団も、神童も馬鹿も美少女も性別秀吉もいる

…まるで昔のFクラス…僕らを見ているようだ…

「今日はもうすぐ始まる清涼祭についてなんだけど…その前にみんなAクラスに勝って満足は駄目だ！試験召喚戦争でGクラスに勝つんだ！勝ってみんなが落ちこぼれじゃないのを見せてやれ！！俺達のクラスは最強だ！！」

「「ウオオオオ！」」

試験召喚戦争は今でも続いている…僕が持ち出してみると案の定元神童の河上君は賛成してきて…Fクラスの戦いが再び始まったんだ。僕らが卒業して以来の革命だ

「Fクラスはやっぱりこうじゃないとね…」

ありがとう…雄二…僕に学力だけじゃないって教えてくれて

☆

帰路…僕は必ず保育園に寄って行く…理由は簡単で息子と妻を迎えに行くからだ。今頃そわそわしてるだろう

妻は若きして保育園の園長を勤めている。まあ絵を描くのが好きだ

し何より子供達が好きな彼女にとってはふさわしい職業だ

「…あ―やっぱりか」

軽く息を吐いてから軽い足取りで入り口へ向かう。まどかは鍵を閉めていて息子の直樹はそわそわとしている。相変わらず微笑ましい

「お疲れ様…二人共」
「あなた？」
「お父さんだ！」

二人は嬉しそうにこちらへ向かってくる…ニコッと微笑みながら二人を迎える

「直樹いい子にしてたかい？」
「うん！」
「はは。そりゃ良かった」

頭を撫でながら息子を抱きかかえる…暖かい…

「まどかもいつもご苦労様」
「あなたこそ…あっ！今日の夕ご飯何がいいかな？」
「僕はパエリア！」
「直樹！昨日も食べたでしょ？」

まどかは少し叱ると直樹はぶうと頬を膨らます…

「まあいいじゃないか。味をアレンジすればまた違う風味が出るし…それに」
「それに？」

「まどかに無理ばかりさせれないからね…」

微笑みながら彼女に告げると…まあ案の定真っ赤だ…そんな表情も魅力的なんだけど

「ありがとう…明君。あなたも無理しないでね？」

「…！？」

…彼女がこう呼ぶ時は本気というか…うーん…表現しにくいな…

「…うん。」

静かに笑ってから鞄からベルトを取り出し、巻きつけメダルを入れる…さあ！今日は早く帰って久しぶりに楽しむぞ！

「まどか！直樹！今日は空の風を感じながら帰ろうか？」

「うん！」

「…そうだね♪」

ならそうと決まれば…！みんなこれからもよろしくね！

「変身！！」

バカとメダルライダーと召喚獣―完―

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6786s/

バカとメダルライダーと召喚獣

2011年11月16日21時08分発行